松本市文化財調査報告書　No.196

長野県松本市

NAKAYAMAKOFUNGUN

中山古墳群 14・15

KANIHORIHIGASHI·KANIHORINISHI

カニホリ東・西遺跡

－発掘調査報告書－

2008. 3

松本市教育委員会

松本市文化財調査報告書　No.196

長野県松本市

NAKAYAMAKOFUNGUN

中山古墳群 14・15

KANIHORIHIGASHI·KANIHORINISHI

カニホリ東・西遺跡

－発掘調査報告書－

2008. 3

松本市教育委員会

序

中山古墳群、カニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡は松本市の南東部中山地区に所在する遺跡です。中山地区の丘陵一帯には多数の古墳が存在することが以前から知られており、松本市史跡に指定されています。今回中山霊園第３次造成事業が計画されたため、埋蔵文化財を記録保存する目的で、松本市が緊急発掘調査を実施することとなりました。松本市は中山霊園造成に伴う発掘調査を数多く行っており、今回で14･15回目の調査となります。調査を開始したところ、古墳の他にも集落遺跡のカニホリ東遺跡・カニホリ西遺跡を新発見したため、並行して調査を実施しました。

発掘調査は平成16年４月から翌17年12月にかけて行われました。長期間にわたる調査となりましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、13基の古墳と縄紋時代の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思います。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

松本市教育委員会　教育長　伊　藤　　光

例　言

1　本書は平成16年4月10日～17年12月７日に実施された、松本市中山4,883番地他に所在する中山古墳群第14･15次、カニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は中山雀岡第3次造成事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。

3　本書の執筆は、Ⅰ章：事務局、Ⅱ章1節：森　義直、同2節吉井　理、Ⅲ章1節１・3竹原　学、同１節2横井　奏、同2節１直井雅尚、同２節2横井　奏、同2節４西澤寿晃、その他を三村竜一が行った。

4　本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子

土器接合：中村恵子、竹平悦子、中澤温子

土器実測、トレース：白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、八板千佳

石器・石製品実測、トレース：横井　奏、内田陽一郎

金属器実測、トレース：涸澤文江、荒井留美子

遺構図調整、トレース：荒井留美子、下条ちか子、中村恵子、岡崎武祥、吉井　理

一覧表作成：荒井留美子、下条ちか子、中村恵子、直井雅尚、関沢　聡、竹原　学、岡崎武祥、横井　奏、吉井　理

遺構写真：宮嶋洋一、岡崎武祥、菊池直哉、三村竜一

遺物写真：宮嶋洋一、横井　奏

総括・編集：三村竜一

5　本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。

中山○号古墳→○号古墳、第○号住居址→○住、第○号竪穴状遺構→○竪、第○号炭焼窯→○炭、第○号集石→○集石、第○号土坑→○土、第○号ピット→P○、第○号土器集中区→○土集、第○号溝状遺構→○溝、第○号谷状地形→○谷、トレンチ○→○T、サブトレンチ○→○ST

6　本書では以下のものをスクリーントーンで表した。

焼土集中範囲…　炭化物集中範囲…　礫被熱範囲…

7　遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下の通りである。

表記法　土色（含有物・量・状態、土質）

土色									
	1	黒色	7	褐色	13	橙色	19	にぶい褐色	25	灰橙色
	2	黒褐色	8	褐灰色	14	赤色	20	にぶい黄橙色	26	明黄褐色
	3	暗褐色	9	黄褐色	15	赤褐色	21	にぶい赤褐色	27	明黄橙色
	4	暗黄褐色	10	黄橙色	16	うすい暗赤灰色	22	灰黄褐色	28	明褐色
	5	暗赤褐色	11	黄橙褐色	17	濃い暗赤灰色	23	灰褐色	29	明赤褐色
	6	暗灰褐色	12	浅黄色	18	にぶい黄褐色	24	灰黄橙色	30	明橙色

含有物	（土色）			（状態）
A	黒色	H	黄橙色	O	明褐色	A'	土塊
B	黒褐色	I	赤褐色	P	明赤褐色	B'	土粒
C	暗褐色	J	赤色	Q	焼土	C'	砂粒
D	暗黄褐色	K	茶褐色	R	炭化	D'	物
E	褐色	L	灰白色	S	礫	E'	材
F	黄褐色	M	白色			F'	片
G	黄色	N	明黄褐色			G'	マンガン粒

含有物量　a混入　b多量　c少量　d微量　e極少量　f非常に多量

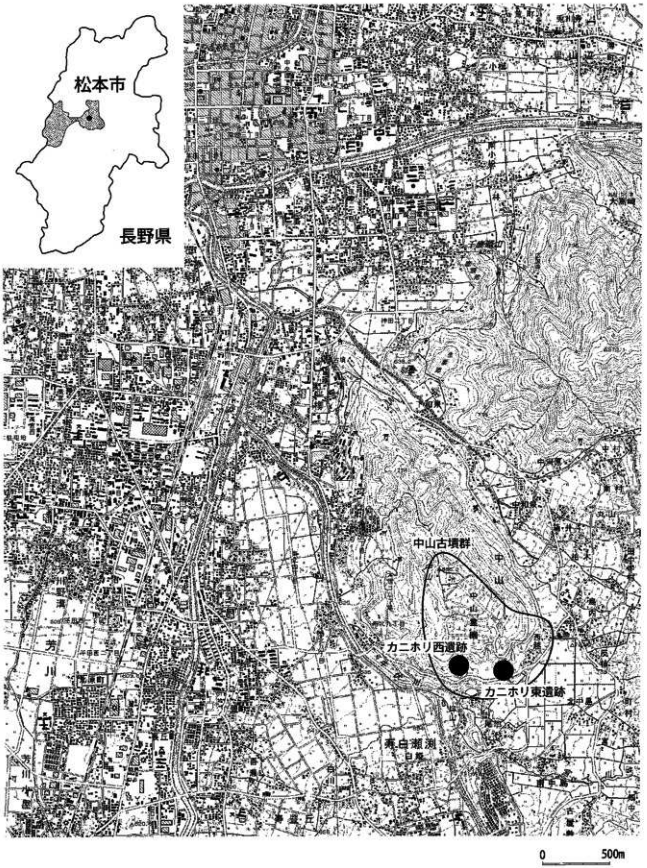
土質　①粘質　②堅固　③砂質　④しまりなし　⑤しまりよし　⑥シルト質　⑦粘土質

8　出土した遺物については、遺跡に関わらず Ⅲ章に集約し、掲載している。

9　本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1　℡ 0263-86-4710　Fax 0263-86-9189）に収蔵されている。

目　次

序
例　言
目　次
Ⅰ章　調査の経緯
　1節　調査に至る経緯 …… 1
　2節　調査体制 …… 1
Ⅱ章　遺跡の環境
　1節　地形と地質 …… 2
　2節　周辺遺跡 …… 4
　3節　過去の調査 …… 8
Ⅲ章　調査の概要 …… 10
Ⅳ章　中山古墳群 …… 24
Ⅴ章　カニホリ東遺跡
　1　竪穴住居址 …… 41
　2　竪穴状遺構 …… 46
　3　炭焼窯 …… 46
　4　集石 …… 48
　5　土坑・ピット …… 48
　6　溝状遺構 …… 49
　7　石積 …… 49
Ⅵ章　カニホリ西遺跡
　1　竪穴住居址 …… 67
　2　竪穴状遺構 …… 69
　3　炭焼窯 …… 70
　4　集石 …… 71
　5　土坑・ピット …… 71
　6　土器集中区 …… 72
　7　溝状遺構 …… 72
　8　谷状地形 …… 72
Ⅶ章　出土遺物
　1節　縄紋時代の遺物
　　1　土器 …… 95
　　2　石器・石製品 …… 101
　　3　土製品 …… 103
　2節　古代の遺物
　　1　土器 …… 134
　　2　石製品・ガラス製品 …… 136
　　3　金属製品 …… 136
　　4　骨 …… 137
Ⅷ章　総括 …… 144
付編 …… 146
写真図版
発掘調査報告書抄録



第1図　遺跡の位置

Ⅰ章　調査の経緯

1節　調査に至る経緯

今回、長野県松本市中山4,883番地他において、中山霊園第３次造成事業が計画された。事業地は全体が周知の埋蔵文化財包蔵地である中山古墳群に該当しており、工事により予定地内の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。このため松本市教育委員会は、記録による遺跡の保存を図るため、発掘調査を実施した。

文化財保護法第57条の３（現93条）に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書は、平成16年5月13日付長野県教育委員会宛てに提出された。

現地での発掘調査は平成16年４月10日～17年12月７日に実施した。調査終了後、平成17年12月９日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成17年12月13日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行った。

2節　調査体制

調査団長：竹澗公章（松本市教育長、～平成18年3月）、伊藤　光（同　平成18年4月～）

調査担当者：三村竜一、岡崎武祥、菊池直哉

調　査　員：今村　克、竹原久子、西沢寿晃、三村　肇、宮嶋洋一、望月　映、森　義直

協　力　者：浅輪敬二、荒井留美子、荒木　稔、飯田三男、井口方宏、石井敏二、石川三男、今井太成、入山正男、海老原千津子、大木丈夫、大月八十喜、翁像　薫、折井完次、勝川順一、上條智代、上條信彦、上條正子、上條道代、川島明子、久根下三枝子、久保田登子、黒木奈津美、黒澤隆祐、河野清司、小林芳朗、小松栄一、酒井茉莉、笹井トキ子、澤柳　博、清水陽子、下条ちか子、白鳥文彦、鈴木幸子、高橋登喜雄、竹内直美、竹平悦子、寺島　実、等々力明子、中川佳子、中澤温子、中野智昭、中村恵子、中山自子、福島　勝、布野行雄、布野和嘉夫、古屋美江、洞澤文江、堀内五郎、待井敏夫、松林アオイ、松山あずさ、真々部まさ子、丸山惠子、三澤栄子、道浦久美子、養島菜奈、宮澤文雄、宮田勝年、宮田美智子、三代沢二三恵、三代沢宗俊、村山牧枝、本木修次、百瀬　寛、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、八板千佳、山崎照友、山崎春隆、横山　清、吉川光子、米山禎興、渡辺順子

事　務　局：松本市教育委員会　教育部文化財課（～平成16年6月30日：文化課、～平成17年3月31日：文化財保護課）

池田英俊（課長、～平成17年3月）、宮島吉秀（課長、平成17年4月～）、川上百合子（係長、～平成17年3月）、熊谷康治（課長補佐、～平成18年3月）、横山泰基（係長、平成18年4月～）、直井雅尚（主査）、関沢　聡（主査、平成18年4月～）小山高志（主事、～平成18年3月）、櫻井　了（主事）、渡邊陽子（嘱託、～平成18年3月）、太田万喜子（嘱託、～平成16年8月）、花村かほり（嘱託、平成17年4月～19年3月）、栁澤希歩（嘱託、平成19年4月～）

Ⅱ章　遺跡の環境

1節　地形と地質

1　調査地中山丘陵の地形と地質

松本盆地の東南方に連なる中山丘陵は、盆地の東方を南北に走る筑摩山地の南部にある鉢伏山（標高1,928m）の西麓に、主脈とほぼ平行の形で盆地にあり、最も大きな独立した丘陵山地である。南北はおよそ3km、巾の一番広い南寄りの所で東西約1.5kmの甘藷状の形態をしている。この丘陵は南に高く北に低くなっており、南部の一番高い所は863mで、西側の盆地面が標高630mであるので、丘陵の比高は200m強である。北方は標高を減じ突端は652mである。山頂の北半は崩壊して崖となっており、頂上付近の西側と東側は崖錐が発達している。山頂から南は緩く南に傾斜し、上部の平坦地は中山霊園となっており、平均斜度は5°程である。

この丘陵は松本盆地の東南端に独立しており、鉢伏山塊の西の山麓が南北方向の断層（松本盆地東縁線の一部）によって生じたケルンバットではないかと推定される。また丘陵の西側は断層崖とみられ、南北方向の推定断層があり、更に最近判明した古墳時代からの活断層である並柳断層が、丘陵の西側を南北方向に走っている。

河川については、この丘陵の南側で鉢伏山に源を発する牛伏川が、前鉢伏山から流出する中沢、北沢、そのすぐ北の宮入山から流出する宮入川などと合して、丘陵の西側に沿って北に流れ、丘陵の北端近くから北西に流路を変え500m程で田川と合流している。丘陵の東側は、高遠山（標高1,316m）に源を発する複数の沢により、中山地区に3つの小扇状地を形成しつつ合して複合扇状地を形成し、中山地区の集落や農地となっている。これ等の沢は丘陵の東麓で合して和泉川となり、東麓に沿って北流し、丘陵の北北西約500mで田川と合流している。このように丘陵の東と西を囲むように河川が流れており、これは新旧の断層と関係があると推定される。丘陵の上から眺めると、松本盆地南部の河川は背松本の旧市街方面に流れており、上述した牛伏川が足下を洗い、その先約1kmを田川が、更に出川の先1.5kmを奈良井川が、というように北流している。これは盆地の基盤が旧市街地から両島－南松本付近にかけて、沈降を続けているためと推定される。

2　地質について

丘陵の北側の基盤は新生代新第三紀層であり、内村累層の砂岩・頁岩の互層であるが、砂岩や石英閃緑岩の貫入を受けて走向や傾斜は乱れており、一部北側の露頭でN45° E、NWへ42°と測定できたが単に参考値でしかない。

丘陵の南半分にはロームが載っており、ロームの下部は、石英閃緑岩の角礫や風化小礫の破片と小量の頁岩の風化した破片がロームと混在している。その下には石英閃緑岩の1m以上の角礫が横たわり、調査孔の一部では破砕され、風化の進んだ基盤の一部ではないかとみられる閃緑岩体があり、断層により破砕されたと推定される。したがって従来閃緑岩の巨礫は、東部山地から運ばれたと考えられてきたが、基盤から崩落したものも混在していると思われる。

これ等石英閃緑岩体は、東部山地の高遠山一帯の内村層に貫入した深成岩体であり、その西端が断層で切られ、その発砕帯部が削られて、ケルンバットになったとみられる。同じようなものが西部山地の旧梓川村～三郷村にかけて、松本盆地西縁線沿いに、南から帆立山、七日山、室山などが盆地面に独立した小山として顔をだしており、H5年の帆立山付近の土木工事により、西部山地との間には大規模の発砕帯がみつかり、西縁断層線によることがはっきりした。このように盆地の東縁と西縁には盆地面の上に独立した小山が存在している。

3　発掘地点の地形・地質

今回の平成16年～17年の調査は霊園の南面の丘陵斜面で、標高はおよそ710m～750mの間にあり、傾斜は6°～17°である。

発掘地点は年次は異なっても大同小異であり、地形上に谷や凹凸があるため、遺構の深さも一定していない。概念的には、柱状図の如く、

① 表土は腐食の混入による黒褐色のローム質土である。

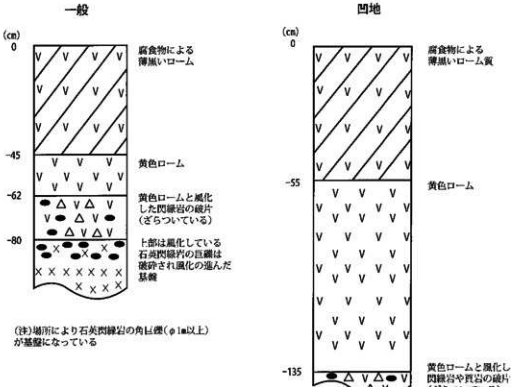
② 黄褐色のローム質であるが、斜面であるので下への移動がある。

③ 石英閃緑岩の角礫やその風化小礫、頁岩の小破片、とローム質の混合層となっており、非常にざらついている。

④ 石英閃緑岩の巨角礫（１m以上）が横たわり、非常に風化の進んだものや表面が新鮮なものなどが混在している。

⑤ 基盤と思われる破砕され風化の進んだ閃緑岩体となっており、地形の凸部では③が地表付近にある。凹部では①と②が非常に厚くなっている（柱状図参照）。遺構は②と③に集中している。以上調査地点は住居としてはやや急過ぎ、定住していたかどうか疑わしく季節的なものではなかったかと思う。

（注）地層の代表例として、平成８年度調査地の柱状図を載せておく。



挿図1　平成8年度調査地の柱状図

2節　周辺遺跡

本遺跡周辺には縄紋、弥生、古墳、奈良～平安時代と多くの遺跡が存在する。縄紋時代より時期別に中山地区の遺跡について述べていくことにする。

縄紋時代

本地区の縄紋時代の遺跡については報告書が既刊され、その中で概観されているので、本書では簡単な説明にとどめる。註）

縄紋～中世と多時期に亘る山影遺跡、早期前半～中期後葉の土器や住居址が確認されている深沢遺跡と南中島遺跡、早期～前期の土器、中期初頭の集落が確認されている向畑遺跡、中期～後期にかけての住居が確認された弥生前遺跡などがある。縄紋時代の遺跡は中期が特に多く、早期～前期初頭の東海系土器が多く出土し、中期中葉から後期前半を主体とする坪ノ内遺跡はなかでも大きな遺跡である。

弥生時代

この時代の遺構、遺物は出土が少なく、不明な点が多い。鍬形原遺跡では中山地区で初めて弥生の住居址が4軒検出された。弥生～古墳時代前期の住居が1軒検出している生妻遺跡では、中期初頭の壺の口縁部が出土している。向畑遺跡では、中期後半から末の土器片、石包丁が出土しているが遺構は発見されなかった。

古墳時代

集落遺跡と古墳を別記する。

【集落遺跡】

向畑遺跡には、前期に栄えた集落があり、その後、中期の住居が2軒造られているが、その後は居住地には使用されていない。

山影遺跡には、向畑の集落に続く中期の住居が21軒検出され、勾玉・管玉・臼玉・ガラス小玉が住居址内から出土している。他には馬具や鉄鏃も発見されている。住居址は傾斜地に造られている。また、焼失家屋が6軒検出されている。

ツカヤ下遺跡でも道路工事中に同期の住居が3軒発見されている。

前述の生妻遺跡にも中期の住居が1軒あったが、小範囲の調査なので、その他の遺構は不明である。近くの二山では子持勾玉が採集されている。

古墳時代後期の集落址は中山地区においては現在まで発見されていない。

中山地区外では、すぐ西に位置する寿地区の出川南遺跡、百瀬遺跡等で後期の集落址が見つかっている。出川南遺跡は松本市内最大の後期集落址である。

【古墳】

古墳は弘法山古墳の3世紀末を最古に、やや遅れて造られた中山36号墳（仁能田山古墳）の二つを初めに、南部には少ないもののほぼ全域に築造されている。その数は松本市内有数である。本遺跡南に位置する向畑には低い丘陵の尾根上に12基の古墳がある。そのうち1990年次に調査した8基のうち7基は5世紀後半の古墳で、その配置等から同一の造営集団が次々に構築したものと考えられる。本地域の古墳は山影遺跡やツカヤ下遺跡の集落と同時期のものである。以後、横穴式石室導入後の6世紀後半から7世紀初頭の古墳は中山地区の集落内にも点在する。中山36号墳の東方に棺護山古墳群、本遺跡南方には向畑古墳群、その西には坪ノ内古墳群、その西端に桜立古墳、中山霊園周辺に鍬形原古墳群、西越古墳群がある。現在、中山霊園になっている鍬形原には明治初年には80余基の古墳があったという。その後、開墾のために墳丘は削平され、墳丘が残存するものは4基だけであった。17号墳・38号墳・39号墳ほか4基は既に調査されており、これらは7世紀頃に築造されたものである。山麓には盤掘古墳（中山11号墳）がある。

奈良時代

鍬形沢古窯址群は鍬形原の東端から南に下る沢の砂防工事で削平された部分に、当代の2基の須恵器窯の灰原が発見され、同地の斜面の中ほどでは、当代の炭焼きの跡が発見されている。

不動沢古窯址群で検出した須恵器窯は自然流路に近接して構築されており、灰原及び物原は自然流路内において形成されていた。

西越古墳には、石室中間の片隅に石を敷いて当代の壺が一つ葬られていた。これは蔵骨器と考えられ、後になって葬られていたもののようである。

本地区では古墳時代後期に続き奈良時代においても集落址は見つかっていない。

平安時代

南中島集落の北東に10世紀前半の住居が1軒発見されている。また、官人川の対岸の字深沢にも平安時代後期の住居が1軒発見されている。

山影遺跡では9世紀後半から10世紀前半の住居5軒と掘立柱建物1棟が調査区全域に分散して検出された。9世紀後半の土坑が2基あり、1基は同時期の住居址と14mしか離れておらず、住居と墳墓が近距離で営まれていたことになる。この地域は、中世以後は墓域であり、居住域ではない。

生妻遺跡でも、平安中期とみられる土師器・須恵器・灰釉陶器片が発見された。ここは、現在の生妻集落の縁辺部にあたる。中山地区内の各地で土師器・須恵器が採集されており、地区内全域に当時の集落があったと考えられる。

奈良時代～平安時代になると直営の牧場が作られ、本遺跡南に埴原の牧と千石の牧が残っている。その近くには、長野県指定史跡になっている埴原牧の「繋飼場跡」がある。これは全国的に珍しい牧場遺構である。

沖田の北の字島内（埴原北）には長野県史跡に指定されている「推定信濃牧監庁跡」がある。

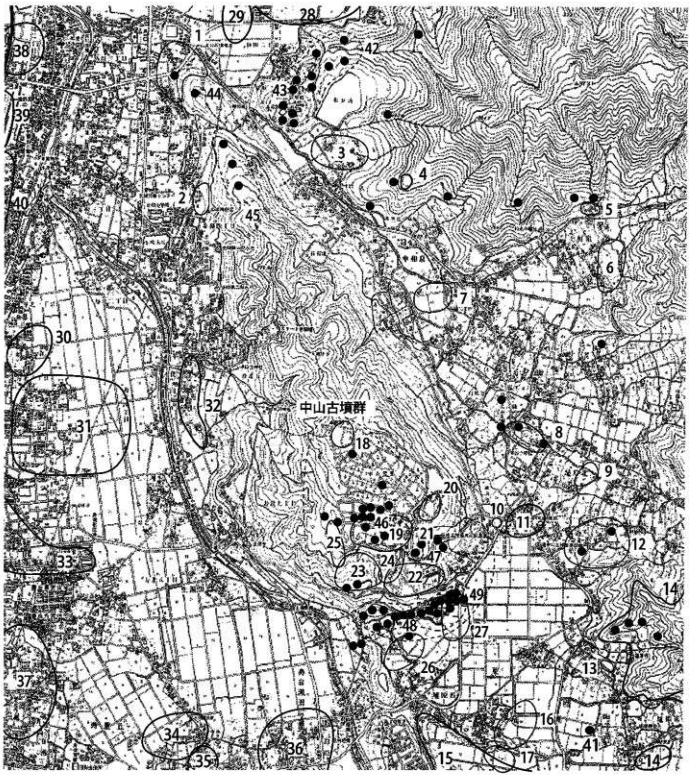
また、鍬形沢古窯址群は灰原及び須恵器が確認されているが、全容は不明である。

中世

埴原東宮ノ下にある鉾塚は石積の塚で、近くに中山古墳群はあることもあり、当初は古墳と考えられていたが、発掘調査により13世紀の古瀬戸前期様式の四耳壺が出土した。意図的に頸部より上の部分を打ち欠いており、壺内に骨片は認められなかったが、蔵骨器とみられ、中世の墳墓と考えられる。

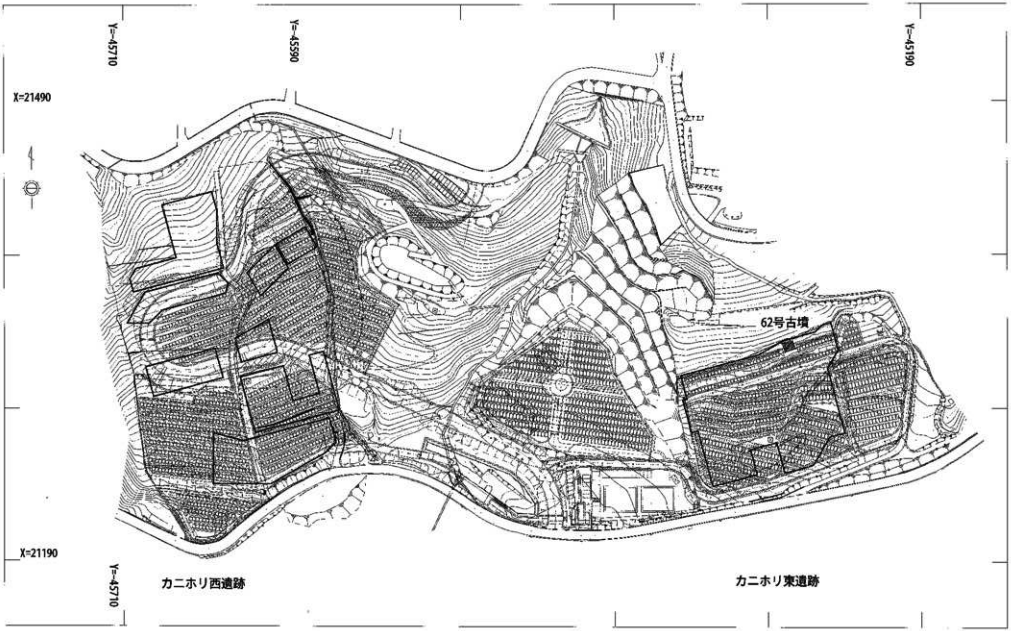
註）

松本市教育委員会　1988～1990『松本市向畑遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』
松本市教育委員会　1990『松本市坪ノ内遺跡』
松本市教育委員会　1991『松本市南中島遺跡』
松本市教育委員会　1991『松本市弥生前遺跡』
松本市教育委員会　1991『松本市生妻遺跡』



1 平畑遺跡
2 山行法師遺跡
3 生妻遺跡
4 弥生遺跡
5 宮平八幡裏山遺跡
6 和泉遺跡
7 弥生前遺跡
8 ツカヤ下遺跡
9 塩原北遺跡
10 推定信濃牧監庁跡
11 鳥内遺跡
12 山影遺跡
13 町村遺跡
14 塩原城址
15 塩原の牧跡
16 南中島遺跡
17 深沢遺跡
18 鍛形原砦址
19 鍛形原遺跡
20 西越遺跡
21 西越山林遺跡
22 カニホリ東遺跡
23 カニホリ西遺跡
24 鍛形沢古窯址群
25 不動沢古窯址群
26 坪ノ内遺跡
27 向畑遺跡
28 神田遺跡
29 神田西遺跡
30 竹渕南原遺跡
31 竹渕遺跡
32 源黒遺跡
33 向原遺跡
34 白川遺跡
35 野田遺跡
36 白姫遺跡
37 百瀬遺跡
38 出川遺跡
39 出川西遺跡
40 出川南遺跡
41 鉢塚
42 祐護山古墳群
43 中山36号墳(仁能田山古墳)
44 弘法山古墳
45 中山北尾根古墳群
46 鍛形原古墳群
47 西越古墳群
48 坪ノ内古墳群
49 向畑古墳群

第2図　周辺遺跡



第3図　調査範囲

（X，Y）＝旧平面直角座標第Ⅷ系

3節　過去の調査

松本市教育委員会では、霊園一帯が市指定の史跡中山古墳群にあたり、およそ南北1.2km、東西1.1kmの範囲にある群集墳を『中山古墳群』（遺跡番号419）としている。ところが、以前から同じ名称が、松本市合併前の旧中山村内に存在する全古墳を指す総称としても使われている。旧中山村内に存在する古墳の範囲は、およそ南北3.5km、東西３km程になる。このため、３世紀末に築かれたとされている弘法山古墳も、旧中山村内に所在するため、後者の範囲では中山古墳群に含まれる。本報告では、遺跡番号419の範囲内の群集墳を、中山古墳群として扱っていく。また、松本市教委員会（以下市教委と略）の遺跡台帳では、旧中山村に所在する古墳の個々の古墳名は第１号から連続する番号を付け、『中山○号古墳』としている。このため、弘法山古墳は中山48号古墳の別名がある。

旧中山村は、松本市考古博物館の前身である中山考古館が建てられたように、埋蔵文化財に対する住民の関心が特に高い村であった。中山霊園造成以前にも多くの発掘調査が行われており、蟹掘古墳は、旧東京帝国大学学生の宮坂光次らにより大正12年に調査され、昭和5年、史前学雑誌に報告されている。この古墳と並んでいたとされる中山11号古墳は、昭和８年に発掘調査が行われた。調査記録がほとんど残されていないため、内部主体、副葬品の配列状態などは不明である。遺物は、直刀７点、刀子５点、鉄鏃４点などが出土している。現在の市教委の遺跡地図では、今回の開発工事の範囲内に位置するため、再調査の実施を想定した。隣接する蟹掘古墳は、開発区域西端の区域外にあったとされている。

市教委の調査は、昭和42年度の中山霊園造成事業（第１次）の際に、中山17号古墳（鍬形原17号古墳）と39号（鍬形原５号古墳）の2基を実施している（未報告）。その後、第２次中山霊園造成事業で霊園が南に大きく拡張されることになり、事前の発掘調査を実施している。これ以降、霊園造成事業に伴う発掘調査は、調査名称を中山古墳群として、平成２年度（第１次）～同13年度（13次）にかけて、合計13回実施している。調査面積は、合計でおよそ42,000㎡になり、15・16・38・49～55・57号古墳の合計11基を調査した。このうち15・16・38号古墳は周知、49～55・57号古墳は新発見の古墳である。市教委では、埋蔵文化財の保存・活用を図るため、比較的良好な状況で残存していた15・16・49号古墳を整備し、現地で保存している。

また、13回にわたる調査では、古墳の他にも集落址、古窯址群、製炭遺構などを新発見した。縄紋・弥生時代の集落址、古代の製炭遺構は鍬形原遺跡、須恵器古窯址は鍬形原古窯址群と不動沢古窯址群、中近世以降では鍬形原砦址がある。これまでの調査概要については、今回の成果を加えて、第１表に掲載した。

参考文献
宮坂光次　1930「長野県筑摩郡中山村古墳発掘調査報告1・２」（『史前学雑誌』２-1・２）
楓原　健　1989「中山古墳群」（『長野県史』考古資料編1巻（3））

第1表　中山霊園第2·3次造成事業に伴う発掘調査成果一覧表

年(平成)	次	期間	面積(㎡)	発見された主な遺構	出土した主な遺物	所見・備考
2	1	4/27～8/31	6,300	古墳7（16・49～54号古墳）、炭焼窯1、土坑8、溝1、集石2、石垣23、石積1、列石1	土師器・須恵器・陶磁器、武器（剣1、刀2、鉄鏃10以上）、装身具（金環5、勾玉1、小玉1）	50～54号は埋滅古墳で周溝と石室底部のみ検出 石垣は近世以降
3	2	4/23～6/1	8,400	土坑1、溝1	土師器・須恵器	外周道路部も調査
4	3	5/20～7/30	3,117	古墳2（38・55号古墳）、炭焼窯4、土坑16、暗渠、須恵器窯2（確認のみ）	土師器・須恵器・陶磁器、馬具、武具、装身具（耳環、管玉、勾玉、臼玉）	須恵器窯は鍛形沢古窯址群と命名　鍛形原碧址トレンチ調査
5	4	4/20～5/21	3,033	炭焼窯2、土坑25、ピット、溝1	須恵器、土師器、炭	
7	5	5/8～8/4	2,400	古墳1（15号古墳）、炭焼窯8、土坑14、配石遺構1、縄紋時代遺物包含層	土師器、須恵器、炭化物	鍛形原碧址トレンチ調査　炭焼窯1基現状保存
8	6	6/6～8/23	2,200	古墳1（15号古墳）、住居址7（縄紋2、弥生4、不明1）、竪穴状遺構3、炭焼窯5、土坑105、集石土坑3、溝4、ピット多数	縄紋土器（中期·後期）、弥生土器、石器（石斧·石鏃·凹石）、土製品、炭化物、炭化米	縄紋·弥生集落址は鍛形原遺跡と命名
9	7	5/16～11/19	3,676	古墳1（15号古墳）、住居址5（縄紋中期）、炭焼窯1、土坑142、集石土坑1、ピット群2、溝3	縄紋土器、須恵器、石器（有舌ポイント·石鏃·石斧·凹石）	縄紋集落
	8	8/25～10/7	2,682	炭焼窯3、土坑68、ピット群3、溝1、配石1、ロームマウンド3	縄紋土器、須恵器、石器（石鏃·石斧·石皿）、炭	縄紋集落の土坑分布域
10	9	4/20～7/31	2,030	古墳1（57号古墳）、住居址13（縄紋中期8、弥生5）、炭焼窯1、土坑76、ピット	縄紋土器、弥生土器、須恵器、石器（石鏃·石斧）	縄紋·弥生集落　57号古墳は埋滅古墳で周溝の一部と石室底部のみ検出
11	10	4/27～1/21	6,851	環状杭列1、須恵器窯1（8C）、同灰原4	縄紋土器、土師器、須恵器、窯壁、窯滓	西側谷状部分の調査　須恵器窯は不動沢古窯址群と命名　西側独立丘陵にトレンチ
12		6/1～7/17	329			
12	11	9/27～12/7	955	炭焼窯4、土坑24	土師器、陶磁器、石器、炭化物	
	12	7/28～8/28	190	建物址1、土坑16	土師器、石器、炭化物、窯壁	
13	13	7/31～10/30	254	土坑9	土師器、石器	
16	14	4/10～3/28	15,305	古墳10（61～70号古墳）、住居址20（縄紋前期·中期、不明）、竪穴状遺構7、炭焼窯6、集石7、土坑153、ピット150、溝状遺構5、石積1	縄紋土器、須恵器、石器·石製品、土師器、骨片、金属製品	縄紋前期末～中期初等の斜面集落と古墳10基の調査
17	15	5/10～12/7		古墳3（71～73号古墳）、住居址17（縄紋前期·中期、不明）、竪穴状遺構7、炭焼窯11、集石6、土坑455、ピット506、溝状遺構9、石積1、谷状地形6	縄紋土器、須恵器、石器·石製品、土師器、骨片、金属製品、ガラス玉	カニホリ東·カニホリ西遺跡と命名　62号古墳を現状保存
合計			57,722	縄紋時代：住居址31、土坑多数、集石土坑4 弥生時代：住居址9 古墳時代：古墳24（15·16·38·49～55·57·61～73号古墳）、配石2 奈良·平安時代：炭焼窯44、、須恵器窯3、建物址1 戦国時代：砦の空堀（トレンチで確認） 時期不明：住居址22·炭焼窯2	縄紋土器（早期～晩期）、弥生土器（後期）、土師器、須恵器、石器（ポイント·鏃·斧·石皿·凹石等）、武具（剣·刀·鏃·牾頭）、馬具（轡·鞍）、装身具（耳環·玉類）、炭化物、骨、窯壁 ※総量は整理用コンテナ130箱	鍛形原遺跡·縄紋·弥生時代の集落跡を新発見·命名 カニホリ東·カニホリ西遺跡：縄紋時代の集落跡を新発見·命名 奈良時代の炭焼窯を発見 鍛形沢古窯址群·不動沢古窯址群:奈良時代の須恵器窯を新発見·命名 中山古墳群:古墳24基のうち21基を新発見·命名 鍛形原碧址:空堀の存在を確認

Ⅲ章　調査の概要

今回の調査は第14・15次調査となる。平成16年度実施分を第14次調査、同17年度実施分を第15次調査として実施した。中山霊園一帯は市指定の史跡中山古墳群にあたり、調査開始以前から古墳群の存在は予想されていた。古墳群の調査を開始したところ、縄紋時代を中心とする集落遺跡を新発見した。集落遺跡は調査地中央部にある谷によって東西に分断されていることから、この沢を境界に2つの遺跡に分け、東側をカニホリ東遺跡、西側をカニホリ西遺跡と命名した。遺構はカニホリ東遺跡では南向きの傾斜面上に、カニホリ西遺跡では台地に拡がる緩斜面上に集中しており、立地の上でも違いが認められる。

1　調査地の設定

(1)　カニホリ東遺跡の範囲　開墾等の削平により、周知の古墳や墳丘の存在を予想させるような土盛がなく、人力と建設用重機によるトレンチ調査から始めた。トレンチは等高線に沿う形で、任意に設定した。その結果、縄紋時代の遺構・遺物と古墳を検出した。調査は遺物・遺構確認部周辺を中心に面的に拡げ、調査区（A～C・N区）を設定した。各調査区の面積は、A区2,387㎡、B区1,440㎡、C区981㎡、N区2,113㎡、合計6,921㎡である。

(2)　カニホリ西遺跡の範囲　カニホリ東遺跡と同様、遺構・遺物確認部分周辺を中心に、D～M、O区を設定した。須恵器古窯址の存在が予想される場所では、試掘トレンチ調査を実施したが、検出できなかった。各調査区の面積は、D区1,072㎡、E区1,039㎡、F区440㎡、G区420㎡、H区360㎡、I区1,601㎡、J区594㎡、K区510㎡、L区1,724㎡、M区554㎡、O区70㎡で合計8,384㎡になる。

2　遺構検出面の設定

建設用重機を用いて、基本的には耕作土直下の明黄褐～黄褐色土層中に設定した。谷状地形部分では、場所により異なる。地表面からの深さは、切り土・盛土部分があるため、約10～100cm程と深浅がある。古墳はカニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡と同一の遺構検出面で調査している。

3　測量方法

平面測量は、簡易遣り方測量で行った。カニホリ東遺跡の範囲内では国土地理院の旧平面直角座標第Ⅷ系X=21313.546、Y=45252.478、カニホリ西遺跡の範囲内には同X=21290.000、Y=45600.000にそれぞれ原点（EW 0・NS 0）を設定し、そこから2mのメッシュを組み、各交点に釘を打ち基準点とした。

4　検出遺構

縄紋時代を中心に、古代、近現代の遺構を検出・調査した。石室内に石積状の礫が検出された62号古墳の石室は、調査期間中に現地での保存が決定し、調査終了後、砂を充填して埋め戻した。

(1)　中山古墳群　古墳13（61～73号墳・後期古墳）

(2)　カニホリ東遺跡　竪穴住居址24（縄紋時代前期末～中期初頭9軒、中期後半以降1軒、不明14軒）、竪穴状遺構4、炭焼窯9（古代～近現代）、集石1、土坑236（縄紋時代～近現代？、120・173・174・202土は欠番）、ピット287、溝状遺構8、石積2（近現代）

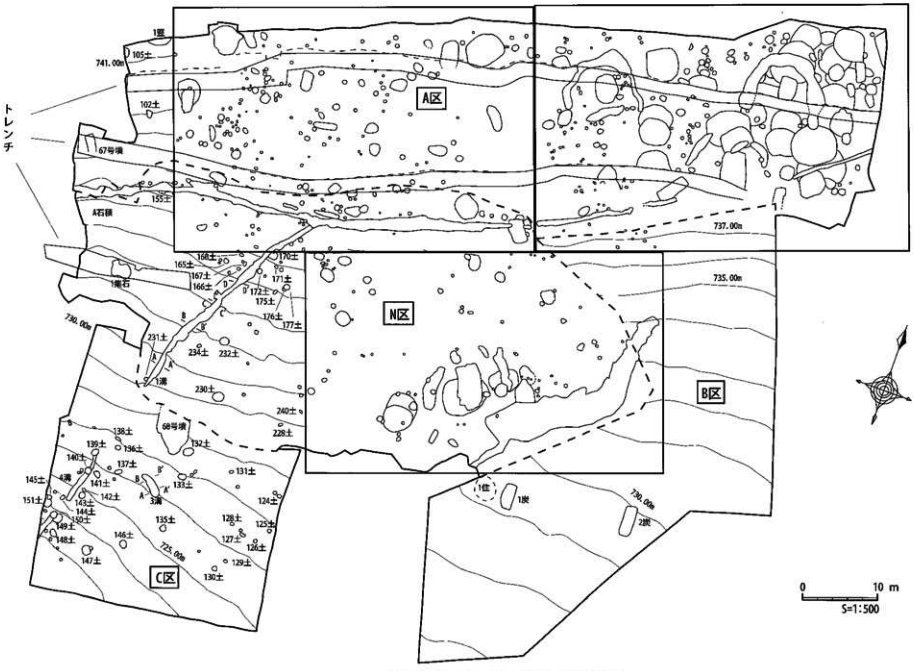
(3)　カニホリ西遺跡　竪穴住居址13（縄紋時代前期末～中期初頭3軒、中期後半3軒、不明7軒）、竪穴状遺構9、炭焼窯8（古代？）、集石13、土坑369（縄紋時代～近現代、251土は欠番）、ピット163、土器集中区3（縄紋時代前～中期）、溝状遺構6（近現代？）、谷状地形6

5　出土遺物

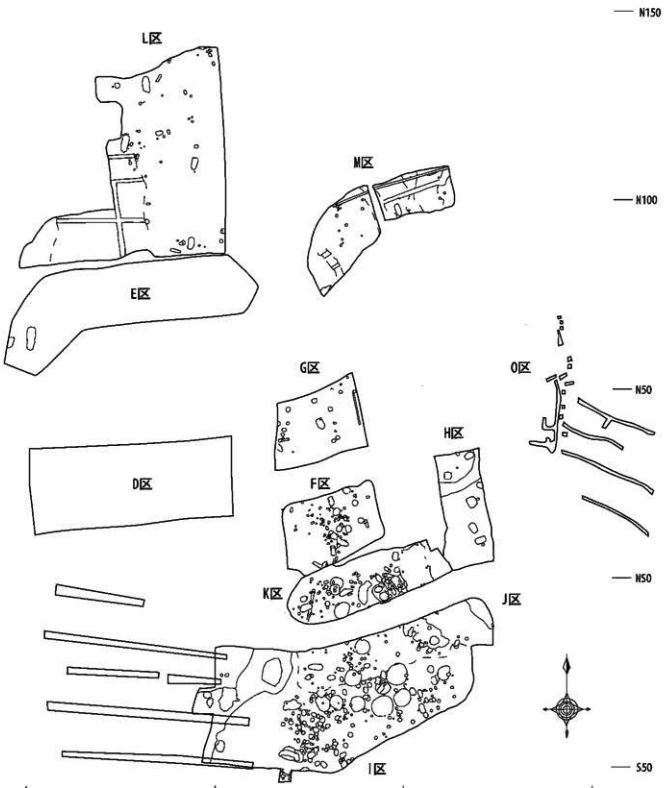
(1)　中山古墳群　　土器・陶磁器、金属製品、石製品、ガラス製品、骨類、炭化物

(2)　カニホリ東遺跡　土器・陶磁器、金属製品、銭貨、石器・石製品、骨類、炭化物

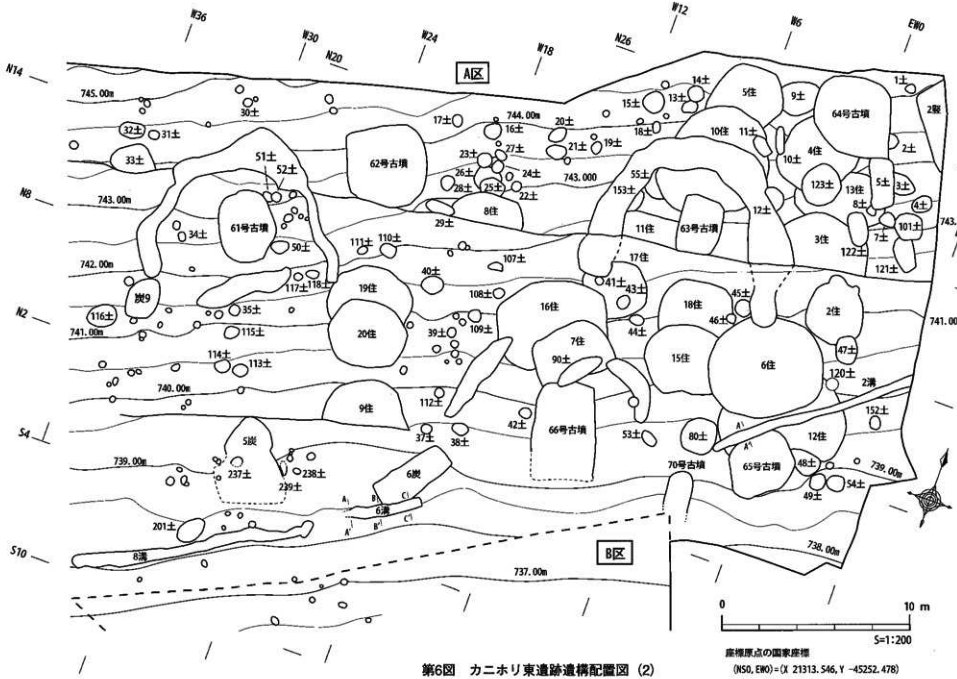
(3)　カニホリ西遺跡　土器・陶磁器、金属製品、石器・石製品、骨類、炭化物



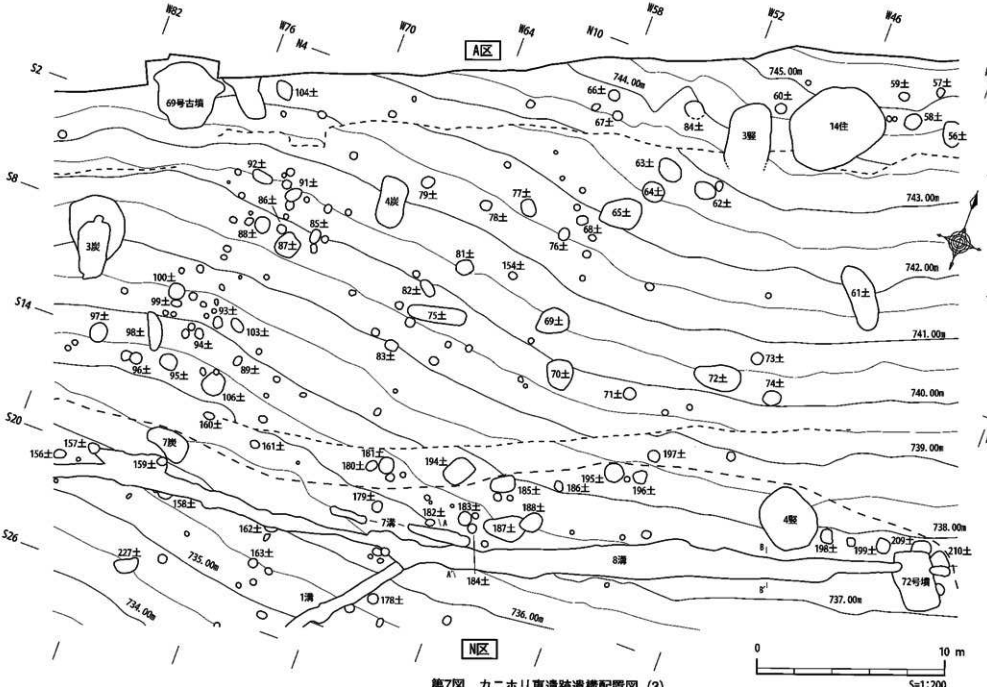
第4図　カニホリ東遺跡遺構配置図（1）



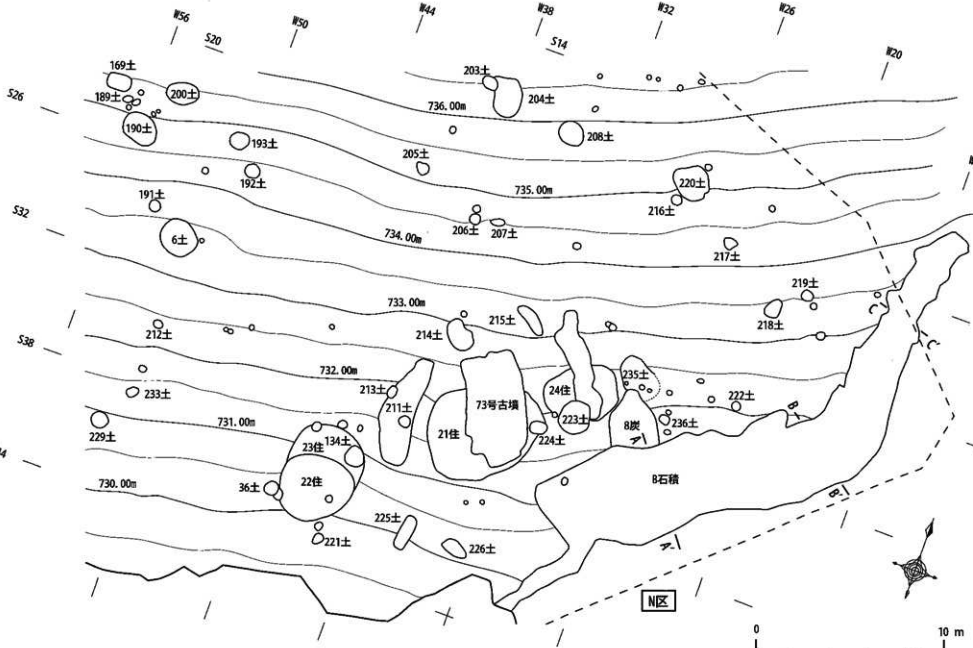
第5図　カニホリ西遺跡遺構配置図 (1)



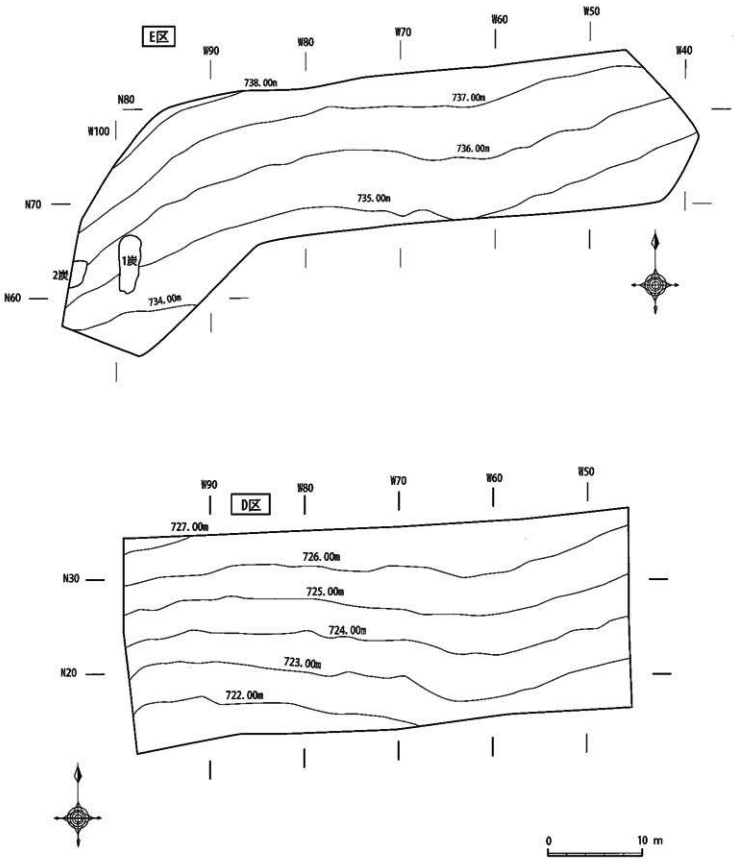
第6図　カニホリ東遺跡遺構配置図（2）



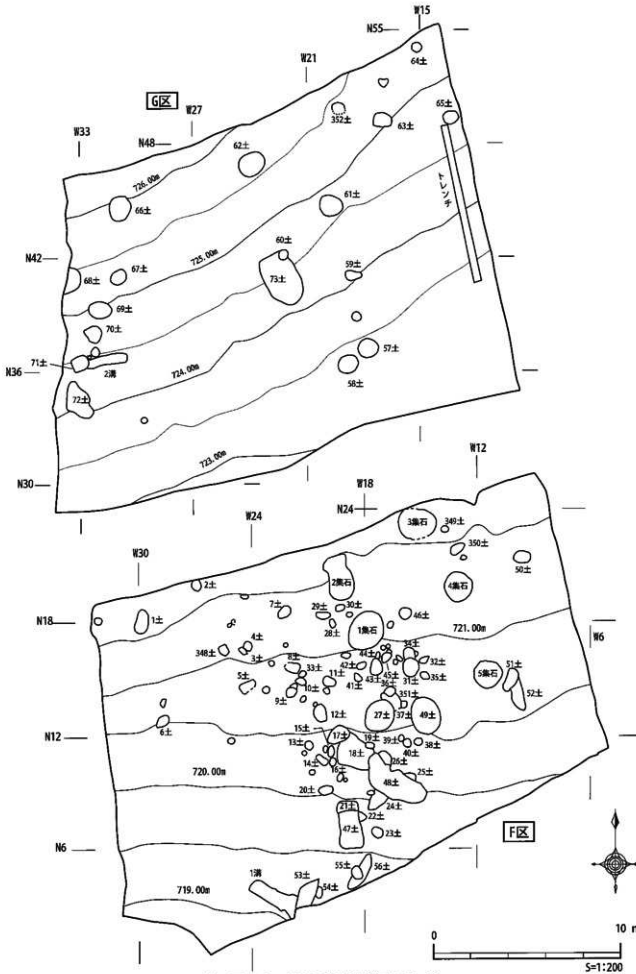
第7図　カニホリ東遺跡遺構配置図（3）



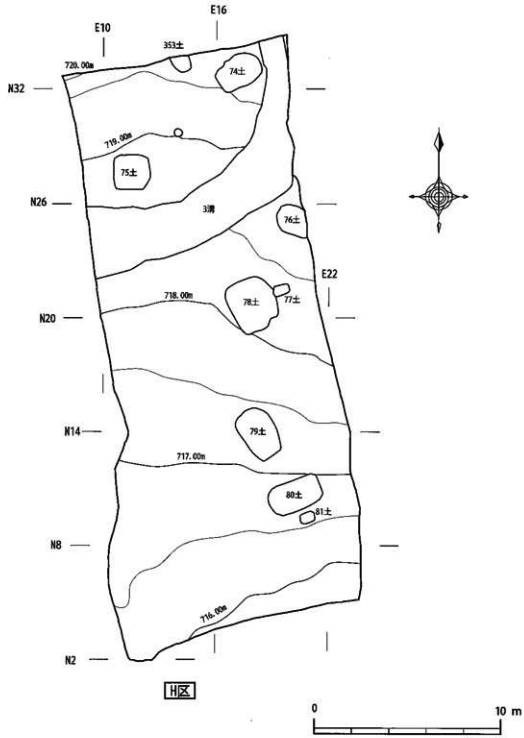
第8図　カニホリ東遺跡遺構配置図（4）



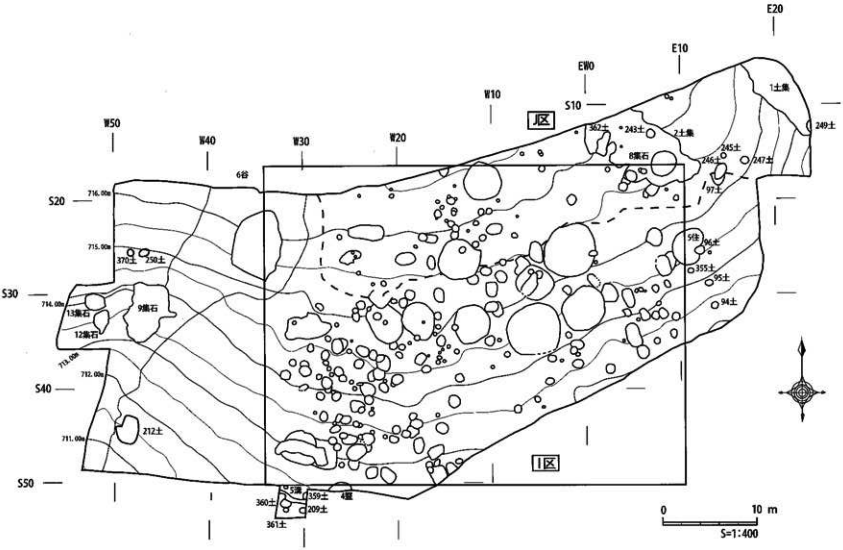
第9図　カニホリ西遺跡遺構配置図（2）



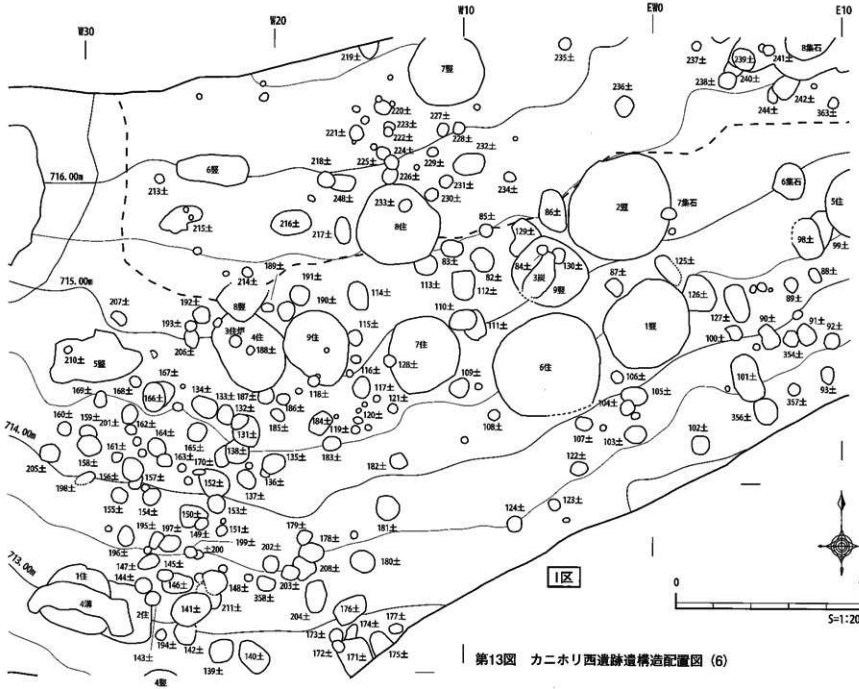
第10図　カニホリ西遺跡遺構配置図（3）



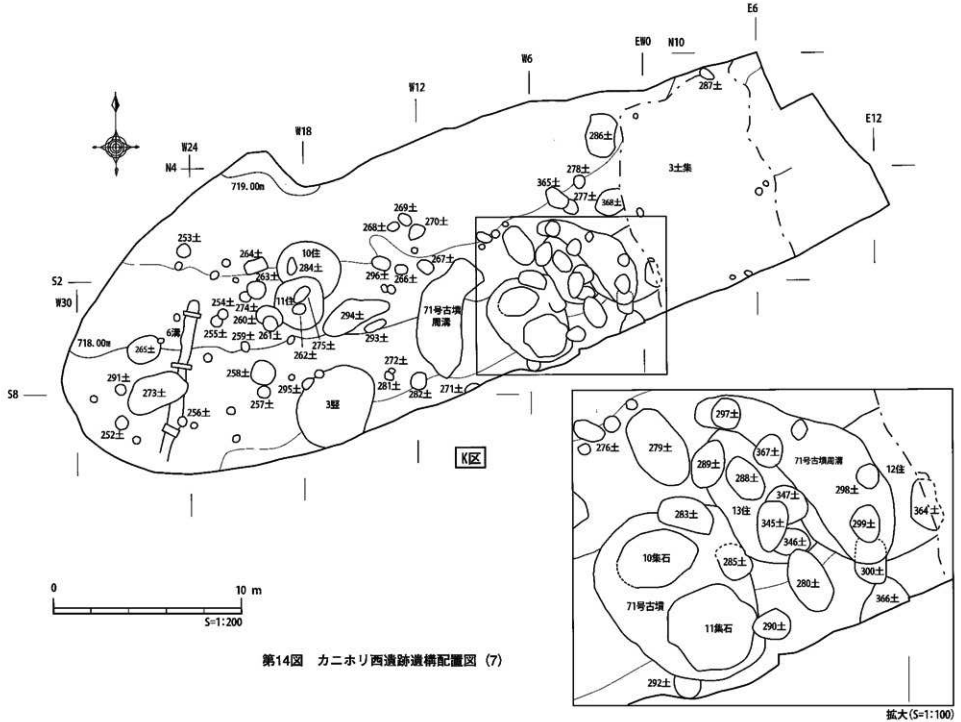
第11図　カニホリ西遺跡遺構配置図（4）



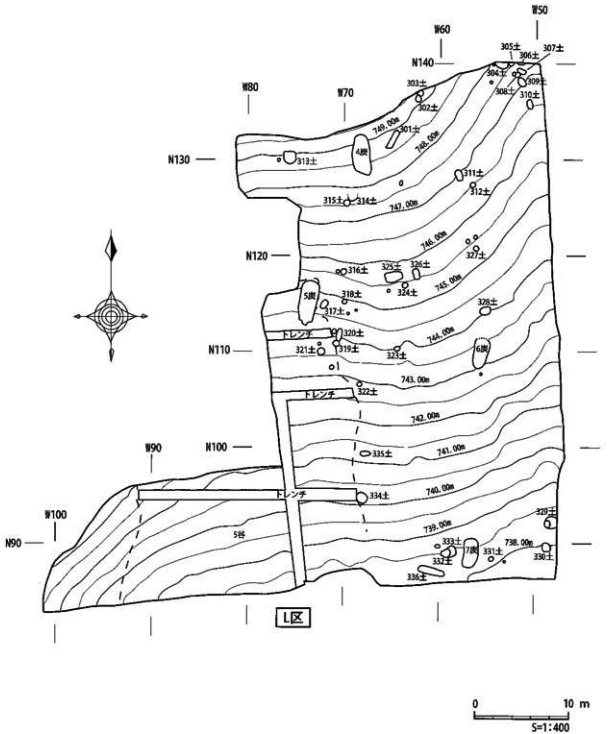
第12図　カニホリ西遺跡遺構配置図（5）



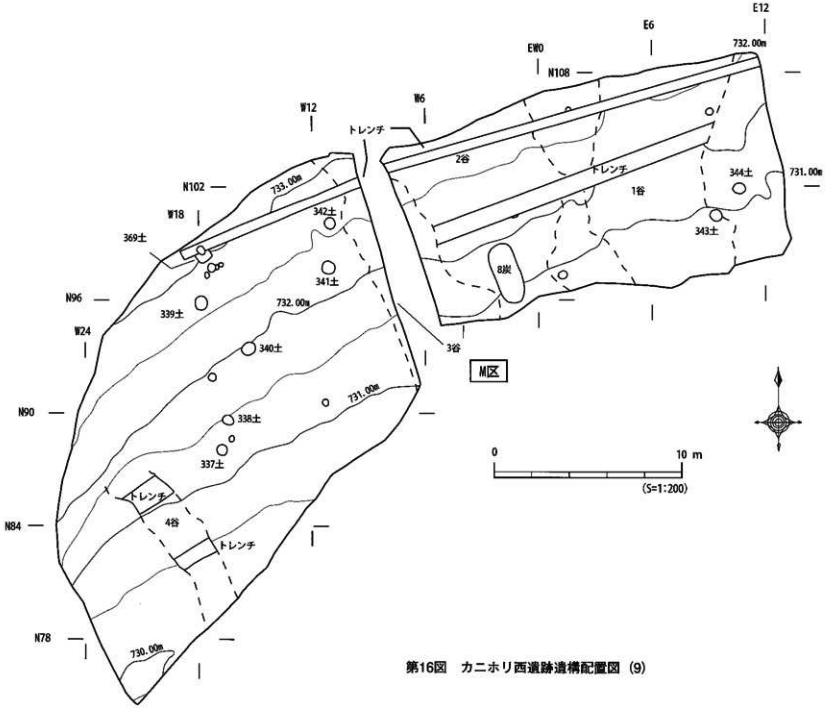
第13図　カニホリ西遺跡遺構造配置図（6）



第14図　カニホリ西遺跡遺構配置図（7）



第15図　カニホリ西遺跡遺構配置図（8）



第16図　カニホリ西遺跡遺構配置図（9）

Ⅳ章　中山古墳群

今回、13基の古墳を新発見し調査した。残存状況は、開墾などの影響を受けているため非常に悪く、全ての古墳の墳丘部は削平され天井部は残存しない。埋葬施設はすべて横穴式石室であるが、斜面下側の開口部側は、62号古墳の一部のみ残存していた。このため、袖の形状なども62号古墳を除き、不明である。分布をみると、A区に９基、C区に１基、N区に２基、J区に１基あり、南向き斜面の東端部にあたるA区に集中している。石室が残存していた12基の古墳の内、68号古墳を除いた11基は、石室の礫表面が被熱し、黒変・赤変化する礫が含まれている。被熱箇所は、石室の壁内面ばかりでなく、外面・上下面等にもみられることから、石室構築以前に被熱した可能性もあり、時期は推定できない。石室内に炭化物や骨片が出土するものがあることから、時期は推定できないものの、火葬が行われた可能性もある。分析が可能な炭化材のサンプルが得られた61・64号古墳を対象に放射性炭素年代測定および樹種同定を行ったが、推定された年代は中～近世で、樹種はコナラ属であった。個々の玄室計測値は、第２表に掲載した。

中山61号古墳（第17図）

位置・切り合い　A区中央東寄りに位置する。主体部で50土、周溝で19住を切る。**検出状況**　耕作土直下で主体部と周溝を検出した。**周溝**　２箇所で途切れ、北側に弧を描く周溝と、南側に平面直線状の周溝に分かれる。**墳形**　周溝の平面形から円墳と推定され、周溝の内法は東西7.9mを測る。**主体部の形態**　南東に開口部をもつ。玄室の幅は奥壁側で狭く、開口側に向かって拡がり、平面形は台形を呈する。残存する西壁南端の礫は、羨道側が拡がる様に埋設されている。**石室の礫**　１～２段残存する。箱形を呈する礫を用いて、奥壁と西壁は、最大面を石室内側面にして積まれるものが多く、東壁では、最大面を上・下面に使っている。**石室掘り方**　奥壁側は検出面から30cmの深さまで傾きがあり、以下はほぼ直に掘り込まれる。東壁は傾きがあり、西壁は緩やかに掘り込まれる。**覆土**　奥壁側の西半では、検出面から30cmの深さまで炭化材と焼土の堆積がみられた。**底面**　地山の二次堆積ロームを底面とし、非常に堅固な状況であった。南東に向って僅かに傾斜し、羨道側に僅かな窪みが認められる。

遺物出土状況　土器などの出土量は少ない。底面直上から、完形の須恵器杯Ａ（№４）が出土し、土師器の杯（№１）・高杯（№２）も認められている。**時期**　遺物から、７世紀末と推定される。

中山62号古墳（第18・19図）

位置・切り合い　A区中央東寄りに位置し、61号古墳の東に並ぶ。他の遺構との切り合いはない。**検出・掘り下げの状況**　重機による耕作土除去の際、耕作土直下に不整円形の落ち込みを確認した。落ち込みの東端部に南北方向に伸びる列状の石積が検出されたため、掘り方の東側に石室が寄る主体部を想定した。落ち込みに東西方向のサブトレンチを設定し、掘り下げたところ、落ち込みの中央付近と西側にも南北方向に伸びる列状の石積が現れ、計３列が確認された。サブトレンチの土層堆積観察と平面検出を再度実施したが、遺構の切り合い等は確認できず、疑問を残したまま単独の遺構として掘り下げた。**埋葬施設**　主体部には、ほぼ中央に南北方向に積まれた石積がある。見かけ上は、この石積の東側面が羨壁になり、平面が長方形の玄室２基が並んだ特殊な形態になる。仮にこの石積を取り除くと、後期古墳にみられる方形の玄室形態になる。この石積は、西側が壁面になるように個々の礫面を揃えて積まれているが、東側は積まれた礫の形状・大きさが不揃いなため、凹凸があり、隙間が多い。礫の積み方から、玄室として構築されたのは、中央の石積を東壁とする平面が長方形の玄室と、中央石積を取り除いた平面が方形の玄室が考えられる。方形の石組は、奥壁が西側・東側の石積と組み合わされているのに対し、中央の石積は、接する場所はあるが、他の石積と組み合う部分が無く、底面から１段目の礫は、全てが底面から離れ、接していない。これらの点から、中央の石積は、幅を減じた新しい玄室の構築時に新設された東側側壁と考えたい。その際には、中央の

石積の東側は埋め戻され、西側には以前より浅い礫敷の底面を設けたものと思われる。本報告では中央の石積の東側部分を第１玄室、中央石積を取り除いたほぼ方形の玄室を第２玄室として述べていきたい。**石室の形態**【第２玄室】平面形は正方形を呈し、両袖式と推定される。東側は第１玄室築造時に埋め戻されたものと推定したい。【第１玄室】平面形は、長方形～台形を呈し、羨道側が広く奥壁側に向うにつれ、狭くなる。羨道部は底面まで削平されるため明確ではないが、両袖式と推定される。西側は第１玄室の袖をそのまま利用したと推定される。閉塞石の有無は、破壊により不明である。**礫の積み方**【第２玄室】２～６段が残存する。箱形を呈する礫を用いて、最大面を上・下面にする様に積まれ、個々の礫は長辺を壁の伸びる方向に向ける。壁面は、内傾して内側にせり出す。【第１玄室】２～６段が残存する。箱形を呈する礫を用いて、最大面を上・下面にする様に積まれ、個々の礫は東側壁を除いて長辺を壁の伸びる方向に向けている。東側壁では、短辺を壁の伸びる方向に向けている。壁面は、東側壁を除き、内傾して内側にせり出す。**石室掘り方**【第２玄室】概ね直に掘り込まれる。北東部では、一旦直に掘り込まれ、石積の底から２～３段目付近で斜めに傾く。**覆土の状況**【第２玄室】中央石積の東側は、覆土中～底面に多数の礫が混入する。【第１玄室】覆土上～下層にかけて多数の礫が混入し、第２玄室とは状況が異なる。**底面の状況**【第２玄室】確認できなかった。掘り方底面は、地山の明黄褐色土で、概ね平坦堅固な状態であった。第１玄室構築時に壊された可能性もある。【第１玄室】６層下～７層上面に礫敷の底面があった可能性が高いが、第２玄室の掘り方底面まで掘り下げてしまった。玄室北半部分では、多数の礫が覆土の最下層の７層（暗褐色土）上面に接した状態でまとまっていた。掘り下げ時には、面としては捉えられなかったが、これらの礫は埋設された礫敷の底面であった可能性が高い。

遺物出土状況【第２玄室】土器などの出土量は少ないが、須恵器長頸壺の一括品が北東隅の底面上から出土している。【第１玄室】土器などの出土量は比較的少ないが、須恵器が出土している。石室南東隅部の底面礫上から、蓋Ａ（№10～12・14・15）、長頸壺（№16）がまとまって出土し、南西部６～７層上面に杯Ａ（№７）が出土している。**時期**　出土した土器類から第１・第２玄室ともに、７世紀末と推定される。

中山63号古墳（第20図）

位置・切り合い　Ａ区中央東側に位置する。主体部で10住を切り、周溝では３・６・10・17住、12・45・55・153土を切る。**検出状況**　試掘トレンチの壁面に周溝の一部と主体部の落ち込みを確認した。**周溝**　平面半円形に検出し、開口部のある主体部南では確認できなかった。北～西側では、底面に段がある。**墳形**　周溝の平面形から円墳と推定され、周溝内法は東西6.6mを測る。**主体部の形態**　掘り方と推定される落ち込みを確認した。規模は長さ（南北）6.1m以上、幅（東西）4.5m程を測る。**石室**　開墾などによって残存せず不明。破壊され石積の石材として抜き取られた可能性がある。**覆土の状況**　礫が混入していたが、破壊された石室の礫が散在したものと思われる。

遺物出土状況　出土量は比較的多く、主体部掘り方と周溝から須恵器壺片（№18）と土師器甕片（№17）等が出土している。**時期**　遺物より、７世紀末～８世紀前半と推定される。

中山64号古墳（第21図）

位置・切り合い　Ａ区北東端部に位置する。主体部で４住、2・5・9土を切る。**検出状況**　検出作業時から、骨片・骨粉がみられた。**主体部の形態**　残存部分の平面形は、長方形を呈する。**石室の礫**　１～２段残存する。箱形を呈する礫を用いて、最大面を壁面にして積まれている。**石室掘り方**　平面形は不整な楕円形を呈し、傾いて掘り込まれる。**覆土の状況**　検出面～覆土下層にかけて、骨片・骨粉が検出された。**底面**　確認できなかった。掘り方底面は地山の明黄褐色土（２次堆積ローム）である。覆土下層には礫が多数あり、面的に認められないものの、深さがほぼ一定であることから、礫敷の底面であった可能性もある。

遺物出土状況　土器類は出土していない。金属製品は多く、９点が出土している。器種は刀子（柄頭・№１）、

鏃（№2～8）と不明品（№9）がある。その他、玄室底面では、礫下に骨片・骨粉が面的に拡がって検出された。**時期**　土器類の出土が無く、時期は不明である。

中山65号古墳（第22図）

位置・切り合い　A区南東端部に位置する。主体部はA石積に切られ、48土と12住を切る。12住の覆土中に構築される。**検出状況**　A石積を除去したところ、南北方向の石列が現れ、古墳主体部と推定した。残存部は少なく、石積構築の際に、破壊されたと考えられる。**主体部の形態**　平面形は長方形を呈するものと推定される。残存部では、幅が羨道部側から奥壁側に向かって徐々に狭まる。**石室の礫**　残存する側壁は東西共に1段のみ。箱形を呈する礫を用いて、最大面を上・下面に使っている。**石室掘り方**　側壁部では傾きをもって掘り込まれ、礫埋設部の周囲は、他に比べ深く掘り込まれる。**底面**　本址が切る12住覆土の暗褐色土をそのまま底面とし、軟弱である。特に南東部は破壊を受け、一部掘り過ぎてしまった恐れもある。**覆土の状況**　玄室南半部は多数の礫が散乱しているが、底面まで壊されていて、玄室に伴わない礫の可能性が高い。

遺物出土状況　出土量は少ないが、須恵器が出土している。残存部の南側底面上から、美濃須衛産の須恵器杯B（№19）、蓋B（№20・21）が出土している。**時期**　出土した土器から、8世紀前半と推定される。

中山66号古墳（第23図）

位置・切り合い　A区東半部中央に位置する。主体部で90土に切られ、7住を切り、周溝で7・16住を切る。**検出状況**　A石積の礫を除去し、主体部を検出した。主体部の南端部は、A石積の構築の際に上部が削り取られ、石室の礫も失われていた。**周溝**　主体部南側に2箇所に分かれて検出し、平面形は弧を描き、断面は皿型を呈する。**主体部の形態**　残存する範囲内では、平面長方形を呈する。**石室の礫**　1～4段残存する。奥壁、羨道側は残存していない。側壁は、上に積まれた礫が僅かに内傾にせり出し、内傾している。積み方は、東壁南端部の2個を除き、箱形を呈する礫を横方向に使い、最大面を上・下面にする様に積んでいる。東壁南端部の2個は縦方向に最大面を側面にして埋設しており、仕切石の可能性がある。**石室掘り方**　平面形は隅丸長方形を呈する。**覆土の状況**　残存部の中央部分には礫が少ない。奥壁と玄室側には、多数の礫が出土しているが、開墾時に持ち込まれた可能性が高い。**底面**　明確ではないが、2面存在した可能性もある。下面は堅固な明黄褐色2次堆積ローム土、上面は黄褐色土粒を含む軟弱な暗褐色土である。

遺物出土状況　出土量は多く、玄室と周溝から須恵器片が出土している。須恵器には美濃須衛産の蓋A（№29・30）、蓋（№30・31）、長頸壺？（№33）がある。**時期**　出土土器から、7世紀末と推定される。

中山67号古墳（第22図）

位置　A区西端部に位置する。**検出状況**　地山の明黄褐色土に褐色土の落ち込みとして本址を検出した。**周溝**　調査区内では確認していない。区外でも主体部の周囲にサブトレンチを設定し検出を試みたが、確認できなかった。**主体部の形態**　西側側壁は残存しておらず不明。羨道側の南側も、底面下まで耕作が及び失われていた。**石室の礫**　部分的に1段のみが残存する。奥壁では、箱形を呈する礫を縦方向に長く使い、埋設している。**石室掘り方**　残存部では平面楕円形。奥壁側は側壁に比べ深く、傾いて掘り込まれる。**底面の状況**　地形に合わせ、概ね北～南方向に傾斜を持つ。堅固な褐色土。

遺物出土状況　土器類、金属製品等の出土は皆無である。奥壁側の覆土～底面には、骨粉が拡がっていた。他には、水晶の原石が底面から出土している。**時期**　土器類などが出土しておらず、不明である。

中山68号古墳（第24図）

位置・切り合い　C区北端部に位置する。開墾に伴う石垣状の石積の下にあり、礫を除去し検出した。**主体部の形態**　平面形は円～楕円形を呈し、今回調査した他の古墳と主体部の形態は大きく異なる。**石室の礫**　開墾により壊され、基底部のみ残存する。他の古墳では、概ね長さ30cm超の箱形を呈する礫を石材に選んでいるが、本址は長さ20cm未満の比較的小さな円礫・角礫を主として、形状を選ばずに使用している。

積み上げ方も他は概ね直もしくは内傾しているが、本址は褐色土を混合して、上方に開いて積まれる。上部の構造は不明だが、土石混合の基底部に、側壁や天井部を支える強度があるとは考えにくく、疑問が残る。あるいは、空間を伴う玄室がなかった可能性もある。今回は古墳として扱ったが、本来は古墓かもしれない。**石室掘り方**　平面形は不整な卵形に近い。**覆土の状況**　多数の礫が混入し、下層～底面上には炭化物と骨粉が面的に拡がる。**底面**　地山の褐色土をそのまま底面とし、ほぼ平坦で堅固な状態であった。

遺物出土状況　出土量は比較的多く、覆土下層～底面上に須恵器杯（No.36・37）、美濃須衛産の壺B（No.38・39）、長頸壺（No.42）などがみつかった。**時期**　遺物より、8世紀初頭から前半と推定される。

中山69号古墳（第25図）

位置　A区北西端部に位置する。**周溝**　主体部掘り方東側に近接し、北は調査区外に続く。断面形は皿型に似るが、中央部分は若干深くなる。**主体部の形態**　奥壁の中程～東側、羨道側は残存しないが、平面は長方形を呈するものと思われる。**石室の礫**　1～4段が残存する。奥壁東側には、2.1mを超える大きな礫を縦に埋設している。側壁は、箱形を呈する礫を横にし、最大面を上・下面にする様に積んでいる。**石室掘り方**　平面形は不定形で、東側中程は広く、周溝に接している。**覆土の状況**　羨道側は多数の礫が含まれるが、開墾時に持ち込まれた礫の可能性が高い。北東部の下層～底面には、炭化物と焼土が面的に認められた。**底面**　地山の褐色土をそのまま底面とし、堅固な状況であった。

遺物出土状況　土器類、金属製品などは皆無で、底面から骨片が出土している。**時期**　時期を推定できる遺物が無く、不明である。

中山70号古墳（第26図）

位置・切り合い　A区南東端部に位置し、主体部の南側部分は開墾時の切り土で削り取られ、消失していた。開墾に伴うA石積が主体部の上に築かれ、石室の礫一部は、A石積に組み込まれていた。**検出状況**　A石積を除去したところ、灰黄褐色土の落ち込み中に、平面「コ」の字形の石列を検出し、比較的規模の小さな玄室と推定した。残存状況は悪く、奥壁と奥壁側の側壁の一部・底面が残存する。**主体部の形態**　残存部では、平面形は長方形を推定する。**玄室規模**　残存部での玄室幅は48cmと狭く、今回検出した玄室では最小規模である。**石室礫の積み方**　1～3段が残るが、A石積の影響を受けている。石室築造時の原位置を保っていない恐れもあるため明確ではないが、奥壁は上方に広がる様相を示し、側壁も若干上方に開く。調査中に一部の礫は崩れてしまった。**石室掘り方**　奥壁側は、傾いて掘り込まれる。**覆土の状況**　石積の基底部に取り込まれ、ほとんど残存していなかった。底面上に4個の礫が認められるが、本址に伴うものかは分からない。**底面**　開墾等による削平で底面下まで壊され、不明である。

遺物出土状況　須恵器片1点が検出されたが、混入した遺物の可能性が高い。骨類・炭化物・焼土なども無い。**時期**　遺物が無く、不明である。

中山71号古墳（第27図）

位置・切り合い　K区に位置し、南の調査区外には東西方向に道路が通る。多数の遺構との切り合いがあり、主体部は10・11集石、283・285土に切られ、13住、290土を切る。周溝は主体部の北西と北東に2箇所に分かれて検出し、北東の周溝部分で12・13住、300・299・367土を切り、297・298土に切られる。

検出状況　耕作土直下に弧を描く2箇所の溝と楕円形の掘り方を検出し、古墳と推定した。**墳形**　周溝の平面形から円墳と推定され、周溝の内法は東西8.0mを測る。**周溝**　検出面からの掘り込みは、最深部で35cmと浅い。北西の周溝の覆土中には、直径10～40cm大の礫が多数認められた。**主体部の形態**　残存部分は少ないが、玄室は長方形を呈するものと推定される。**石室の礫**　側壁は1段のみ残存する。箱形を呈する礫を横方向に使い、最大面を上・下面にする様に積んでいる。**石室掘り方**　掘り方全体を深く掘り、玄室内は埋土し、底面を貼っている。**底面**　埋土の灰黄褐色土を底面にしている。底面上に焼土の堆積と骨粉が認め

られた。

遺物出土状況　出土量は少なく、須恵器蓋（№43）がある。**時期**　遺物より、8世紀前半と推定される。

中山72号古墳（第24図）

位置・切り合い　N区北東部に位置する。主体部を8溝に切られ、209・210土、P 232を切る。**検出状況**　A石積が主体部の上に築かれ、玄室の礫は石積の基底部に組み込まれていた。**主体部の形態**　側壁の一部が残存する。玄室は平面長方形と推定される。**石室の礫**　側壁は1段のみ残存する。箱形を呈する礫を横方向に使い、最大面を上・下面にする様に積んでいる。**覆土の状況**　奥壁側に長さ20～60cm程の礫が数個あるが、A石積構築時に持ち込まれた可能性もある。**底面**　確認できなかったが、埋土の灰黄褐色土の上面は、堅固な状況であり、底面の可能性がある。

遺物出土状況　土器類、金属製品、炭化物などは出土しなかった。**時期**　出土遺物が無く、不明である。

中山73号古墳（第28図）

位置・切り合い　N区南東部に位置し、21・24住を切り、211・213・223土に切られる。**検出状況**　耕作土直下で検出した。**周溝**　主体部の東西に、2箇所に分かれて検出した。**主体部の形態**　羨道側が残存しないが、玄室は平面長方形と推定される。**石室の礫**　1～3段残存する。奥壁部分では、箱形を呈する礫を縦にし、壁面が最大面になるよう埋設される。側壁部分では、1ヶ所を除き、箱形を呈する礫を横方向に使い、最大面を上・下面にする様になるように積んでいる。東壁の残存部中央部には、礫を縦に埋設した仕切石があり、境石と推定される。西壁に対面する礫は、横使いに埋設されるものの、他に比べ小さく、境石の可能性がある。**石室掘り方**　残存部では、不整な長方形を呈する。**覆土の状況**　残存部の奥壁～境石付近では、覆土上層を中心に多数の礫が出土している。中層では、骨粉が少量認められた。**底面**　確認できなかった。掘り方底面は地山のにぶい黄褐色土で、堅固な状況であった。遺物出土状況から、掘り下げ時には捉えられなかったが、覆土下層の暗褐色土中あるいは上面に底面があった可能性もある。

遺物出土状況　土器類、金属製品、玉類など比較的多い。土器には須恵器杯B（№44・45）、金属製品では刀子（№10）、玉類では切子玉（№1）がある。いずれも覆土下層からの出土であった。

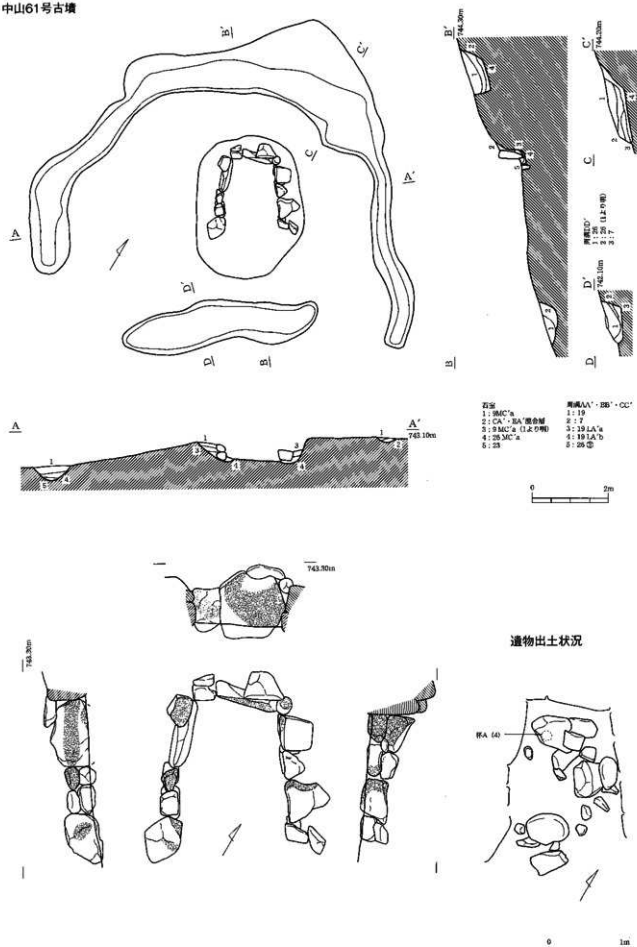
時期　出土した遺物から、8世紀初頭～前半と推定される。

第2表　玄室計測値一覧表　　単位：m

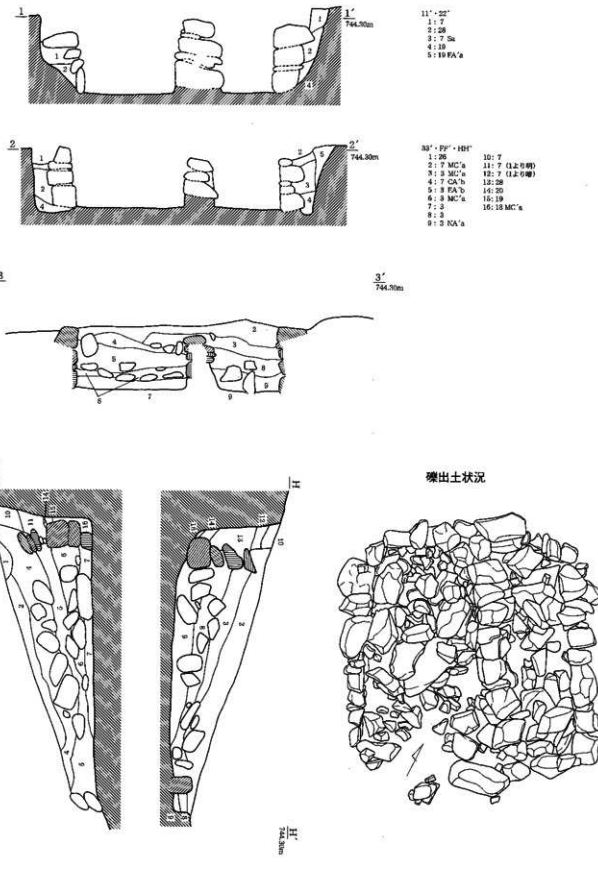
古墳名	玄室幅（最短）	玄室幅（最長）	玄室残存幅	玄室長	玄室左残存長	玄室右残存長	玄室残存高
61号古墳	1.1	1.4		2.1			0.9
62号古墳（第1玄室）	0.9	1.5		2.6			1.2
62号古墳（第2玄室）	2.5	2.8		2.6			1.3
63号古墳	-	-		-	-	-	-
64号古墳	1.3	1.4		2.6			0.8
65号古墳	0.7	0.9			2.5	2.3	0.5
66号古墳	1.5	1.7			3.1	4.0	0.7
67号古墳			1.1		-	1.3	0.5
68号古墳		1.0			1.1	1.2	-
69号古墳	0.9	1.1	1.9				1.0
70号古墳	0.5				0.4	0.9	0.6
71号古墳	1.2				2.3	1.0	0.3
72号古墳	1.0				1.2	1.7	0.4
73号古墳	1.2	1.4		4.7			0.8

※左右表記については玄門から奥壁を見たときの左右

中山61号古墳

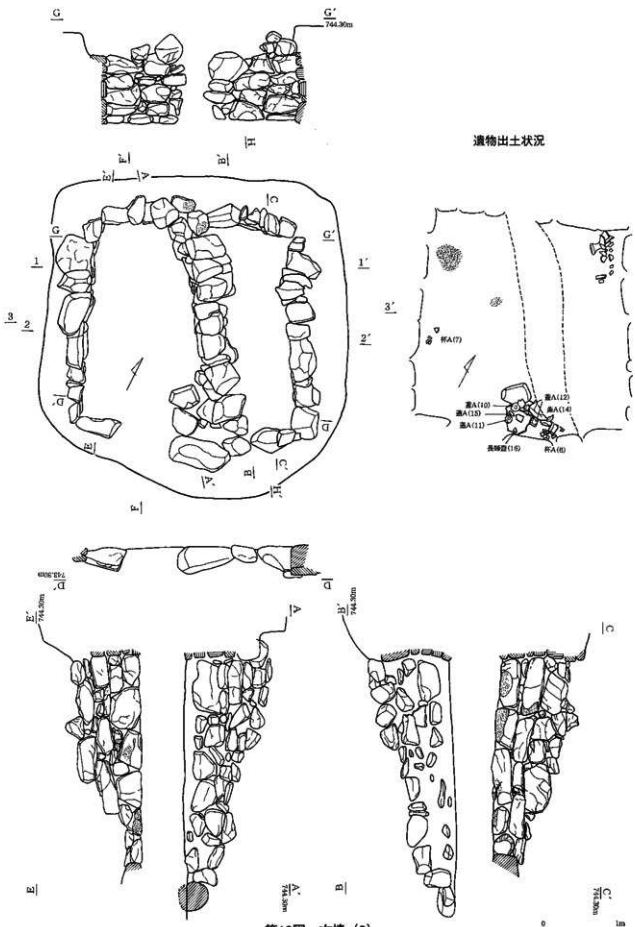


第17図　古墳（1）


1
1′
744.30m
11′・22′
1：7
2：28
3：7 Sa
4：19
5：19 FA′a
2
2′
744.30m
33′・FF′・HH′
1：26
2：7 MC′a
3：3 MC′a
4：7 CA′b
5：3 FA′b
6：3 MC′a
7：3
8：3
9：3 KA′a
10：7
11：7 (1より明)
12：7 (1より暗)
13：28
14：20
15：19
16：18 MC′a
3
3′
744.30m
F′
744.30m
F
H
H′
744.30m
礫出土状況
0
1m

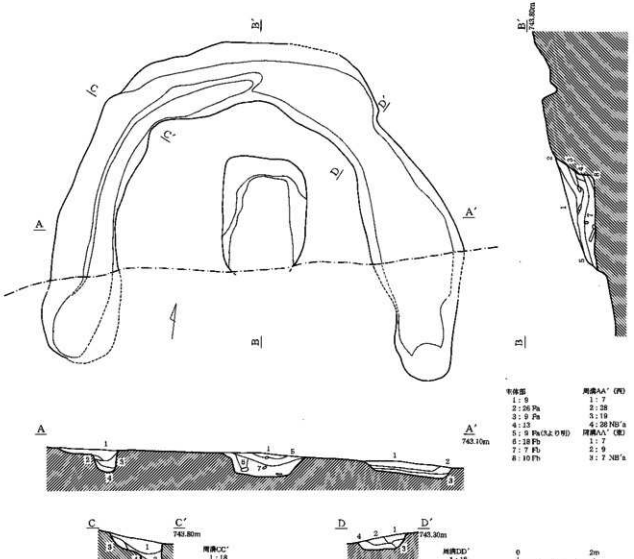
第18図　古墳（2）

中山62号古墳



第19図　古墳（3）

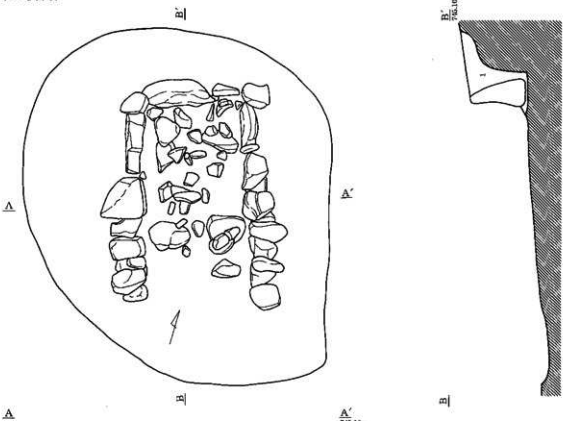
中山63号古墳

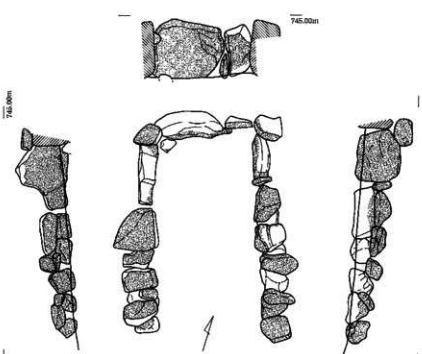


遺物出土状況

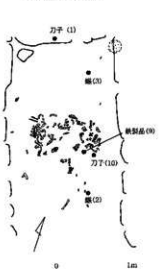
第20図　古墳（4）

中山64号古墳





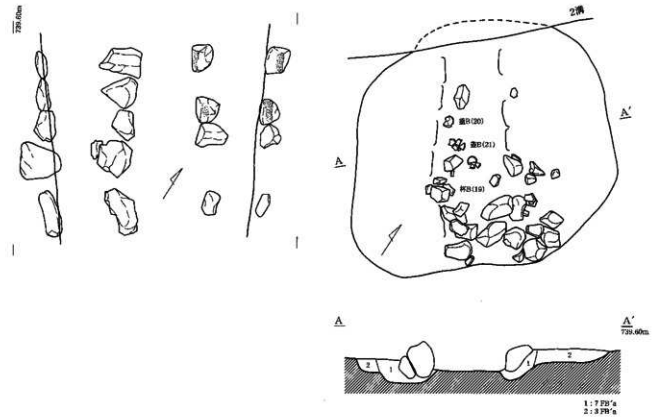
遺物出土状況



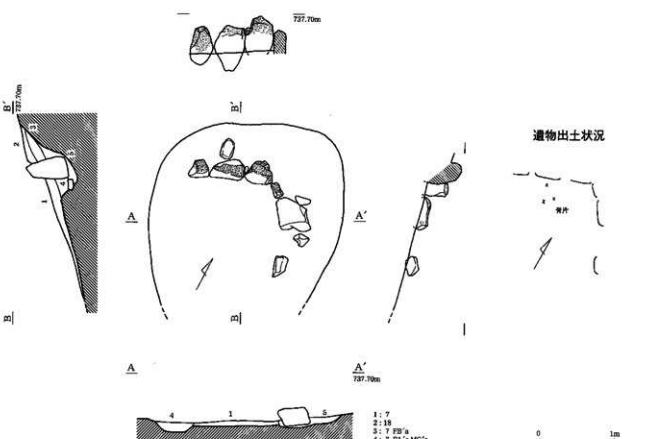
第21図　古墳（5）

中山65号古墳

遺物出土状況

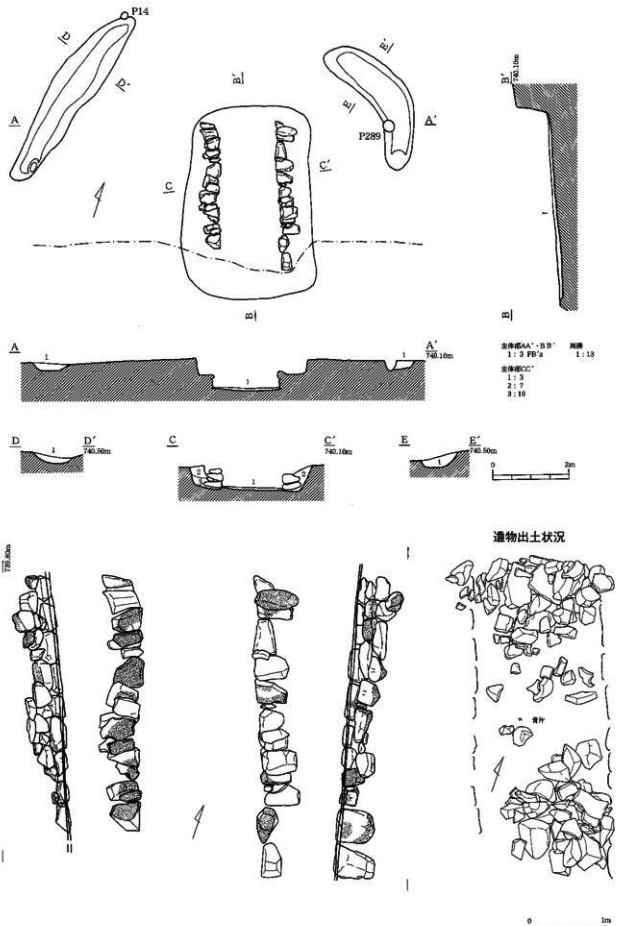


中山67号古墳



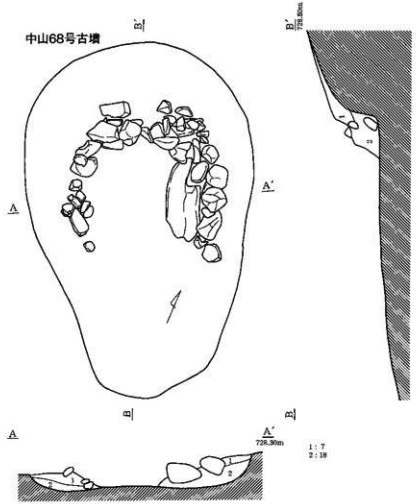
第22図　古墳（6）

中山66号古墳

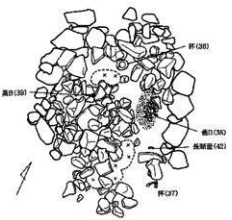


第23図　古墳（7）

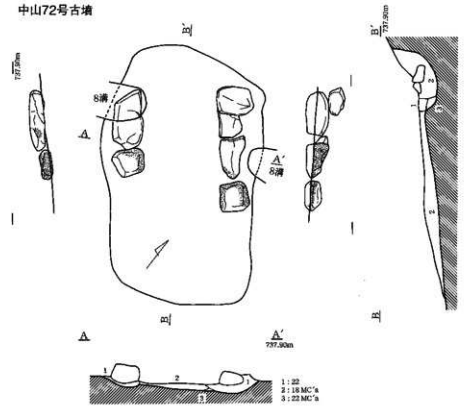
中山68号古墳



遺物出土状況



中山72号古墳

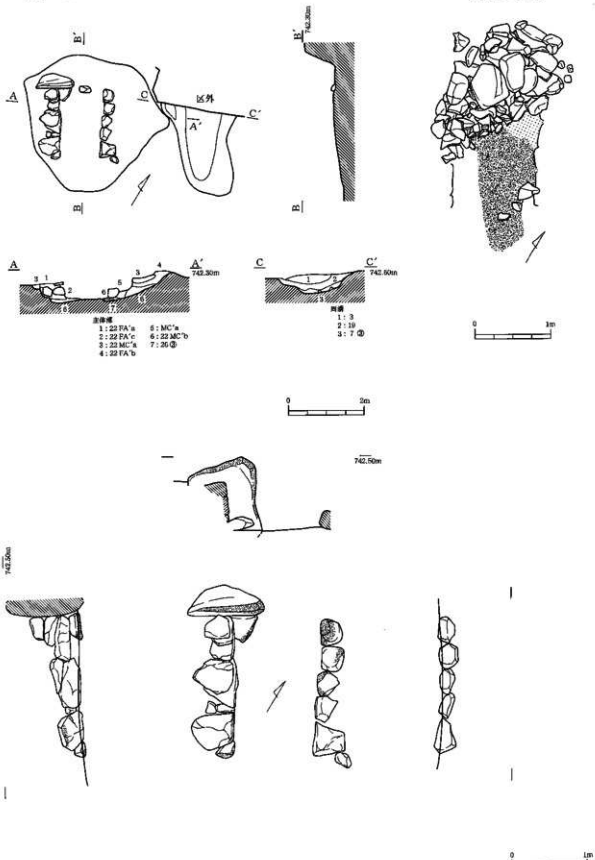


遺物出土状況

第24図　古墳（8）

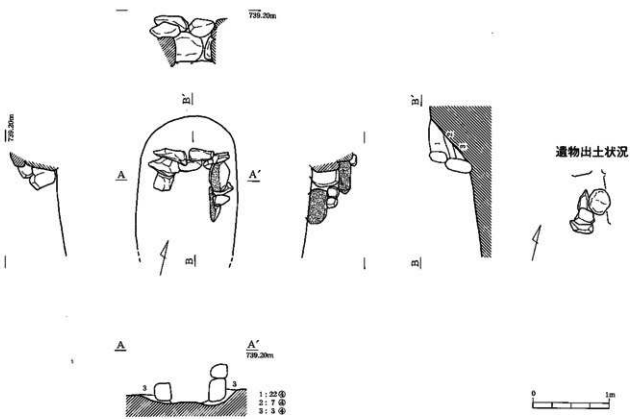
中山69号古墳

遺物出土状況



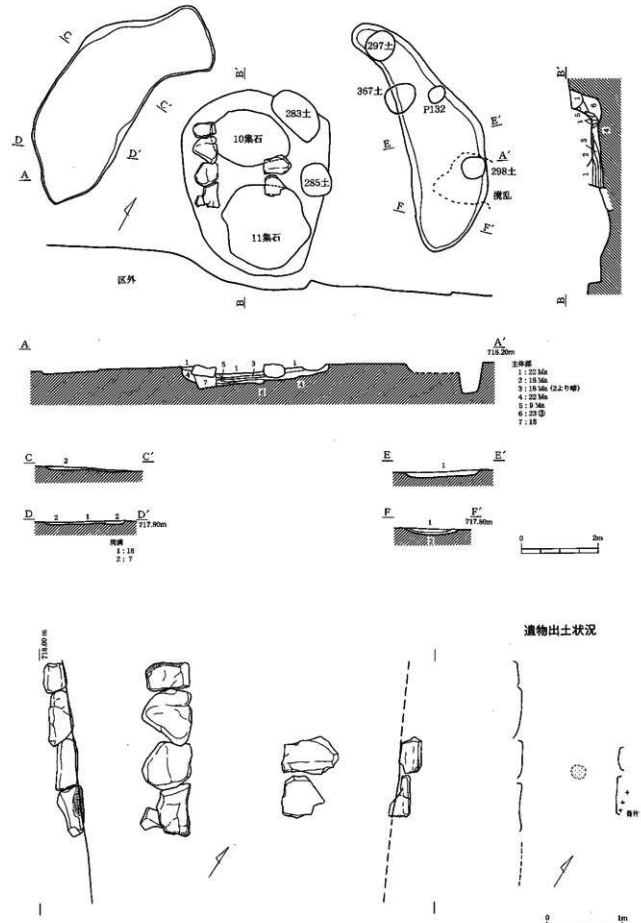
第25図　古墳（9）

中山70号古墳



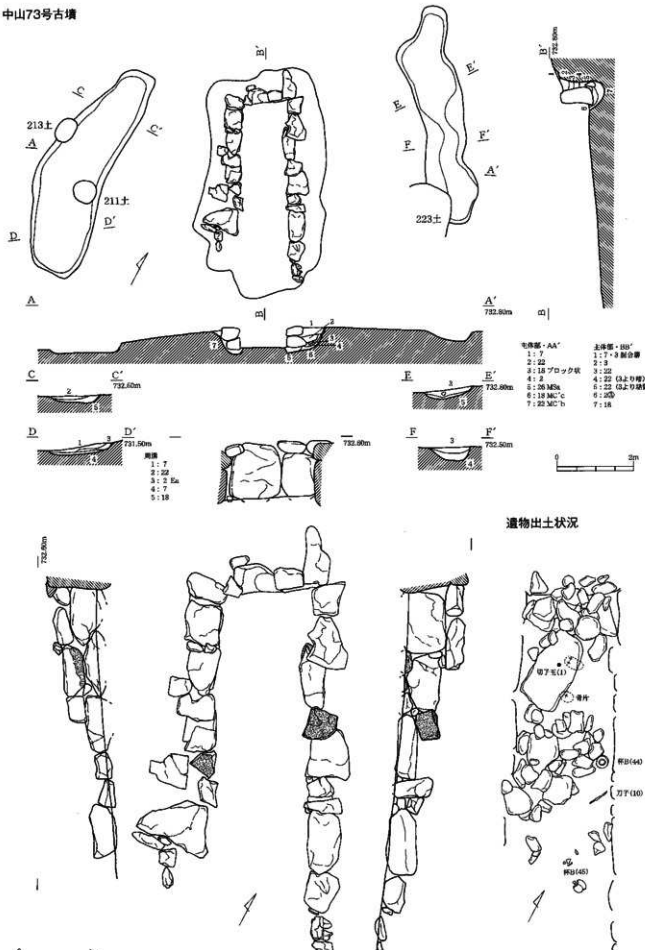
第26図　古墳（10）

中山71号古墳



第27図　古墳（11）

中山73号古墳



第28図　古墳（12）

V章　カニホリ東遺跡

1　竪穴住居址（第3表）

カニホリ東遺跡では、24軒の竪穴住居址を調査した。一括遺物等から時期が推定される住居址は10軒あり、その内9軒（2～4、6·10～12·15·16住）が縄紋時代前期末～中期初頭、1軒（1住）は中期後半以降である。集落遺跡に伴う他時期の遺構は極めて少なく、おそらく時期不明の住居址も縄紋時代前期末～中期初頭に属するものが多いと思われる。竪穴住居址は、斜度7～16°の検出面上にあり、住居の床面傾斜は4～16°の範囲に収まる。炉・柱構造など不明なものが多く、住居址として扱ってよいのか疑問も残るが、斜面上に立地する住居址群は、長野県内の他遺跡でも縄紋時代前期末～中期初頭を中心として検出され、研究者は斜面集落あるいは斜面住居と称し、注目している。註1）

第1号住居址（第29図）

位置　B区南西部に位置する。**検出状況**　農道造成などにより、覆土・床が失われ、ピット・炉の位置などから床面の範囲を推定した。**炉**　石囲炉。埋設された礫は西側の一部が残存する。**ピット**　石囲炉の周囲に7基の穴があり、本址に伴うピットとして扱った。P1·3·7は段をもって掘り込まれる。位置・規模などからP6を加えて、4本柱の主柱穴を想定したい。P2·4は位置・規模から、貯蔵穴かもしれない。いずれも覆土に炭化物粒が混入していた。**遺物出土状況**　非常に少ないが、打製石斧（№49）が出土している。**時期**　縄紋土器片や石囲炉の存在から、中期後半と推定される。

第2号住居址（第29図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　南壁やや東寄りで、47土に床面下まで切られる。**平面形**　北壁に2箇所の半円形の突出部がある。突出部分の底面の溝さは、床面部分とほぼ同じである。**壁**　浅いが、傾きをもって掘り込まれる。**床面**　地形の傾斜に合わせて、北から南に傾きをもつ。凹凸はなく、堅固。**炉**　地床炉で、中央北寄りに平面円形の焼土範囲として検出した。**ピット**　南側に2基あり、位置・規模から柱穴の可能性もある。北壁の突出部に床を掘り込まずに柱を建てていたと仮定すると、4本柱の柱穴の可能性もある。**遺物出土状況**　少ないが、縄紋深鉢片が上層～床面に出土した。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第3号住居址（第29図）

位置　A区東偶に位置する。**切り合い**　13住を切り、297土に切られる。63号古墳の周溝に西壁を切られる。**壁**　ほぼ直に掘り込まれる。**床面**　起伏・傾斜がある。**炉**　地床炉で、北側にある。**ピット**　多数ある。P7はP8覆土中で検出し、それぞれ別のピットとして扱ったが、P8の柱痕の可能性もある。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋深鉢片（№2·3）、石核・石錐・打製石斧が出土している。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第4号住居址（第30図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　64号古墳主体部、10·123土に切られる。南側で13住を切る。**壁**　非常に緩やかに掘り込まれ、特に西側では、床面との境界がはっきりしない。**床面**　軟弱。起伏がある。中央部が浅く、南偶が深くなっている。北西部壁下に深さ2～6cmの周溝状の落ち込みがあるが、長さは2m程と短く、壁の構築に伴うものとは推定できない。**炉**　未検出である。**ピット**　2基のみ。位置・規模等から、柱穴とは考えにくい。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋深鉢片（№4）が出土している。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第5号住居址（第30図）

位置　A区北東部に位置する。10住に南側を切られ、西側半は、床面下まで失われている。**切り合い**　東側で9土を切る。**壁**　北側は、非常に緩やかに掘り込まれ、床との境界がはっきりしない。東・西壁も北側まで傾斜が続き、中央部でほぼ直になる。**床面**　地形に合わせて北から南へ強い傾斜があり、堅さはなく、起伏がある。**炉**　調査範囲内では検出できなかった。**ピット**　4基を検出した。この内P4は、北東部の壁中に位置し、住居址外側に向かって斜めに掘り込まれている。柱穴ならば、中央部に向かって斜めに柱が建っていた可能性がある。**遺物出土状況**　出土量は非常に少ない。**時期**　縄紋時代と思われるが時期は不明。

第6号住居址（第30図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　北壁中央部を63号古墳の周溝に切られ、西壁で15・18住を、南壁で12号住を切る。**検出状況**　地形の傾きに対して、直交する東西方向に長軸をもつ比較的大規模な住居址である。**壁**　傾斜をもつ。**床面**　南北方向は、地形の傾きにあわせて大きく南側が低くなり、北壁中央部と南壁中央部の比高差は113cmを測る。白色砂粒の混入する明黄褐色土の床面は平坦ではなく、大きな起伏がある。東側壁下から1m程内側の範囲は、中央部に比べ20cmほど浅くなる。南壁下には浅い溝状の落ち込みがあるが、深さ数cmと非常に浅く、周溝とは考えにくい。**炉**　検出していない。**ピット**　P3・5・10は、位置的に4本主柱の内の3基である可能性がある。西壁際～南半部分の床面は、ピットを見落とした可能性があり、南東部に未検出の1基があったかもしれない。P10は柱穴状の堆積が認められ、P3・5には底面に段がある。P15は西壁中央下に位置し、直径26cmを測り、住居址外側に向かって斜めに掘り込まれる。柱穴と仮定すると、中央部に向かって斜めに柱が建てられた可能性がある。この他壁際には、P4・14・18の3基のピットが検出され、位置・規模から柱穴の可能性がある。P1・7・11・17は長径60cm以上の規模を測る大きな穴で、貯蔵穴の可能性がある。この内P17の覆土上層からは、土器片がまとまって出土している。**遺物出土状況**　縄紋土器は覆土下層を中心に比較的多く、関西系の搬入品の鉢（№36）を含む。石器類は石鏃・打製石斧が出土している。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第7号住居址（第31図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　本址北側で16住を床面下まで切る。南東部では95土と66号古墳主体部に切られる。地形の傾きから若干南に振れる方向に長軸をもつ。**壁**　東・西はやや傾きをもって掘り込まれる。北壁はほぼ直。**床面**　起伏はないが、軟弱な明黄褐色土。地形に合わせた傾きがあるが、地形の傾斜に比べ、かなり緩やかになっている。**炉**　検出されなかった。**ピット**　3基検出した。いずれも北側にあり、比較的規模が大きい。今回は竪穴住居址として扱ったが、疑問も残る。**遺物出土状況**　縄紋土器小破片が出土している。**時期**　縄紋時代と思われる。

第8号住居址（第32図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　西壁を29土に切られる。**検出状況**　重機によるトレンチ掘削の際、南半を失ってしまった。**壁**　傾いて掘り込まれる。**床面**　軟弱な明黄褐色土で、地形に合わせ傾斜がある。**炉**　検出されなかった。**ピット**　6基検出した。P3・5は、柱痕状の堆積が認められた。P2は底面に段があり、柱穴の可能性がある。西壁下のP1は、斜めに掘り込まれている。**遺物出土状況**　出土遺物は皆無である。**時期**　不明である。

第9号住居址（第32図）

位置　A区東側に位置する。**検出状況**　試掘トレンチにより南半部は床面下まで削平してしまった。**壁**　残存状況は悪いが、北壁は傾斜をもつ。**床面**　軟弱な明黄褐色土。床面がはっきりせず、掘り下げ時には一部を掘り過ぎてしまった。**炉**　確認できなかった。中央付近にあるP1は断面皿形を呈し、覆土に焼土粒・炭化物粒が混入していた。周辺の底面や壁面も若干被熱し、地床炉の可能性もある。**ピット**　P1～7が検出されたが柱穴は不明。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋土器片が出土している。**時期**　縄紋時代と思

われる。

第10号住居址（第32図）

位置　A区東側北寄りに位置する。**切り合い**　63号古墳の主体部に南壁際を切られ、同墳周溝に中央部を横切られる。北東部では11土に覆土下層まで掘り込まれる。本址が切る遺構には、北側で5住、南西部に55土がある。A区にあるほとんどの住居址は床面の高低差・傾斜を減ずるためか、ほとんどの住居址が東西方向に長軸をもつが、本址は例外で南北方向に長軸をもつ。**覆土の状況**　南北方向の土層観察の畦は63号古墳周溝に分断される。覆土も北側と南側で異なり、南北が別遺構の可能性もある。**壁**　傾いて掘り込まれる。**床面**　北から南に強い傾斜をもつ。北東部には段をもつ窪みがあり、周囲より20cm程深くなるが、切り合いにより、範囲もわからない。**炉**　3基の地床炉がある。床面南側にある1炉は、断面皿形に深さ5cm程掘り込まれる。炉の北東部には、深鉢（№7）の上半部が正位に置かれた状況で出土している。2・3炉は、床面西側に僅かに切り合って検出された。深さは2炉が13cm、3炉が8cm程を測る。**ピット**　P3・4・6・9・11は柱痕状の堆積は認められないが、位置・規模から柱穴の可能性がある。このうちP4・9・11は南壁側に直線上に並ぶ。P6は1炉を切る。**遺物出土状況**　一括遺物は深鉢（№7）のみで、縄紋土器の出土量は比較的少ない。石器類は、石鏃・磨製石斧などが出土している。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第11号住居址（第30図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　63号古墳の主体部・同古墳の周溝に床面下まで切られ、試掘トレンチ掘削により、南半を失う。竪穴住居址として扱ったが、疑問も残る。**壁**　北壁のみ残存し、ほぼ直に掘り込まれる。**床面**　軟弱な明黄褐色土。北から南に傾斜があり、細かな起伏が認められる。**炉**　検出できなかった。**ピット**　P1のみ検出。**遺物出土状況**　ほとんど出土していないが、関西系の搬入品（№52）を含む縄紋土器深鉢片が出土している。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第12号住居址（第33図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　6住に北側を切られ、南側を65号墳主体部と48土に切られる。その他、中央部を2溝に横切るように切られる。**壁**　北・東壁は傾いて掘り込まれる。**床面**　堅固で起伏はない。西側・東側の中央から北側壁下にはテラス状の段が認められる。北から南にかけて緩やかに傾斜しているものの、掘り込みの深さを変えて、斜きを減らしている。北半部は、地山に含まれる礫が露出している。**炉**　床面ほぼ中央に位置する地床炉。P17・25に切られる。炉内から遺物は出土していない。**ピット**　総数25基ある。このうちP2・3・5は、規模や柱痕状の堆積から、柱穴の可能性がある。壁下に円形に並ぶP24・19・14・12等は柱痕状の堆積は確認されないが、位置から柱穴の可能性もある。南壁下ではピットが検出できなかった。**遺物出土状況**　縄紋土器は比較的多く、深鉢片（№9～12）が出土した。石器類は、石鏃・石錐（№28）・石匙（№34）・RF（№53）・磨石類（№57）・滑石製の玉類など器種に富む。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第13号住居址（第29図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　3・4住、5・7・122・123・297土に切られる。住居址として扱ったが、疑問が残る。**壁**　ほぼ直に掘り込まれる。**床面**　地山の明褐色土に類似し、堅さもなく掘り下げ時には明確に捉えられなかった。**炉**　検出されなかった。床面には被熱痕や焼土の検出もない。**ピット**　P1を西側で検出した。**遺物出土状況**　縄紋土器小破片が数点出土している。**時期**　縄紋時代と思われる。

第14号住居址（第33図）

位置　A区中央北側に位置する。**切り合い**　他遺構との切り合いはない。**壁**　斜面上方の北壁は傾きがある。下方の南側は、検出面からの壁高が低い。**床面**　検出面の傾きに比べ、多少緩やかになっているが、強

い傾斜を持つ。床面は白色の小礫を含む粘質の明黄褐色土。**炉・ピット**　何れも未検出である。住居址としたが、竪穴状遺構として扱うべきであった。**遺物出土状況**　出土遺物は皆無である。**時期**　不明である。

第15号住居址（第33図）

位置　A区東側に位置し、耕作により斜面下方の南端部は消失している。**切り合い**　東側を6住に床面下まで切られ、北壁で18住を床面下まで切る。**壁**　北壁は緩やかに掘り込まれ、中央部分では床面と壁面の境界がはっきりしない。西壁は傾きがある。**床面**　軟弱で、地形に合わせて傾き、起伏はない。**炉**　検出されなかった。中央やや南東寄りでは下層～床面に、厚さ10cm程の炭化物粒とともに焼土塊の堆積があり、炉に関わる痕跡なのかもしれない。**ピット**　13基あり、柱痕状の堆積が確認されるものはない。このうち壁下のP 1・5・6・9・13は柱穴の可能性もある。P 5・12は斜めに掘り込まれ、柱の跡とすると、P12は中央に、P 5は壁側に向かって斜めに建てられた可能性がある。**遺物出土状況**　縄紋土器の出土量は多く、深鉢が出土。石器類には石錐（№29）が出土。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第16号住居址（第31図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　南東部を7住、西壁の一部を66号古墳の周溝に床面下まで切られる。北東部で17住を切る。**覆土の状況**　焼土粒・炭化物粒を含む。**壁**　斜面上方の北壁は傾きがある。下方の南壁は、僅かに残存する程度である。**床面**　斜面上方北側を深く、下方南側を浅く掘り込んでいるため、斜きは地形に比べ、かなり緩やかになっている。起伏はなく、堅固。**炉**　検出していない。**ピット**　総数は22基を数える。ほとんどが壁から内側1mの範囲内にある。直径20～30cm程の比較的小規模な穴が多い。P 2・11・19は他に比べ掘り込みが深く、6住に切られる南東部に柱穴を想定すると4本主柱、P 2・11間にある掘り込みの浅いP 6を補助穴とすると6本主柱も考えられる。**遺物出土状況**　出土量は少ないが、縄紋土器深鉢片が出土。**時期**　出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第17号住居址（第31図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　16住に南西部を床面まで切られ、63号古墳、43土にも切られる。**壁**　傾きをもつ。**床面**　地形の傾斜に合わせて、北から南に傾きをもつ。起伏はなく、堅固。**炉**　検出していない。**ピット**　10基ある。このうちP 1～4は、規模・位置から、4本柱の主柱穴の可能性があるが、P 1がやや北側に寄っている点で疑問が残る。P 2はP 4に向けて斜めに掘り込まれ、斜めに傾いて柱が建てられた可能性もある。また、壁下にあるP 5～9・10は、壁下柱穴の可能性もある。**遺物出土状況**　出土遺物は皆無である。**時期**　不明である。

第18号住居址（第34図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　6・15住、46土に切られる。**壁**　傾きをもつ。**床面**　北～南に傾斜する。**炉**　確認できなかった。**ピット**　12基ある。長径68cmを測る比較的大きなP12を除くと、11基のピットは壁寄りにあり、直径は20～35cm程と比較的小さい。比較的掘り込みの深いP 1～3・5・11は柱痕状の堆積は観察できないものの、位置から柱穴の可能性もある。**遺物出土状況**　比較的少ないが、縄紋土器深鉢片が出土。**時期**　縄紋時代と思われるが時期は不明。

第19号住居址（第34図）

位置　A区東側に位置する。**切り合い**　20住に南側を床面下まで切られる。**覆土の状況**　微量の炭化物粒・焼土粒を混入する。**壁**　残存部では緩やかに掘り込まれている。**床面**　傾斜に合わせ、北から南に傾きをもつ。起伏はなく堅固である。**炉**　確認できなかった。**ピット**　計14基検出した。20住と切り合う部分にあるものは帰属が不明。調査では、本址の床面で検出した穴のみを、本址に伴うものとして扱った。14基のピットの中で、P 1・2・13・14は、位置や規模から、壁下柱穴の可能性がある。P 3～8も掘り込みは浅いが、位置的には柱穴の可能性がある。20住床面で検出した20住のP 5・19～21も位置等から、本址に伴う壁下柱

穴の可能性がある。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋土器深鉢片が出土。**時期**　縄紋時代と思われるが時期はわからない。

第20号住居址（第34図）

切り合い　北側で19住を切る。**床面**　堅固で起伏はない。北から南に強い傾斜、西から東に弱い傾斜をもつ。**炉**　検出されなかった。**ピット**　24基ある。本址に伴うものとして扱ったものには、19住に伴うものが含まれている可能性がある。壁下～60cm程内側の範囲内に多く、円形に並ぶ。いずれも柱痕状の堆積は認められない。P 1～3・6～10・12～16・18・21～24は、掘り込みが比較的浅いが、位置的に壁下を巡る柱穴の可能性がある。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋土器深鉢片が出土。**時期**　縄紋時代と思われるが時期は不明。

第21号住居址（第35図）

位置　N区南東部に位置する。周辺には本址を含めて4軒の竪穴住居址（21～24住）が、斜面上に集中して検出された。**切り合い**　73号古墳主体部、224土に床面下まで切られる。**覆土**　地山のにぶい黄褐色土中に黒褐色土などが堆積していた。**壁**　斜面上方の北側では、緩めに掘り込まれる。壁高が浅く明確ではないが、東西も傾く。**床面**　地山のにぶい黄褐色土を床面とする。地形にあわせて北から南に傾斜し、起伏はない。東壁付近は若干浅い。**炉**　検出できなかった。**ピット**　西側に6基検出した。P 1は底面に段があり、柱痕状の堆積が認められることから、柱穴の可能性がある。P 2・3は柱痕状の堆積は認められないものの、P 1との位置関係から柱穴の可能性がある。これらに比べ、南西端にあるP 5・6は平面規模が100cmを超える大規模な穴で、掘り込みは15～20cm程と比較的浅い。貯蔵穴の可能性もあるが、単独土坑の可能性も捨て切れない。**遺物出土状況**　縄紋土器は非常に少なく、深鉢片がある。石器類にはRF（№39）がある。**時期**　縄紋時代と思われるが、時期は不明。

第22号住居址（第35図）

位置　21住の西4mに近接する。**切り合い**　北側でP263、北東部で134土に切られる。**壁**　緩やかに掘り込まれる。**床面**　地形に合わせ、北西から南東方向に傾斜をもつ。起伏はなく堅固である。**炉**　確認できなかった。**ピット**　東壁際に2基が切り合って検出された。何れも東壁に向かって斜めに掘り込まれ、壁は袋状になる。深さは、P 1が53cm、P 2が41cmと比較的深い。位置・規模から貯蔵穴の可能性があるが、本址に切られる単独土坑の可能性もある。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋土器深鉢片が出土。**時期**　縄紋時代と思われるが時期は不明。

第23号住居址（第35図）

切り合い　南半を22住に床面下、134土、P239に覆土中層まで切られる。**壁**　傾いて掘り込まれる。**床面**　地形に合わせ、北西から南東方向に傾斜をもち、堅固。細かな起伏はないが、壁際は中央に比べて若干深い。**炉**　中央東側に位置する地床炉。平面は楕円形を呈し、東側半が深く、西側半は浅い。覆土のにぶい黄橙色土には焼土粒が少量混入していた。**ピット**　地床炉に近接して2基検出された。**遺物出土状況**　非常に少ないが、縄紋土器深鉢片がある。**時期**　縄紋時代と思われるが時期はわからない。

第24号住居址（第35図）

位置　21住の東に近接して検出した。**切り合い**　223土、73号古墳周溝、P252に切られる。**壁**　緩やかに掘り込まれ、壁と床の境界もはっきりしない。**床面**　北から南に傾斜をもち、軟かい。北東部は、掘り込みが浅くテラス状になる。**炉・ピット**　検出されなかった。住居址としたが、竪穴状遺構として扱うべきであった。**遺物出土状況**　出土遺物は皆無である。**時期**　不明である。

註1）樋口昇一・小松　学他　2002『女夫山ノ神・牛売沢・鳶ヶ沢遺跡』塩尻市教育委員会
小松　学　2005『平出博物館　紀要』第22集　「松本平の縄紋前期集落」塩尻市平出博物館

2　竪穴状遺構（第36図）

竪穴住居址と同程度の規模があると推定される遺構の内、壁や底面が明瞭でなく、竪穴住居址と推定できないものを竪穴状遺構とし、4基を調査した。一部は、開墾や耕作に伴う遺構である可能性も捨て切れない。**分布**　A区北東端部（2竪）、A区北端中央部（3竪）、A区北西端部（1竪）、N区北端中央部（4竪）に点在し、遺跡全体では北端部にあたる。**形態**　全体を検出したものは4竪のみで、不整円形を呈する。3竪は隅丸長方形を呈するものと推定され、炭化物や焼土は検出していないが、平面、断面の形態から、炭焼窯の可能性もある。**内部状況**　ピットなどの付属施設を伴うものはない。**出土遺物状況**　縄紋土器片が出土しているが、図化し得たものない。**時期**　出土遺物が少なく、混入品の可能性もあり、不明である。

3　炭焼窯

坑内製炭遺構6基と築窯製炭遺構3基を調査した。坑内製炭遺構は地表面に竪穴を掘り、内部に炭材を詰め、上から蓋をして炭を焼いた遺構である。製炭法は、一般的に伏焼法と呼ばれる。炭焼窯の操業時期が推定できる土器類の出土が無いため、炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を、分析が可能なサンプルが得られた1・2・3・6炭を対象に行った。推定される年代（西暦）は、1炭－660～820年、2炭－480～620年、3炭－590～750年、6炭－740～900年で、樹種は、何れもコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。築窯製炭遺構は地表面を半地下式に掘り窪め、底、壁、天井を築いた遺構である。石窯が5・8炭の2基確認された。2基は構築方法などが酷似している。9炭は形態が不明であるが、ここで扱った。

(1) 坑内製炭遺構（第37図、第7表）

第1号炭焼窯

位置　B区南西部に位置する。東方14mには2炭が、軸を揃えて検出された。**底面**　地山の明黄褐色土をそのまま底面としている。中央には縦軸にあわせて浅い溝があり、北端部の窪みにつながる。被熱により若干赤褐色化している。溝と窪み部分を除き、起伏はない。**壁**　検出面からの掘り込みが浅いため、明確ではないが、緩やかに掘り込まれ、若干赤褐色化している。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　炭化材片、焼土粒があるのみである。

第2号炭焼窯

位置　B区南部に位置する。**底面**　被熱により若干赤褐色化している。中央縦軸には溝はなく、北壁側では僅かに窪む。細かな凹凸などはないが南側は僅かに浅い。**壁**　検出面からの掘り込みは浅いが、傾きをもち、若干被熱し赤褐色化する。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　炭化材片、焼土粒があるのみである。

第3号炭焼窯

位置　A区西端に位置する。北側の円形部分については、本址に伴う遺構とは確認できず、本址が切る別遺構の可能性もある。焼成の影響によるしみ、あるいは掘り方の可能性も捨て切れない。**底面**　全面が被熱により赤褐色化し、特に中央やや東寄りでは強く赤色化している。中央部中央縦軸には溝はない。細かな凹凸があり、南壁側は傾斜が若干強く、北側では傾斜が殆どない。**壁**　検出面からの掘り込みは浅いが、傾きをもち、若干被熱し赤褐色化している。**煙道**　北壁中央東寄りに、半円形の落込みが検出され、位置・規模から煙道の基底部と推定した。**遺物出土状況**　炭化材、焼土粒があるのみである。

第4号炭焼窯

位置　B区南部に位置する。**底面**　被熱により若干赤褐色化している。中央縦軸に溝はない。細かな凹凸、傾斜はなく北壁側では僅かに浅くなる。**壁**　検出面からの掘り込みは浅いが、傾きをもち若干被熱し赤褐色化する。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　炭化物粒、焼土粒、被熱痕のない数個の礫が認められた。

第６号炭焼窯

位置　B区南部に位置し、開墾に伴う溝に南壁を切られる。**底面**　被熱により若干赤褐色化している。中央縦軸には溝はない。概ね平坦だが、北東半には浅い凹凸がある。短軸断面は、南東が深く、地形にあわせてやや傾く。**壁**　検出面からの掘り込みは浅いが、傾きをもち、若干被熱し赤褐色化している。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　炭化材、焼土粒があるのみである。

第７号炭焼窯

位置　N区北西部に位置する。長軸方向は地形の傾きに直交する。**底面**　被熱により若干赤褐色化している。中央には溝はない。短軸は地形にあわせて南に傾斜し、長軸は西側が深くなり傾く。底面中央東寄りは、島状に浅くなる。**壁**　検出面からの掘り込みが浅いため明確ではないが、緩やかに掘り込まれ、若干赤褐色化している。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　炭化物粒、焼土粒があるのみである。

(2) 築窯製炭遺構（第７表）

第８号炭焼窯（第38図）

位置　N区南東部に位置する。**検出状況**　天井部と焚口部前庭部は開墾などにより削平されていた。近代以降の開墾に伴う石垣が前庭部を破壊しているが、炭化室は、比較的残存状況は良い。炭化室部分の掘り方範囲は、煙道部北側で内壁から22cmを測り、南方に下るにつれ拡がり、概ね平面は三角形を呈する。炭化室中央部分では、西側で壁面から約100cm、東側で約40cmを測る。５炭も同様に西側が広い様子が認められる。**覆土**　覆土下層～底面直上に被熱した礫が多数確認され、壁等の石材として用いられた可能性が高い。量的には堆積物のおよそ1/2が礫である。**底面**　大きさ４～48cmを測る30個程の板状の礫を埋設し、底面としている。長軸に比較的大きい平面方形の礫を4個並べ、その他は比較的小さい長方形の礫を縦方向に並べている。礫間には、小さな礫を詰めている。目地幅は非常に狭く、礫が接する部分が多いが、平面三角形の隙間が数箇所で生じている。底面全体の傾斜は焚口側が若干深くなっており、３～５°程の傾斜がある。被熱による変色は、灰黄～黄橙色化がみられる。後に底礫を断ち割ると、礫下は被熱し、埋土の明黄褐色土が赤褐色化していた。**壁**　壁は塊状の礫を積み上げて築いている。奥壁側で７～８段、焚口部側で４～５段程が残存する。平坦な面を室内側に向けて積まれ、壁面は上方に向かって僅かに傾く。隙間には小さめの礫と土が詰め込まれている。壁面の礫の大きさは３～22cm程であるが、概ね14cm程のもので揃えられている。壁面は被熱し、灰～黒色化がみられる。礫間・壁裏側は、被熱し埋土の明黄褐色土が赤褐色化する。**焚口部**　幅52cmを測る。**焚口部と前庭部の境界部**　基底部には両側に直方体状の礫を埋設し、西側ではその上に板状の礫が積まれる。基底部礫の壁面幅は炭化室・前庭ともに20cm程を測る。前庭部はこの礫を基点に東西方向に伸びる２～３段の石積の袖が築かれ、規模は東側218cm、西側132cm、高さは最高部で34cmを測る。**煙道部**　炭化室奥壁裏側に板状の礫を組み合わせて埋設し、構築している。排煙は炭化室奥壁底面に、内側からみて、幅36cm高さ11cmの倒面長方形の穴が設けられ、ここから壁裏側の煙道を通り、室外に排出される。穴の断面は平面長方形を呈し、規模は、幅36cm奥行き16～22cmを測る。傾斜は約71°である。底面～検出面の斜距離は124cmを測る。**前庭部**　広範囲に削平を受け不明であるが、炭化物が広範囲に拡がっている。付属遺構　確認できなかった。炭化室～前庭部周囲では、北方と西方に土坑・ピットが計７基検出された。仮設覆屋的な柱穴の可能性も捨てきれないが、規模・配置・覆土の状況などから、付属遺構ではなく単独の土坑・ピットとして扱った。**遺物出土状況**　多量の炭化物小片が出土している。**時期**　土器類などの遺物が無く、不明であるが、構築方法等から、近代以降と推定される。

第９号炭焼窯（第37図）

位置　A区中央部南西に位置する。**検出状況**　掘り下げの過程で、多量の焼土、粘土粒・塊、被熱した底面を検出し、炭焼窯と推定した。**底面**　被熱により若干赤褐色化している。中央部に長軸方向に伸びる溝が

確認された。最大で深さ20cm、幅25cmを測り、他の炭焼窯に比べ、幅が広く深い。9基の小規模なピットが溝部分を含めて検出されたが、本址に伴わない可能性もある。規模は直径6～18cm、深さ7～26cmを測る。**壁**　検出面からの掘り込みは30～40cmと比較的深く、傾きがある。僅かに被熱し赤褐色化している。**覆土**　短時間の埋没が推定でき、人為的な埋土の可能性がある。**煙道**　検出していない。**遺物出土状況**　特殊な遺物として、被熱し硬化した粘土粒・塊が多数あり、総数は35点、総重量は約300ｇを量る。最大の粘土塊は長径6.3cmを測り、表面に並行する線条痕や断面半円形の窪みが認められた。土器類は、縄紋土器小破片が1点あるが、混入した可能性がある。**時期**　不明である。本址は炭焼窯として扱ったが、炭化物の出土量は非常に少なく、他の炭焼窯址とは、形状・堆積状況等相違点が多い。硬化した粘土塊は窯壁の可能性もあり、製炭を目的としない築窯遺構の可能性もある。

4　集石（第39図）

カニホリ東遺跡では、N区の西端部で1集石1基を検出した。平面規模は東西320cm、南北110cm程を測る。平面形は捉えられなかった。礫の範囲は不整円形を呈している。出土遺物はなく、時期はわからない。開墾や耕作に伴う遺構である可能性も捨て切れない。

5　土坑・ピット（第8表）

カニホリ東遺跡では、土坑236基、ピット287基が検出された。火葬墓の220土も本項で扱っている。また、検出時に礫を伴う穴は、集石として扱ったが、掘り下げ後に礫が検出された集石土坑は、そのまま土坑としているため、区分が曖昧になってしまった。カニホリ東遺跡の範囲内で出土した遺物は、古墳に伴うものと、炭焼窯・火葬墓から出土した炭化物・骨を除き、ほぼ全てが縄紋時代に属することから、一括遺物を伴わず、時期の決定が出来ないものも、ほとんどが縄紋時代に属する可能性が高い。分布をみると、竪穴住居址が集中してみつかったA区東側、竪穴住居址未検出のA区西側～N区北側、C区西側の4溝周辺に比較的集中し、B区では、全く検出していない。また、A区西端～C区北西部は、検出数が極端に少ない。規模が100cmを超える大形のものは、A区東端部とA区南西部～N区北東部に多い。遺構数が最も多く、遺跡を構成する遺構であるので、代表的なもの、特徴的なものなど131基を掲載した。

代表的な土坑

14土（第40図）　**位置**　A区北東部。**切り合い**　13土を切る。**形状**　平面形は円形を呈し、断面は皿形を呈する。**壁**　壁面はやや傾いて掘り込まれる。**遺物出土状況・時期**　遺物はなく、時期は不明。

208土（第44図）　**位置**　N区北東部に位置する。**形状**　断面形は、半円形に近い。**壁**　やや傾いて掘り込まれ、壁と底の境界がはっきりしない。**遺物出土状況**　遺物はなく、時期はわからない。N区北東部には、193土・195土・209土など形態的に類似する土坑が点在している。

特徴的な土坑

33土（第40図）　**位置**　A区中央北側、61号古墳の周溝西側に位置する。南側は削平され底面下まで失われる。**壁**　残存する北壁は、傾いて掘り込まれる。**覆土**　中央付近の底面～下層には炭化物層があり、その上ににぶい褐色土、炭化物が少量混入する明褐色土が堆積している。**遺物出土状況**　炭化物堆積層からは、被熱した粘土塊が出土している。土器・石器などの一括遺物は無い。**時期**　不明である。

116土（第42図）　**位置**　A区中央北側、61号古墳主体部の南西に位置する。**形状**　断面形は台形を呈する。**底面**　東側に直径10cmの穴が3基あり、深さはいずれも18cmを測る。**壁**　傾いて掘り込まれ、底面から検出面に向かって外湾している。**覆土**　明黄褐色土と炭化物・焼土が多量に混入したにぶい褐色土が堆積している。**遺物出土状況**　遺物はなく、時期はわからない。

146土（第43図） **位置** C区中央南寄りに位置する。**形状** 壁はやや傾いて掘り込まれ、断面形は台形を呈する。**底面の状況** 底面は被熱するものの、焼土化は認められない。起伏はなく、地形の傾斜に合わせて、南に向かって深くなる。**壁** 掘り方の上半部には厚さ数cmの粘質土を全周に貼り付けている。被熱焼土化は地山まで及ぶ。**覆土の状況** 底面～壁面下部に厚さ8cm程の炭化物堆積（4層）が認められる。その上に炭化物多量混入の黒褐色土（3層）、焼土塊多量混入の黒褐色土（2層）、暗褐色土（1層）の順に堆積する。4層上面には、4個の被熱した礫が認められた。また、1・2層の下面には、直径5cm程の被熱した礫が面的に認められた。使用時には、火が焚かれ、礫が入れられたものと考えられる。これらの状況から、本址は屋外調理施設の可能性がある。**遺物出土状況** 覆土中から縄紋土器深鉢小破片が出土している。**時期** 出土した遺物から、縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

220土（第44図） **位置** N区北東部に位置する。**壁** 斜面下側の北東壁は残存しないが、緩やかに立ち上がるものと思われる。他は30～40°程傾いて掘り込まれる。**遺物出土状況** 底面中央やや南寄りに、90×55cm程の範囲に、焼骨がまとまってみつかった。焼骨は全て人骨で、比較的太くて長い棒状の骨が外周に並べたようにあり、その内側には北側に大きな破片、南側に小破片が検出された。長方形の範囲の外周には、南側を除いて平面「U」字形の焼土の堆積が認められた。出土状況から、一旦火葬を行い、焼骨をまとめた可能性が高い。**遺物** 焼骨以外にはない。**時期** 中世以降の火葬墓の可能性が高い。本調査跡では、他に同様の遺構は認められなかった。

223土（第44図） **位置** N区南東部に位置し、24住・73号墳周溝を切る。**壁** 傾いて立ち上がる。**覆土** 北西部の覆土中には、数個の礫が含まれていた。東側底面には、被熱黒変した礫がまとまって検出された。底面上に接するものと、埋設されたものがあり、平面長方形に並べられている。囲まれた部分の覆土中には炭化物が多量に混入し、下層には1個の礫が認められた。**遺物出土状況** 他に土器類などの一括遺物はなく、時期はわからない。本調査跡では、他に同様の遺構は認められなかった。

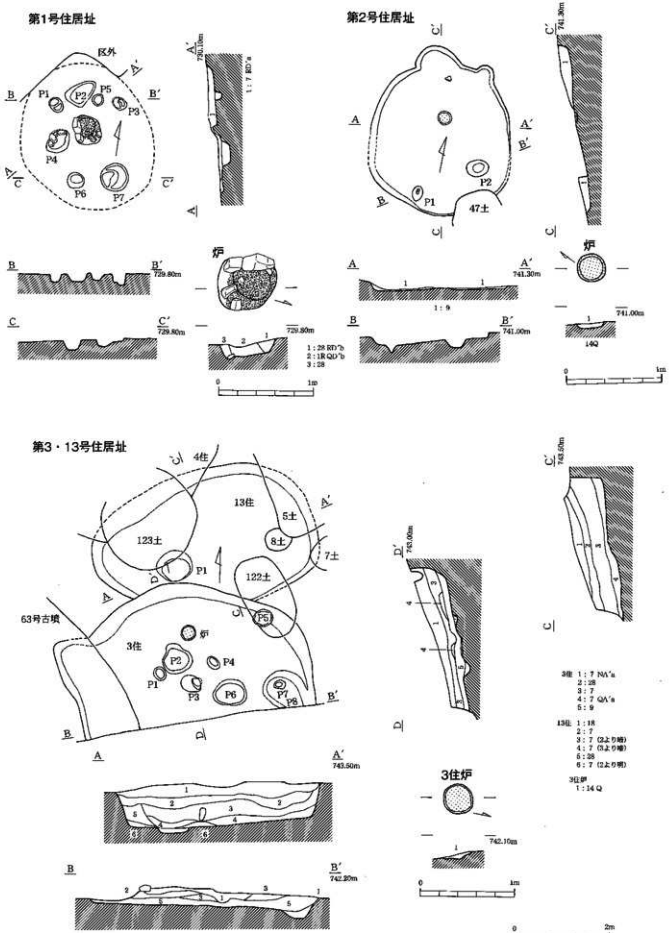
225土（第44図） **位置** N区南東部、73号墳の南に近接する。**検出状況** 検出時には、遺構の掘り方と後に堆積した遺構本体と推定される部分の土層の相違が確認できた。**形状** 掘り方は南北224cm、東西92cmの長楕円形を呈し、遺構本体と思われるプランは、南北178cm、東西75cmの規模を測り、長方形を呈する。掘り方部分はにぶい黄褐色土を用いて人為的に埋め戻された可能性がある。遺構本体と思われるプランの壁は、ほぼ直に掘り込まれる。**覆土** 覆土上層には、2個の礫が含まれていた。堆積状況などから、釘等の出土はないものの木棺などを埋設した可能性もある。**遺物出土状況** 覆土中から須恵器の小破片が出土している。**時期** 遺物から8世紀前半と推定される。73号古墳の南に近接していることから、何らかの関係がある可能性もある。本調査跡では、他に類似する土坑は認められなかった。

6 溝状遺構 （第45図）

8条を検出したが、この内2・6・7・8溝は、明治時代の開墾に伴う石積の直下で検出された。石積に伴う遺構と思われる。また、1溝も8溝から分岐し、斜面下方に伸びていることから、明治時代の開墾に伴う石積に関わるものと推定される。4・5溝は1溝の延長線上に位置することから、同じ遺構であった可能性が高い。3溝はC区中央部に位置する。西壁は若干傾き深く、東壁は斜めに浅く掘り込まれ、底面は西に傾く。今回は溝状遺構として扱ったが、土坑との区分が曖昧なものになってしまった。3溝の時期は不明である。

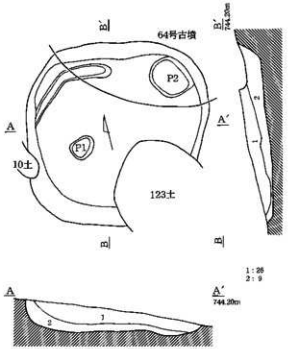
7 石積（第45図）

明治時代以降、傾斜地を開墾する際に傾斜を減じ畑地を区画する為に設けられた石垣状の石積で、山側は盛土がされ、谷側は切土がされる。A・B石積の一部を調査した。

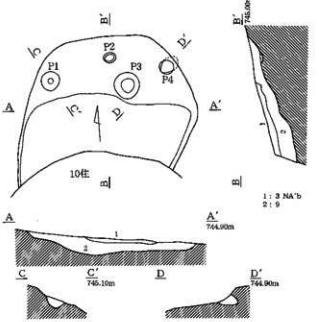


第29図　カニホリ東遺跡　住居址（1）

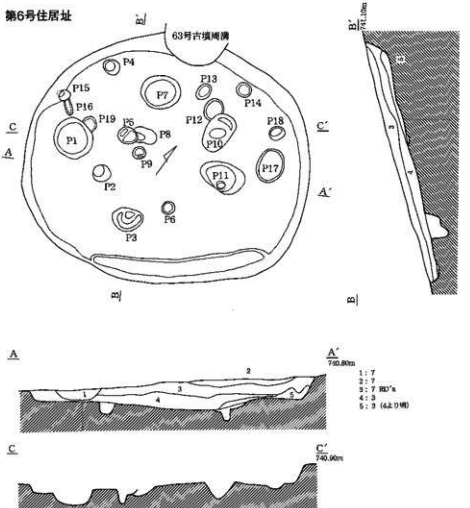
第4号住居址



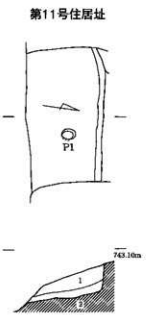
第5号住居址



第6号住居址

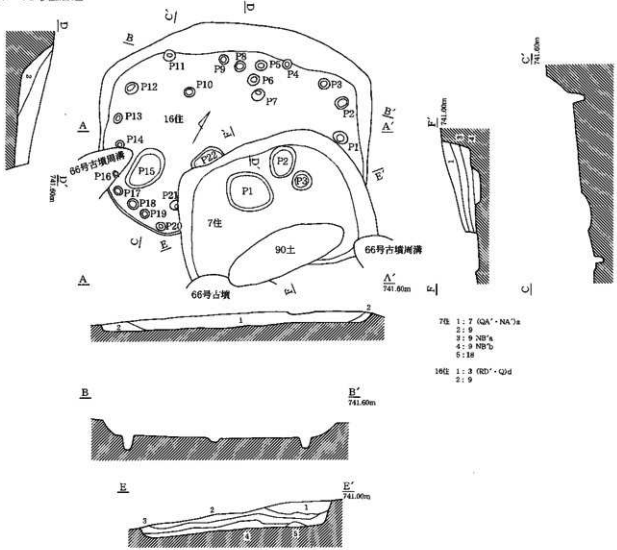


第11号住居址

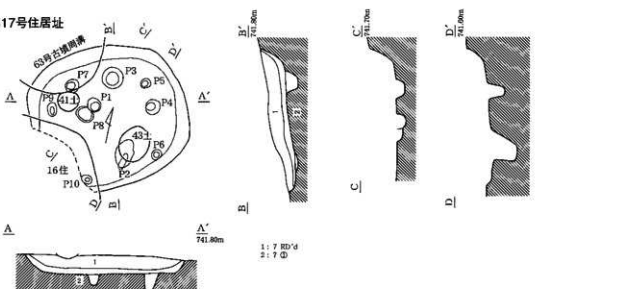


第30図　カニホリ東遺跡　住居址（2）

第7・16号住居址

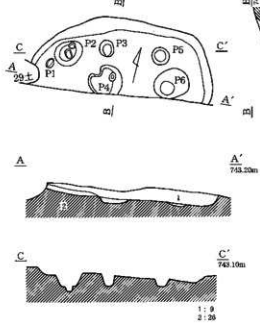


第17号住居址

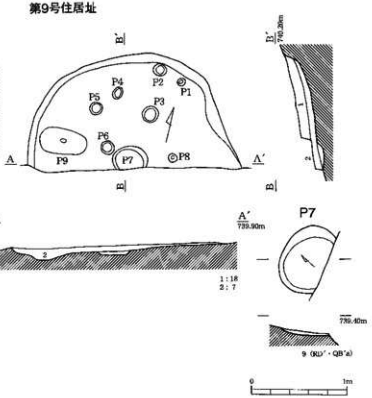


第31図　カニホリ東遺跡　住居址（3）

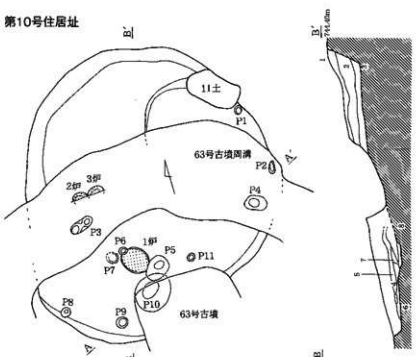
第8号住居址

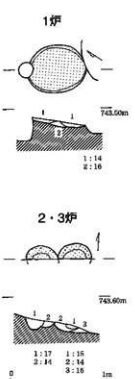


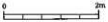
第9号住居址



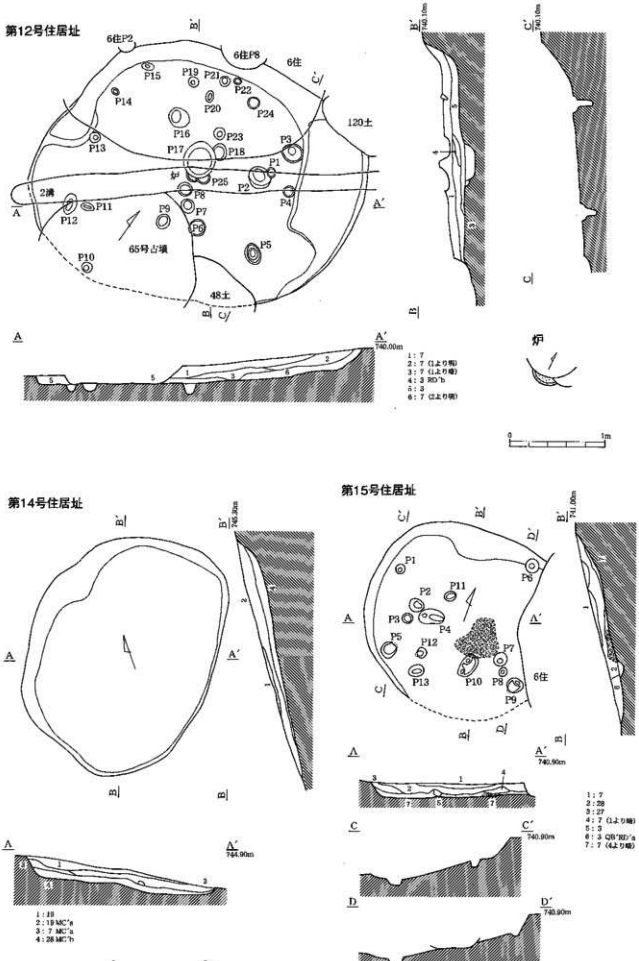
第10号住居址





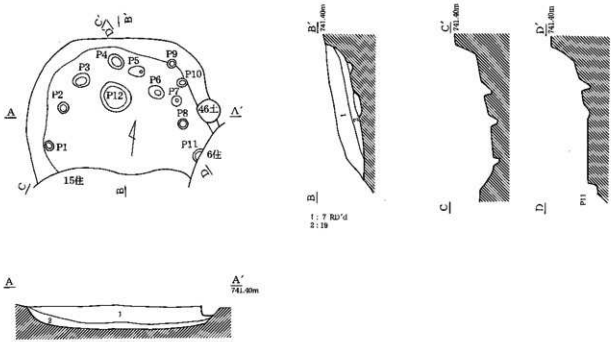


第32図　カニホリ東遺跡　住居址（4）

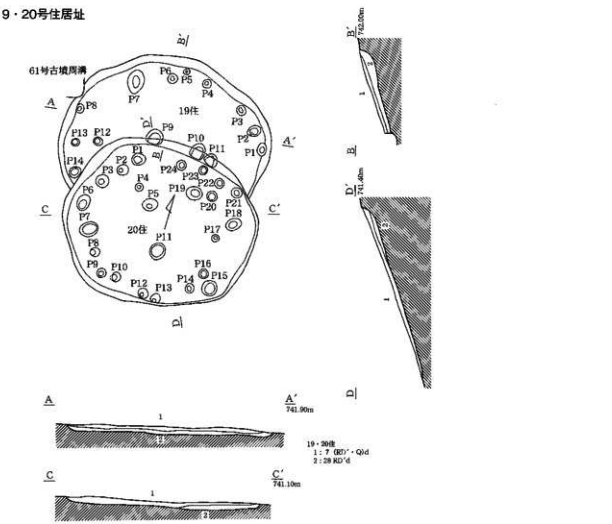


第33図　カニホリ東遺跡　住居址（5）

第18号住居址



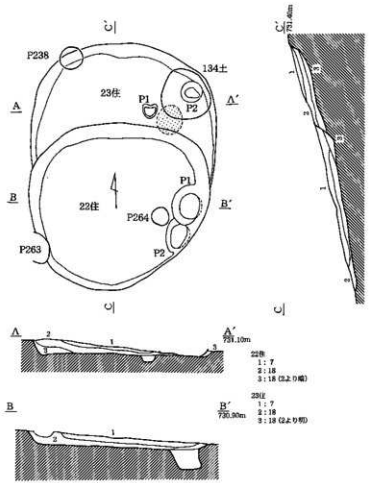
第19・20号住居址



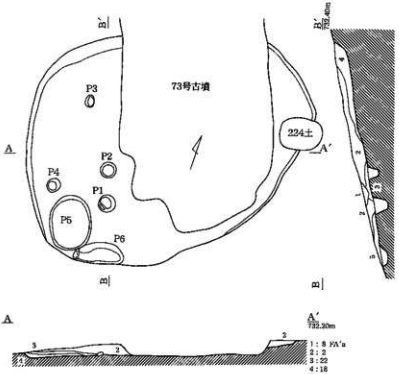
第34図　カニホリ東遺跡　住居址（6）

0　2m

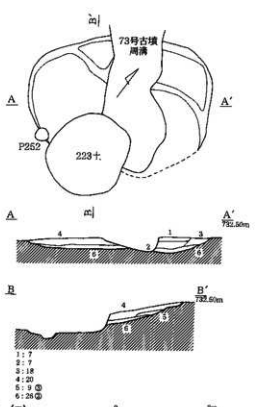
第22・23号住居址



第21号住居址

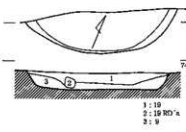


第24号住居址

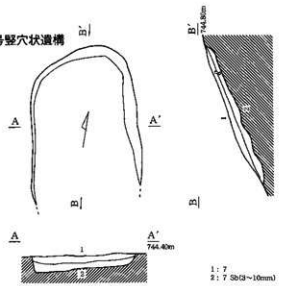


第35図　カニホリ東遺跡　住居址（7）

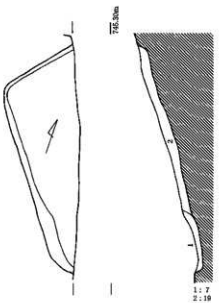
第1号竪穴状遺構



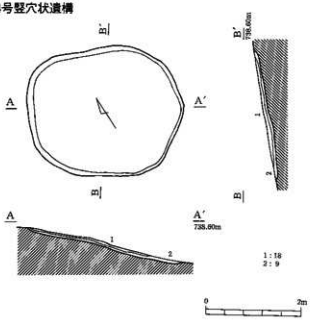
第3号竪穴状遺構



第2号竪穴状遺構

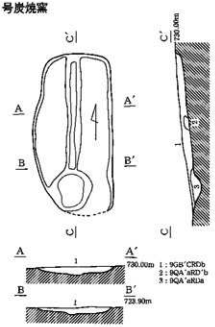


第4号竪穴状遺構

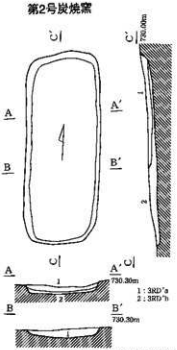


第36図　カニホリ東遺跡　竪穴状遺構

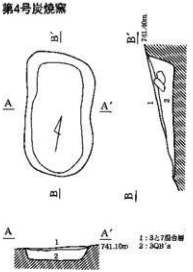
第1号炭焼窯



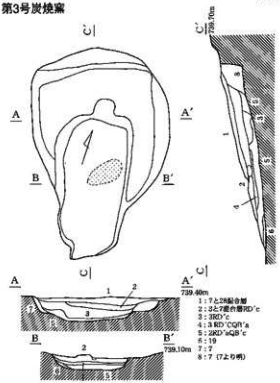
第2号炭焼窯



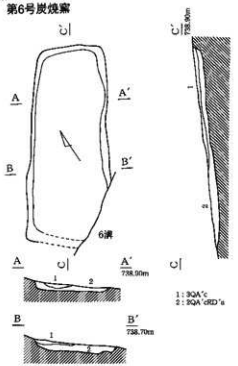
第4号炭焼窯



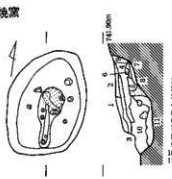
第3号炭焼窯



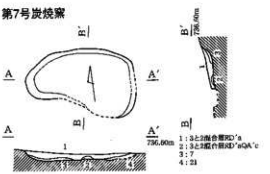
第6号炭焼窯



第9号炭焼窯

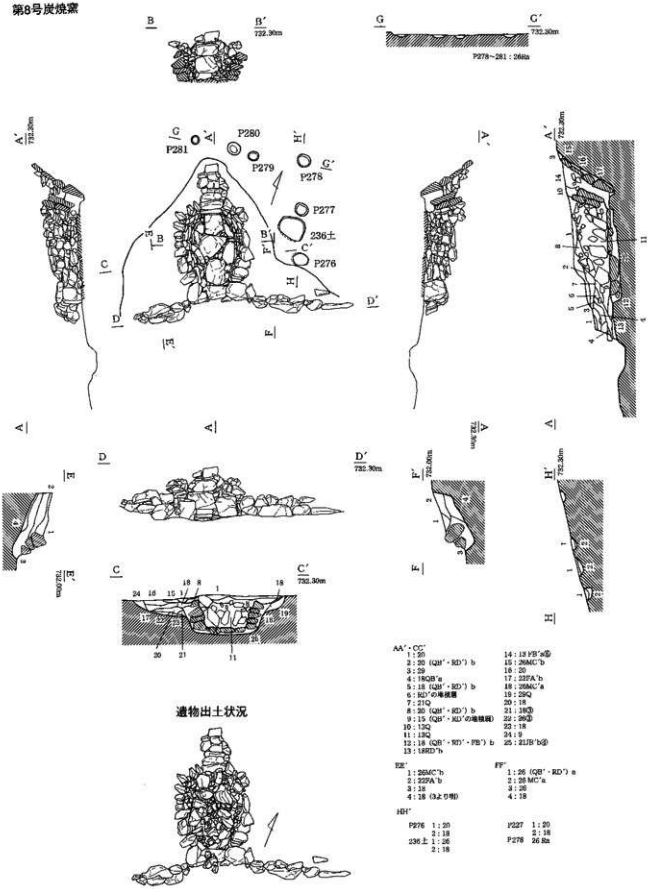


第7号炭焼窯



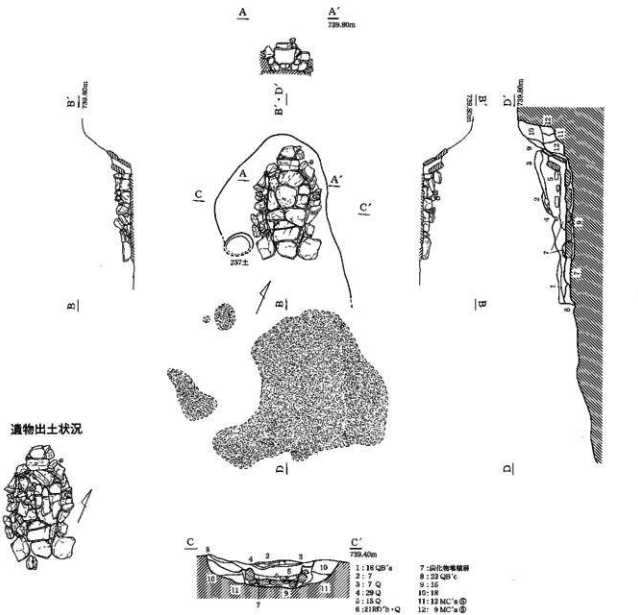
第37図　カニホリ東遺跡　炭焼窯（1）

第8号炭焼窯

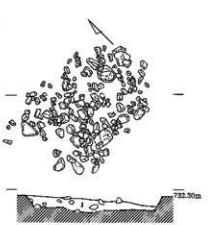


第38図　カニホリ東遺跡　炭焼窯（2）

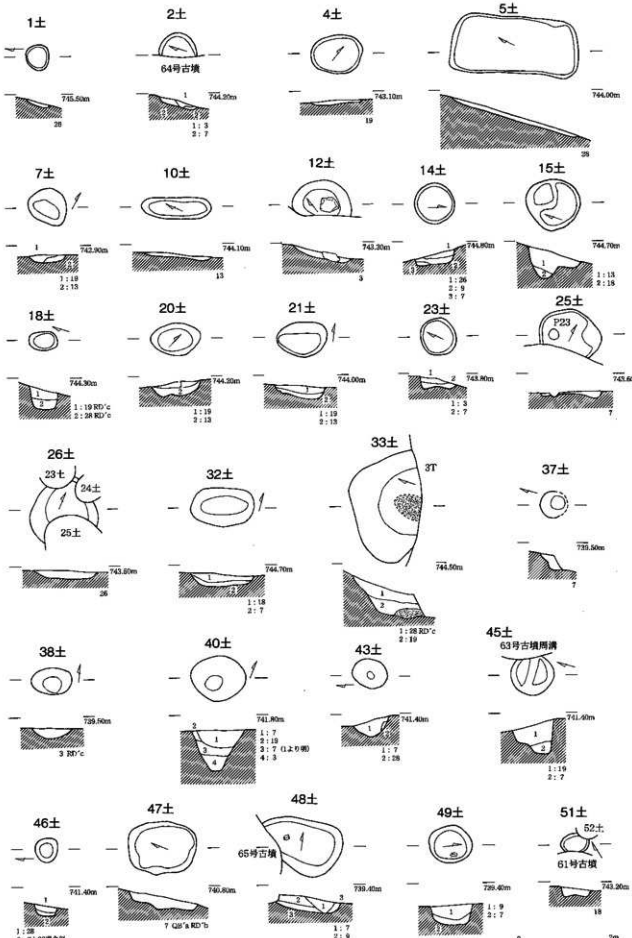
第5号炭焼窯



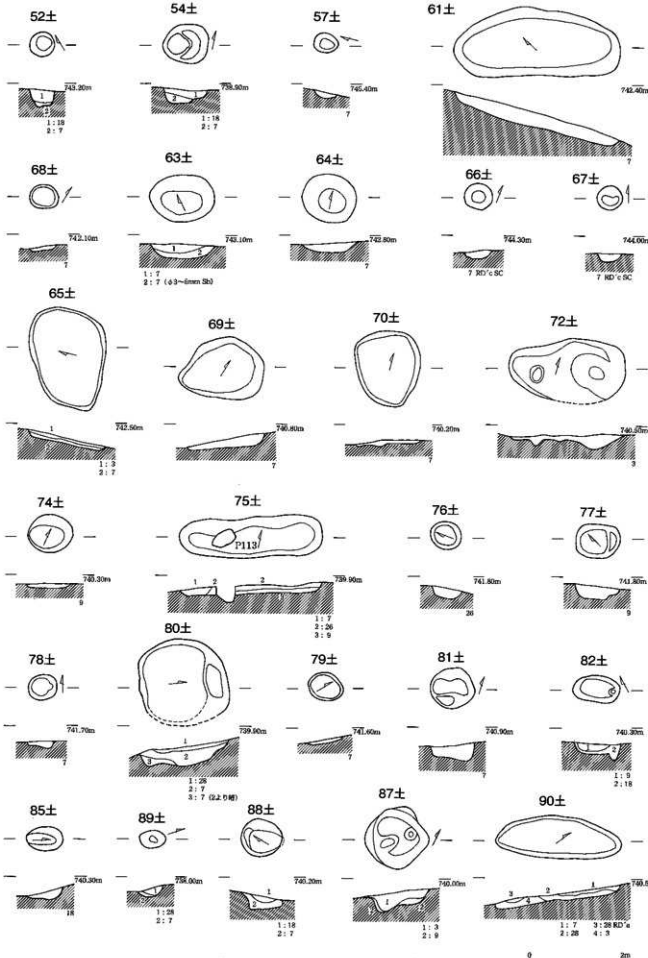
第1号集石



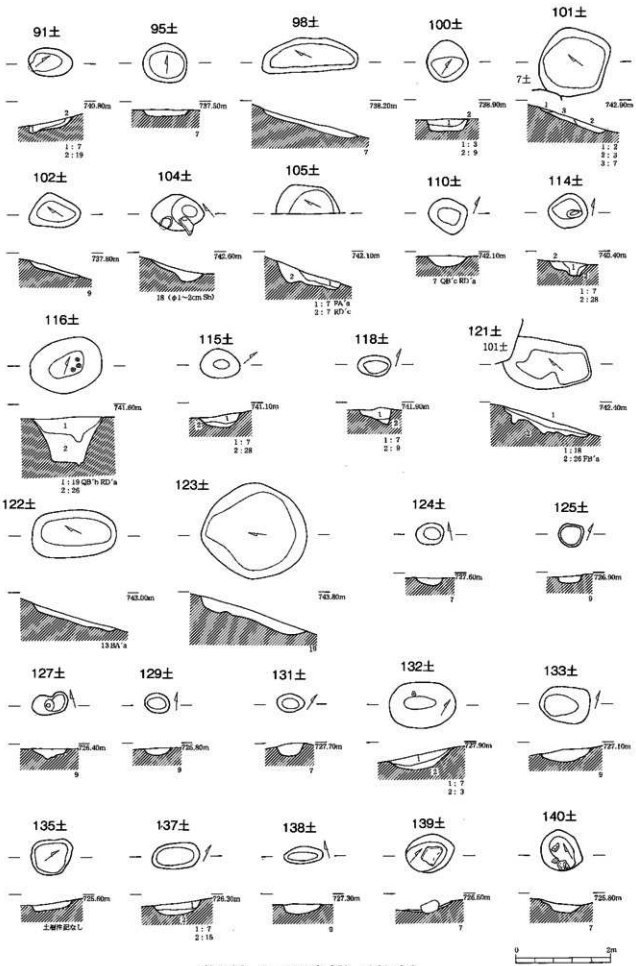
第39図　カニホリ東遺跡　炭焼窯（3）・集石



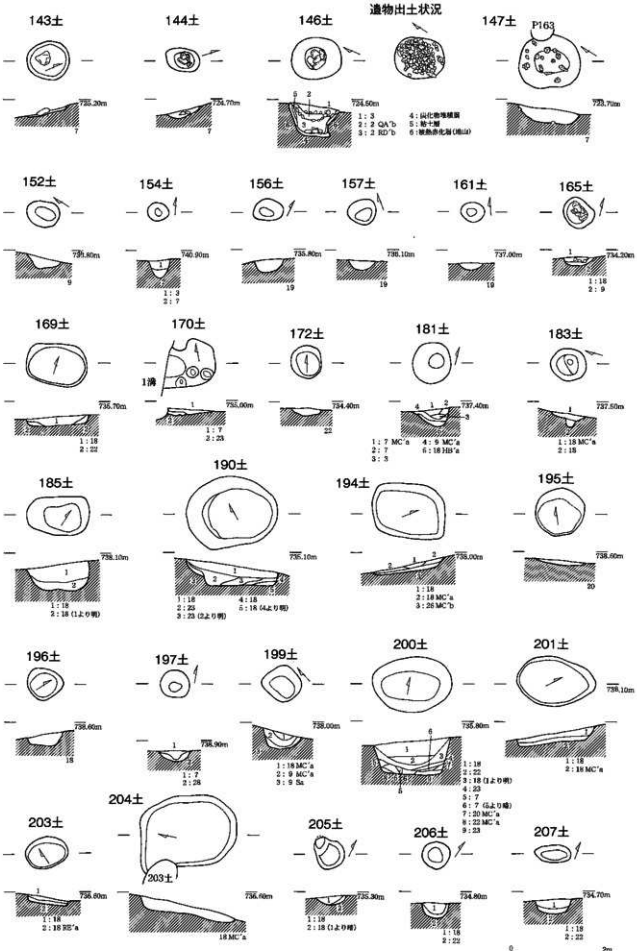
第40図　カニホリ東遺跡　土坑（1）



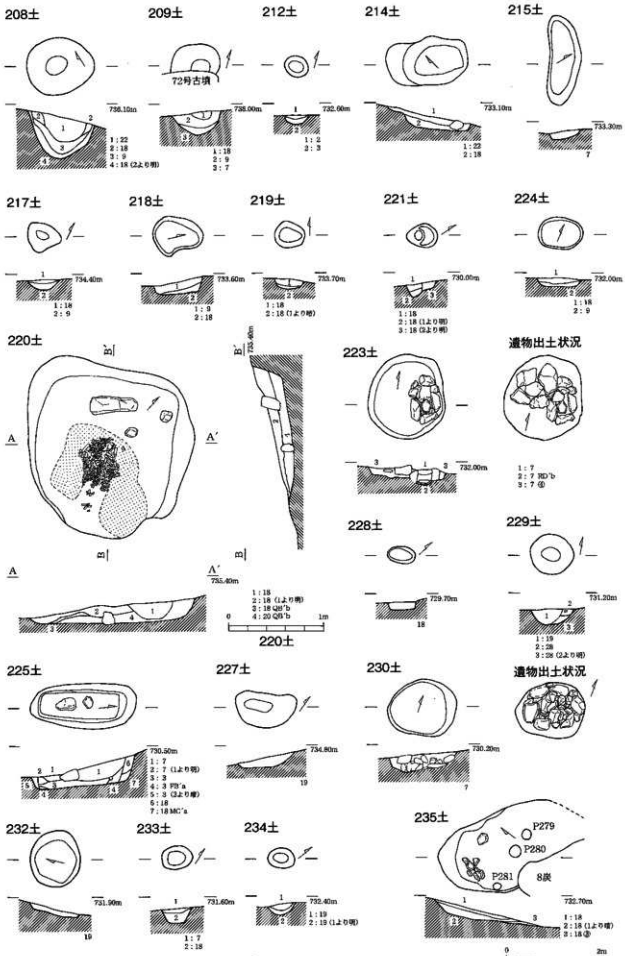
第41図　カニホリ東遺跡　土坑（2）



第42図　カニホリ東遺跡　土坑（3）

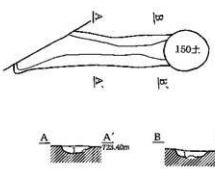


第43図　カニホリ東遺跡　土坑（4）

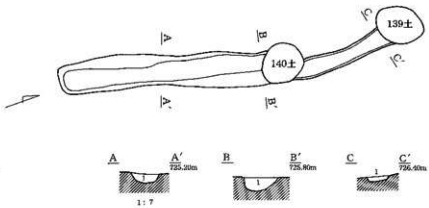


第44図　カニホリ東遺跡　土坑（5）

第5号溝状遺構



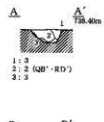
第4号溝状遺構



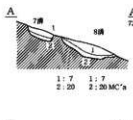
第1号溝状遺構

第2号溝状遺構

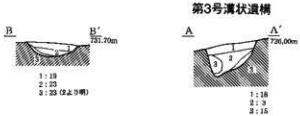
第6号溝状遺構

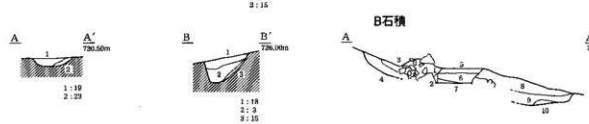


第7・8号溝状遺構



第3号溝状遺構





第45図　カニホリ東遺跡　溝状遺構、石積

Ⅵ章　カニホリ西遺跡

1　竪穴住居址（第４表）

カニホリ西遺跡では、13軒の竪穴住居址を調査した。一括遺物等から時期が推定される住居址は６軒あり、その内３軒（６・８・12住）が縄紋時代前期末～中期初頭、３軒（５・７・９住）は中期後半である。集落に関わる遺構は、他時期と推定されるものが極めて少ないことから、時期不明の住居址も縄紋時代前期末～中期初頭、中期後半に属するものが多いと思われる。多くの住居址はⅠ・J・K区の比較的傾斜の緩い斜面上で検出された。検出面の傾斜度は４～９°で、住居址床面の傾斜は、５～11°に収まる。炉・柱構造など不明なものが多く、竪穴状遺構との区別が曖昧なものもある。

第１号住居址（第46図）

位置　Ⅰ区南西部に位置する。**検出状況**　撹乱などにより、覆土がほとんど失われていた。**切り合い**　東側で２住を切り、４溝が中央部を横切る。**覆土の状況**　直径10～40cm大の礫が全体にみられた。**炉**　検出されなかった。**ピット**　7基を本址に伴うものとして扱った。P1は柱痕状の堆積が認められ、深さ18cmと浅いが、柱穴の可能性がある。南壁下にP３～５があるが、深さ・位置から柱穴とは推定しかねる。床面の状況等から、本址は竪穴状遺構とすべきなのかもしれない。**遺物出土状況**　非常に少なく、土器類は出土していない。石器では、特殊磨石（№58）がある。**時期**　切り合いなどから縄紋時代と思われるが、不明である。

第２号住居址（第46図）

切り合い　西側で１住、中央を４溝、北西壁を143・144土に切られる。**覆土の状況**　直径10～40cm大の礫が全体にみられた。**床面**　地形の傾斜に合わせて、北から南に傾きをもつ。凹凸はなく、堅固。**炉**　検出されなかった。**ピット**　２基ある。柱痕状の堆積は認められないが、何れも壁寄りの一部が深く掘り込まれており、柱穴の可能性もある。１住と同様に、本址は竪穴状遺構とすべきなのかもしれない。**遺物出土状況**　少ないが、縄紋土器片が出土している。**時期**　縄紋時代と思われるが、不明である。

第３号住居址（第46図）

位置　Ⅰ区中央に位置する。**検出状況**　4住覆土中に石囲炉を確認した。**床面**　耕作等により消失するが、床面東側は4住覆土中に構築されたと推定される。**ピット**　188・189・192・193・206土とP70は単独の土坑・ピットとしたが、位置的に本址に付属する可能性もある。**炉**　石囲炉は西側が壊され、被熱礫が散乱していた。残る３辺は、箱形を呈する礫を平面方形に並べ埋設している。礫の内面は、被熱し赤変していたが、覆土中に焼土の堆積は認められなかった。**遺物出土状況**　出土遺物は皆無である。**時期**　時期は縄紋時代中期後半以降と考えられるが、不明である。

第４号住居址（第46図）

切り合い　北側を３住に貼られ、北壁を８竪・P70、東壁を９住、中央で188土に切られる。**床面**　軟弱で起伏があり、地山に含まれる礫が露出する。中央部が浅く、南側と西側が深い。**炉**　検出されなかった。**ピット**　13基を検出したが、この中には、単独のもの、３住に付属するものが含まれる可能性もある。P５・６・８～10・12は深さ16～32cmと比較的深く掘り込まれる。床面の状況などから、本址は竪穴状遺構とすべきなのかもしれない。**遺物出土状況**　出土量は比較的多く、縄紋土器深鉢片（№98～101）などがある。**時期**　縄紋土器は中期後半に属するが、3住の混入遺物を含む可能性があり、時期は不明である。

第５号住居址（第46図）

位置　Ⅰ区東部に位置する。96土に東側を切られ、東端部は耕作が床面下まで及ぶ。**切り合い**　東壁で96土に切られ、西壁で99土を切る。**床面**　地形に合わせて、北西から南東に傾斜をもつ。堅くはなく、起伏は

少ない。**ピット**　12基を検出した。この内P 9は北東の壁直下に位置し、覆土中に焼土粒・塊が混入している。また中央東寄りのP12は、直径48cm、深さ12cmを測る平面円形の穴で、底面が僅かに被熱焼土化している。位置的に疑問があるが、破壊された炉の可能性もある。P 7は北壁直下にある比較的大きな穴で、位置・規模等から貯蔵穴の可能性がある。P 1・5・6・8・9は位置・規模等から、柱穴の可能性もある。**遺物出土状況**　出土量は比較的多く、縄紋土器深鉢片がある。**時期**　遺物から中期後半と推定される。

第6号住居址（第47図）

位置　I区中央東寄りに位置し、斜面下方の南端部は、耕作が床面下まで及んでいた。**規模**　今回の調査では、比較的大規模な住居址である。**壁**　検出面から床面が非常に浅く明確でないが、北壁は傾斜をもち、東西は緩やかに掘り込まれ、壁と床の境界もはっきりしない。**床面**　白色砂粒の混入する明黄褐色土の床面は、地形の傾斜に合わせ北北西～南南西に傾きをもち、起伏は少なく、堅くはない。床面の比高差は北壁と南壁直下で70cmを測る。**炉**　2箇所の地床炉を検出した。1炉は中央南西寄りに位置し、長径56×短径30×深さ6cmを測る。断面形は皿形を呈す。北西寄りに焼土が堆積しており、炉本体は、焼土範囲なのかもしれない。炉2はほぼ中央に位置し、長径80×短径40×深さ8cmを測る。断面形は皿形を呈し、壁はなく、浅く窪む。覆土には焼土が堆積している。地山に含まれる礫が北端・東端に各1個が露出しており、住居構築時に除去せず、意図的に残した可能性もある。**ピット**　総数20基ある。規模から長径が100cmを超える5基（P 4・9・12・18・20）と60cm未満の15基に分けられる。長径が100cmを超える5基は貯蔵穴や本址に切られる単独の土坑、60cm未満の15基は柱穴や単独のピットの可能性がある。P 2・7・11・14・19（もしくは17？）・8は、平面六角形に配置され、6本主柱穴の可能性がある。この内P 2・8・11は、底面に段をもつ。P 2・7間のP 5は底面に段をもち、柱間支柱の可能性もある。**遺物出土状況**　出土量は非常に多く、縄紋土器深鉢片（№103・104）などがある。石器では、打製石斧（№46）が出土している。**時期**　出土した土器類などから、縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第7号住居址（第47図）

位置　I区東側に位置する。**切り合い**　西壁際を128土に、中央南寄りで耕作による撹乱を床面下まで受ける。**壁**　北～西は傾き、南～東は緩やかに掘り込まれる。壁際の床面～壁中には、部分的に地山に含まれる礫が除去されず、壁に露出する。**床面**　礫を含む軟弱な明黄褐色土で、起伏は少なく、地形に合わせて傾く。**炉**　南西部に位置する。赤褐色の焼土が堆積する落ち込みとして検出した。礫が抜き取られた石囲炉なのかもしれない。**ピット**　8基検出した。位置・規模等から、P 1～5・7は柱穴の可能性がある。この内P 7は、住居址内側から壁中に向かって斜めに掘り込まれ、仮に柱があったとすれば、斜いていた可能性が高い。P 2・3は底面に段を持つ。**遺物出土状況**　縄紋土器深鉢片を主に、比較的多い。この内№105を掲載した。石器では、石核が出土している。**時期**　遺物から、縄紋時代中期後半と推定される。

第8号住居址（第48図）

位置　I・J区にまたがって位置する。調査は区毎に行い、I区部分の調査終了後、J区部分を調査した。**切り合い**　東側で223土に切られる。**検出状況**　耕作により、床面下まで削平されていた。**床面**　地形に合わせて傾斜がある。軟弱な明黄褐色土で起伏がある。**炉**　検出されなかった。**ピット**　4基を検出した。P 1・4は底面に段があり、柱穴の可能性がある。本址は床面の状況などから、竪穴状遺構とすべきなのかもしれない。**遺物出土状況**　出土量は少ないが、縄紋土器深鉢片（№106）がある。石器では、石核（№1・2）が出土している。**時期**　遺物から、縄紋時代前期末～中期初頭と推定したい。

第9号住居址（第48図）

位置　I区中央北寄りに位置する。**切り合い**　西壁で4住を切り、南壁で118土、中央部をP 52に切られる。**覆土の状況**　覆土中には多数の礫が含まれる。**壁**　傾いて掘り込まれ、礫が露出する。**床面**　軟弱な明黄褐

色土にも礫が含まれ露出する。地形に合わせ、北から南に傾斜をもち、起伏が認められる。**炉・ピット**　いずれも確認できなかった。竪穴住居址として扱ったが、竪穴状遺構として扱うべきであった。**遺物出土状況**　非常に少ないが中期後半の浅鉢（№107）・深鉢片がある。**時期**　縄紋時代中期後半と推定される。

第10号住居址（第48図）

位置　K区西側に位置する。**切り合い**　南側を11住、西側を284土に床面下まで切られる。**床面**　北から南に緩やかな傾斜をもつ。礫を含むにぶい黄明褐色土をそのまま床面とし、礫が露出している。**炉**　検出されていない。**ピット**　5基を本址に付属するものとしたが、単独の土坑・ピットの可能性もある。また、11住のP1・2も本址に伴うピットの可能性もある。竪穴住居址としたが、竪穴状遺構として扱うべきであった。**遺物出土状況**　出土量は、非常に少ない。**時期**　縄紋時代と思われるが、時期は不明である。

第11号住居址（第48図）

切り合い　北側で10住を切り、中央部を262・275土に床面下まで切られる。**覆土の状況**　覆土のにぶい褐色土・灰黄褐色土中には多数の礫が含まれる。**壁**　概ね傾いて掘り込まれる。**床面**　軟弱なにぶい黄褐色土で北から南に傾斜がある。細かな起伏が認められ、数個の礫が露出する。**炉**　検出できなかった。**ピット**　6基が壁下～壁際で検出された。柱痕状の堆積は確認できないが、いずれも規模・配置から柱穴の可能性がある。**遺物出土状況**　出土量は、非常に少ない。**時期**　縄紋時代と思われるが、時期は不明である。

第12号住居址（第48図）

位置　K区東側に位置する。**切り合い**　西隅で13住を切り、73号墳の周溝に覆土中を切られる。東側では3土集に切られる。その他347・364・300土に床面下まで切られる。**壁**　北・南壁はほぼ直、西壁は緩やかに掘り込まれる。**床面**　堅固で起伏がある。地形に合わせ、北北西から南南東方向に傾きをもつ。**炉**　検出できなかった。**ピット**　8基ある。西側で検出されたものが多く、直径16～36cmと比較的小規模である。**遺物出土状況**　出土量は比較的多く、縄紋土器深鉢片（№108）などがある。石器では、石核、石鏃（№14・16・17）、石錐（№30）など多くの器種がある。**時期**　時期は遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。

第13号住居址（第48図）

切り合い　12住、73号墳主体部・周溝、288土他多数の土坑に切られる。**壁**　残存部では、北～西で緩やか、南壁でほぼ直に掘り込まれる。**床面**　地形にあわせ、北北西から南南東方向に傾きをもつ。**炉**　検出されなかった。**ピット**　中央付近で2基検出した。**遺物出土状況**　非常に少ない。12住との切り合いから、縄紋時代前期末～中期初頭以前と推定される。

2　竪穴状遺構（第49～50図、第6表）

9基を調査した。一部は開墾や耕作に伴う遺構の可能性も捨て切れない。**分布**　調査地の南東部、I・J・K区にあり、竪穴住居址の分布と重なる。**形態**　平面形は概ね円形（1～3・7・9竪）、長楕円（6竪）・不定形（5竪）を呈する。不定形・不明なものは、検出面からの掘り込みが浅く、底面下まで耕作が及んでいるものが多い。5竪は南側、6竪は北側に拡がる可能性がある。**底・壁**　壁の掘り込みは、概ね傾斜がある。底面や壁面は、地山の黄褐色～明黄褐色土に含まれる礫が除去されずにそのまま露出し、起伏や傾斜が認められるものが多い。ピットなどの付属施設を伴うものには、2・7竪があるが、単独遺構との切り合いの可能性もある。7竪は底面中央付近に4基のピットがあり、東側下には、2.8×1.4mの不整形の浅い窪みがある。**遺物出土状況**　いずれも出土量は少ないが、縄紋時代の深鉢破片、近世の内耳鍋片などが出土している。**時期**　一括遺物を伴うものはないが、出土遺物から、1～6竪は縄紋時代前期末～中期初頭、7・8竪は近世以降、9竪は縄紋時代中期後半と推定したい。

3　炭焼窯（第7表）

8基の坑内製炭遺構がある。3炭は調査地南端の比較的傾斜が緩いⅠ区にあり、検出面の傾斜は6°を測る。他の7基は調査地北側の比較的傾斜が強いE・L・M区にあり、検出面の傾斜は10～15°を測る。いずれも一括遺物は無く、焼土粒、炭化物粒が確認された。煙道はいずれも残存していない。時期は、カニホリ東遺跡と同時期、古代の可能性が高い。

第1号炭焼窯（第50図）

位置　E区西部に位置する。西4mには2炭が、軸を揃えて並んで検出された。**規模**　全長592cmを測り、今回の調査では最大である。**底面**　ほぼ全面が被熱により若干赤褐色化している。中央軸に溝はない。南壁中央際には直径50cm、深さ12cm程の平面円形の窪みがあり、壁は半円形に突出する。中央やや北寄り部分ではやや浅くなるが、概ね起伏は少ない。**壁**　検出面からの掘り込みは比較的深い。傾斜は場所によって異なり、北壁は緩やか、南壁は袋状になる部分もある。**遺物出土状況**　中央部～南壁にかけては、検出面～底面に20個程の礫が散らばって認められた。

第2号炭焼窯（第50図）

検出状況　北西隅は区外に続く。**底面**　ほぼ全面が被熱により、赤褐色化している。中央軸に溝はない。北東隅には検出面から14cm程の深さまで、緩やかに掘り込まれる突出部がある。位置・形状等から、排煙部の可能性がある。**壁**　傾斜は場所によって異なり、概ね北半はほぼ直、南半では傾く。特に東壁南側では緩やかな部分があり、4個の礫が出土した。**遺物出土状況**　少数だが、被熱痕がない礫が壁際にみられた。

第3号炭焼窯（第50図）

位置　Ⅰ区東半中央部に位置し、全体が9堅覆土中に検出された。Ⅰ区東半一帯は傾斜地末端の台地にあたり、傾斜が比較的緩やかで、他の炭焼窯とは立地が異なる。長軸方向は、地形の傾きから60°程東方を指す。**底面**　ほぼ全面が被熱し、僅かに赤褐色化している。中央軸に溝はない。**遺物出土状況**　被熱痕のない礫が中央東寄りにみられた。

第4号炭焼窯（第51図）

位置　L区北部に位置し、4箇所に撹乱を受ける。L区一帯は傾斜地上端に近く、比較的急な斜面である。**底面**　ほぼ全面が被熱により僅かに赤褐色化していて、特に中央南寄りは、顕著に焼け、やや盛り上がっている。北側～西側中央南寄りは、他の部分より15cmほど浅く、段状になる。軸に溝はない。地形にあわせて、北から南方向に傾く。**壁**　検出面からの掘り込みが比較的浅いが、緩やかにみえる。

第5号炭焼窯（第51図）

位置　L区中央西部に位置する。**底面**　中央には縦軸にそって北壁中央直下から伸びる浅い溝があり、南側で途切れる。この周辺から南壁の突出部分は、やや深く掘り込まれている。底面は全体的に被熱し赤褐色化している。**壁**　僅かに傾いて掘り込まれ、若干赤褐色化している。

第6号炭焼窯（第51図）

位置　L区東部に位置する。北壁中央を撹乱により壊される。**形状**　他の炭焼窯と平面形態が異なり、南壁中央部が尖り三角形に近い。**底面**　地山の明黄褐色土をそのまま底面としている。中央軸には溝はない。底面は全体的に僅かに被熱し赤褐色化している。**壁**　浅いが傾いて掘り込まれ、若干赤褐色化している。

第7号炭焼窯（第51図）

位置　L区南東部に位置する。**底面**　中央には浅い溝はない。底面は全体的に僅かに被熱赤褐色化し、数箇所では炭化物粒が面的に付着し、黒変している。起伏はほとんどない。**壁**　浅いが傾いて掘り込まれ、若干赤褐色化している。

第８号炭焼窯（第51図）

位置　M区東部に位置する。周辺の傾斜は、比較的急である。**底面**　中央には縦軸にそって中央部に伸びる浅い溝がある。他の炭焼窯では山側の壁直下から掘り込まれる例が多いが、北壁から50cm、南壁では100cm程離れている。全面が僅かに被熱により赤褐色化し、数箇所では炭化物粒が付着し黒変している。起伏はほとんどない。**壁**　概ねほぼ直に掘り込まれ、北東隅～東壁北端部は、緩やかになる。

4　集石（第52図）

カニホリ西遺跡では、Ⅰ・F・K区で、総数12基検出された。遺構検出時において、人為的に礫をまとめた遺構の内、石積・古墳などに伴わないものを集石とした。何れも時期の推定が可能な一括遺物や焼土・炭化物・骨等は認められない。９集石を除く11基は、円形もしくは楕円形の掘り方の中心部分に、比較的大きな礫を置き、周囲を取り囲む様に中心の礫より小さめの礫を廻らせている。事故防止のため、一部のみ掘り下げた。他遺構との新旧関係から、古墳時代末以降と推定されるものがあり、明治時代の開墾時に掘り出された不要な礫を廃棄した痕跡の可能性が高い。９集石は、６谷を切る。他に比して大規模で、比較的大きな礫が縦に埋設されている。中央部では南北方向に列状に並び、古墳主体部の可能性も考えられた。慎重に調査を進めたが、廃棄を目的とした埋設の可能性があるものの、最後まで遺構の性格は推定できなかった。

5　土坑・ピット（第55～61図）

カニホリ西遺跡では、D・E・O区を除く各区から土坑369基、ピット163基、総数532基が検出された。調査地内に未調査部分があるため、分布状況は明確ではないが、L～I区にかけて、高低差約40mの斜面上に南北約200m、東西90mの範囲に拡がっている。M区の東方～J区の東方は、尾根の裾部を流れる沢が形成した谷状の地形になっており、分布は途切れると推定される。特に集中している場所は、F区中央部、Ⅰ区中央部、K区中央～西側である。竪穴住居址と竪穴状遺構はⅠ・J・K区の南北55m、東西50mの範囲内で検出されており、分布は重なる。時期は、出土遺物から縄紋時代前期末～中期初頭と中期後半に属すると推定されるものがある。カニホリ西遺跡の範囲内で出土した遺物は、古墳に伴うものと、炭焼窯から出土した炭化物を除くと、ほぼ全てが縄紋時代に属することから、時期の推定が出来ない土坑も、多くが縄紋時代に属する可能性が高い。ただし、西遺跡のH区で検出された74～80土、G区の72・73土は、形態・堆積状況等が異なっていることから、中世～近現代に属する可能性がある。また、J区東端の362土は堆積状況などから、ロームマウンドの可能性が高い。個々の遺構図については、極力掲載することに努め、代表的なもの、一括遺物が出土したもの、特徴的なもの147基を図示した。

91土（第56図）　**位置**　Ⅰ区東端部に位置する。耕作による撹乱を受け、西壁が354土を切る。**壁**　概ね傾いて掘り込まれ、断面形は、皿形に近い。**遺物出土状況**　壁下には西側を除き、５～20cm程の礫が有り、底面中央やや西寄りに縄紋土器の破片（№111・112）がまとまって確認された。**時期**　出土遺物より、縄紋時代前期末～中期初頭と考えられる。Ⅰ区を中心に、平面形が円～楕円形を呈する土坑が多数ある。

115土（第56図）　**位置**　Ⅰ区中央に位置し、西壁は９住に接する。**壁**　南側はほぼ直、その他では、壁面が外側に拡がり、断面は袋状を呈している。**遺物出土状況**　覆土中層からほぼ一個体分の深鉢（№115）破片がまとまって出土している。**時期**　出土遺物より、縄紋時代前期末～中期初頭と考えられる。本遺跡では、他に断面袋状の土坑・ピットは少ないが、107・130土がある。

140土（第57図）　**位置**　Ⅰ区北端に位置する。**切り合い**　他の遺構との切り合い関係は無い。**壁・底**　浅い部分は緩やかかに掘り込まれるため、壁と底の区別がつかない。壁～底面には、除去されずに残された大小４個の礫が露出する。**遺物出土状況**　北西部の円形の落ち込みからは、一括の縄紋土器破片（№118～

121）と土製円盤（№10）が出土している。**時期**　出土遺物より、縄紋時代前期末～中期初頭と推定される。本址に切られる141土は、形状・遺物出土状況等が類似し、出土遺物から同時期の土坑と推定される。

75土（第56図）　**位置**　H区北東部に位置する。他の遺構との切り合いはない。**形状**　壁面はほぼ直に掘り込まれる。断面は台形に近い。**遺物出土状況**　覆土の褐灰色土中には、ほぼ全面に、15cm程の礫を中心に多数の礫が認められた。H区の土坑は平面形が方形あるいは長方形で、覆土は褐灰色を呈するものが多く、覆土に多量の礫を含む点で他区の土坑と異なる。陶磁器などの遺物が出土しておらず、時期は推定できないが、中世～近現代に属する可能性がある。

302・303土（第60図）　**位置**　L区北端に位置し、比較的傾斜が急な調査地の最北端にあたる。2基は切り合って検出された。**形状**　302・303土はいずれも傾いて掘り込まれ、底面積が狭い。底面の位置は302土が中央、303土は北壁下にある。**遺物出土状況**　一括遺物がなく、時期は推定できない。L・M区検出の土坑・ピットは分布が薄く、規模も比較的小さいものが多い。比較的緩やかな傾斜地に立地するF・I・J・K区の土坑とは性格が異なるものと思われる。

6　土器集中区（第53～54図）

今回の調査地で、最も遺構が集中するのはI・J・K区で、南向き斜面上の台地上である。この台地上の東端部にある谷状の窪みと台地末端部分の裾部の堆積土から、縄紋土器片を中心に、土製品、石器類が多数出土したため、土器集中区として調査した。J区東端部に1・2土集の2基、K区の東端に3土集1基がある。2・3土集は農道に分断されるため明らかではないが、位置的に一連の谷状の窪みと考えられる。1土集は、台地末端部分の裾部で、調査区外に拡がる可能性が高いが、農道造成により東側は消失していた。南端部では、249土に切られる。検出面からの深さは最深部で88cmを測る。底面は、台地上と同じ黄褐～明黄褐色土で、礫を含む。調査範囲内では確認できないが、区外には、東に向かって強い傾斜あるいは段があるものと推定される。覆土下層には直径30cm程を中心とした多数の礫が認められ、一括品の縄紋土器片を含め、多数の破片、土製品、石器が出土した。縄紋土器類は竪穴住居址や土坑からの出土遺物に比べ、器面や破片の断面が磨滅しているものが多い。時期は一括土器から、前期末～中期後半と推定される。2土集は1土集の10m程西にある窪みで、8集石、239・241・243・362土、P96に切られ、P103を切る。長さ約11m、幅6.5m、検出面からの深さは30cm程を測る。黒色土の堆積土中には、直径15～20cm大を中心にした礫が含まれ、縄紋土器の小破片、石器が混じる。量的には1土集に比べ少ない。3土集は287土、P124～126・130・131・163に切られる。長さは約11m、幅8m、検出面からの深さは50cm程を測る。灰黄褐～黒色土の堆積土中には、直径20～30cm大を中心にした礫が含まれ、縄紋土器の小破片、石器が混じる。量的には2土集に比べ少ない。出土遺物から、2土集の時期は縄紋時代前期前半以降、3土集は前期末以降と推定される。

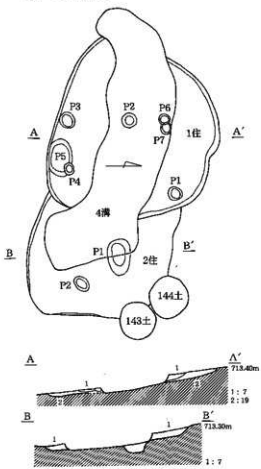
7　溝状遺構

合計6条検出した。H区の3溝を除き、明治時代以降の耕作に伴なう畝合と推定されるが、一括遺物がなく時期は推定できない。H区の3溝は、覆土に大量に礫が含まれ、礫間には空間も認められた。近代以降の礫の廃棄を目的とした溝状遺構と考えられるが、一括遺物がなく時期は推定できない。

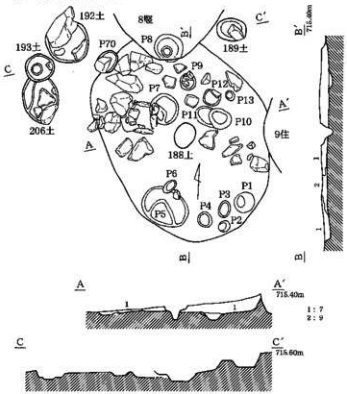
8　谷状地形

谷状の自然地形で、I・L・M区で検出した。遺物を含むものがあるため、トレンチを設定して一部を掘り下げた。遺物は縄紋土器小破片などで、混入品と思われる。

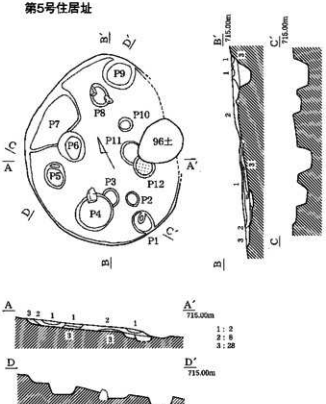
第1・2号住居址



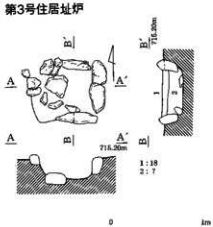
第4号住居址（第3号住居址炉）



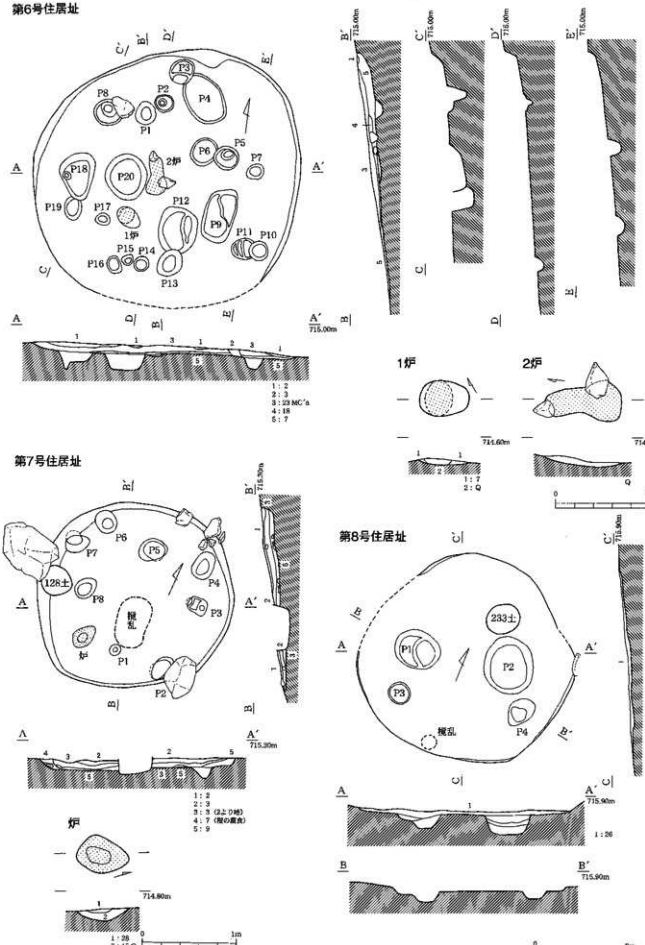
第5号住居址



第3号住居址炉

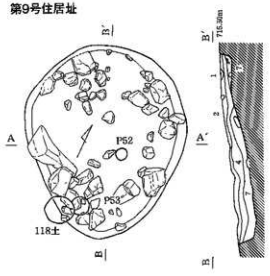


第46図　カニホリ西遺跡　住居址（1）

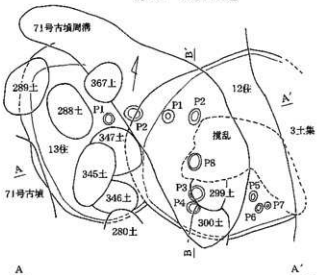


第47図　カニホリ西遺跡　住居址（2）

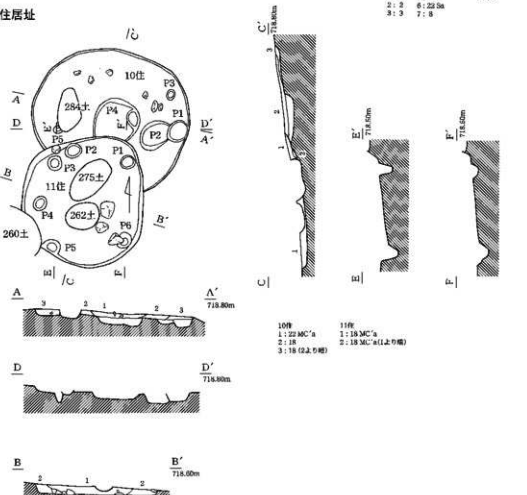
第9号住居址



第12・13号住居址

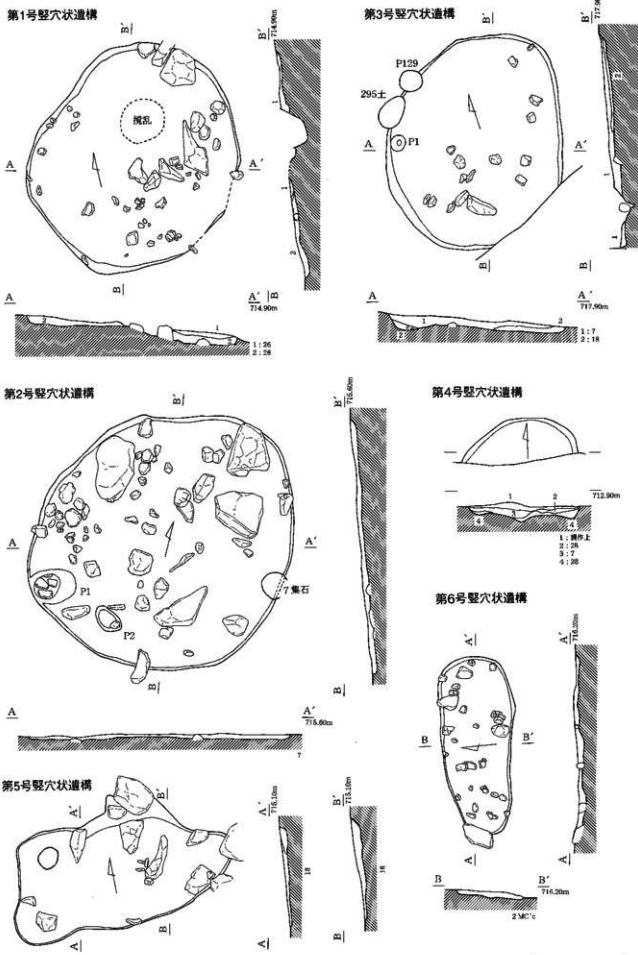


第10・11号住居址

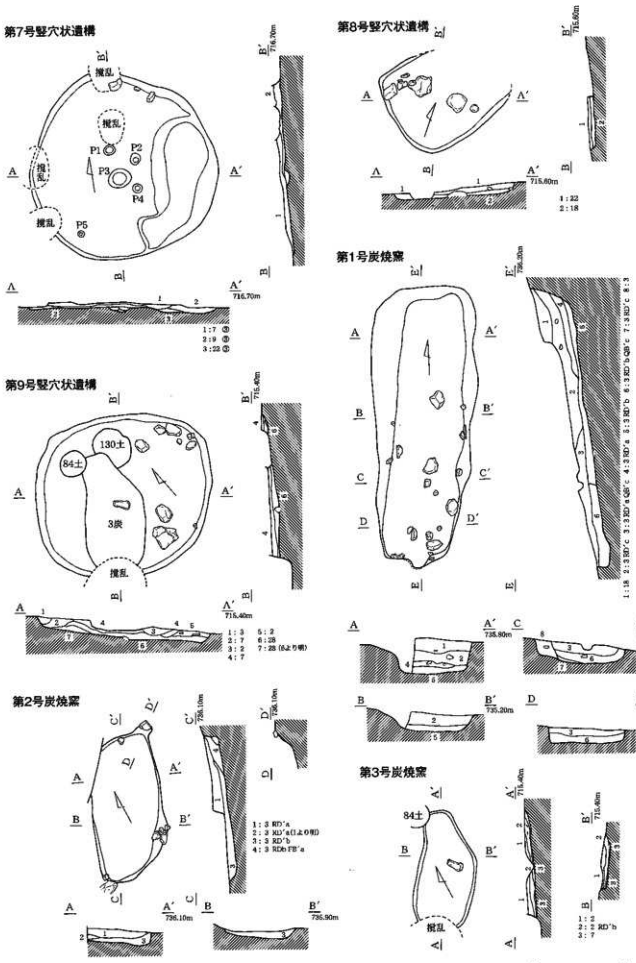


第48図　カニホリ西遺跡　住居址（3）

0　2m

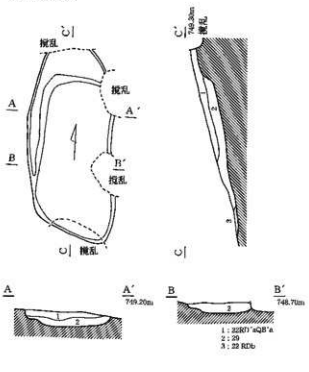


第49図　カニホリ西遺跡　竪穴状遺構（1）

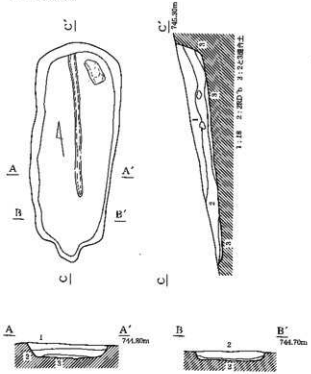


第50図　カニホリ西遺跡　竪穴状遺構（2）、炭焼窯（1）

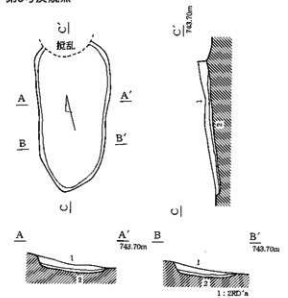
第4号炭焼窯



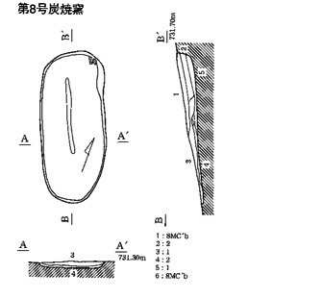
第5号炭焼窯



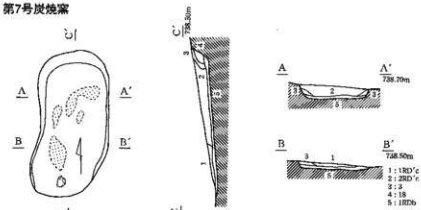
第6号炭焼窯



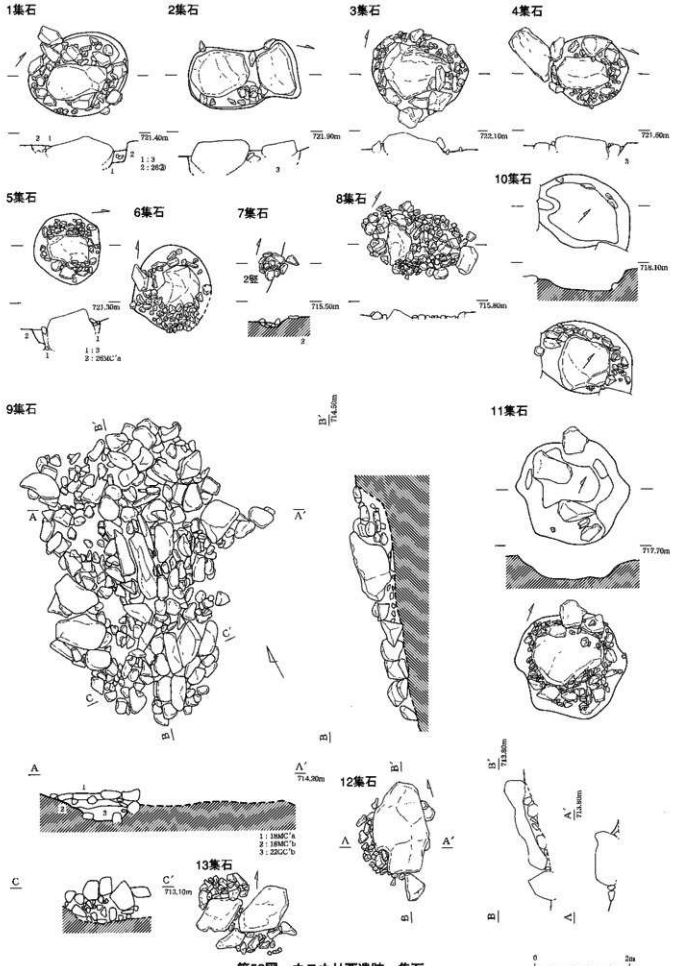
第8号炭焼窯



第7号炭焼窯

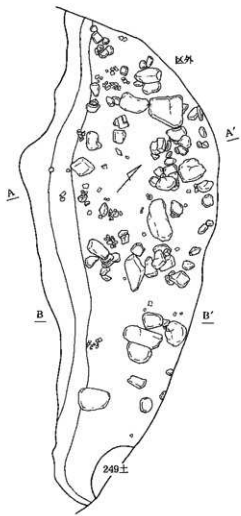


第51図　カニホリ西遺跡　炭焼窯（2）

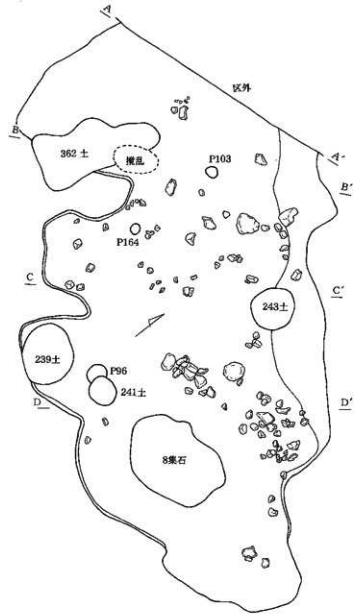


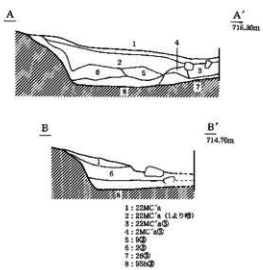
第52図　カニホリ西遺跡　集石

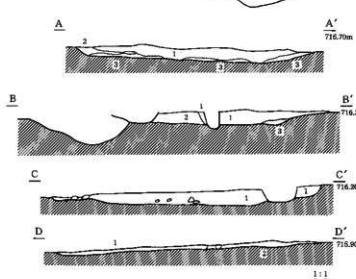
第1号土器集中区



第2号土器集中区



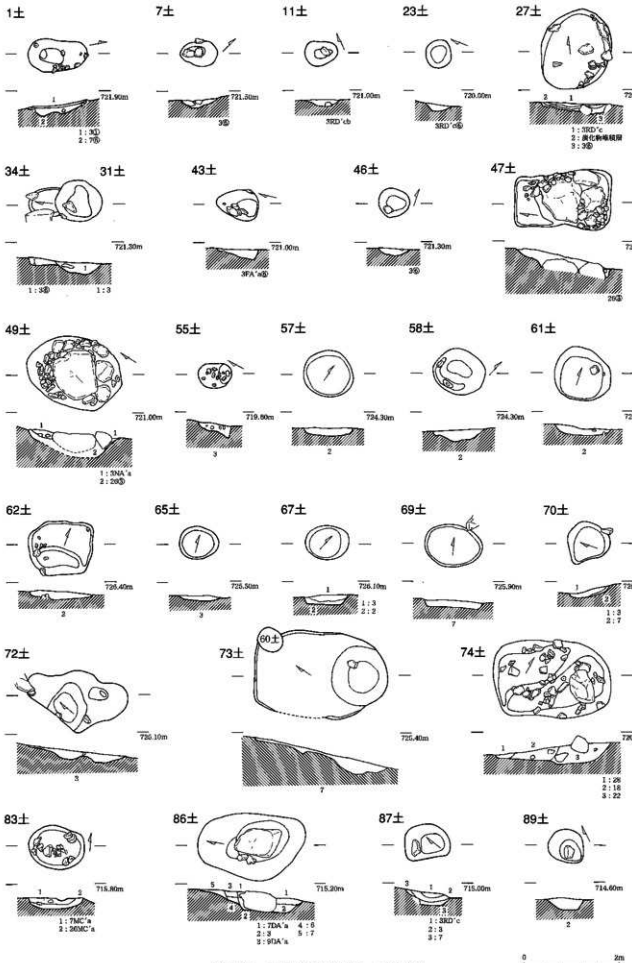




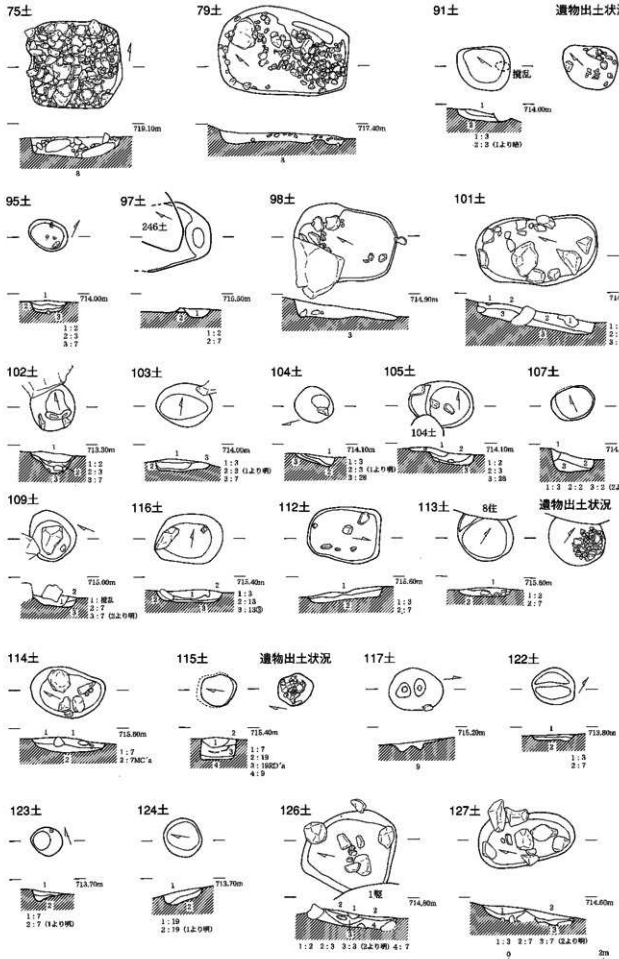
第53図　カニホリ西遺跡　土器集中区（1）

第3号土器集中区

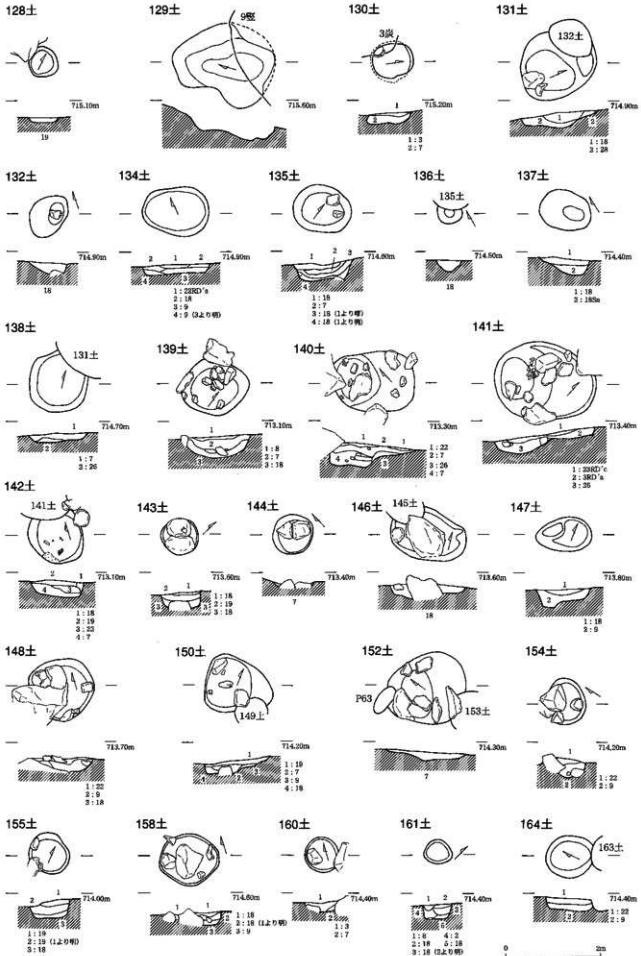
第54図　カニホリ西遺跡　土器集中区（2）



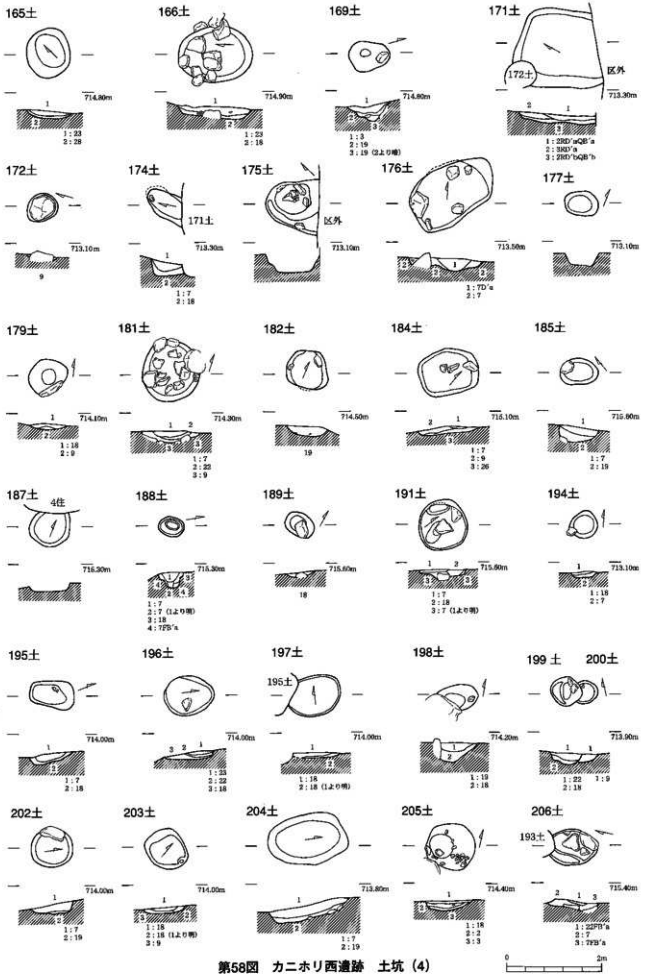
第55図　カニホリ西遺跡　土坑（1）



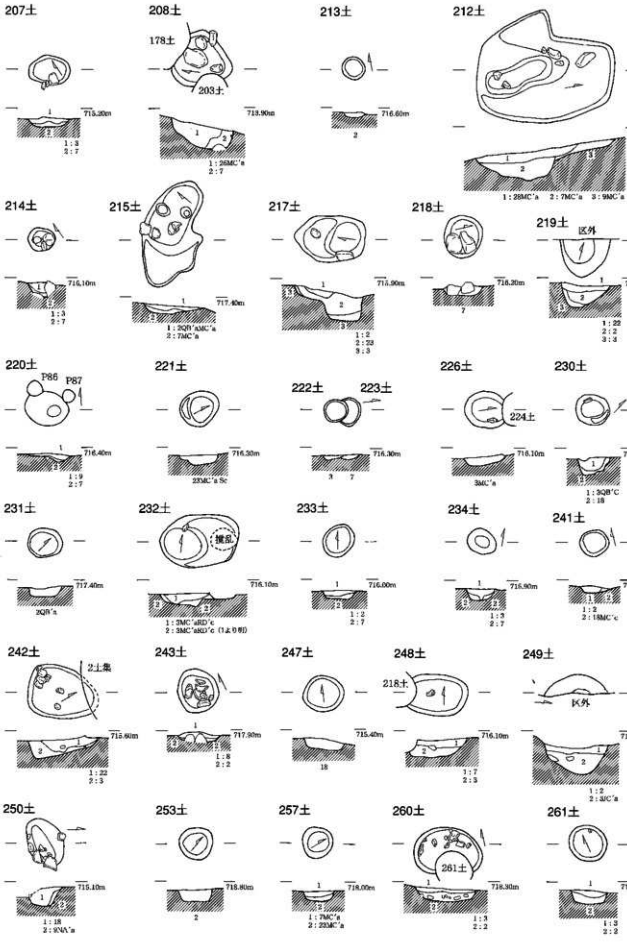
第56図　カニホリ西遺跡　土坑（2）



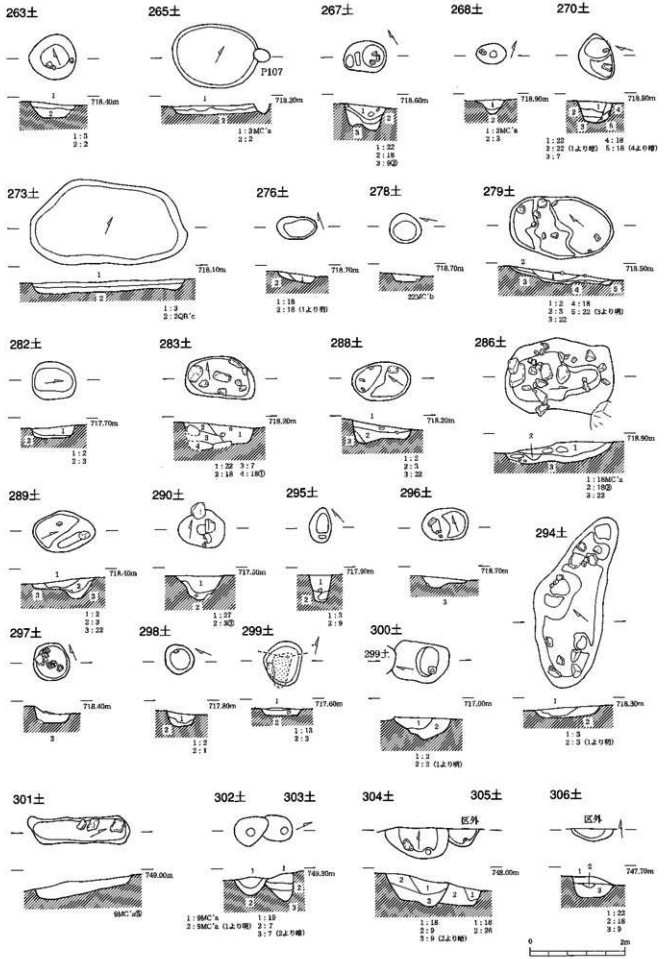
第57図　カニホリ西遺跡　土坑（3）



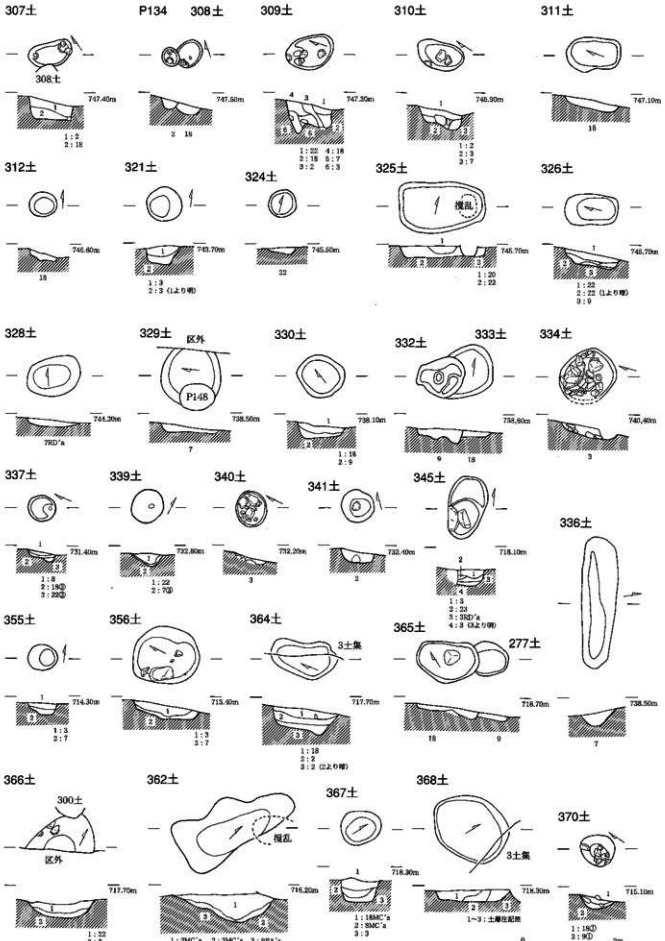
第58図　カニホリ西遺跡　土坑（4）



第59図　カニホリ西遺跡　土坑（5）



第60図　カニホリ西遺跡　土坑（6）



第61図　カニホリ西遺跡　土坑（7）

第3表　カニホリ東遺跡竪穴住居址一覧表

No.	図No.	調査区	平面形	規模（cm） 長軸	短軸	深さ 北	南	東	西	床面傾度	床面積（m²）	長軸方位	炉 形態・位置	時期	所見
1	29	B	不明	–	–	–	–	–	–	–	–	–	右側・不明	中期後半以降	炉とピットの検出
2	29	A	円形	364	292	26	11	5	19	8°	(7.29)	N-14°-W	地床・中央北寄り	縄紋前期末～中期初	
3	29	A	不明	512	–	71	–	27	16	13°	(10.65)	N-81°-E	地床・北側	縄紋前期末～中期初	
4	30	A	円形	396	376	17	–	39	–	5°	9.39	N-11°-E	未検出	縄紋前期末～中期初	
5	30	A	(楕円形)	–	368	(67)	–	47	36	15°	<4.30>	–	未検出	縄紋	
6	30	A	楕円形	612	544	59	(10)	38	34	12°	21.92	N-63°-E	未検出	縄紋前期末～中期初	
7	31	A	不整円形	412	–	49	–	32	19	7°	(7.97)	N-42°-E	未検出	縄紋	竪穴状遺構?
8	32	A	不明	(380)	–	19	–	6	–	16°	<4.26>	N-85°-E	未検出	不明	
9	32	A	不明	(444)	–	20	–	14	28	10°	<7.57>	N-75°-E	未検出	縄紋	P7は地床炉?
10	32	A	楕円形	(620)	(540)	54	–	–	37	9°	(21.84)	N-17°-E	地床3・南西、西側	縄紋前期末～中期初	2軒の住居址?
11	30	A	(円形)	–	–	49	–	–	–	8°	<4.11>	–	未検出	縄紋前期末～中期初	竪穴状遺構?
12	33	A	楕円形	(696)	538	57	–	21	31	4°	(26.59)	N-48°-E	地床・中央	縄紋前期末～中期初	石器多器種
13	29	A	楕円形	484	(316)	119	–	71	111	10°	(9.09)	N-72°-E	未検出	縄紋	
14	33	A	楕円形	520	396	66	–	11	37	15°	13.44	N-36°-E	未検出	不明	竪穴状遺構?
15	33	A	不明	(328)	(360)	60	–	–	26	11°	<10.21>	N-14°-W	未検出	縄紋前期末～中期初	
16	31	A	(楕円形)	576	–	60	–	10	16	7°	(17.26)	N-63°-E	未検出	縄紋前期末～中期初	
17	31	A	(楕円形)	(274)	306	56	12	18	41	5°	(6.62)	N-28°-E	未検出	不明	
18	34	A	不明	(290)	396	43	–	37	38	10°	(7.58)	N-10°-W	未検出	縄紋	
19	34	A	(楕円形)	(444)	(182)	27	–	–	5	13°	<6.51>	N-79°-E	未検出	縄紋	
20	34	A	楕円形	416	348	67	2	3	25	16°	10.32	N-72°-E	未検出	縄紋	
21	35	N	(楕円形)	626	466	–	3	3	10	10°	(21.70)	N-65°-E	未検出	縄紋	
22	35	N	楕円形	382	358	–	5	10	30	10°	8.21	N-38°-E	未検出	縄紋	
23	35	N	不明	396	174	44	–	8	21	6°	(4.93)	N-2°-E	地床・中央北東	縄紋	
24	35	N	楕円形	390	294	–	–	9	–	12°	(8.43)	N-55°-E	未検出	不明	竪穴状遺構?

第4表　カニホリ西遺跡竪穴住居址一覧表

No.	図No.	調査区	平面形	規模（cm） 長軸	短軸	深さ 北	南	東	西	床面傾斜度	床面積（m²）	長軸方位	炉 形態・位置	時期	遺構所見
1	46	I	不整円形	356	–	17	3	–	–	8°	(9.96)	N-18°-E	未検出	縄紋	竪穴状遺構?
2	46	I	不整円形	314	–	20	5	11	–	7°	(6.05)	N-22°-E	未検出	縄紋	竪穴状遺構?
3	46	I	不明	–	–	–	–	–	–	–	–	–	未検出	縄紋中期後半?	炉のみ
4	46	I	楕円形	460	340	10	4	17	14	4°	(12.30)	N-28°-W	石囲・不明	縄紋中期後半?	竪穴状遺構?
5	46	I	楕円形	408	(296)	20	7	5	8	6°	9.28	N-30°-E	未検出	縄紋中期後半	P9は地床炉?
6	47	I	円形	596	564	18	–	8	8	5°	23.50	N-5°-E	地床2・中央、同南西	縄紋前期末～中期初	
7	47	I	円形	414	400	27	13	11	–	5°	11.38	N-12°-W	石囲?・南西部	縄紋中期後半	
8	47	I-J	円形	440	434	–	2	3	–	5°	14.91	N-2°-W	未検出	縄紋前期末～中期初	竪穴状遺構?
9	48	I	楕円形	410	338	–	–	–	–	7°	8.50	N-24°-E	未検出	縄紋中期後半	竪穴状遺構?
10	48	K	(円形)	338	(186)	11	–	7	12	8°	<5.87>	N-21°-E	未検出	縄紋	竪穴状遺構?
11	48	K	円形	286	282	–	9	10	22	8°	(5.23)	N-31°-E	未検出	縄紋	
12	48	K	(楕円形)	368	(326)	25	30	–	–	9°	<9.47>	N-29°-W	未検出	縄紋前期末～中期初	石器多器種
13	48	K	不明	400	(214)	–	12	–	26	5°	<5.25>	N-37°-W	未検出	縄紋前期末～中期初?	

※（ ）は推定値、〈 〉は残存値

第5表　カニホリ東遺跡竪穴状遺構一覧表

No.	図No.	調査区	平面形	規模（cm） 長軸	短軸	深さ 北	南	東	西	底面積（m²）	時期	遺構所見
1	36	A	–	(322)	(84)	–	8	31	22	(2.12)	不明	
2	36	A	–	(484)	(124)	11	–	–	20	(4.88)	不明	
3	36	A	(楕円形)	(312)	224	27	–	30	30	(6.70)	不明	炭焼窯?
4	36	N	不整円形	328	272	20	33	32	10	7.58	不明	

第6表　カニホリ西遺跡竪穴状遺構一覧表

No.	図No.	調査区	平面形	規模（cm） 長軸	短軸	深さ 北	南	東	西	底面積（m²）	時期	遺構所見
1	49	I	円形	502	424	9	5	7	9	16.56	縄紋前末～中初	
2	49	I	円形	588	536	23	5	8	19	24.02	縄紋前末～中初	ピット2基あり
3	49	K	円形	452	378	15	14	6	23	(13.83)	縄紋前末～中初	
4	49	I	–	(246)	(94)	20	–	20	12	(1.71)	縄紋前末～中初	
5	49	I	不定形	(432)	(220)	17	3	16	1	(9.89)	縄紋前末～中初	
6	49	I	長楕円形	(382)	150	5	3	7	12	(5.01)	縄紋前末～中初	
7	50	I	円形	402	392	15	2	14	14	12.48	近世以降?	ピット5基あり、内耳鍋片出土
8	50	I	–	–	–	12	14	14	14	(3.06)	近世以降?	内耳鍋片出土、土坑?
9	50	I	円形	372	342	13	19	19	22	(10.85)	縄紋中期後半	

※（ ）は推定値、〈 〉は残存値

第7表　炭焼窯一覧表

(1) 坑内製炭遺構

カニホリ東遺跡

No.	図No.	調査区	平面形	炭化室規模（cm）			長軸方向		窯床傾斜（前傾）	煙道形態					出土遺物	特記事項
				全長	最大幅	焚口幅	真北	地形傾斜		個数	傾斜	平面長（cm）	斜距離（cm）	口径（cm）		
1	37	B	隅丸長方形	332	164	－	N- 1° -W	N-10° -W	5°	－	－	－	－	－		中央縦軸に浅い溝、焚口に浅い窪み
2	37	B	隅丸長方形	404	154	－	N- 3° -W	N-10° -W	4°	－	－	－	－	－		
3	37	A	隅丸長方形	292	160	－	N-13° -W	N- 0°	5°	1	11°	32	－	42		煙道あり、炭化室北側は別遺構？
4	37	A	楕円形	260	142	－	N- 8° -W	N-11° -W	1°	－	－	－	－	－		
6	37	A	長方形	420	158	－	N-33° -E	N-60° -E	5°	－	－	－	－	－		底面焚口側は窪む
7	37	N	不整楕円形	236	132	－	N-81° -W	N-85° -E	2°	－	－	－	－	－		焚口は西側？　斜面に対して長軸が直交

カニホリ西遺跡

No.	図No.	調査区	平面形	炭化室規模（cm）			長軸方向		窯床傾斜（前傾）	煙道形態					出土遺物	特記事項
				全長	最大幅	焚口幅	真北	地形傾斜		個数	傾斜	平面長（cm）	斜距離（cm）	口径（cm）		
1	50	E	隅丸長方形	592	222	－	N- 8° -E	N-30° -E	9°	－	－	－	－	－		南壁の焚口部は突出、2炭と並んで検出
2	50	E	楕円形	308	148	－	N-30° -E	N-60° -E	7°	－	－	－	－	－		北東隅に煙道？
3	50	I	不整楕円形	<222>	124	－	N-33° -E	N-60° -E	5°	－	－	－	－	－		焚口部は攪乱を受ける
4	51	L	不整楕円形	336	196	－	N-20° -E	N-12° -E	7°	－	－	－	－	－		底面の一部に段 攪乱を受ける
5	51	L	隅丸長方形	462	182	－	N-11° -E	N- 0°	5°	－	－	－	－	－		焚口部の壁は突出、中央縦軸に溝
6	51	L	楕円形	<282>	158	－	N-13° -E	N-30° -E	6°	－	－	－	－	－		奥壁は攪乱を受ける
7	51	L	不整楕円形	310	132	－	N- 8° -E	N-20° -E	5°	－	－	－	－	－		底面に炭化物
8	51	M	楕円形	314	132	－	N-21° -W	N- 7° -W	4°	－	－	－	－	－		中央に浅い溝

※　＜＞は残存値

(2) 築窯製炭遺構（石窯）

カニホリ東遺跡

No.	図No.	調査区	平面形	炭化室規模（cm）			長軸方向		窯床傾斜（前傾）	煙道形態					出土遺物	特記事項
				全長	最大幅	焚口幅	真北	地形傾斜		個数	傾斜	平面長（cm）	斜距離（cm）	口径（cm）		
5	38	A	馬蹄形	183	90	46	N-22° -W	N-15° -W	1°	1	71°	28	58	18		前庭部に炭化物
8	39	N	馬蹄形	181	88	36	N-20° -W	N- 8° -W	3°	1	66°	68	124	36		前庭部に炭化物
9	37	A	楕円形	192	120	－	N-10° -E	N-20° -E	16°	－	－	－	－	－	被熱粘土塊	炭焼窯以外の窯？

第8表　カニホリ東遺跡土坑一覧表

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	40	A	56	48	13		
2	40	A	54	58	25		
3		A	<120>	104	15		
4	40	A	112	84	33		
5	40	A	272	122	91		
6		N	208	184	45		
7	40	A	88	74	33		
8		A	<36>	44	17		
9		A	<176>	176	87		
10	40	A	148	44	45		
11		A	118	64	32		
12	40	A	130	<76>	29		
13		A	<84>	78	57		
14	40	A	90	86	36		
15	40	A	112	106	69		
16		A	92	84	31		
17		A	92	96	48		
18	40	A	58	40	51		
19		A	68	52	36		
20	40	A	104	70	35		
21	40	A	104	76	39		
22		A	54	52	35		
23	40	A	80	80	37		
24		A	68	60	11		
25	40	A	130	<86>	32		
26	40	A	(140)	(132)	34		
27		A	64	50	17		
28		A	78	70	64		
29		A	156	<60>	42		
30		A	48	44	22		
31		A	56	50	28		
32	40	A	134	82	41		
33	40	A	200	<156>	88		
34		A	50	38	25		
35		A	56	56	32		
36		N	80	72	23		
37	40	A	56	<52>	49		
38	40	A	88	58	40		
39		A	54	44	36		
40	40	A	116	96	98		
41		A	44	44	16		
42		A	64	58	30		
43	40	A	76	62	47		
44		A	76	54	32		
45	40	A	92	<82>	71		
46	40	A	52	50	28		
47	40	A	148	112	42		
48	40	A	<180>	114	37		
49	40	A	92	80	46	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
50		A	86	66	31	石棒	
51	40	A	60	<58>	30		
52	41	A	52	52	39		
53		A	92	56	53		
54	41	A	94	82	33	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
55		A	<140>	<78>	59		
56		A	136	88	38		
57	41	A	82	38	18		
58		A	96	80	34		
59		A	56	44	21		
60		A	60	56	32		
61	41	A	336	132	90		
62		A	114	92	20		
63	41	A	138	102	36		
64	41	A	114	102	37		
65	41	A	232	134	22		
66	41	A	60	56	28		
67	41	A	54	52	27		
68	41	A	60	48	12		
69	41	A	180	132	30		
70	41	A	164	136	27		
71		A	64	62	26		
72	41	A	246	134	50		
73		A	62	62	21		
74	41	A	96	80	30		
75	41	A	306	86	27		
76	41	A	68	58	28		
77	41	A	94	72	36		
78	41	A	60	54	19		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
79	41	A	72	56	20		
80	41	A	186	<184>	63	須恵器・杯・蓋	7世紀末か?
81	41	A	96	88	44		
82		A	96	56	43		
83		A	68	56	24		
84		A	<70>	96	19		
85	41	A	78	52	24		
86		A	48	48	18		
87	41	A	136	136	61		
88	41	A	88	76	40		
89	41	A	56	38	32		
90	41	A	268	90	27		
91	42	A	92	60	28		
92		A	114	56	31		
93		A	62	48	26		
94		A	56	44	13		
95	42	A	92	82	30		
96		A	62	60	21		
97		A	106	90	42		
98	42	A	202	70	15		
99		A	56	40	17		
100	42	A	88	86	45		
101	42	A	142	140	36		
102	42	A	110	76	20		
103		A	82	54	18		
104	42	A	112	78	40		
105	42	A	134	<58>	55		
106		A	126	110	39		
107		A	78	40	44		
108		A	58	54	27		
109		A	68	66	29		
110	42	A	80	68	28		
111		A	58	40	17		
112		A	52	52	22		
113		A	80	68	36		
114	42	A	82	74	27		
115	42	A	84	64	39		
116	42	A	156	114	130		
117		A	44	40	10		
118	42	A	68	42	35		
119		A	240	170	93		
121	42	A	186	106	71		
122	42	A	180	100	69		
123	42	A	224	204	88		
124	42	C	60	48	21		
125	42	C	52	50	16		
126		C	54	48	15		
127	42	C	74	44	24		
128		C	50	46	12		
129	42	C	54	44	17		
130		C	64	64	14		
131	42	C	56	40	35		
132	42	C	140	96	50		
133	42	C	104	78	22		
134		N	108	104	45		
135	42	C	92	84	21		
136		C	68	60	13		
137	42	C	104	56	20		
138	42	C	84	40	24		
139	42	C	108	78	23		
140	42	C	92	82	40		
141		C	100	64	28		
142		C	60	34	9		
143	43	C	92	84	31		
144	43	C	72	50	30		
145		C	58	58	26		
146	43	C	108	88	64	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
147	43	C	128	110	49		
148		C	110	74	20		
149		C	128	<82>	30		
150		C	96	88	37		
151		C	176	<96>	69		
152	43	A	70	54	30		
153		A	<136>	<44>	67		
154	43	A	48	40	55		
155		N	90	<34>	36		
156	43	N	66	44	32		
157	43	N	60	54	28		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
158		N	68		12		
159		N	52	46	15		
160		A	56	36	28		
161	43	A	52	44	21		
162		N	66	<38>	26		
163		N	50	48	28		
164		N	54	38	17		
165	43	N	68	64	31		
166		N	54	40	28		
167		N	58	44	23		
168		N	58	36	30		
169	43	N	130	92	41		
170	43	N	<104>	102	35		
171		N	48	40	17		
172	43	N	68	64	26		
175		N	68	38	18		
176		N	54	<24>	28		
177		N	80	78	46		
178		N	56	54	27		
179		N	60	56	29		
180		A	64	48	15		
181	43	A	88	84	44		
182		N	50	36	22		
183	43	N	76	68	38		
184		N	50	48	29		
185	43	N	132	84	85		
186		N	56	36	9		
187		N	<186>	128	46		
188		N	124	96	26		
189		N	56	36	20		
190	43	N	196	154	63		
191		N	64	60	21		
192		N	80	76	25		
193		N	100	96	26		
194	43	A	156	116	42		
195	43	N	102	100	32		
196	43	N	76	70	33		
197	43	N	64	62	26		
198		N	84	60	35		
199	43	N	76	70	54		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
200	43	N	166	120	94	石鏃	
201	43	A	162	104	42		
203	43	N	88	68	46		
204	43	N	206	150	61		
205	43	N	74	62	32		
206	43	N	60	60	40		
207	43	N	76	36	40		
208	44	N	144	122	112		
209	44	N	104	<56>	79		
210		N	<88>	<84>	32		
211		N	64	60	?		
212	44	N	48	48	26		
213		N	66	46	23		
214	44	N	172	100	45		
215	44	N	188	64	48		
216		N	60	54	20		
217	44	N	72	60	27		
218	44	N	108	70	32		
219	44	N	64	54	24		
220	44	N	180	176	53	陸骨多量出土	火葬墓?
221	44	N	68	52	36		
222		N	48	48	18		
223	44	N	182	168	20		
224	44	N	92	66	13		
225	44	N	224	92	79	須恵器壺・甕	8世紀前半、木棺墓か?
226		N	136	74	35		
227	44	N	132	72	39		
228	44	N	60	36	20	須恵器杯	8世紀後半
229	44	N	92	88	48		
230	44	N	152	120	40		
231		N	<48>	46	26		
232	44	N	120	106	48		
233	44	N	68	48	39		
234	44	N	56	42	31		
235	44	N	<272>	168	48		
236		N	56	46	26		
237		A	70	<30>	18		
238		A	44	28	14		
239		A	<48>	<30>	21		
240		N	52	24	15		

※（ ）は推定値、＜ ＞は残存値

第9表　カニホリ西遺跡土坑一覧表

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	55	F	128	64	34		
2		F	<60>	50	8		
3		F	52	44	19		
4		F	70	24	17		
5		F	90	<44>	<19>		
6		F	80	48	21		
7	55	F	80	52	16		
8		F	<64>	50	15		
9		F	60	50	26		
10		F	60	40	10		
11	55	F	70	52	19		
12		F	92	64	18		
13		F	48	44	11		
14		F	72	32	10		
15		F	60	32	12		
16		F	44	32	17		
17		F	122	84	47		
18		F	<180>	144	46		
19		F	48	32	14		
20		F	76	48	18		
21		F	112	<48>	27		
22		F	<48>	44	16		
23	55	F	62	56	20		
24		F	(108)	82	41		
25		F	70	<28>	33		
26		F	88	<48>	22		
27	55	F	180	148	28		
28		F	44	28	17		
29		F	78	40	14		
30		F	50	34	16		
31	55	F	100	86	29		
32		F	56	32	23		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
33		F	44	32	6		
34	55	F	<56>	60	14		
35		F	54	40	26		
36		F	64	52	12		
37		F	<36>	36	22		
38		F	44	40	18		
39		F	36	28	16		
40		F	46	40	15		
41		F	52	36	12		
42		F	56	36	11		
43	55	F	90	62	25		
44		F	<36>	22	4		
45		F	62	44	16		
46	55	F	64	64	15		
47	55	F	204	110	<30>		
48		F	362	156	<54>		
49	55	F	210	156	<41>		
50		F	92	64	22		
51		F	126	56	64		
52		F	146	64	56		
53		F	<160>	90	34		
54		F	60	<32>	16		
55	55	F	70	52	30		
56		F	212	64	43		
57	55	G	104	102	23		
58	55	G	110	94	30		
59		G	88	58	13		
60		G	58	48	18		
61	55	G	116	118	30		
62	55	G	144	132	37		
63		G	112	96	12		
64		G	54	52	20		

No.	図No.	区	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
65	55	G	82	68	20		
66		G	140	116	33		
67	55	G	92	76	29		
68		G	140	<68>	34		
69	55	G	124	90	24		
70	55	G	92	84	28		
71		G	100	90	32		
72	55	G	216	124	49		
73	55	G	284	180	79		
74	55	H	240	168	40	縄紋深鉢	
75	56	H	188	184	48		
76		H	<172>	154	47		
77		H	86	54	28		
78		H	(274)	254	63		
79	56	H	278	186	20		
80		H	288	160	50		
81		H	82	56	25		
82		I	132	108	14		
83	55	I	118	90	30	縄紋深鉢、石鏃	縄紋前末～中初頃?
84		I	56	52	9		
85		I	72	68	27		J区にかかる
86	55	I	228	138	60		J区にかかる
87	55	I	96	72	35		
88		I	84	52	24		
89	55	I	80	68	33		
90		I	130	90	47		
91	56	I	118	88	20	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
92		I	84	80	16		
93		I	94	64	29		
94		I	76	72	24		
95	56	I	84	64	31	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
96		I	104	88	24		
97	56	I	<122>	156	24		
98	56	I	216	154	41		
99		I	<80>	132	29		
100		I	84	66	25		
101	56	I	252	144	56		
102	56	I	<84>	92	44		
103	56	I	118	92	29		
104	56	I	84	72	15	縄紋深鉢、石皿	縄紋前末～中初頃?
105	56	I	140	100	34	石皿	
106		I	72	56	34		
107	56	I	90	72	43		断面袋状
108		I	64	60	25		
109	56	I	108	92	21		
110	56	I	150	106	29	縄紋深鉢	
111		I	160	118	34		
112	56	I	154	116	37		
113	56	I	122	<90>	36	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
114	56	I	160	106	30		
115	56	I	84	74	50	縄紋深鉢、打製石斧	縄紋前末～中初頃?
116		I	54	44	19		
117	56	I	116	90	36		
118		I	62	56	16		
119		I	48	44			
120		I	50	36			
121		I	52	52	31		
122	56	I	92	76	35		
123	56	I	66	58	30	縄紋深鉢?	
124	56	I	82	76	36		
125		I	?	?	40		
126	56	I	218	(160)	44		
127	56	I	204	108	42		
128	57	I	64	64	38		
129	57	I	(216)	(180)	66	縄紋土器	縄紋早期?
130	57	I	84	70	26	縄紋深鉢、石核	断面袋状
131	57	I	<116>	146	39		
132	57	I	102	72	33	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
133		I	100	84	30		
134	57	I	142	100	27		
135	57	I	126	100	50		
136	57	I	56	<32>	24		
137	57	I	108	84	41		
138	57	I	<112>	128	41	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
139	57	I	148	124	57	縄紋土器	縄紋後期?
140	57	I	<156>	128	55	土製円盤	縄紋前末～中初頃?
141	57	I	218	(168)	41	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?

No.	図No.	区	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
142	57	I	<96>	116	43	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
143	57	I	80	78	37	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
144	57	I	90	84	17		
145		I	84	62	28		
146	57	I	164	106	27	縄紋深鉢	
147	57	I	118	72	38	縄紋深鉢	
148	57	I	142	130	38		
149		I	74	56	34		
150	57	I	148	108	48	縄紋深鉢	
151		I	62	52	9		
152	57	I	<158>	152	44		
153		I	98	90	22		
154	57	I	100	<40>	57	縄紋深鉢	
155	57	I	90	76	50		
156		I	130	114	50		
157		I	<84>	<56>	35		
158	57	I	128	112	42		
159		I	92	<32>	18		
160	57	I	74	72	33		
161	57	I	64	52	33		
162		I	62	52	15		
163		I	80	76	33		
164	57	I	<94>	92	30		
165	58	I	108	92	26		
166	58	I	156	120	42	打製石斧	
167		I	<58>	<120>	26		
168		I	64	58	23		
169	58	I	88	64	29		
170		I	120	<60>	29		
171	58	I	<168>	166	40	縄紋深鉢	
172	58	I	68	58			
173		I	<64>	70	29		
174	58	I	<84>	54	47		
175	58	I	<114>	118	47	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
176	58	J	196	120	40	縄紋深鉢、石鏃、打製石斧	縄紋前末～中初頃?
177	58	J	70	52	29	縄紋土器、土製耳飾	
178		I	128	98	30		
179	58	I	84	<68>	16		
180		I	132	114	25		
181	58	I	132	122	33		
182	58	I	94	82	38		
183		I	94	76	8		
184	58	I	126	98	30		
185	58	I	80	56	39		
186		I	68	60	19		
187	58	I	<72>	88	25		
188	58	I	54	40	35	縄紋深鉢	縄紋中期後半?
189	58	I	64	48	24		
190		I	104	90	22		
191	58	I	108	106	37		
192		I	92	<48>	27		
193		I	58	58	17		
194	58	I	58	56	15		
195	58	J	94	52	30	縄紋深鉢	縄紋前末～中初頃?
196	58	I	108	86	34		
197	58	I	<106>	86	12		
198	58	I	<62>	56	45		
199	58	I	68	60	30		
200	58	I	<32>	48	26		
201		I	104	82	32		
202	58	I	86	86	26	縄紋深鉢	
203	58	I	88	80	46		
204	58	I	176	108	67	縄紋深鉢	
205	58	I	108	100	26	縄紋深鉢、石皿、打製石斧	縄紋前末～中初頃?
206	58	I	<92>	74	32		
207	59	I	88	60	24		
208	59	I	<112>	126	72		
209		I	<60>	60	41		
210		I	48	42	33		
211		I	<94>	<64>	34		
212	59	I	294	240	99	縄紋	
213	59	J	52	48	11		
214	59	J	58	50	31		
215	59	J	236	126	32		
216		J	214	128	30		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
217	59	J	152	96	73	縄紋深鉢、石鏃、磨石類	
218	59	J	90	78	31	石核	
219	59	J	<82>	108	49		
220	59	J	90	78	20		
221	59	J	84	72	27		
222	59	J	50	46	11		
223	59	J	60	<28>	10		
224		J	76	72	8	縄紋深鉢	縄紋中期後半?
225		J	<66>	68	10		
226	59	J	<82>	78	26		
227		J	74	60	16		
228		J	66	62	17		
229		J	60	48	29		
230	59	J	72	70	42	石錐	
231	59	J	72	64	42		
232	59	J	164	112	37		
233	59	J	72	64	22		
234	59	J	64	52	27		
235		J	66	60	11		
236		J	114	100	40		
237		J	52	48	18		
238		J	92	92	29		
239		J	128	110	33		
240		J	<38>	90	15		
241	59	J	64	56	28		
242	59	J	<122>	110	61		
243	59	J	94	86	19		
244		J	88	<44>	46		
245		J	58	54	22		
246		J	184	106	47	石核	J区にかかる
247	59	J	90	76	24		
248	59	J	<108>	84	43		
249	59	J	132	<42>	56		
250	59	I	110	76	35		
252		K	72	70	26		
253	59	K	74	72	27		
254		K	54	54	22		
255		K	<54>	60	13		
256		K	52	46	30		
257	59	K	68	64	31		
258		K	134	128	33		
259		K	54	44	24		
260	59	K	146	<54>	32		
261	59	K	84	76	29		
262		K	70	56	17		
263	60	K	100	96	35		
264		K	124	68	39		
265	60	K	180	134	27		
266		K	66	56	26		
267	60	K	88	64	58		
268	60	K	64	46	41		
269		K	76	56	14		
270	60	K	98	70	49		
271		K	84	<28>	31		
272		K	32	<24>	20		
273	60	K	334	168	30	敲石類、磨製石斧	
274		K	<52>	58	38		
275		K	106	56	25		
276	60	K	84	46	29		
277	61	K	<64>	72	19		
278	60	K	72	60	38	縄紋深鉢	
279	60	K	216	128	41	縄紋土器	縄紋前期前半?
280		K	172	100	45		
281		K	56	40	16		
282	60	K	92	82	30		
283	60	K	148	86	56		
284		K	92	50	23		
285		K	88	78	34		
286	60	K	228	152	60		
287		K	82	48	20		
288	60	K	124	80	60	縄紋深鉢	
289	60	K	132	86	52	石核	
290	60	K	100	80	66	縄紋深鉢	廃人品か?
291		K	56	56	40		
292		K	<52>	70	34		
293		K	120	44	23		
294	60	K	376	146	54		

No.	図No.	区	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
295	60	K	72	48	55		
296	60	K	100	68	23		
297	60	K	80	76	41	縄紋深鉢	縄紋前来～中初頃?
298	60	K	64	60	68		
299	60	K	88	80	35		
300	60	K	116	80	53		
301	60	L	204	52	47		
302	60	L	80	60	56		
303	60	L	<58>	54	47		
304	60	L	140	68	59		
305	60	L	<44>	<38>	58		
306	60	L	<88>	<28>	44		
307	61	L	94	50	60		
308	61	L	62	50	23		
309	61	L	104	70	77		
310	61	L	104	60	51		
311	61	L	114	66	34		
312	61	L	60	54	33		
313		L	150	138	60		
314		L	<92>	<28>	20		
315		L	66	64	29	打製石斧	
316		L	62	60	20		
317		L	98	64	79		
318		L	46	46	23		
319		L	68	64	18		
320		L	132	60	15		
321	61	L	76	74	41		
322		L	50	50	22		
323		L	64	48	21		
324	61	L	60	60	19		
325	61	L	182	106	39		
326	61	L	112	62	48		
327		L	58	52	13		
328	61	L	112	82	30		
329	61	L	<122>	114	29		
330	61	L	102	84	38		
331		L	54	44	15		
332	61	L	98	84	39		
333	61	L	<60>	104	34		
334	61	L	<112>	110	42		
335		L	110	52	20		
336	61	L	280	72	43		
337	61	M	58	56	37		
338		M	60	50	23		
339	61	M	76	68	35		
340	61	M	76	64	32		
341	61	M	68	68	33	石錐	
342		M	60	60	17		
343		M	66	62	11		
344		M	64	56	12		
345	61	K	136	78	52	縄紋深鉢、石核、石錐	
346		K	<76>	70	19		
347		K	<54>	102	28		
348		F	56	48	21		
349		F	42	36	8		
350		F	86	48	16		
351		F	<126>	64	25		
352		G	68	<24>	29		
353		H	<90>	88	29		
354		I	84	82	34		
355	61	I	62	54	31		
356	61	I	144	120	41	縄紋深鉢、石核	
357		I	68	64	36		
358		I	96	74	15		
359		I	80	<42>	23		
360		I	<108>	<80>	31		
361		I	56	44	9		
362	61	J	260	110	59	縄紋深鉢	縄紋晩期?
363		J	60	50	24		
364	61	K	144	72	62		
365	61	K	134	88	34		
366		K	<140>	<80>	29		
367	61	K	88	74	53		
368	61	K	<148>	132	38	磨石類	
369		M	76	<48>			
370	61	I	74	66	30		

※（ ）は推定値、＜ ＞は残存値

Ⅶ章　出土遺物

1節　縄紋時代の遺物

1　土器

今回の調査ではカニホリ東遺跡および同西遺跡から竪穴住居址、土坑出土品を中心に縄紋土器が多量に出土した。それらについて整理作業を進めた結果、本報告書作成に際してカニホリ東遺跡97点、同西遺跡261点の資料を図化・提示することができた。そのうち、88％を占める316点が縄紋前期末葉から中期初頭に帰属するものであり、今回検出された集落址に伴うものである。次いで多いのが中期後半の土器群で、これはカニホリ西遺跡の当該期住居址群に帰属する。

出土土器群の中核をなす縄紋時代前期末葉～中期初頭、すなわち関東の諸磯c式期から五領ヶ台式に並行する中部高地の土器編年については井戸尻編年、諏訪湖編年他いくつもの型式が設定され、その名称や内容を巡ってはいまだ見解の相違があり整理途上にあるといえる。従って本報告の記述にあたっては土器群の詳細な検討はせず、主要な遺構出土品について紋様要素や構成、器形の面から内容を本文および観察表で提示することに主眼を置いた。

(1)　縄紋早期の土器

ア　押型紋土器（186・206）

カニホリ西遺跡から2点出土するがいずれも小片で、全体の紋様構成は掴めない。9竪の186は山形紋を縦位施紋する。原体幅は不明だが5条以上を数える。129土の206は楕円紋を縦位施紋する。

イ　条痕紋系土器（251）

カニホリ西遺跡1土集出土の251は頸部に突帯を1条巡らし、絡条体によると思われる押圧を加える。器壁は内外面ともに横位に絡条体条痕を施すが、外面は摩滅が著しい。

(2)　縄紋前期前半の土器

ア　櫛歯状工具による刺突列点紋を施紋する土器（210・242・309）

カニホリ西遺跡の139土・279土・2土集から各1点出土している。いずれも櫛歯状工具による刺突列点紋を横方向に施紋するもので、胎土・焼成ともに良好である。210は同じ工具による単沈線紋と刺突列点紋を交互に施す。309は刺突列点紋のみ多段に施す。242は連弧状を呈している。

イ　胎土に繊維を含み縄紋を施す土器（310～314・317）

カニホリ西遺跡の2土集から5点が出土している。いずれも胎土に繊維を少量含み、同一個体の可能性が高い。表面に単節縄紋を横位ないし斜位施紋し、結節が伴うものもある。

(3)　縄紋前期末～中期初頭の土器

住居址・土坑出土土器群から主要なものを取り上げる。内容的にはカニホリ東遺跡では前半段階（前期末葉）に位置付くものが多く、反対にカニホリ西遺跡では後半段階（中期初頭）の比率が高い。

ア　カニホリ東遺跡出土土器群

2住出土土器群（1・13～19）

深鉢片が出土している。13～15は外反する口縁部破片で、13は大波状となる。施紋は器面を平行沈線紋で密に埋めるもののみである。その原体は、1を除き幅の狭い半截竹管工具で密に深く刻まれている。紋様構成は口縁部紋様帯として数条の沈線を横走させ（13～15）、口縁部から胴上部では横位に弧状（13）またはレンズ状（17・18）に集合させる。そのほか胴部片では斜格子状（19）や横位綾杉状（16）の構図がみられる。

3住出土土器群（2・3・20～29）

主たる紋様要素として平行沈線紋を多用する一群と、縄紋を多用する一群がある。いずれも小片のため全形の分かるものはないが、口縁形態は内湾するもの（20）と内屈するであろうもの（21・27）がある。沈線紋は弧状（20）、斜線（23）、綾杉状（22）、縦位等間隔平行沈線（27）等がみられ、口頸部や胴上部では横位紋様帯を構成する。縄紋を多用するものでは24～26等単純に外反・外開する口縁部形態がみられる。地紋の縄紋は斜位施紋が大半だが、20は結節縄紋を縦位等間隔の帯状に施す。施紋は口縁部に波状隆線を1、2段巡らせる。20は胴部に平行沈線紋による区画紋を配する。

4住出土土器群（4・30～33）

3住と同様の構成である。沈線紋主体のもののうち31・32は内屈口縁となるもので、下段に縦位等間隔平行沈線紋を配する。胴部片の30は斜格子状紋と横線紋による横位紋様帯である。縄紋施紋の4は単純に開く深鉢で斜位に縄紋を充填する。

6住出土土器群（5・6・34～38）

平行沈線紋を主体とするもの（6・34・35・38）、条線紋（37）を施すもの、篦切半隆線紋を施すもの（5）等がある。これらに加えて外来系(36)が1点存在する。6は大波状口縁の深鉢で、波頂部に一対の突起を付す。口縁端部に沈線紋を数条巡らせ、以下は弧状に集合させる。34も同様である。胴部片の35は渦巻状、38は菱形の構図を縦位展開させる。36は非常に薄い器壁で、縄紋地に弧状の結節浮線紋を多段に配する。胎土や色調も他とは明らかに異なり、当該期の土器群に伴う関西系の搬入品と考えられる。

10住出土土器群（7・40～49）

平行沈線紋を主な紋様要素とする一群に加え、縄紋施紋のものが少量伴う。口縁部形態は外開・外反するもの（7・40・47）と内屈するもの（41・45）がある。紋様構成は、40が平行沈線紋を横位弧状に集合させる。45は口唇に連続爪形紋、口縁部上段紋様帯に横線紋を充填する。41は口縁部下段紋様帯に縦線紋を集合させる。胴部片の42・44には綾杉状の横位平行沈線紋帯がみられる。縄紋施紋の47は肥厚する口縁部に三角印刻紋を施す。7は全体に雑な仕上げで、口縁部に山形波状の沈線紋を粗雑に施紋している。

11住出土土器群（8・50～52）

内屈口縁の8は口唇および屈折部に爪形隆線紋を巡らせ、上段紋様帯に斜格子状紋、下段に縦位等間隔平行沈線紋を配する。縄紋施紋の50は肥厚口縁部に三角印刻紋を施す。51は横位羽状縄紋の上に凹線紋による構図を描く。関西系の52は薄手で結節浮線紋を重畳状に配する。

12住出土土器群（9～12・53～66）

出土量が比較的多い。紋様要素として平行沈線紋（10・11・53・54・56・57・64）、凹線紋（9）、ボタン状貼付紋（55）、条線紋（65）、結節浮線紋（59・60・62・66）、篦切浮線紋（61）、縄紋（63）があり、バラエティーに富む。複数の紋様要素が組み合わさる場合も多い。沈線紋を多用する一群は波状口縁の深鉢が多く、口縁部の紋様帯は集合沈線による弧線、レンズ状、菱形等の構図を横位に展開する。胴部片の10は横位紋様帯を逆V字状紋と縦線紋で埋める。11は強く張り出す底部で、沈線を縦位の相対する弧状に配する。55は相対する弧線を横位に展開するもので、2個1対のボタン状貼付紋を付す。凹線紋を施す9は縄紋を地紋とし、外開する口縁部に渦巻紋を横位に展開させる。条線紋を多用する65は胴部に数段の横位紋様帯を設

け、条線と三角印刻紋を組み合わせ渦巻や菱形の構図を描く。62・66は頸部がくびれる深鉢で、上半と下半で横位に紋様帯を分ける。上段は結節浮線紋による渦巻紋や同心円紋、下半は66が縦位綾杉状の沈線、62は羽状縄紋で埋める。これらの口縁部形態は59・60のような、大きく外反する口縁部外面に三角印刻紋帯を設け、口唇にも浮線紋等の施紋を行う。61は15住の79と同一個体となる縄紋地紋の大波状口縁深鉢で、口縁直下および頸部に篦切浮線紋を３条巡らせる。羽状縄紋を施す63は口縁直下に波状隆線紋を巡らせる。

15住出土土器群（67 ～ 86）

主たる紋様要素として平行沈線紋（67 ～ 71・74・75・78・82）、ボタン状貼付紋（72・73）、篦切沈線紋（76・83）、篦切浮線紋（79）、結節浮線紋（81）、条線紋（77）、縄紋（80・86）がある。器形は深鉢のみで、大波状口縁（70・79）、外反・外開口縁（68・80・86）、内湾口縁（67）、内屈口縁（69・71）がみられる。平行沈線紋は横位に菱形（67）や波状（70）を描くもの、頸部の縦位等間隔施紋（68）、斜格子状紋による横位紋様帯を配するもの（74・78）等がある。篦切浮線紋の79は菱形の横位構図、条線紋（77）は半月状の印刻紋を伴った横位構図を描く。81は結節浮線紋で密な同心円紋を描く。縄紋施紋は波状隆線を伴い目の粗いもの（80）や細密な羽状縄紋を施すもの（85）がある。

イ　カニホリ西遺跡出土土器群

６住出土土器群（104・151 ～ 166）

平行沈線紋を多用する一群と縄紋を主体とする一群がある。胴部のあり方から前者は純粋に沈線紋のみで構成するものは少なく、地紋に縄紋を併用している。内屈口縁の深鉢が主体と思われ、口縁部は上下2段の横位紋様帯を置く。上段の紋様帯は斜格子状紋、斜線紋、瓦状押引紋等を充填し、爪形隆線紋等で区画する。下段は縄紋地紋で縦位等間隔平行沈線を充填するものが特徴的にみられる。胴部は縦位の結節縄紋の上に、上半にのみ横帯する紋様帯を巡らせるものが目立つ。158は頸部の爪形隆線紋以下山形波状紋帯、Y字状紋を配する。157は横線紋と縦位等間隔平行沈線紋を巡らせる。160は大きく外開する口縁部の内面に結節沈線紋による紋様帯を設け、浅鉢と考えられる。外面は横線紋と斜線紋を横帯させる。縄紋を主体とする一群は良好な資料に欠け、紋様構成のわかるものは少ない。162は口縁部と頸部に細線紋による紋様帯を巡らせている。161は内湾口縁で口縁部直下に楔状印刻紋を伴った単沈線紋を横走させる。胴部の地紋は結節縄紋を縦位帯状に施すが、帯と帯の間隔は狭い。

12住出土土器群（108・173 ～ 181）

平行沈線紋を多用する深鉢の良好な資料を１点得ている。108は内湾する口縁部、短くくびれる頸部、直線的に収束する胴部をなす。口縁端部は内外に肥厚し、外面は無紋帯とする。口縁部外面は4単位の橋状突起を貼付し、区切られた４単位の区画に斜線紋を充填している。幅の狭い頸部には綾杉状紋を横帯させ、口縁部とは交互の位置で橋状突起を4単位付す。胴部は斜線紋を充填した雲形状の区画紋を縦位4単位に配している。これ以外の資料は小破片だが、沈線紋主体の土器群（174 ～ 176・178）、浮線紋を施すもの（173・179）、縄紋施紋（181）のものがみられる。

91土出土土器群（110・199）

外面を肥厚させた単純な立ち上がりの深鉢がある（110）。口縁端部には推定４単位に３条１単位の浮線紋を付している。外面は全面に縄紋を横位施紋する。

95土出土土器群（111・112・198）

縄紋を地紋とする深鉢がある。111は直開する深鉢の胴部で、下向きの連続弧状結節隆線紋と押圧隆線紋を交互多段に重ねる。112は深鉢底部である。

113土出土土器群（114・203）

口縁部が短く直立し、胴上部が半球状に膨らむ小形の深鉢が出土している（114）。頸部にV字状の貼付紋と交互の楔状印刻紋を巡らせる。203はキャリパー状口縁の深鉢で、口唇に刻目、単沈線による縦線紋を充填した口縁部紋様帯を有する。

115土出土土器群（115・204・205）

縄紋地紋の深鉢が出土している。115・205は内湾口縁で、1点はほぼ完形である。115は口縁端部に単沈線による玉抱三叉紋を巡らし、4単位に山形の突起と円形貼付紋を付す。口縁部紋様帯は縦位等間隔平行沈線紋で、数本おきにR字状の構図を付加する。胴部は上位に2段の平行沈線による横位紋様帯を巡らせ、2段目に三角形と楕円の区画紋を交互に充填する。地紋の縄紋は口縁部が横位、胴部が縦位帯状に施される。204は外反する波状口縁の深鉢片である。口唇に刻目を施し、口縁端部に楔状印刻紋を付した単沈線と縄紋による紋様帯を置く。口縁部紋様帯は垂下隆線と頸部隆線で三角形に区画されるが無紋である。

132土出土土器群（208・209）

薄手で縄紋施紋のみの深鉢片が2点ある。208は外反する形態、209は胴部が膨れる器形で、ともに縄紋は横位施紋である。

138土出土土器群（207）

内湾口縁の深鉢片が1点ある。207は口縁端部を内外に肥厚させ、端部外面は無紋とする。口縁部外面は縄紋の上に横線と山形波状の結節隆線紋を巡らせる。

140土出土土器群（118～121・211～217）

浮線紋・結節隆線紋を主紋様とする個体を中心に、平行沈線紋を多用するものがみられる。前者は頸部から強く外開するキャリパー状口縁部をなす深鉢が主体で、いずれも縄紋を地紋としている。紋様構成は口縁部から胴上部まで数条の横走する結節隆線紋で区切られた紋様帯を多段に重ねる。各紋様帯の紋様構成についてみると、もっとも残存の良好な118は細いソーメン状の円形浮線紋を充填する紋様帯を主体に、胴上部には横位綾杉状の浮線紋帯を設けている。ほかに211は円形の結節隆線紋、213・215は山形波状の結節隆線紋ないし結節浮線紋で紋様帯を構成している。これらの胴部～底部として120・121・214・217があり、いずれも口縁部と同様、結節隆線紋や浮線紋で紋様を描く。その構成は121のように横位構成のものと、120・214・217のような縦位構成のものがある。なお、121は底部外面に6単位の押圧を施す。沈線紋主体のものは119・213がある。213は波状口縁の深鉢で、端部に広く面を作り出す。紋様構成はいずれも平行沈線を集合させ、端部および口縁部上位に斜線、口縁部下位に山形波状紋を充填する。119は菱形等縦位の平行沈線区画紋を配する。

141土出土土器群（122）

円筒形の深鉢が1点出土している。幅広の竹管による半隆線紋、連続爪形紋を主紋様要素とし、口縁部と胴上部に連続爪形紋帯、頸部に爪形隆線紋を巡らせる。胴部は上端に楽形の貼付紋を付す爪形隆線垂下紋による縦位4分割構成とし、半隆線紋でさらに分割を行う。隆線垂下紋に沿って蛸鈴状の構図を描く点も特徴的である。

142土出土土器群（123・219）

全形の判明する個体が1点ある。123は筒形で底部が張り出し気味の下半部に、大きく開く上半部が取り付く深鉢で、口縁部は内湾させる。内外に肥厚する端部は無紋とし、以下に地紋の縄紋を充填する。紋様帯は口縁部紋様帯と胴部紋様帯から構成される。口縁部は上段に横位結節隆線、下段に等間隔の縦位平行沈線紋を配する。頸部には横位結節隆線と4単位の円形貼付紋を置き、貼付紋から結節隆線紋を垂下させて胴部を4分割する。

143土出土土器群（124・125・218）

3点が提示される。125は深鉢の胴下半部で、結節羽状縄紋を縦位等間隔の帯状に施紋する。124は縄紋地に浮線紋を縦位等間隔に付す。218は関西系の土器で、肥厚する口縁部内面に内傾する凹面を設け、斜縄紋を充填する。外面は縄紋を地紋とした口縁部直下に断面三角形の低い突帯を1条巡らせ、Σ状を呈する連続爪形紋を施す。縄紋原体や胎土、黒ずんだ色調が特徴的で、搬入されたものと考えられる。

175土出土土器群（126・227・228）

126は縄紋地に横走隆線紋と連続弧状隆線紋による横位紋様帯を多段に配する。227は大形の深鉢下半部だが器壁は薄く、縄紋を横位に全面に施す。

176土出土土器群（229～231）

内湾口縁の深鉢片が出土している（229・230）。ともに内外に肥厚する口縁端部は無紋とし、口縁部以下地紋に縄紋を施す。口縁部紋様帯は横位構成で、結節沈線紋や円形浮線紋(229)、山形波状の結節隆線紋(230)がみられる。229は胴部も多段に横位紋様帯を置き、各帯には山形波状の結節沈線紋、斜走平行沈線紋、円形浮線紋が充填される。

195土出土土器群（127・232）

外開する波状口縁深鉢が1点ある（127）。頸部に隆線紋を1条巡らし紋様帯を上下に分割する。口縁部紋様帯は端部外面の縄紋帯以下は無紋帯とし、波頂部から垂下する隆線紋で4分割される。隆線に沿って施される楔状印刻紋を付す単沈線が特徴的である。胴上部は単沈線による弧線紋等の横位紋様帯を置き、地紋に結節縄紋を帯状施紋する。

205土出土土器群（128）

単純に外開する深鉢がみられる。口縁端部外面の縄紋帯と頸部の隆線および貼付突起を除き、口縁部紋様帯、胴部紋様帯のいずれも無紋である。胴部は縦位帯状施紋の結節縄紋を地紋としている。

290土出土土器群（129・240）

縄紋施紋の深鉢が出土している。129は口縁直下に篦先による刻みを加えた波状隆線紋を2段巡らせている。

297土出土土器群（130・244）

風化により磨耗の著しい130は底部が張り出し気味で筒形の胴下部が取り付く深鉢と考えられる。強く内湾する口縁部、半球状の胴上部が特徴的な深鉢である。紋様帯は口縁部、頸部、胴上部に分かれる。口縁部は交互三角印刻紋と多条の結節沈線紋による山形波状の構図を上下2段に配し、頸部は太い押圧隆線と4単位の橋状把手で上下を画する。胴下部は不整な三角印刻紋を全面に不規則に充填する。

1土集出土土器群（131～138・251～308）

前期末～中期初頭の土器群が主体を占める。252は波状口縁の深鉢で2個1対のボタン状貼付紋、平行沈線紋による短冊状の施紋を特徴とする。254もボタン状貼付紋がみられる。253・255～258は平行沈線紋を多用し、菱形、綾杉、弧線等の構図を描く。259～263は外反する口縁部に篦切沈線紋による同心円紋を描く。同様に264・266は結節浮線紋、265は篦切浮線紋で同心円紋を描く。266・300は結節沈線紋で施紋される。268は三角印刻紋と多条の結節沈線紋を組み合わせ構図を描く。269～273・276はいずれも地紋に縄紋を施紋し、結節浮線紋や結節隆線紋で構図を描く。273～275・278はキャリパー状の口縁部形態で、縄紋地にソーメン状の円形浮線紋を充填した横位紋様帯を配するものである。275は口唇にもソーメン状浮線紋を付し、278には綾杉状の浮線紋がみられる。284は縦位等間隔に浮線紋を付す。256は口縁部に三角印刻紋が施される。280・281・283・285～287は平行沈線紋が多用されるもので、280・281は内屈口縁の深鉢である。隆線紋や平行沈線紋による区画に斜線紋、格子状紋等を充填する。287は胴上部に巡らされるV字状紋である。131・132は楔状印刻紋や連続刺突紋が伴う単沈線紋を主紋様要素とし、内湾気味に外開する口縁部、大

きく半球状に膨らむ胴上部を特徴とする深鉢である。132は地紋の縄紋を口縁部～胴上部で横位、胴下半部は縦位帯状に施紋する。131は頸部に刻目隆線を巡らせ、横状突起を４単位付す。さらに胴上部を刻目隆線紋、胴下部を渦巻紋が伴う単沈線で縦位分割する。132は胴上部に玉抱三叉紋による横位紋様帯を描く。269・136も同種の器形である。133・291～295・297・299・302はキャリパー状口縁の深鉢で、297は波状口縁である。いずれも口縁直下に幅の狭い紋様帯を置き、それ以下は無紋とするか縦位等間隔平行沈線を施す。紋様帯の区画は平行沈線か棒状印刻紋を伴う単沈線紋によっている。円形の貼付紋を配するものもある。133は胴部形態の判明するもので、波状口縁になると考えられる。頸部に刻目隆線を巡らし胴上部に単沈線紋による玉抱三叉紋を配した横位紋様帯が巡らされる。胴下部は縦位帯状の結節縄紋である。

(4)　縄紋中期後半の土器（98～100・102・105・107・138・142・143・149・150・167・168・172・192・193・233・238・257・302～308・348・349・352・356）

カニホリ西遺跡の４・５・７・９住、９竪、188・224土、１土集他から出土しているが、破片が主体でまとまった一括資料には恵まれない。住居址・竪穴状遺構についてはその帰属時期を示していると思われる。いずれも時期的には唐草紋系2段階に相当する内容を備えている。

器形は107の１点のみ浅鉢の他はすべて深鉢である。唯一器形の窺える102は頸部がくびれ、口縁部が緩く外反、胴中位が張る形態である。98・99・105・193・306等もこれと同様な頸部のくびれる器形と考えられる。306は口縁部が内湾する。107の浅鉢は口縁部をくの字状に内屈させ、押引紋による紋様帯を設ける。

深鉢の施紋は隆線、単沈線、刺突紋で構成される。頸部は隆線や粘土紐貼付による波状紋等で紋様帯を巡らすもの（172等）と、紋様帯を持たないもの（102・138等）がみられる。胴部は隆線懸垂紋で４分割するものを主体に、剣先紋等を伴う大柄の渦巻紋が存在する。地紋は多くが綾杉状あるいは斜位に単沈線を充填させ、波状沈線懸垂紋等が伴う。102は縄紋を地紋とする。

(5)　縄紋晩期初頭の土器（248）

カニホリ西遺跡の362土から出土した1点のみである。大きく外開する波状口縁深鉢の波頂部で、刻目突帯で画された幅の狭い口縁部紋様帯には瘤状の貼付突起、篦状工具による沈線で楕円区画が施される。頸部以下は無紋で、口縁部の内面は肥厚させている。

2　石器・石製品（第77～82図、第12・13表）

縄紋時代に属すると考えられる石器及び石製品はカニホリ東遺跡で510点、西遺跡で2,297点、計2,807点が出土した。石材は黒曜石が2,467点と全体の88%を占め、以下ホルンフェルスが100点弱、チャート・砂岩・泥岩が50点前後と続く。時期は石匙や玦状耳飾など縄紋時代前期に特徴的な石器が目立つ一方、早期の特殊磨石や後・晩期に特徴的な有茎石鏃も見られる。以下、観察表では記載できない部分について各器種毎に述べる。

(1)　石核（1～12）

複数のネガ面で構成される石器。石核に189点が該当し、12点を図示した。石材は大半が黒曜石製である。剥離面と打面の関係から3つに大別した。

1類　潰れを伴った線状の打面を持つ。剥離作業は上下端ないし求心状に打点を移動させながら行う。残核は板状ないし紡錘形状となる。いわゆる楔形石器を指す。（便宜上石核として扱う）

2類　剥離作業や残核形状は1類と似るが、楔形石器の特徴である潰れを伴った線状の打面を持たないタイプ。

3類　90度の打面転移を行い、剥離作業面と打面が入れ替わるタイプ。残核は概ねサイコロ形状となる。12は大型の原石に直接剥片剥離を行うもので他の資料には見られない。

(2)　石鏃（13～24）

減厚を目的とした二次加工により平面三角形・断面レンズ状を志向している石器。全体で54点が出土し12点を図示した。石材は黒曜石製が47点、チャート製が7点である。平面形を基に抽出を行い、一部を除き凹基無茎である。23は局部磨製石鏃である。研磨痕跡が剥離痕跡内に及ぶため、二次加工後に研磨を行っている。研磨の方向は表裏面共に長軸方向である。24はチャート製の有茎石鏃で、縄紋時代後・晩期に属するものと考えられる。

(3)　石錐（25～30）

二次加工により先鋭な機能部を作出した資料。全体で35点が出土し6点を図示した。石材は凝灰岩製の一点を除き黒曜石製である。主に2つのタイプが見られた。

素材の一部に二次加工を施すもの　25・28・29

二次加工が素材全体に及ぶもの　26・27・30

大半は前者に属し、二次加工は限定的なものが多い。26の様につまみ部を持たないものは3点確認された。25は機能部に磨耗痕跡が見られ、側面に長軸と直行方向の線状痕が確認される。

(4)　石匙（31～35）

二次加工により茎部を作出し、一端に刃部を持つ資料。全体で6点が該当し、1点を除き図示した。石材は黒曜石製2点・チャート製2点・珪質凝灰岩製1点・流紋岩製1点である。刃部と茎部の関係から2つに大別し、前者を縦横型、後者を縦型とした。

刃部と茎部が概ね平行するもの　31・32

刃部と茎部が概ね直行するもの　33～35

31・33～35は剥片を素材としバルブの痕跡を持つ。刃部は背面からの二次加工により作出される。32のみ表裏両面から加工されている。31は無斑晶質の流紋岩を素材とし、この石材はいわゆる下呂石と呼ばれている。

(5) 刃器類（36～45・52～55）

剥片や分割礫の一部に二次加工を施した石器。全体で237点が該当し、14点を図示した。これらの中には必ずしも完成形ではなく、製作途中の未成品などが含まれていることも予測される。石材は黒曜石が169点、チャート、ホルンフェルス、泥岩が各20点弱で後続する。

36～38は平面形が三角形で断面凸レンズ状を呈することから石鏃未成品の可能性がある。39～45はいわゆるスクレーパー類である。黒曜石やチャート・珪質凝灰岩などを使用し比較的小型なものが含まれる。40のみ内湾する刃部を持つが、その他は外湾する刃部を持つ。44の様に入念に二次加工が施されるケースは稀で、大半は41～43の様に限定的である。52～55もスクレーパー類であるが、こちらは砂岩やホルンフェルスを素材とし大型で重量のあるものが含まれる。52～54は薄手の素材の縁辺に二次加工を施したもので、平面形は円形・楕円形・長方形など様々だが、刃部形状に大きな違いは見られない。53は打製石斧に似るが、長軸端部に剥離痕跡を持たないことから横刃型刃器と判断した。55は厚手の素材に二次加工を施したもので、礫器に該当する。

(6) 打製石斧（46～51）

二次加工により概ね平行する側縁を持ち、長軸端部に剥離痕跡を持つ石器。全体で67点が出土し、6点を図示した。石材はホルンフェルス製27点、泥質片岩製21点、砂岩製17点である。平面形はいずれも短冊形ないし撥形を呈する。46・47・49・50の刃部、46・49の胴部に磨耗痕跡が観察された。47は胴部に敲打痕跡を持つ。基本的に調整は表裏両面に及ぶが、51のみ礫面側からの片面調整である。

(7) 磨製石斧（56～58）

刃部を研磨により作出した資料。全体で4点が出土し3点を図示した。石材は蛇紋岩製3点、砂質片岩製1点である。60は上端にも研磨痕跡が観察されることから破損後に再度研磨した可能性がある。61は打製石斧と磨製石斧の中間的な様相を呈しており、機能部を中心に研磨調整が施されている。

(8) 磨石類（59～62）

円礫を素材とし磨痕・敲打痕・凹痕などの痕跡を持つ資料。これらの痕跡は複合することが多く総称して磨石類とした。全体で51点が出土し、4点を図示した。石材は砂岩製26点と安山岩製15点で大勢を占める。61は長方体形状を呈する。使用ないし整形により変形し原形を留めていない。石質が荒く磨痕は確認できなかった。62は大型礫を素材とし側面稜上に剥離を伴う磨痕を持つ特殊磨石である。

石皿類に関しては破片数点が出土しただけで、図示に耐えうるような資料は得られなかった。

(9) 石製品（63～65）

縄紋時代に属する石製品は3点が出土した。64は滑石製の玦状耳飾である。穿孔部は3段階に分けて作業が行われ、擦り切り部は明瞭な線状痕を持ち表裏両面から作業を行っている。65は鉄石英製の異形石器である。

3　土製品（第76図）

カニホリ西遺跡出土の11点を提示した。ミニチュア土器、土製耳飾、土偶、土製円盤がある。

(1)　ミニチュア土器（1～5）

5住出土の1・2はいずれも破片である。2は胴部で無紋、1は底部で外面に沈線紋が見える。3は6住出土の底部片である。4・5は1土集出土でともに中期初頭の深鉢のミニチュアである。4はキャリパー状の口縁部で、全周の約3分の1を残す。端部外面には横走単沈線と楔状印刻紋を巡らせ、口縁部外面にハート形の顔面装飾を付す。顔面は縄紋を地紋とし三叉紋で両眼を表す。5は筒状の胴部で、4の下部とも考えたが接合しない。わずかに縄紋が施紋される。

(2)　土製耳飾（6～8）

3点が出土した。1住出土の6は直径3.7cm、外縁の厚さ1.4cmで、表裏両に凹面を作り出す。内孔から外縁に焼成前の切り欠きがあり、玦状耳飾の形態をなすようである。7・8は177土出土の環状耳飾で7は直径3.5cm、厚さ2cm、肉厚に作られる。8も直径3.5cmで7と同大である。外縁の厚さは1.6cmでやや薄く、表裏とも内面は凹面となる。いずれも粗雑な整形である。

(3)　土偶（9）

2土集から1点が出土した。丸い断面形でハの字形に開く脚部である。裾部の直径1.7cm、残存高1.7cmを測る。胴部との接合部で破損したものと捉えられ、中期初頭のものと考えられる。

(4)　土製円盤（10）

140土から出土した10はミニチュア土器の底板を利用した土製円盤で、周縁を外面側から丁寧に打ち欠いて成形している。

第10表　カニホリ東遺跡　縄紋土器観察表

図No.	遺構	器形	部位	地紋	主な紋様要素	主な構図	その他
1	2住	深鉢	胴		平行沈線紋（原体幅狭・深い施紋）	雑な斜格子状	雑な施紋
13	2住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
14	2住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	斜線	
15	2住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）		端部外面肥厚
16	2住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	横位綾杉状	雑な施紋
17	2住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	レンズ状	
18	2住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	レンズ状	
19	2住	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅・横位）	平行沈線紋（幅狭・浅い施紋）	斜格子状	地紋は雑な施紋
2	3住	深鉢	胴	縄紋（横～斜）			
3	3住	深鉢	胴	結節縄紋（縦位帯状・密接施紋）	平行沈線紋（原体幅広・深）	縦線	
20	3住	深鉢（内湾）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状・縦線	
21	3住	深鉢	口縁		連続爪形紋／細線紋	渦巻状突起／細線紋	
22	3住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	縦位綾杉状	
23	3住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	横位平行沈線紋帯（横線・斜線）	
24	3住	深鉢	口縁	縄紋（横）	波状隆線紋	端部波状隆線紋（横位1段）	
25	3住	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	単沈線紋（細）	端部横位縄紋帯／口縁部無紋帯	
26	3住	深鉢	口縁	縄紋（横）	波状隆線紋	端部波状隆線紋（横位3段）	
27	3住	深鉢	頸	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	縦位等間隔平行沈線紋	
28	3住	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）		
29	3住	深鉢	口縁	縄紋（横）			
4	4住	深鉢	口縁	縄紋（斜）			端部外面折返し
30	4住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅広・深）	横位平行沈線紋帯（横線・斜格子状）	
31	4住	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	斜位等間隔平行沈線紋	
32	4住	深鉢	頸	縄紋（斜）	平行沈線紋（幅広・浅）	縦位等間隔平行沈線紋	
33	4住	深鉢	胴	縄紋（縦）	平行沈線紋（幅狭・深）	区画紋	
5	6住	深鉢	胴	縄紋	箆切半隆線紋	幾何学状	
6	6住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	波頂部突起状／18住との遺構間接合
34	6住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	端部外面肥厚
35	6住	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅・縦）	平行沈線紋（幅狭・深）	渦巻状	
36	6住	鉢	胴	縄紋（粗）	結節浮線紋（細・疎）	弧状	関西系
37	6住	深鉢	胴		条線紋（細密）	弧状	
38	6住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	縦線・斜格子状	
39	9住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
7	10住	深鉢	口縁～胴	条痕状の削り（横）	山形波状沈線紋（単沈線）		端部外面肥厚
40	10住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
41	10住	深鉢（内屈）	頸		平行沈線紋（幅広・浅）	縦位平行沈線区画紋（縦線）	
42	10住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	横位平行沈線紋帯（綾杉状）	
43	10住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	斜格子状	
44	10住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	横位平行沈線紋帯（綾杉状）	
45	10住	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／連続爪形紋	口縁部平行沈線紋帯（横線）	
46	10住	深鉢	底		平行沈線紋（幅狭・深）	縦位綾杉状	
47	10住	深鉢	口縁	縄紋（横）	三角印刻紋／凹線紋	端部三角印刻紋	端部外面肥厚
48	10住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／細線紋／交互楔状印刻紋	横帯紋様帯	
49	10住	深鉢	底	結節縄紋（縦帯・等間隔施紋）	平行沈線紋（幅狭・深）	垂下紋	
8	11住	深鉢（内屈）	口縁	縄紋（横）	爪形隆線紋／平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平行沈線+単沈線）	横位平行沈線紋帯（斜格子状・爪形隆線紋）／縦位等間隔平行沈線紋	
50	11住	深鉢	口縁	縄紋（横）	三角印刻紋／凹線紋	端部三角印刻紋	端部外面肥厚／口唇部突起
51	11住	深鉢	胴	羽状縄紋（横・縦）	凹線紋	弧状	
52	11住	鉢	胴	縄紋（粗）	結節浮線紋（細・疎らな施紋）	じ字状（重層）	関西系
9	12住	深鉢	口縁	羽状縄紋（横）	凹線紋／平行沈線紋（幅狭・深）	横位凹線紋様帯（渦巻状）	
10	12住	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	横位平行沈線紋帯（逆V字状・縦線）	
11	12住	深鉢	底		平行沈線紋（幅狭・浅）	縦位レンズ状	張出底
12	12住	深鉢	底				
53	12住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	端部外面肥厚
54	12住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	レンズ状	
55	12住	深鉢（波状）	口縁		結節沈線紋（細・密）／平行沈線紋（幅狭・浅）／ボタン状貼付紋	端部結節沈線紋帯／口縁部平行沈線紋（弧状）	
56	12住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	渦巻状	
57	12住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	幾何学状	
58	12住	深鉢	口縁	縄紋（横）	三角印刻紋／凹線紋	端部三角印刻紋帯	
59	12住	深鉢	口縁		三角印刻紋／結節浮線紋（細・密）／浮線紋	口唇部浮線紋／端部交互三角印刻紋帯／口縁部紋様帯（結節浮線紋）	60と同一個体

図No.	遺構	器形	部位	施紋	主な紋様要素	主な構図	その他
60	12住	深鉢	口縁		三角印刻紋／結節浮線紋（細・密）	口唇部凹線紋／端部交互三角印刻紋帯／口縁部紋様帯（結節浮線紋）	59と同一個体
61	12住	深鉢（波状）	口縁	縄紋（横）	貼付浮線紋		84と同一個体
62	12住	深鉢	頸～胴	羽状縄紋（横）	結節浮線紋（縄・疎）	頸部横位結節浮線紋帯（同心円状）／胴部横位羽状縄紋	66と同一個体か
63	12住	深鉢	口縁	羽状縄紋（横）	波状隆線紋	単部波状隆線紋（横位1段）	
64	12住	深鉢（内屈）	胴		平行沈線紋（幅広・深）	横位弓形隔平行沈線	
65	12住	深鉢	胴		条線紋（細密）／三角印刻紋	横位紋様帯（渦巻状・山形波状）	
66	12住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅広・浅） 三角印刻紋／結節沈線紋（細・密接な施紋）	上半：横位紋様帯（渦巻・三角）／下半：平行沈線紋（縦位破砕状）	
67	15住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	横位菱形状	
68	15住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	横位等間隔平行沈線紋	
69	15住	深鉢	口縁突起		平行沈線紋（幅広・深）／胴線紋		
70	15住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・浅）	波状	
71	15住	深鉢（内屈）	口縁		爪形隆線紋	口縁部爪形隆線区画紋	
72	15住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）／ボタン状貼付紋		
73	15住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）／ボタン状貼付紋	菱形状	
74	15住	深鉢（内屈）	頸		爪形隆線紋／平行沈線紋（幅広・深）／斜格子状紋（平行+単位）	横位平行沈線紋帯（斜線・連弧状）	
75	15住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	横線・弧状	
76	15住	深鉢	胴		貝殻沈線紋	貝殻沈線紋帯（幾何学状）	
77	15住	深鉢	胴		条線紋（細・密）／三角印刻紋	横位紋様帯（幾何学状）	
78	15住	深鉢	胴		"平行沈線紋（幅広・深） 斜格子状紋（平沈+単沈）"	横位平行沈線紋帯（斜格子状紋）	
79	15住	深鉢（波状）	口縁	縄紋（横）	貝殻浮線紋	端部貝殻浮線紋帯（3条）	64と同一個体
80	15住	深鉢	口縁	縄紋（横）	波状隆線紋	端部波状隆線紋（1段）	
81	15住	深鉢（波状）	頸		結節浮線紋（隅・密）	頸部紋様帯（同心円状）	
82	15住	深鉢	底		平行沈線紋（幅広・浅）	底部	
83	15住	深鉢	胴	縄紋（斜）	貝殻沈線紋		
84	15住	深鉢	口縁				端部外面折返し
85	15住	深鉢	胴	羽状縄紋（横）			
86	15住	深鉢	口縁	縄紋（横）			
87	16住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／ボタン状貼付紋（1対）		
88	18住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	斜線	
89	18住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	斜線	
90	49土	深鉢	口縁	縄紋（横）	浮線紋（太）	口縁部浮線紋帯（2条）	
91	54土	深鉢	底		平行沈線紋（幅狭・浅）	弧状	
92	80土	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	端部外面肥厚
93	2溝	深鉢（内屈）	頸		結節隆線紋／斜格子状紋（平沈+半沈）／半行沈線紋（幅狭・深）	頸部平行沈線区画紋（脚了状紋）／垂下隆線（結節隆線紋）	
94	66号古墳	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅広・浅）／ボタン状貼付紋（1対）	斜線	
95	68号古墳	深鉢（内屈）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／爪形隆線紋	口縁部平行沈線紋帯（斜線）／頸部横位等間隔平行沈線紋	
96	検	深鉢	胴	羽状縄紋（横）			
97	検	深鉢	胴		条線紋（細・密）／三角印刻紋／結節沈線紋／隆線（太）	横位紋様帯	

第11表　カニホリ西遺跡　縄紋土器観察表

図No.	遺構	器形	部位	施紋	主な紋様要素	主な構図	その他
141	2住	深鉢	胴	縄紋（縦）	半隆線紋（太・深）	横位紋様帯（菱形・楕円状）	
98	4住	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）／連続刺突紋	隆線懸垂紋／鏡形状沈線紋	中期後半
99	4住	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／斜走沈線紋	中期後半
100	4住	深鉢	底				中期後半
101	4住	深鉢	底	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	懸垂紋（縦位平行沈線紋）／平行沈線紋（渦巻状）	張出底／148と同一個体
142	4住	深鉢	胴	縄紋（横）	単沈線紋／連続刺突紋	渦巻状	中期後半
143	4住	深鉢	胴	縄紋（横）	単沈線紋（太）／結節凹線紋（太）	鏡形状沈線紋／懸垂紋（波状沈線紋）	中期後半
144	4住	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／斜走沈線紋	
145	4住	深鉢	頸		押圧隆線紋／単沈線紋（細）		
146	4住	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／結節浮線紋（細）	斜線	
147	4住	深鉢?	胴	縄紋（横）	結節沈線紋（細・単）／結節半隆線紋（細・単）／平行沈線紋（幅狭・深）／三角印刻紋	横位平行沈線区画紋（複線・三角印刻紋）	
148	4住	深鉢	胴	縄紋（縦）	平行沈線紋（幅狭・深）	渦巻状	101と同一個体
102	5住	深鉢	口縁～胴	縄紋（斜）	隆線紋（太）	懸垂紋／単位隆線懸垂紋	中期後半
149	5住	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線渦巻紋	中期後半
150	5住	深鉢	頸	縄紋（横）	押圧隆線（太）		中期後半

図No.	遺構	器形	部位	地紋	主な紋様要素	主な構図	その他
103	6住	深鉢	底				
104	6住	深鉢	胴～底	結節縄紋（縦帯・密）			
151	6住	深鉢（内屈）	口縁		爪形隆線紋／格子状紋（平沈+平沈）	口縁部平行沈線区画紋（格子状紋・爪形隆線紋）	突起（鰭状）
152	6住	深鉢（内屈）	口縁		連続爪形紋／平行沈線紋（幅広・深）	端部連続爪形紋／口縁部横位平行沈線区画紋（斜線）	
153	6住	深鉢（内屈）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／隆線紋／刻目紋	口唇部刻目紋／端部縄紋／口縁部隆線区画紋	
154	6住	深鉢（内湾）	口縁		瓦状押引紋		
155	6住	深鉢（内屈）	頸	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	縦位等間隔平行沈線紋	
156	6住	深鉢	胴	結節縄紋（縦帯・密）	平行沈線紋（幅広・深）	Y字状紋（斜線）	
157	6住	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	横位平行沈線区画紋（横線・縦位等間隔平行沈線紋）	
158	6住	深鉢	頸～胴	結節縄紋（縦帯・等間）	爪形隆線紋／平行沈線紋（幅広・深）	頸部爪形隆線紋／胴部横位平行沈線紋帯（山形波状紋）／胴部Y字状紋（斜線）	
159	6住	深鉢	胴	結節縄紋（縦帯・密）	平行沈線紋（幅広・深）	Y字状紋（斜線）	
160	6住	浅鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／結節沈線紋（細・深）／連続爪形紋	口唇部連続爪形紋／端部外面横位平行沈線紋帯（横線）／口縁部外面横位平行沈線紋帯（斜線）／端部内面結節沈線紋帯	端部内面肥厚
161	6住	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	単沈線紋／楔状印刻紋	端部紋様帯（縄紋・楔状印刻紋）／口縁部無紋帯	
162	6住	深鉢	口縁		細線紋／平行沈線紋（幅広・深）	端部紋様帯（細線紋）／口縁部無紋帯／頸部紋様帯（細線紋）	
163	6住	深鉢	胴	縄紋（縦）	平行沈線紋（幅広・浅）	懸垂紋（縦線・山形波状紋）	
164	6住	深鉢	胴	結節縄紋（縦帯・密）	単沈線紋／刻目隆線紋	横位刻目隆線紋	
165	6住	深鉢	胴	結節縄紋（縦帯・等間）	平行沈線紋（幅広・浅）	横位平行沈線紋帯（横線）	
166	6住	深鉢	胴	縄紋（縦帯・密）			
105	7住	深鉢	胴		単沈線紋／隆線紋	隆線渦巻紋（剣先紋）／綾杉状沈線紋	中期後半
167	7住	深鉢	胴		隆線紋（太）／連続刺突沈線紋（太）	隆線懸垂紋／斜位連続刺突沈線紋	中期後半
168	7住	深鉢	胴	縄紋（斜）			中期後半
169	7住	深鉢	口縁				端部外面肥厚
106	8住	深鉢	底				
170	8住	深鉢	口縁	縄紋（横）	押圧隆線紋	口縁部外面押圧隆線紋	端部内外肥厚
171	8住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	縦線・斜格子状紋・横位山形波状紋	
107	9住	浅鉢（内屈）	口縁		押引紋	端部押引紋帯	中期後半
172	9住	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	頸部隆線紋帯／胴部隆線懸垂紋	中期後半
108	12住	深鉢（内湾）	口縁～胴		平行沈線紋（幅狭・深）／橋状突起	口縁部横位平行沈線区画紋（斜線）／口縁部橋状突起（4単位）／頸部横位平行沈線区画紋（羽状）／頸部橋状突起（4単位）／胴部縦位平行沈線区画紋（雲形）	端部内外面肥厚
173	12住	深鉢（波状）	口縁		箆切浮線紋（細・疎）	同心円状	
174	12住	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅広・浅）	口縁部横位紋様帯（山形波状）／頸部横位紋様帯（山形波状）	
175	12住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・浅）	菱形	端部外面肥厚
176	12住	深鉢（波状）	頸		平行沈線紋（幅狭・浅）	平行沈線区画紋（菱形）	
177	12住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	雑な施紋
178	12住	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／印刻紋	横位平行沈線紋帯（縦線）	
179	12住	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	結節浮線紋	口縁部紋様帯	端部内面肥厚
180	12住	深鉢	頸		押圧隆線紋		
181	12住	深鉢	口縁	縄紋（横）			端部小突起
182	13住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	横線	
183	13住	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	斜線	端部外面肥厚
184	1竪	深鉢（内屈）	口縁	縄紋（横）	連続爪形紋／平行沈線紋（幅広・深）	口縁部横位平行沈線紋帯（斜線）／頸部縦位等間隔平行沈線紋	
185	4竪	鉢	胴	縄紋（縦）	結節浮線紋（細・単独）	U字状	
186	9竪	深鉢	胴		山形押型紋	縦位施紋	早期
187	9竪	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅）	ボタン状貼付紋（1対）		
188	9竪	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／瓦状押引紋／円形貼付突起／隆線紋	口縁部横位平行沈線紋帯（瓦状押引紋）／円形貼付突起／頸部隆線紋	
189	9竪	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・浅）	横位紋様帯	
190	9竪	深鉢	胴	結節縄紋（縦帯・等間）	平行沈線紋（幅広・深）	V字状紋	
191	9竪	深鉢	口縁	縄紋（横）			端部外面折返し
192	9竪	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／綾杉状沈線紋	中期後半
193	9竪	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／綾杉状沈線紋	中期後半
194	74土	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／爪形隆線紋	口縁部平行沈線紋帯（横線・縦線）	
109	83土	浅鉢	底	縄紋（横）	単沈線紋	沈線懸垂紋	
195	83土	深鉢（内湾）	頸		単沈線紋（細）／連続刺突紋／V字状貼付紋	頸部紋様帯（沈線紋・V字状貼付紋）	

図No.	遺構	器形	部位	地紋	主な紋様要素	主な構図	その他
196	83土	深鉢	胴	結節縄紋（縦縦・密）	平行沈線紋（幅広・深）	連続弧線紋	
197	83土	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平沈+単沈）	平行沈線区画紋（山形波状紋・斜格子状紋）	
110	91土	深鉢	口縁	縄紋（横）	浮線紋	口唇部～端部棒状浮線紋（3条4単位）	端部外面折返し
199	91土	深鉢	底		平行沈線紋（幅狭・深）	横位平行沈線紋帯（横線・斜線）	
111	95土	深鉢	胴	縄紋（横）	押圧隆線紋／結節隆線紋	横位連弧状結節隆線紋帯／横位押圧隆線紋	
112	95土	深鉢	底	縄紋（横）			
198	95土	深鉢	胴	縄紋（横）	結節隆線紋		
200	104土	深鉢	胴	縄紋（斜）	浮線紋		
113	110土	深鉢	底				
201	110土	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・浅）	横位紋様帯	
202	110土	深鉢	胴	縄紋（横）			
114	113土	深鉢（球胴）	口縁～胴		交互楔状印刻紋／V字状貼付紋	頸部横位紋様帯	
203	113土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	刻目紋／単沈線紋	口唇部刻目紋／端部縄紋・縦位沈線紋帯	
115	115土	深鉢（内湾）	完形	縄紋（口縁部横・胴部結節縦帯・密）	単沈線紋（細・深）／平行沈線紋（幅広・深）／円形突起（4単位）	端部紋様帯（縄紋・玉抱三叉紋）／口縁部縦位等間隔平行沈線紋／胴部文様帯（平行沈線楕円区画紋）	端部外面肥厚／口唇部突起4単位
204	115土	深鉢（波状）	口縁	縄紋（横）	単沈線紋／隆線紋／連続刺突沈線紋／刻目紋	口唇部刻目紋／端部縄紋・連続刺突紋帯／頸部連続刺突沈線紋帯	波状4単位
205	115土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／瘤状貼付突起	端部縄紋帯／口縁部縦位等間隔平行沈線	口唇部突起
116	123土	深鉢か	突起		結節浮線紋	渦巻状・菱形	透かしあり
206	129土	深鉢	胴		楕円押型紋	縦位施紋	早期
117	130土	深鉢	底				
208	132土	深鉢	胴	縄紋（横）			
209	132土	深鉢	胴	縄紋（横）			
207	138土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	結節隆線紋（単）	横位浮線紋帯（山形波状）	端部内外面肥厚
210	139土	深鉢	口縁		単沈線紋（細・深）／刺突列点紋（櫛歯状工具）	横位紋様帯	前期前半
118	140土	深鉢（内湾）	口縁～頸	縄紋（横）	浮線紋（ソーメン状）／結節半隆線紋（細）／連続爪形紋	口唇部連続爪形紋／口縁部・頸部横位紋様帯（結節半隆線紋・円形浮線紋）／胴部横位紋様帯（横羽状浮線紋）	端部内外面肥厚
119	140土	深鉢	底	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	縦位平行沈線区画紋（斜線）	
120	140土	深鉢	底	縄紋（横）	浮線紋（細）	縦位等間隔浮線懸垂紋	
121	140土	深鉢	底	縄紋（横）	結節半隆線紋（細）	横位結節半隆線紋帯	底部側面等間隔押圧
211	140土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（縦）	結節浮線紋（細・単）	浮線紋帯（逆U字状）	端部内外面肥厚
212	140土	深鉢（内湾）	胴		結節浮線紋（細・単）／浮線紋	横位浮線紋帯（横線・山形波状）	
213	140土	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	口唇部平行沈線紋（斜線）／口縁部平行沈線紋帯（横線・斜線・山形波状紋）	端部肥厚
214	140土	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（太・単）		
215	140土	深鉢（内湾）	頸	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）	横位浮線紋帯（横線・山形波状）	
216	140土	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	渦巻状	
217	140土	深鉢	胴	羽状縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）		
122	141土	深鉢	口縁～底		平行沈線紋（幅広・深）／連続爪形紋／爪形隆線紋（太）／突起	口縁部連続爪形紋帯／頸部爪形隆線紋／胴部懸垂紋（4単位・爪形隆線紋・トンボ状平行沈線紋）	
123	142土	深鉢	口縁～底	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）／平行沈線紋（幅狭・深・単）	口縁部横位結節浮線紋帯／頸部平行沈線紋帯（コ字状）／胴部懸垂紋（結節浮線紋・4単位）	端部内外面肥厚
219	142土	深鉢	胴	縄紋（縦）	結節沈線紋（細）		
124	143土	深鉢	底	縄紋（斜）	浮線紋（細）	縦位等間隔浮線紋	
125	143土	深鉢（球胴）	胴～底	結節羽状縄紋（縦帯・間）			
218	143土	鉢	口縁	縄紋（横）	連続爪形紋（Σ状）		端部内面縄紋（横）／関西系
220	146土	深鉢	頸	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／隆線紋	頸部隆線紋	
221	146土	深鉢	胴		条線紋（櫛歯状工具）	条線紋帯（横・斜）	
222	147土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	浮線紋	口縁部横位浮線紋帯	端部内傾面
223	150土	深鉢（内湾）	口縁	結節縄紋（縦帯・密）	平行沈線紋（幅広・深）		
224	154土	深鉢	頸	結節縄紋（細）	平行沈線紋（幅広・深）／楔状印刻紋	頸部紋様帯（楔状印刻紋）	
225	171土	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	平行沈線区画紋（斜線）	区画紋周囲を印刻
226	171土	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平沈+単沈）	V字状紋（斜格子状紋）	
126	175土	深鉢	胴	縄紋（横）	隆線紋	横位弧状隆線紋帯	土176と遺構間接合
227	175土	深鉢	胴	縄紋（横）			
228	175土	深鉢	底	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	懸垂紋（平行沈線紋）	
229	176土	深鉢（内湾）	口縁～胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）／結節沈線紋（細・単）／浮線紋（ソーメン状）／平行沈線紋（幅狭・深）	口縁部横位浮線紋帯（円形浮線紋）／頸部横位結節沈線紋帯（山形波状紋）／胴部横位平行沈線区画紋（斜線）／胴部横位浮線紋帯（円形浮線紋）	端部内外面肥厚

図No	遺構	器形	部位	地紋	主な紋様要素	主な構図	その他
230	176土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	結節沈線紋	口縁部横位結節浮線紋帯（山形波状）	端部内外面肥厚
231	176土	深鉢	胴	縄紋（横）	結節沈線紋	結節浮線紋（U字状）	
233	188土	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／斜走沈線紋	中期後半
127	195土	深鉢（波状）	口縁～頸	結節縄紋（口縁部横・胴部縦帯密）	刻目紋／単沈線紋（太）／隆線紋（太）／楔状印刻紋	口唇部刻目紋／端部紋様帯（縄紋・楔状印刻紋）／口縁部無紋帯・隆線垂下紋（4単位）／頸部隆線（縄紋・楔状印刻紋）／胴部単沈線紋帯（連続弧線紋）	
232	195土	深鉢	胴		三角印刻紋／平行沈線紋（幅狭・深）	平行沈線区画紋（斜線）	
234	202土	深鉢	底	縄紋（横）			
236	204土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	刻目紋／単沈線紋（細・深）／楔状印刻紋	端部紋様帯（縄紋・楔状印刻紋）	端部内外面肥厚
128	205土	深鉢（内湾）	口縁～胴		単沈線紋（太）／隆線紋（太）／貼付突起	口縁部無紋帯／頸部隆線紋（貼付突起）	
235	212土	深鉢?	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／格子状紋（平沈+単沈）	口唇部平行沈線紋帯（斜線）／口縁部平行沈線紋帯（斜格子状紋）	端部肥厚
237	217土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）			端部外面折返し
238	224土	深鉢	胴		隆線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／斜走沈線紋	中期後半
243	278土	深鉢	底		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
241	279土	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）		
242	279土	深鉢	胴		刺突列点紋（櫛歯状工具）	連弧状	前期前半
239	288土	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平沈+ソーメン状浮線）／結節沈線紋（細）／鳥嘴状突起	口縁部横位平行沈線区画紋（斜格子状紋2段）／鳥嘴状突起（斜格子状紋）	
129	290土	深鉢	口縁	羽状縄紋（横）	押圧波状隆線紋	端部波状隆線紋（2段）	
240	290土	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）		端部外面肥厚
130	297土	深鉢（内湾）	口縁～胴		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）／隆線紋（太）／橋状把手（4単位）／押圧隆線紋（太）	口縁部横位紋様帯（交互三角印刻紋・結節沈線紋・棒状隆線紋2条1対4単位）／頸部横位紋様帯（押圧隆線紋・橋状把手4単位）／胴部紋様帯（三角印刻紋充填）	
244	297土	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	レンズ状	
250	299土	深鉢	頸		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）／隆線紋	交互三角印刻紋／結節沈線紋／弧状隆線紋	端部外面肥厚
245	345土	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
246	345土	深鉢	胴	縄紋（横）			
247	345土	深鉢	頸	平行沈線紋（幅狭・浅）	篦切浮線紋（細・疎）	弧状	
249	356土	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	端部紋様帯（縄紋）	
248	362土	深鉢（波状）	口縁		単沈線紋（細・深）／瘤状突起／刻目隆線紋	口縁部紋様帯（刻目突帯紋・単沈線紋）	端部内面肥厚／晩期初頭
357	11集石	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・密）	横位	口唇部突起
358	1溝	深鉢	頸	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）		
131	1土集	深鉢（球胴）	口縁～胴	結節縄紋（縦帯・密）	刻目隆線紋／単沈線紋（細）／連続刺突紋	口縁部無紋帯／頸部刻目隆線紋／球胴部横位沈線紋帯（V字状隆線紋・V字状沈線紋・渦巻状沈線紋）／胴部紋様帯（横位沈線紋・沈線懸垂紋）	
132	1土集	深鉢（球胴）	口縁～胴	結節縄紋（口縁部横・胴部縦帯密）	刻目紋／楔状印刻紋／単沈線（太）／隆線紋	口唇部刻目紋／端部紋様帯（縄紋・楔状印刻紋）／口縁部無紋帯／頸部隆線（楔状印刻紋）／胴上部横位沈線紋帯（連弧状）	
133	1土集	深鉢（内湾）	ほぼ完形	結節縄紋（口縁部横・胴部縦帯密）	単沈線紋（太）／連続刺突沈線紋（太）	口縁部紋様帯（単沈線紋・連続刺突沈線紋）／胴部横位沈線紋帯（三叉紋）	
134	1土集	深鉢（球胴）	胴	結節縄紋（縦帯・密）	平行沈線紋（幅広・浅）	横位紋様帯（幾何学形）	
135	1土集	深鉢	底		印刻紋／結節沈線紋（細・密）	横位紋様帯（弧状）	
136	1土集	深鉢（球胴）	口縁	縄紋（横）			口唇部突起
137	1土集	深鉢	底				
138	1土集	深鉢	胴		単沈線紋／隆線紋	懸垂紋（肋骨紋）／綾杉状沈線紋	中期後半
251	1土集	深鉢	口縁	条痕紋（絡条体か・横・内外）	絡条体押圧突帯		早期末葉
252	1土集	深鉢（波状）	口縁	平行沈線紋（幅狭・浅・横位条痕状）	平行沈線紋（幅狭・深）／浮線紋／ボタン状貼付紋（1対）	縦位浮線紋（3条）／縦位沈線紋（3条）	地紋は雑な施紋
253	1土集	深鉢（波状）	口縁		結節沈線紋（太）／平行沈線紋（幅狭・浅）	端部紋様帯（結節沈線紋）／平行沈線紋（弧状）	
254	1土集	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅）	浮線紋（ソーメン状・疎）／ボタン状貼付紋	浮線紋帯（弧状・円形）	地紋は雑な施紋
255	1土集	深鉢	頸	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	横位紋様帯（格子状）	
256	1土集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	綾杉状	
257	1土集	深鉢	胴		条線紋（櫛歯状工具）	ハ字状条線紋	中期後半
258	1土集	深鉢	胴	縄紋（縦）	平行沈線紋（幅広・深）	幾何学状	
259	1土集	深鉢	胴		篦切沈線紋（細・疎）	同心円状	237・243・245と同一個体
260	1土集	深鉢	頸		篦切沈線紋（細・疎）	同心円状	237・244・245と同一個体
261	1土集	深鉢	胴		篦切沈線紋（細・密）	同心円状	
262	1土集	深鉢	胴		篦切沈線紋（細・疎）	同心円状	237・243・244と同一個体

図No.	遺構	器形	部位	施紋	主な紋様要素	主な構図	その他
263	1土集	深鉢	胴		荒切沈線紋（細・疎）	同心円状	243・244・245と同一個体
264	1土集	深鉢（波状）	口縁	平行沈線紋（幅狭・浅）	結節浮線紋（細・疎）	同心円状	地紋は縦な施紋
265	1土集	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅）	施切浮線紋（細・疎）	弧状	地紋は縦な施紋
266	1土集	深鉢	胴	平行沈線紋（幅狭・浅）	結節浮線紋（細）	弧状	地紋は縦な施紋
267	1土集	深鉢（波状）	口縁	平行沈線紋（幅狭・浅）	結節沈線紋（細・疎）	端部結節沈線紋帯／口縁部垂下紋（結節沈線紋）	地紋は縦な施紋
268	1土集	深鉢（波状）	口縁		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）	直線・弧状	
269	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）	横位結節浮線紋帯（直線・連続弧状）	275と同一個体
270	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）		
271	1土集	深鉢	底	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）	連続弧状	
272	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）	横位結節浮線紋帯（直線・連続弧状）	277と同一個体
273	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	浮線紋（ソーメン状）	横位浮線紋帯（円形貼付紋）	
274	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	刻目紋／浮線紋（ソーメン状）	LJ唇部刻目紋／口縁部浮線紋帯（円形貼付紋）	雑部内外面肥厚
275	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	浮線紋（ソーメン状）	LJ唇部浮線紋（縦位）／LJ縁部浮線紋帯（円形貼付紋）	雑部外面肥厚（主縄状）
276	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	荒切浮線紋（太）	垂下紋	
277	1土集	深鉢	胴		結節平隆線紋（太）／平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平沈+浮線）	横位平行沈線区画紋（斜格子状紋）	
278	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細）／浮線紋（ソーメン状）	横位浮線紋帯（円形貼付紋・綾杉状）	
279	1土集	深鉢	口縁		結節沈線紋（太・深）／三角印刻紋	口縁部横位文様帯（結節沈線紋・三角印刻紋）	
280	1土集	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）／隆線紋	口縁部横位隆線区画紋	
281	1土集	深鉢（内屈）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	口縁部横位平行沈線区画紋（斜線）／頸部横位平行沈線区画紋（斜線）	雑部外面肥厚
282	1土集	深鉢	口縁		結節沈線紋（細・密）		雑部外面肥厚
283	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（細広・深）／結節半隆線紋（太）	横位平行沈線区画紋（複線）／結節半隆線紋帯（鋸歯状か）	
284	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	浮線紋（ソーメン状）	擬位等間隔平行沈線紋	
285	1土集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／印刻紋	胴部平行沈線区画紋（斜線）	
286	1土集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）／斜格子状紋（平沈+単沈）	擬位平行沈線区画紋（斜格子状紋）	
287	1土集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅広・深）	V字状紋（斜線）	
288	1土集	深鉢	底	縄紋（横）	浮線紋		底部側面等間隔押圧／関西系か
289	1土集	深鉢	底	縄紋（横）			底部周囲等間隔押圧
290	1土集	深鉢（波状）	口縁		楔状印刻紋／隆線紋／単沈線紋（細）	端部紋様帯（楔状印刻紋）／LJ縁部施紋帯（円形貼付紋）／頸部隆起（楔状印刻紋）	
291	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／楔状印刻紋／隆線紋	端部横位紋様帯（縄紋・楔状印刻紋）	端部内面肥厚
292	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）	擬位等間隔平行沈線	
293	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	隆線紋	端部横位紋様帯（縄紋・平行沈線紋）	端部内面肥厚
294	1土集	深鉢（波状）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	端部文様帯（縄紋）／口縁部平行沈線紋（弧状）	端部外面肥厚
295	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／逆U字状貼付紋	端部紋様帯（縄紋）／擬位等間隔平行沈線	口唇部突起
296	1土集	深鉢	胴	縄紋（斜）	平行沈線紋（幅広・深）	擬位垂下紋	
297	1土集	深鉢（波状）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・浅）	端部紋様帯（縄紋）／口縁部無紋帯（縄紋地紋）	端部内面肥厚
298	1土集	深鉢	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／単沈線紋（細）／刻目紋／隆線紋（太）	口唇部刻目紋／端部紋様帯（縄紋）／口縁部擬位等間隔平行沈線	
299	1土集	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／突起	端部紋様帯（縄紋）／口縁部擬位等間隔平行沈線	端部内面肥厚
300	1土集	深鉢	胴	縄紋（横）	隆線紋／貼付突起	胴部隆線紋・貼付突起	
301	1土集	深鉢	胴	縄紋（斜）	平行沈線紋（幅広・深）	擬位等間隔平行沈線紋	
302	1土集	深鉢	胴		隆線紋（太）		中期後半
303	1土集	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／鏡杉状沈線紋	中期後半
304	1土集	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／鏡杉状沈線紋	中期後半
305	1土集	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／鏡杉状沈線紋	中期後半
306	1土集	深鉢（内湾）	口縁		単沈線紋（太）	沈線紋帯（組曲状）	中期後半
307	1土集	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／鏡杉状沈線紋	中期後半
308	1土集	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／鏡杉状沈線紋	中期後半
309	2土集	深鉢	胴		刺突列点紋（櫛歯状工具）	横位紋様帯	前期前半
310	2土集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半
311	2土集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半
312	2土集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半
313	2土集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半

図No.	遺構	器形	部位	地紋	主な紋様要素	主な構図	その他
314	2上集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半
315	2上集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	菱形状	雑な施紋
316	2上集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	菱形状	雑な施紋
317	2上集	深鉢	胴	縄紋（横）			含繊維胎土／前期前半
318	3上集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅）	綾位	
319	3十集	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・浅・密）	綾杉状	
326	11号古墳	深鉢	胴		半行沈線紋（幅広・深）	綾位波状	
327	11号古墳	深鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・単）	弧状	
320	71号古墳	深鉢	胴		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	
321	71号古墳	深鉢	口縁	縄紋（横）	押圧隆線紋		
322	71号古墳	深鉢（波状）	口縁		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）	墳部紋様帯（幾何学状）	339と同一個体
323	71号古墳	深鉢（波状）	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	墳部肥厚／口唇部突起
324	71号古墳	深鉢	口縁				墳部外面折返し
325	71号古墳	鉢	胴	縄紋（横）	結節浮線紋（細・疎）	弧状	胴西表
139	検	深鉢	底	縄紋（横）	施切浮線紋（太・疎）		底部側面等間隔押圧
140	検	深鉢	底		並行沈線紋（細・浅）	綾位平行沈線紋	
328	検	深鉢	口縁	縄紋（横）	隆線紋／波状隆線紋	口縁部横位隆線紋帯	墳部外面折返し
329	検	深鉢	胴	縄紋（横）	浮線紋	浮線紋（綾位波状・直線）	
330	検	深鉢（波状）	口縁		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）	幾何学状	
331	検	深鉢	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・浅）／刺目紋	口唇部刺目紋／墳部横位縄紋帯	外面肥厚
332	検	深鉢	口縁		三角印刻紋		
333	検	深鉢	口縁	縄紋（横）	三角印刻紋／凹線紋	横位紋様帯（直線・弧状）	墳部外面肥厚
334	検	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／櫛状印刻紋／単沈線紋（細・深）	雨部紋様帯（縄紋・櫛状印刻紋）／口縁部無紋帯	
335	検	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／櫛状印刻紋／単沈線紋（細・深）	墳部紋様帯（縄紋・櫛状印刻紋）／口縁部無紋帯	
336	検	深鉢（波状）	口縁		三角印刻紋／結節沈線紋（細・密）	墳部紋様帯（幾何学状）	333と同一個体
337	検	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅広・深）／隆線紋／三叉紋（刺突）	胴部隆線紋／横位紋様帯	
338	検	深鉢（内湾）	口縁		円形肋付紋		口唇部突起
339	検	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）／山形波状紋（櫛・深）／刺目紋	口唇部刺目紋／墳部縄紋帯／横位平行沈線区画紋（山形波状紋）	
340	検	深鉢	胴		爪形隆線紋／半行沈線紋（幅広・深）	横位平行沈線区画紋（縦位・横線）	
341	検	深鉢	胴	縄紋（横）	半行沈線紋（幅狭・深）	平行沈線区画紋（渦巻状・縦線）	
342	検	深鉢	口縁		平行沈線紋（幅狭・深）	弧状	墳部外面突起
343	検	深鉢	胴	縄紋（横）	平行沈線紋（幅狭・深）	横位平行沈線区画紋（斜縄）	
344	検	深鉢	胴		平行沈線紋（幅広・浅）	斜格子状（綻）	
345	検	深鉢	胴	羽状縄紋（横）			
346	検	深鉢	胴		平行沈線紋（幅広・深）	横位綾杉状	
347	検	深鉢	口縁				
348	検	深鉢	胴		隆線紋／単沈線紋（太）	隆線渦巻紋／沈線紋（斜縄）	中期後半
349	検	深鉢	胴		単沈線紋（太）	渦巻状	中期後半
355	1ST	深鉢	底		平行沈線紋（幅広・浅）	弧状	
332	2ST	深鉢	胴		単沈線紋（太）	渦巻状	中期後半
356	3ST	深鉢	胴		隆線紋／浮線紋（太）／単沈線紋（太）	隆線懸垂紋／沈線紋（斜縄）	中期後半
350	4ST	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（斜）	単沈線紋（細）／平行沈線紋（幅広・深）	墳部紋様帯（縄紋・横状印刻紋・玉抱三叉紋）／口縁部無紋帯	
354	5ST	深鉢	頸～胴	結節縄紋（縦帯・等間）	隆線紋／単沈線紋（太）／横状印刻紋	頸部隆線／胴部横位沈線紋帯（横線・横状印刻紋）	
351	6ST	深鉢（内湾）	口縁	縄紋（横）	横状印刻紋／平行沈線紋（幅広・深）／単沈線紋（綻・深）	墳部紋様帯（縄紋・横状印刻紋・玉抱三叉紋）／口縁部無紋帯	
353	7ST	深鉢	胴	縄紋（横）	単沈線紋（細）／横状印刻紋	横位沈線紋（横状印刻紋）／変形状・渦巻状	

第12表　縄紋時代の石器・石製品一覧表

(1)　カニホリ東遺跡

No	図No	出土遺構	出土地点	調査区	器種	細別	石材	重量(g)	特考	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)
13		3住		A	石核	1類	チャート	13.5		33.9	30.5	11.5
20		50土		A	石核	2類	黒曜石	7.2		24.8	30.6	11.3
51		12住	南東部	A	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.6	片脚欠け	17.8	(13.8)	3.7
52		12住	北東部	A	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.7		18.8	18.2	3.2
53		10住		A	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.2		25.6	16.9	3.4
54		6住ベルト		A	石鏃	凹基無茎	チャート	0.5	先端部欠損	(14.5)	13.2	2.8
56		20C土		N	石鏃	凹基無茎	チャート	0.8	先端・脚部欠け	(22.3)	(20.0)	2.8
61	28	12住	南西部	A	石錐		黒曜石	2.7		40.4	15.7	6.0
62	29	15住	北東部	A	石錐		黒曜石	16.5		57.4	27.1	15.1
71		3住	北西部	A	石鋸	全体調整	黒曜石	3.9	先端欠損	(46.5)	12.4	8.9
75	34	12住	北東部	A	石匙	縦型	黒曜石	9.3		54.9	27.8	9.8
76	35	検出面		A	石匙	縦型	チャート	14.8		54.8	41.2	9.8
81	39	20住		A	RF	スクレーパー類	黒曜石	1.9		25.2	16.9	6.1
88	52	12住	北東部	A	RF	スクレーパー類	凝灰	32.3		81.1	44.9	7.8
89	53	10住		A	RF	横刃型刃器	変性砂岩	90.2		45.6	121.3	17.1
90	54	15住		A	RF	スクレーパー類	変性砂岩	85.0		63.5	87.9	14.3
91	55	A石器		N	RF	礫器	ホルンフェルス	258.7		80.0	83.4	35.0
100		3住	北西部	A	打製石斧	撥形	ホルンフェルス	39.7		44.1	71.3	12.3
104	49	1住		A	打製石斧	短冊形	砂岩	103.5		99.8	47.4	21.7
106	51	3T		A	打製石斧	撥形	変性砂岩	104.5		93.8	67.2	17.7
122		6住ベルト		A	打製石斧	短冊形	ホルンフェルス	49.5		86.8	34.8	11.8
123		3住	北西部	A	打製石斧	短冊形	ホルンフェルス	48.8	完形	89.8	44.3	9.8
127		10住	北西部	A	磨製石斧		蛇紋岩	56.7	欠損	(49.6)	39.2	(22.1)
129	60	12住		A	磨石類	整形磨石	砂岩	457.6		91.2	72.2	43.6
137		12住		A	磨石類		玄武岩	529.2		107.4	57.4	56.0
138		12住		A	磨石類	特殊磨石	安山岩	1,023.8	正裏面磨・縁上ぎら磨 胃壁部敲	175.9	65.8	60.2
139	63	12住		A	玉類		滑石	1.7		(13.5)	(18.7)	6.6

(2)　カニホリ西遺跡

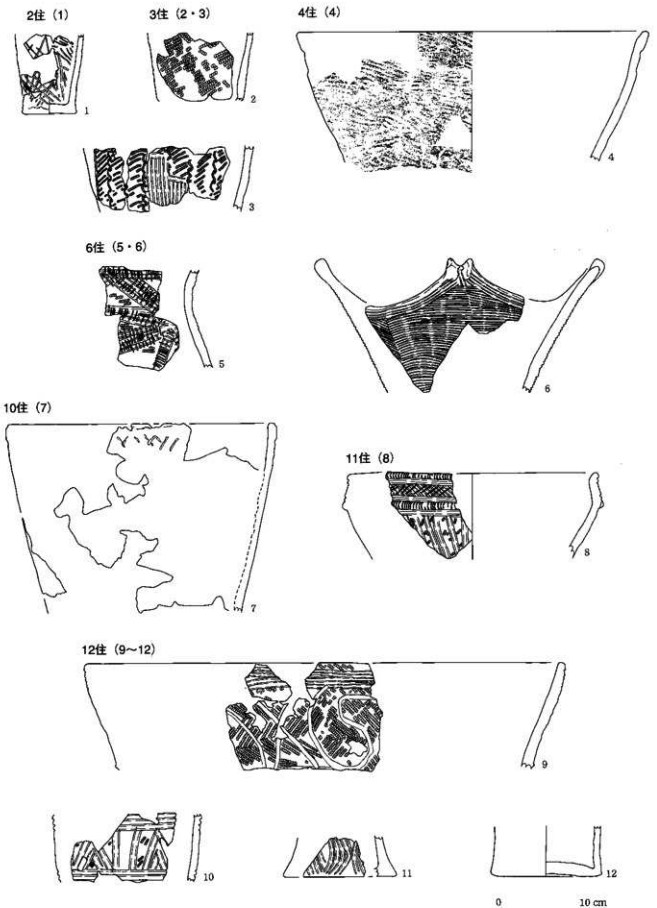
No	図No	出土遺構	出土地点	調査区	器種	細別	石材	重量(g)	特考	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)
1	1	11住	南西部	K	石核	1類	黒曜石	2.6		20.0	21.1	7.9
2	2	11住		J	石核	1類	黒曜石	8.6		30.9	21.4	13.7
3	3	1土集	1～2区	J	石核	1類	黒曜石	7.2		34.0	28.4	9.2
4	4	検出面		K	石核	1類	黒曜石	7.9		26.6	30.2	12.7
5	5	1土集		J	石核	1類	泥岩	6.8		27.6	30.9	8.2
6	6	130土		I	石核	2類	黒曜石	9.0		26.3	35.4	11.9
7	7	345土		K	石核	2類	黒曜石	7.9		28.5	26.2	16.0
8	8	検出面		K	石核	2類	黒曜石	3.7		22.4	20.4	9.3
9	9	176土		I	石核	3類	黒曜石	12.8		27.6	26.8	19.0
10	10	25T		I	石核	3類	黒曜石	19.2		31.2	34.5	25.9
11	11	356土		I	石核	3類	黒曜石	84.3		49.6	42.3	39.5
14		1土集	3区	J	石核	1類	黒曜石	3.8		23.6	22.3	7.4
15		246土		J	石核	1類	黒曜石	2.6		21.8	16.7	7.9
16		1土集	2区	J	石核	1類	黒曜石	2.5		19.2	23.6	7.5
17		3土集	6区	K	石核	1類	黒曜石	1.1		7.0	15.3	4.4
18		P102		J	石核	1類	黒曜石	3.4		17.8	22.5	9.0
19		7住	南西部	J	石核	1類	黒曜石	5.5		30.4	22.1	9.4
21		検出面		K	石核	2類	黒曜石	17.1		31.8	37.0	14.8
22		1土集		J	石核	2類	黒曜石	7.9		25.0	37.7	8.5
23		1土集		J	石核	2類	黒曜石	9.4		27.9	43.1	10.8
24		218土		J	石核	2類	黒曜石	5.6		21.2	32.1	8.0
25		1土集	1～2区	J	石核	3類	黒曜石	15.4		24.8	33.4	26.9
26		289土		K	石核	3類	黒曜石	11.7		33.7	28.9	19.0
27		P29		I	石核	3類	黒曜石	27.8		32.6	32.3	30.4
28		176土		I	石核	3類	黒曜石	13.2		22.8	34.0	21.7
29		12住	北東部	K	石核	3類	黒曜石	11.7		24.2	27.2	20.3
31	13	1土集		J	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.3		13.2	9.9	3.3
32	14	12住		K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.5	先端・脚部欠け	(16.4)	14.4	3.7
33	15	3土集	4区	K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.4	脚部欠損	18.4	14.9	3.8
34	16	12住		K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.6	脚端欠け	(19.3)	15.0	3.3
35	17	12住		K	石鏃	平基無茎	黒曜石	0.6		18.5	16.2	3.0
36	18	2ST	北側	I	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.2	先端再生?	18.8	19.8	4.6
37	19	1土集	1区	J	石鏃	凹基無茎	黒曜石	3.8	先端欠損	(24.4)	24.9	6.4
38	20	217土		J	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.7	脚部欠損	24.8	16.7	3.8
39	21	3土集	5区	K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.1		34.1	16.2	3.4
40	22	217土		J	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.1		26.8	21.6	3.7
41	23	2ST	北側	I	石鏃	凹基無茎 局部磨製石鏃	黒曜石	0.9	片脚欠損	26.3	(15.2)	3.3
42	24	検出面		G	石鏃	凸基有茎	チャート	2.4	先端欠け	(32.9)	15.7	5.7
43		104土		I	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.3	先端部欠損	(12.0)	10.1	3.2
44		105土		I	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.3		20.7	17.6	4.5
45		205土		I	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.8		20.9	14.8	3.6
46		1土集	2区	J	石鏃	凹基無茎	チャート	1.1	脚部欠け	20.4	13.6	3.7
47		1土集	3区	J	石鏃	平基無茎	黒曜石	1.0	基部欠け　有茎?	22.6	16.0	3.5

No.	図No.	出土遺構	出土地点	調査区	器種	細別	石材	重量(g)	備考	残長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
48		12住	北東部	K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.7	脚部欠け	(25.3)	21.6	4.7
49		検出面		K	石鏃	凹基無茎	黒曜石	1.1		23.3	14.8	3.4
50		検出面		L	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.7	個体欠損	19.6	(13.7)	3.9
58	25	検出面		J	石鏃		黒曜石	2.0		26.8	13.4	7.4
59	26	検出面		K	石鏃		黒曜石	0.6		22.6	6.8	4.4
60	27	345ナ		K	石鏃		黒曜石	1.9	先端欠損	(37.6)	13.1	5.8
63	30	12住	P04	K	石鏃		黒曜石	6.7		65.6	18.7	8.2
64		検出面		I	石鏃		黒曜石	7.8		33.8	32.6	13.1
65		83ナ		I	石鏃		黒曜石	3.9		31.6	29.1	10.9
66		341ナ		I	石鏃		黒曜石	1.7		26.3	12.0	7.8
67		230ナ		J	石鏃		黒曜石	1.5		24.9	17.8	9.3
68		2土集	1ST	J	石錐?	つまみ無し	黒曜石	1.3	先端欠損	(21.2)	9.4	6.5
69		3土集	5区	K	石錐		黒曜石	1.2		24.8	14.0	5.2
70		345ナ		K	石錐	つまみ無し	黒曜石	0.7		21.0	7.6	5.6
73	32	3ナ集	3区	K	石匙	横型	細粒珪質凝灰岩	13.3		54.7	34.9	9.7
74	33	1土集	1区	J	石匙	縦型	チャート	16.3		55.4	33.7	11.2
77		25住		L	石匙	縦型	黒曜石	11.5		54.3	37.4	9.4
78	36	3土集		K	RF	石鏃未成品?	黒曜石	1.6		19.6	21.6	4.9
79	37	31住	南東部	I	RF	石鏃未成品?	黒曜石	1.8		22.0	22.9	5.0
80	38	検出面		J	RF	石鏃未成品?	チャート	4.5		30.8	25.2	6.6
82	40	2土集	3区	J	RF	ノッチ	黒曜石	1.3		22.6	16.7	5.1
83	41	1土集	1～2区	J	RF	スクレーパー類	チャート	4.9		23.2	31.4	8.6
84	42	260ナ		K	RF	スクレーパー類	細粒珪質凝灰岩	8.1		30.6	33.9	9.5
85	43	345ナ		K	RF	スクレーパー類	流紋岩	7.0		37.4	28.6	8.9
86	44	1土集		J	RF	スクレーパー類	チャート	13.2		49.0	36.3	9.2
87	45	1土集	1区	J	RF	スクレーパー類	黒曜石	13.7		45.1	28.5	14.3
92		3層		H	RF	スクレーパー類	黒曜石	3.2		31.2	17.4	7.9
93		87ナ		I	RF	横刃型刃器	泥質片岩	19.0	鋸歯縁	39.2	55.8	8.2
94		365ナ		I	RF	石鏃未成品?	黒曜石	2.7	ドリル?	31.3	(24.3)	4.7
95		45ナ		I	RF	スクレーパー類	黒曜石	4.0		25.2	24.0	8.0
96		検出面		J	RF	スクレーパー類	ホルンフェルス	20.3		51.4	69.8	3.7
97		1土集		J	RF	スクレーパー類	砂岩	86.0		61.0	76.9	17.2
98		検出面		J	RF	スクレーパー類	黒曜石	5.6		26.2	(30.4)	10.8
99		検出面		K	RF	スクレーパー類	チャート	10.7		34.8	36.1	8.6
101	46	26住		I	打製石斧	短冊形	泥質片岩	134.3		118.1	42.3	22.2
102	47	113土		I	打製石斧	撥形	変性砂岩	115.7		121.7	51.5	22.5
103	48	166土		I	打製石斧	撥形	泥質片岩	80.9	器体中央に敲打痕	84.7	49.2	8.0
105	50	176ナ		I	打製石斧	短冊形	変性砂岩	52.6		127.7	30.5	13.0
107		1住	北西部	I	打製石斧	撥形	ホルンフェルス	28.5	刃部欠け・刃部磨滅	84.8	47.2	10.4
108		176土		I	打製石斧	短冊形	砂質片岩	89.8	刃部摩滅	112.2	45.5	14.3
109		315土		I	打製石斧	短冊形	ホルンフェルス	127.6		114.9	46.2	18.7
110		365土		I	打製石斧	撥形	泥質片岩	77.3	基部欠損 刃縁磨滅	(91.6)	49.3	14.0
111		206土		I	打製石斧	短冊形	砂質片岩	65.5	基部欠損	(79.8)	41.8	14.2
112		206土		I	打製石斧	撥形	砂質片岩	47.0	刃縁磨滅	84.0	38.8	13.5
113		検出面		J	打製石斧?	撥形	砂岩	29.0	横刃型刃器?	67.2	40.4	9.0
114		1土集		J	打製石斧	撥形	ホルンフェルス	122.8		91.2	58.0	18.0
115		1土集		J	打製石斧	短冊形	砂岩	72.6	刃縁磨滅 破損後に再生?	73.9	39.5	16.8
116		検出面		J	打製石斧	短冊形	ホルンフェルス	181.2		147.9	51.4	23.6
117		1土集	2区	J	打製石斧	撥形	砂岩	54.7		74.2	42.2	13.4
118		1土集	1～2区	J	打製石斧	撥形	ホルンフェルス	43.0	刃縁磨滅	73.0	43.9	13.7
119		3ナ集		K	打製石斧	短冊形	泥質片岩	53.2	刃縁磨滅	97.2	42.3	11.2
120		検出面		K	打製石斧	撥形	変性砂岩	60.7	刃縁磨滅	90.5	41.8	15.0
121		検出面		K	打製石斧	撥形	泥質片岩	115.2	刃縁摩滅	95.1	57.5	16.7
124	56	273土		K	磨製石斧		砂質片岩	28.0	基部再生	37.1	43.0	11.5
125	57	検出面		D	磨製石斧		結晶岩	358.6	基部欠損	(102.8)	(35.0)	32.4
126	58	1ナ集	2区	J	半磨製石斧		結晶岩	60.3		81.0	44.2	14.8
128	59	273土		K	磨石類	敲石	砂岩	59.6		81.1	27.9	17.1
130	61	368土		K	磨石類	整形磨石	安山岩	454.6	敲/凹	110.4	49.2	53.0
131	62	1住		I	磨石類	特殊磨石	砂質片岩	779.6		190.5	51.8	54.3
132		1土集	2区	J	磨石類		安山岩	262.3	磨/凹	93.8	67.0	33.2
133		2ナ集	1～2区	J	磨石類	整形磨石	安山岩	453.5	磨/敲/凹	(97.6)	70.8	46.0
134		8溝		J	磨石類		安山岩	237.2	磨/敲/凹	105.4	54.7	30.9
135		217土		J	磨石類	整形磨石	砂岩	481.7	磨/凹 縁を分割後整形	83.9	82.0	47.4
136		1土集	1区	J	磨石類	敲石	砂岩	179.9	敲	133.0	36.5	26.0
140	64	3ナ集	4区	K	玦状耳飾		蛇紋岩	8.7		(32.8)	(27.8)	7.5
141	65	検出面		I	異形石器		鉄石英	1.7		34.9	16.2	5.5

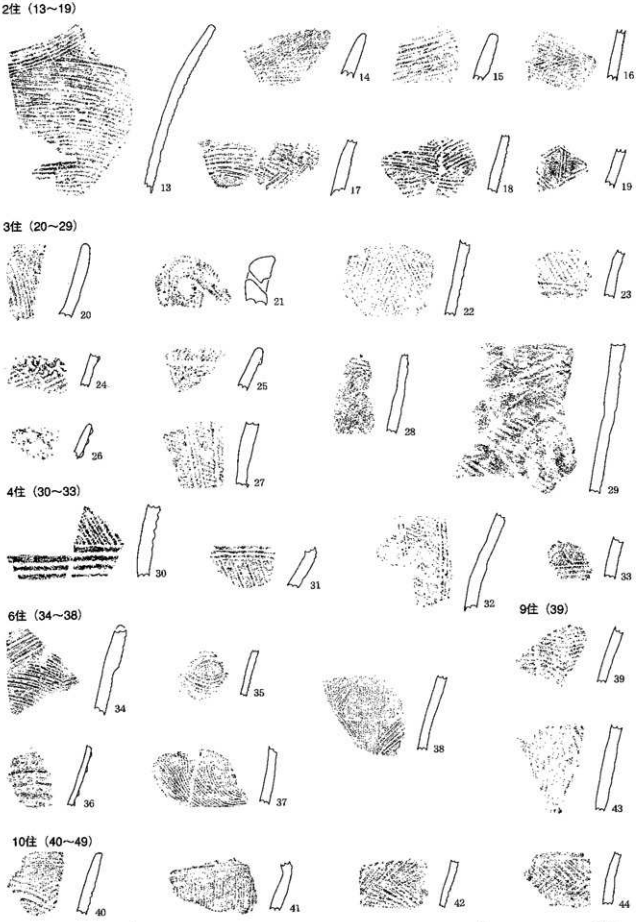
(3) 中山古墳群

No.	図No.	出土遺構	出土地点	調査区	器種	細別	石材	重量(g)	備考	残長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
12	12	71号古墳	南西部	K	石核		黒曜石	333.9		82.9	97	48.6
30		71号古墳	南西部	K	剥石		黒曜石	237.1		70.3	83.8	35.5
55		73号古墳	東周溝	N	石鏃	凹基無茎	黒曜石	0.4	先端・脚部欠け	(15.5)	(13.7)	2.5
57		66号古墳	南東部	A	石鏃未成品	凹基無茎	黒曜石	2.6		26.2	23.7	7.9
72	31	71号古墳	東周溝	K	石匙	横型	流紋岩	15.6		48.6	55.5	14.1

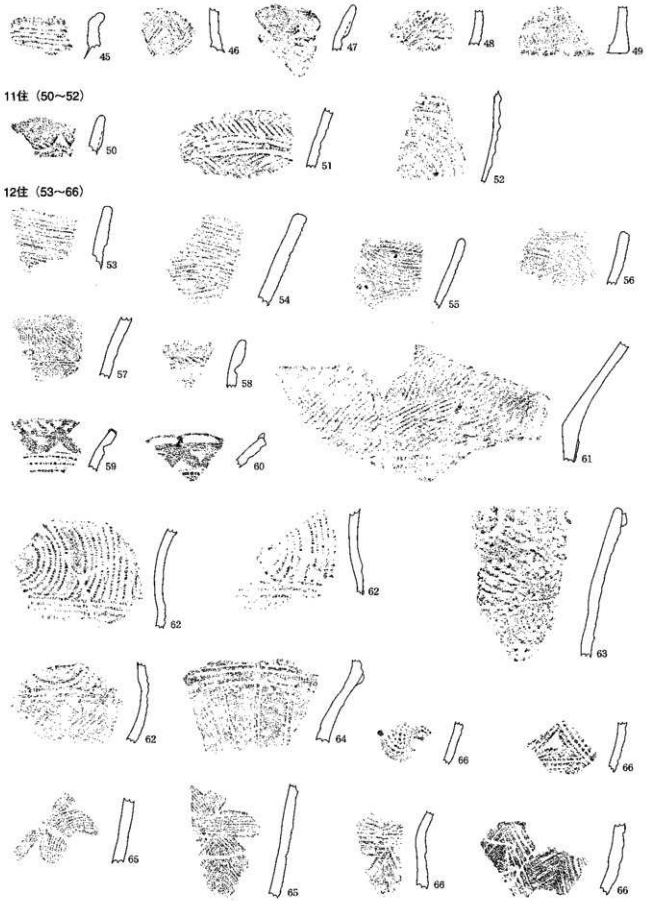
※（ ）は残存値



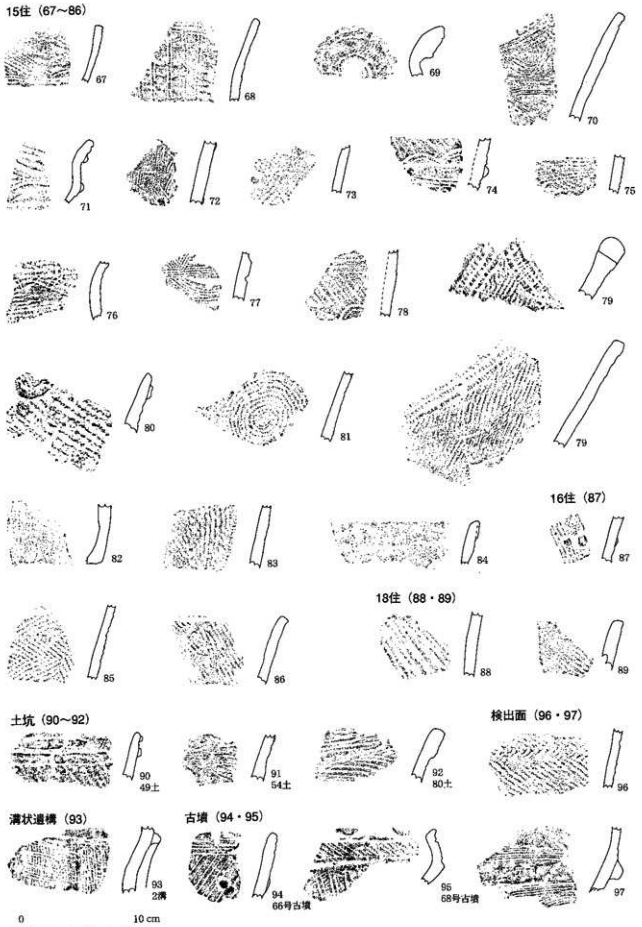
第62図　カニホリ東遺跡　出土土器（1）



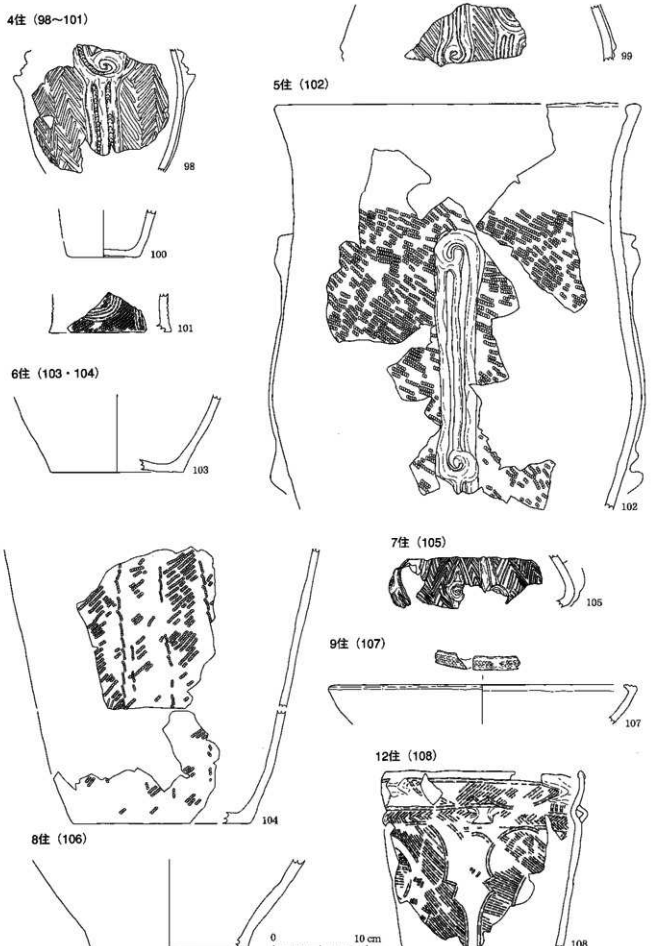
第63図　カニホリ東遺跡　出土土器（2）



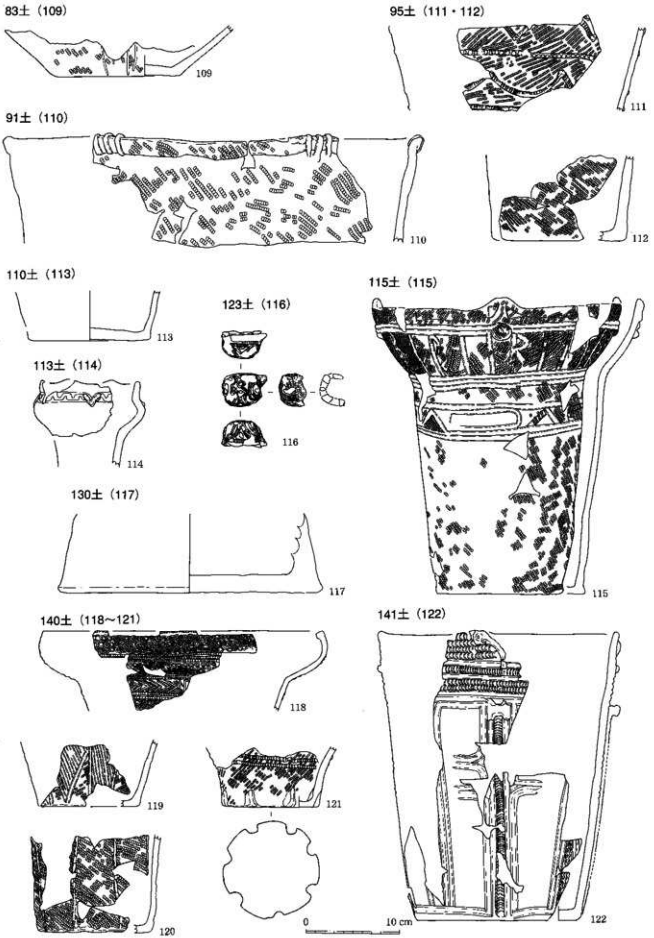
第64図　カニホリ東遺跡　出土土器（3）



第65図　カニホリ東遺跡　出土土器（4）

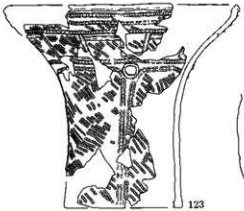


第66図　カニホリ西遺跡　出土土器（1）



第67図　カニホリ西遺跡　出土土器（2）

142土（123）

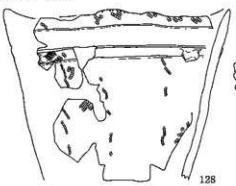


143土（124・125）

175土（126）

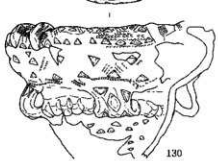
195土（127）

205土（128）

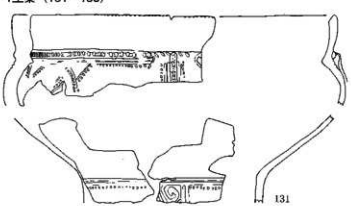


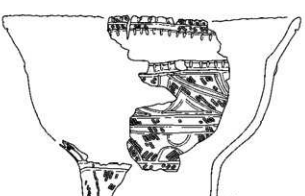
290土（129）

297土（130）

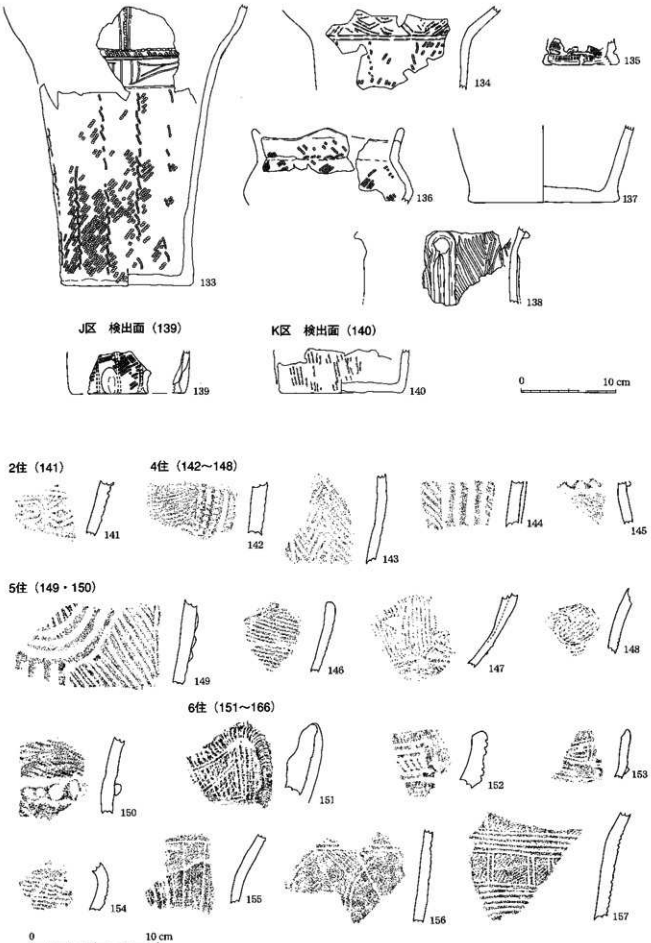


1土集（131～138）

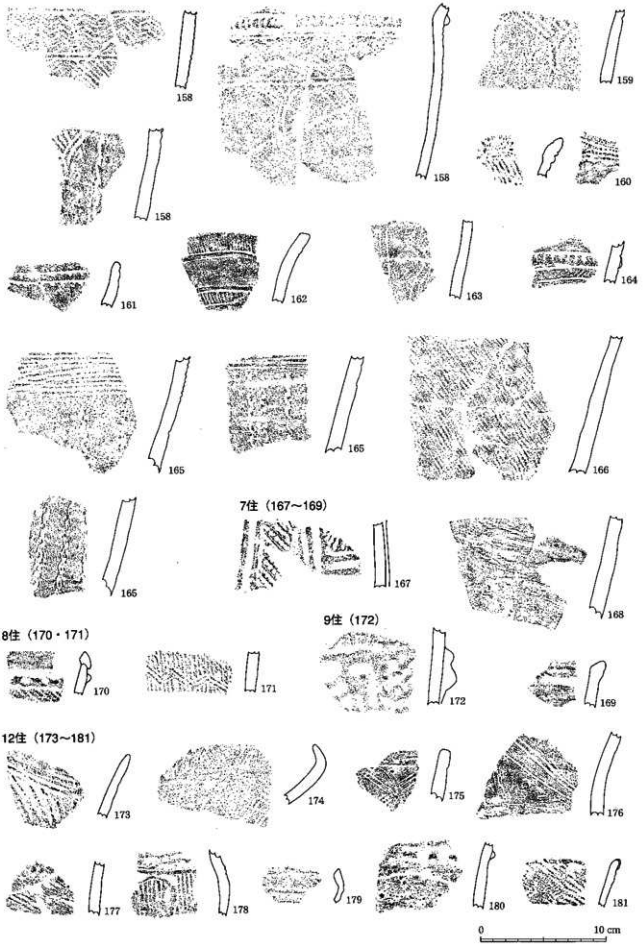




第68図　カニホリ西遺跡　出土土器（3）



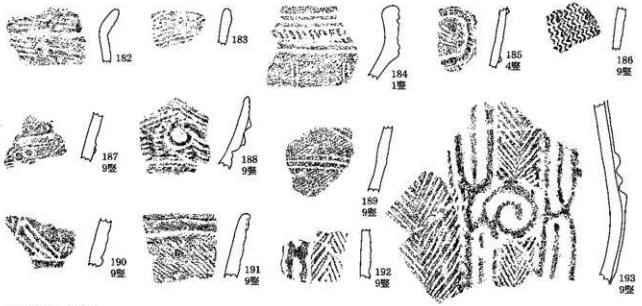
第69図　カニホリ西遺跡　出土土器（4）



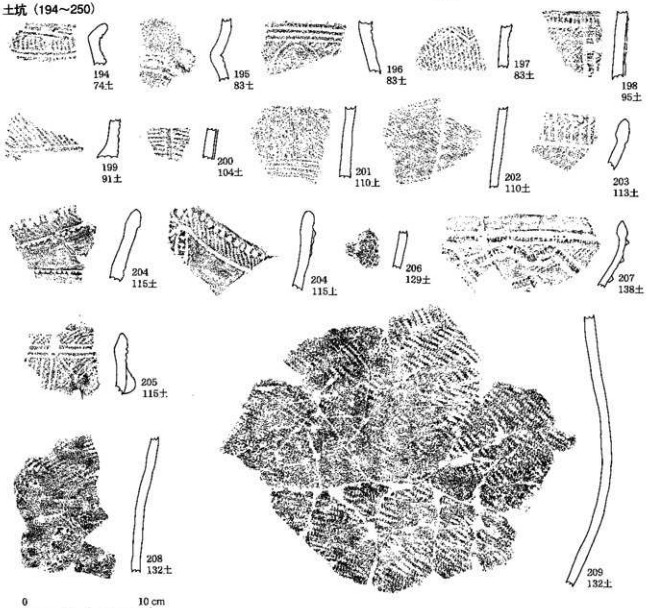
第70図　カニホリ西遺跡　出土土器（5）

13住（182・183）

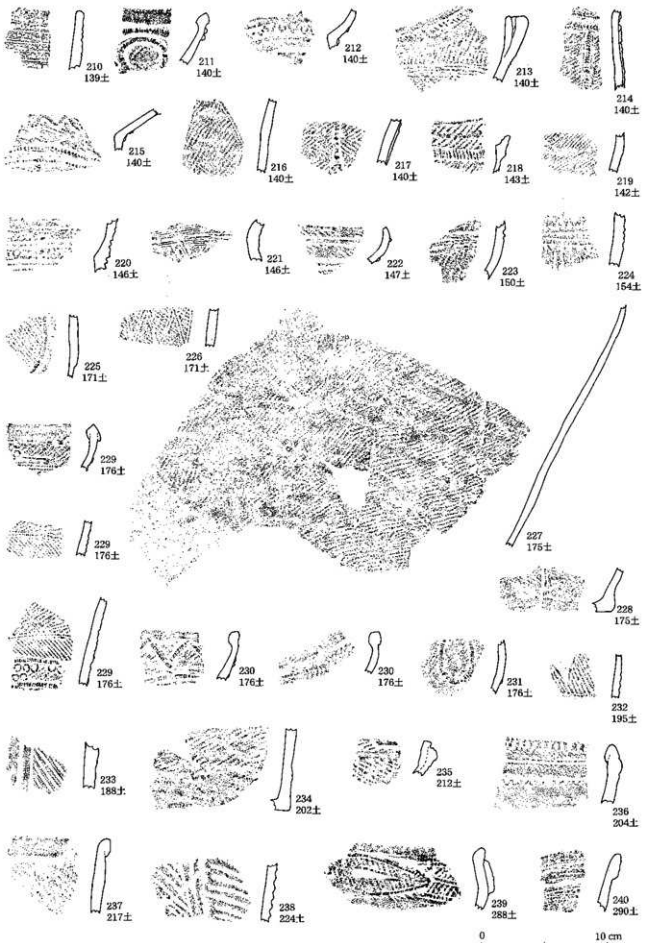
竪穴状遺構（184～193）



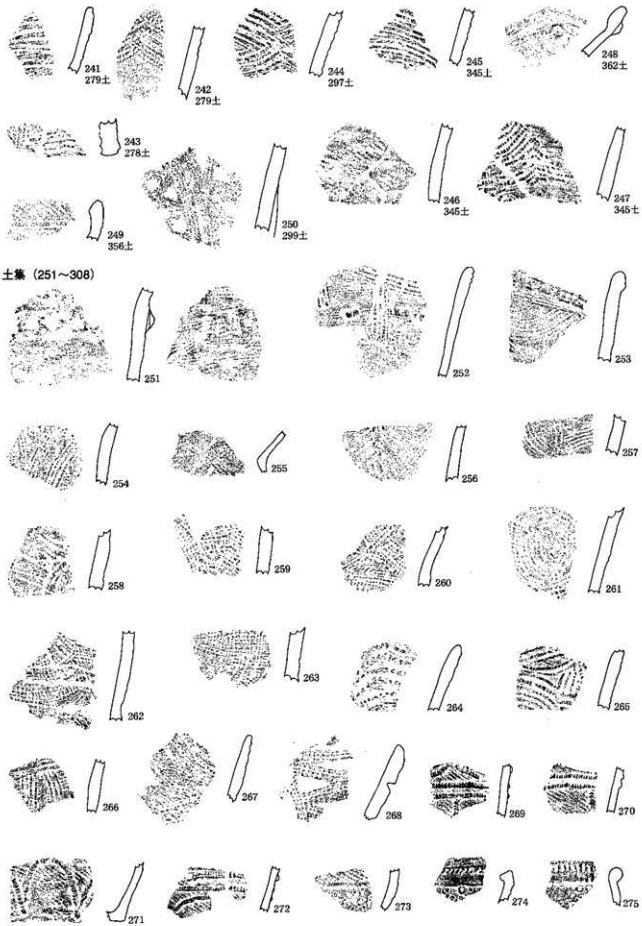
土坑（194～250）



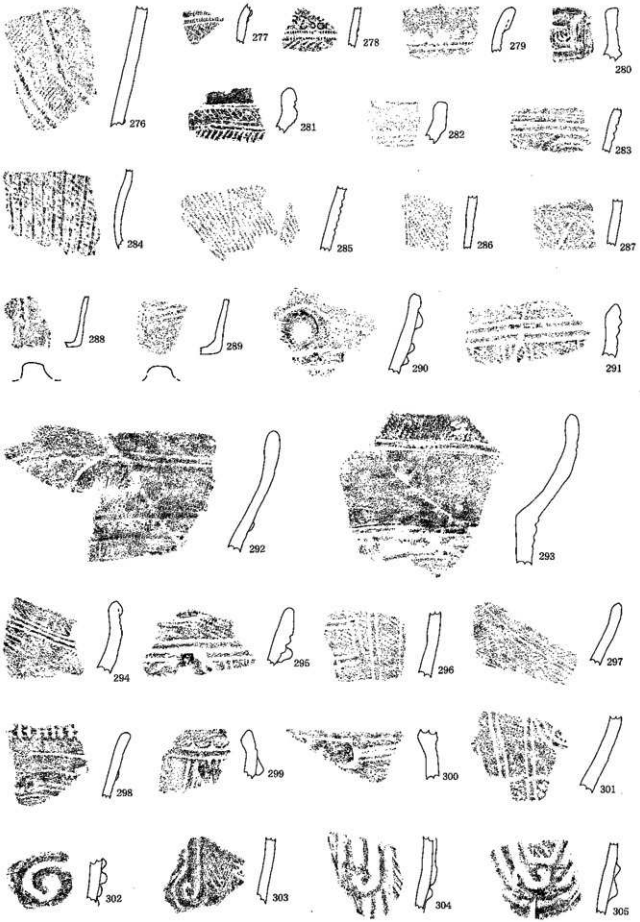
第71図　カニホリ西遺跡　出土土器（6）



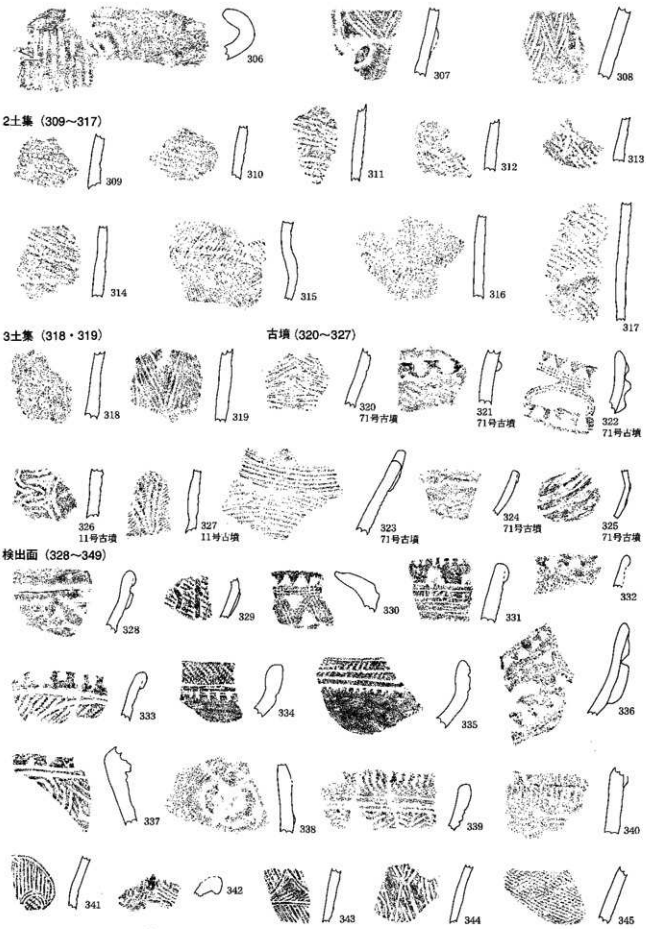
第72図　カニホリ西遺跡　出土土器（7）



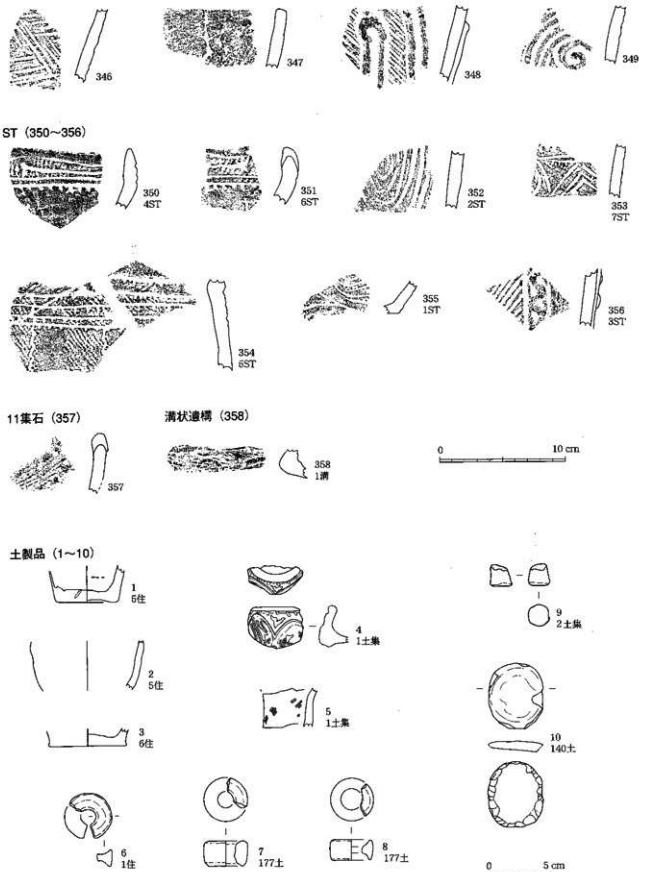
第73図　カニホリ西遺跡　出土土器（8）



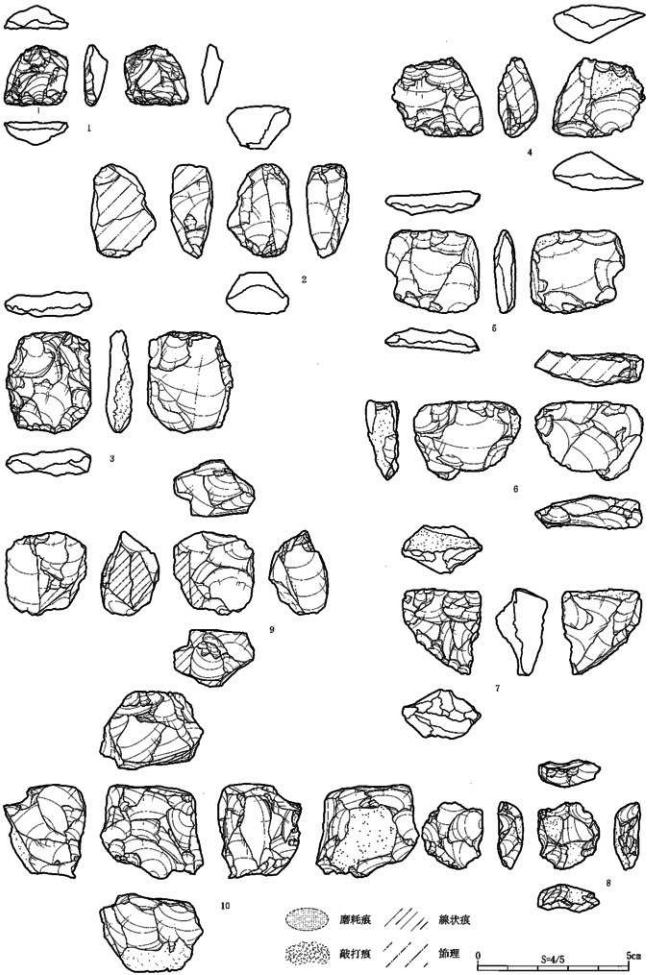
第74図　カニホリ西遺跡　出土土器（9）



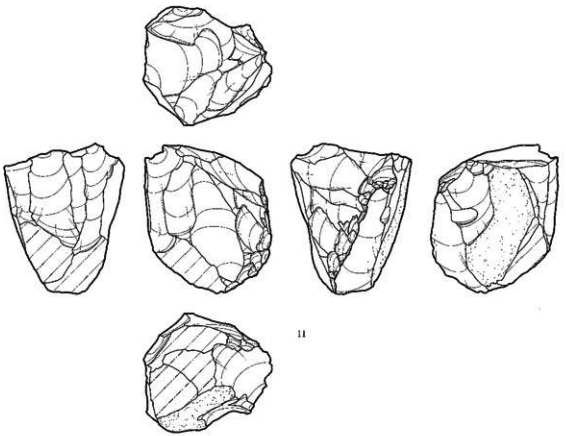
第75図　カニホリ西遺跡　出土土器（10）



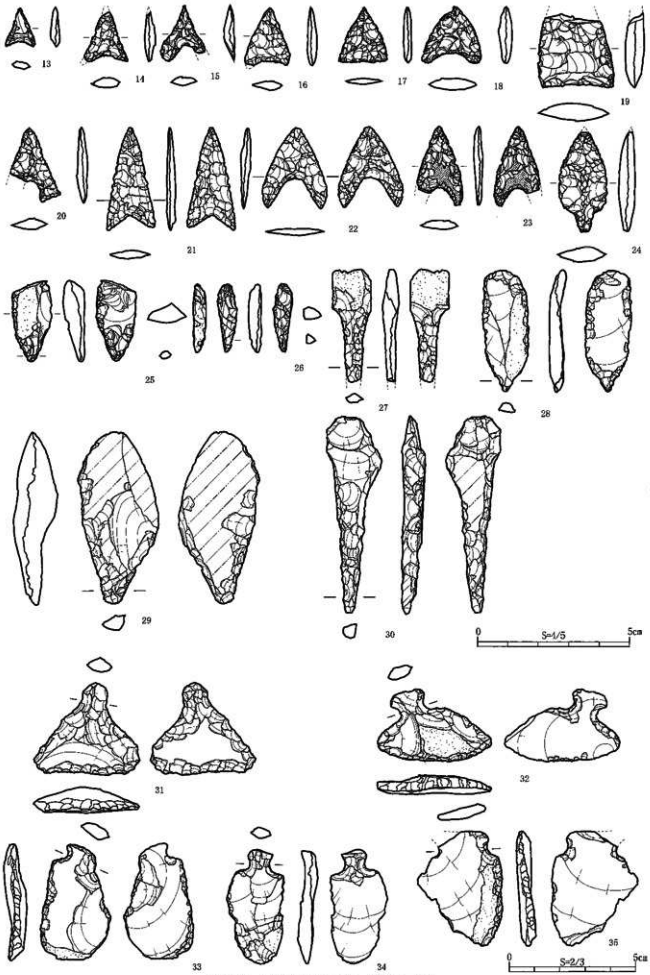
第76図　カニホリ西遺跡　出土土器（11）・土製品



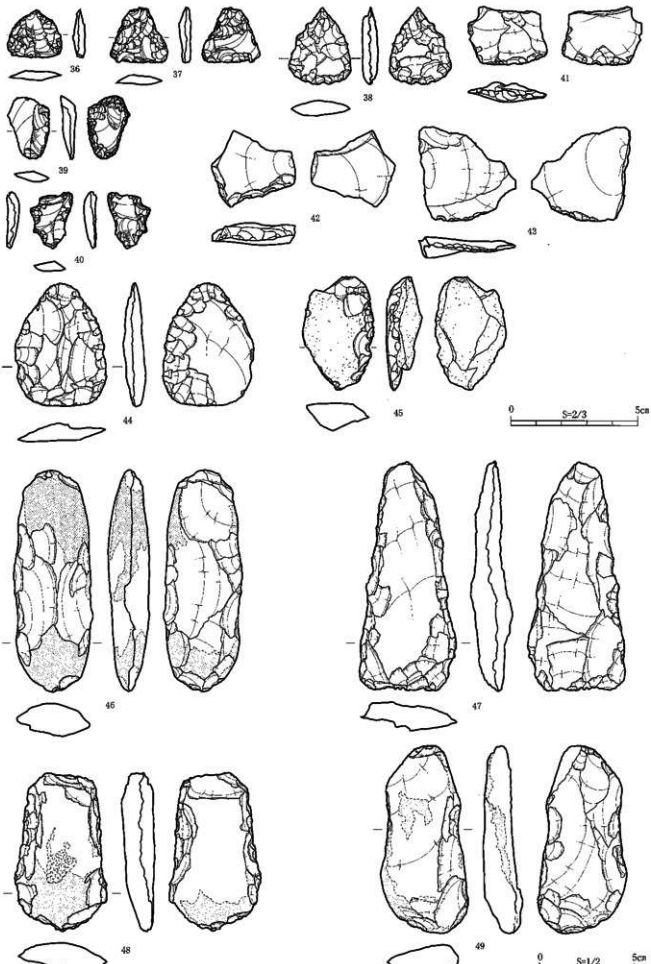
第77図　縄紋時代の石器・石製品（1）



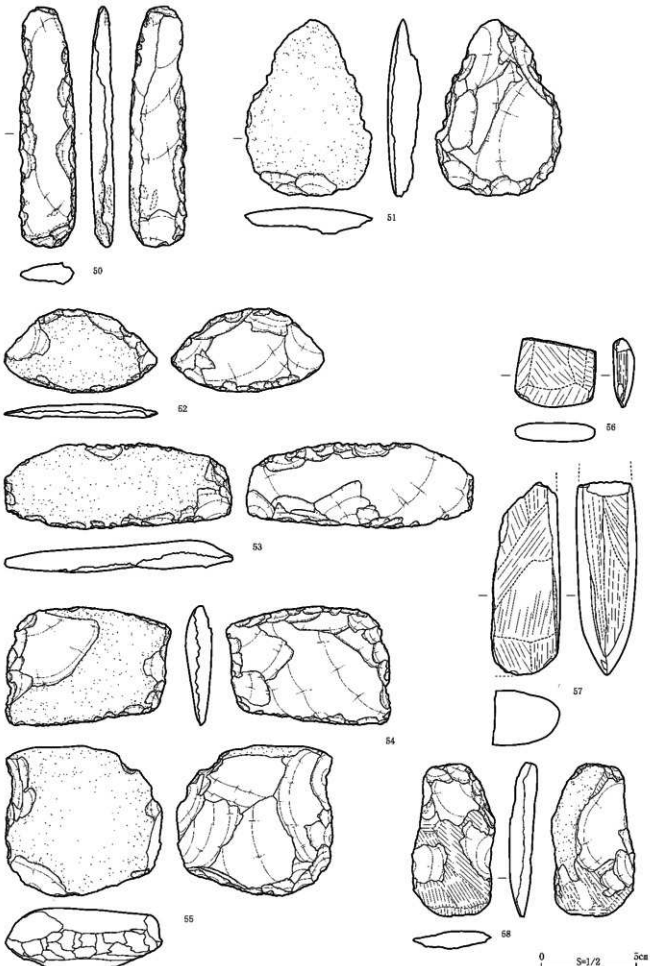
第78図　縄紋時代の石器・石製品（2）



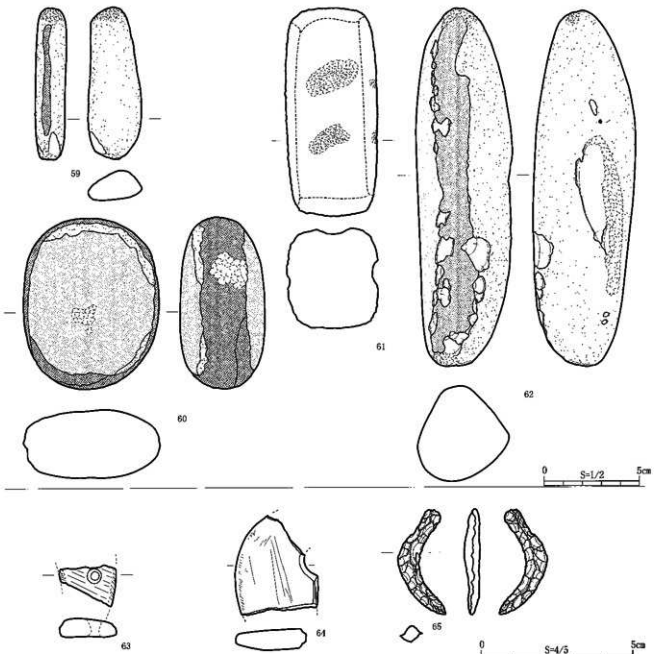
第79図　縄紋時代の石器・石製品（3）



第80図　縄紋時代の石器・石製品（4）



第81図　縄紋時代の石器・石製品（5）



第82図　縄紋時代の石器・石製品（6）

第13表　石器・石製品　器種・石材組成一覧表

	石核	石鏃	石錐	石匙	打製石斧	RF	石器未成品	UF	磨製石斧	磨石類	石皿類	玉類	剥片類	礫石	総計
黒曜石	186	47	33	2		155	14	90					1,925	15	2,467
チャート	1	7	1	2		17		2					14		44
細粒凝灰岩				1		3		1					14		19
頑火岩			1			1							4		6
ホルンフェルス					29	15				1			37		82
砂岩					7	6		1		26	1		14		55
砂質片岩					6	4			1	1			2		14
変性砂岩					3	3				1			7		14
泥岩	1					3							7		11
泥質片岩	1				22	12							9		45
安山岩										15	3		1		19
閃緑石										3			3		6
凝レイ石						1					1		3		5
変敢岩						1				1			2		4
玄武岩										1					1
下呂石				1											1
蛇紋岩					1				3						4
滑石												2			2
鉄石英												1			1
その他						1				2			4		7
総計	189	54	35	6	68	222	14	94	4	51	5	3	2,046	15	2,807

2節　古代の遺物

1　土器

(1)　種別・器種・器形

種別は土師器と須恵器があるが、圧倒的に須恵器が多く、土師器はわずかしかない。器種には、土師器に杯形土器（以下、「●形土器」は省略する。）・高杯・甕、須恵器に蓋杯・杯・鉢・蓋・長頸壺・短頸壺・平瓶・横瓶（・高杯）がある。さらに細分された器形としては、須恵器杯に杯A（無台）・杯B（有台）の2種、須恵器蓋に蓋A（端部内面に逆刺）・蓋B（端部が短く屈曲）の2種がある。また、須恵器長頸壺には、肩部に稜を持ち、口縁端部が頸部からそのまま外反するものと、肩部が丸く胴部が張り、高台を有し、口縁端部が上方へ屈曲するものの2形態がある。

須恵器の中には、胎土に大きな気泡を含んで焼け歪んだ仕上がりの悪いもの（第83図5～15）がある一方で、緻密な胎土と硬い焼きに端正な形態をもった、おそらく美濃須衛窯ないしは東海地方の窯からもたらされたもの（第83・84図19～21・29～33・38～42・51～53・63・65等）が散見される。

(2)　土器群と時期

各古墳、石積、土坑、検出面からまとまった出土があるので様相と時期を概観する。

61号古墳出土品（第83図1～4）　土師器杯1点・高杯1点、須恵器杯A2点が出土している。2の内面には黒色処理が観察される。4の外側面にはヘラによる「X」字状の刻印がある。完形品の4の形態からみて、7世紀末の所産と考える。

62号古墳出土品（第83図5～16）　須恵器杯A5点・蓋A6点・長頸壺の胴部1点が出土している。杯Aと蓋Bは口径が近似し、胎土に気泡の入る仕上がりの悪さも共通しており、おそらくセット関係でもたらされ、本古墳に副葬されたものと考える。長頸壺は肩部の丸い形態のものである。時期は杯A・蓋Aからみて、7世紀末をあてたい。なお、本古墳の副室から、長頸のフラスコ瓶もしくは長頸壺の一括品が出土したが、残念なことに調査中に盗難紛失してしまい、詳細は不明である。

63号古墳出土品（第83図17・18）　土師器甕の口縁部と長頸壺とみられる底部が出土したのみである。時期は7世紀末から8世紀前半と広く捉えておきたい。

65号古墳出土品（第83図19～25）　須恵器杯B1点・蓋B2点・平瓶2点・長頸壺の胴部2点が出土している。22は底が角張らない、把手の付かない形態の平瓶の底部と推定する。23は口頸部が異常に大きく胴部とのバランスを欠く平瓶である。24・25の長頸壺は肩部の丸い形態のものである。22は若干、時期を遡らせねばならないが、他は杯B・蓋Bの形態からみて8世紀前半の所産と推定する。

66号古墳出土品（第83図26～34）　須恵器杯A1点・杯B2点・蓋A2点・摘み部のみの端部不明の蓋2点・長頸壺の口縁部1点・口縁部を欠く短頸壺1点が出土している。33の長頸壺は口縁端部が屈曲する形態である。口径の小ささや自然釉のかかり方から、小形の高杯の脚端部の可能性も大きい。これらの土器群は、蓋Aの存在や杯Bの高台の形状から7世紀末の所産と推定する。

68号古墳出土品（第83図35～42）　須恵器杯A1点・底部不明の杯2点・蓋B2点・長頸壺3点が出土している。35・37の杯はA・Bいずれの可能性もあって決めかねる。長頸壺の40と42は肩部に稜を有する形態で、42の口縁端部は屈曲せずにそのまま外反する器形である。粘土円板貼付の成形が良くわかる。時期は杯の形態と蓋Bの存在から8世紀初頭から前半と推定する。

71号古墳出土品（第84図44～47）　須恵器蓋B1点が出土している。外面に濃く自然釉がかかるもので、端部の形状から、8世紀前半を下らないものと推定する。

73号古墳出土品（第84図44～47）　須恵器杯B2点・蓋B1点・長頸壺の胴部1点が出土している。杯Bの

44・45は形態や焼成状態が近似しているうえに、底面に短線1本の同様なヘラ記号を持つ。セットでもたらされ、古墳に埋納されたものと推定する。47の長頸壺は肩部が丸い形態で、口頸部接合のための粘土円板貼付痕が良くわかる。蓋Bの端部形態や杯Bから、8世紀初頭から前半代の年代が与えられよう。

A石積出土品（第84図48～56） 須恵器杯A1点・杯B1点・鉢1点・蓋B2点・摘み部のみで蕨部不明の蓋1点・平瓶3点が出土している。50の鉢は口縁端部外面に沈線が巡り、おそらく仏器の銅椀を模したものと推定する。55は口縁外面の稜の下部に凸帯がないのと粘土円板に接合されている点からフラスコ瓶ではなく、平瓶もしくは頸部の短い長頸壺と考えた。56は底径、肩高から平瓶とした。時期を全体的にみると7世紀末から8世紀前半と幅があるが、発掘調査時の所見より、A石積自体が周囲の古墳を破壊しながら、後世に作られたものであると捉えられているので、周囲の古墳の年代観からみて問題はなかろう。

B石積出土品（第84図57～63） 須恵器杯A1点・杯B5点・蓋B1点が出土している。杯Bはいずれも底部ばかりだが、底面が回転ヘラ切未調整（58・61・62）、回転ヘラ切後手持ケズリ（59）と古い要素を持ち、高台の形態もいわゆる外にふんばるものである。8世紀初頭までに位置付けられる一群と考える。蓋Bはこれよりわずかに年代が下る可能性があるが、本址がA石積と同様の遺構である性格上、時期差が生じていても理解できる。

80土出土品（第84図64～66） 須恵器杯B1点・蓋A2点が出土している。いずれも破片であるが、7世紀末に置ける資料と考えている。

228土出土品（第84図67） 須恵器杯A1点のみであるが、他の杯Aに対し底面が小さく、糸切痕を残すことから、8世紀後半以降に位置付けられるものであり、今回、報告される古代の土器の中では最も新しい時期に属する。

A区検出面出土品・表採品（第84図68～74・81） 8点の須恵器が図化提示できている。68～70が杯A、71～74が杯B、81はおそらく長頸壺の頸部である。7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられ、A区に展開する古墳群（第61～70・72・73号古墳）に、ほぼ併行しており、これらは古墳・古墳周溝への埋納品の一部だったものが、古墳破壊時に拡散した可能性が高い。

I区検出面出土品（第84図75・76） 須恵器蓋杯が2点図化提示できている。いずれも体部上半と蓋受け部、立ち上がり部の一部が残存しているのみである。7世紀後半代のものであろう。今回出土の古代の土器の中では最古の部類に属し、I地区及びその周辺に、かつてこの時期の古墳が存在した可能性を窺わせる。

N区検出面出土品（第84図77・78） 須恵器蓋Bと横瓶が1点ずつ、図化提示できた。横瓶は肩部の端部のみで全形を知り得ない。粘土円板貼付によって、側面の穴を外側から塞いだ跡がよくわかる。いずれも7世紀末から8世紀前半に属するものであろう。N区の古墳（第73号古墳ないしは湮滅古墳）に伴っていたものである可能性がある。

10住出土品（第84図79・80） 土師器甕の底部が2点出土している。79は工具ナデ、80には内面に明瞭なハケメ調整がみえる。古墳時代後期に属するものと考えるが、本址は縄紋時代の遺構なので、明らかに紛れ込みであろう。本址を切る63号古墳に属する可能性が高い。

(3) 古代の土器まとめ

ほとんどの土師器・須恵器が古墳群に関連するものと考えて間違いはないであろう。時期的には、7世紀後半から8世紀前半代の範囲に収まり、古墳群の造営時期および祭祀の継続期間と重なるものと考えたい。特に、62号古墳出土の粗悪な焼成の須恵器杯Aと蓋A（5～9、11～15）、73号古墳出土の同じヘラ記号を持つ2個体の杯B（44・45）は、良好なセット関係を有しているものと言えよう。

今回、報告した古代の土器のなかで、唯一、228土出土の須恵器杯A（67）が8世紀後半以降に下るものであり、当該土坑の性格を検討する必要があろう。

2　石製品・ガラス製品（第84図、第16表）

本稿では古代に属する石・ガラス製品を扱う。石製品は73号古墳から水晶製の切小玉１点が出土している。六角形状を呈し、明瞭な研磨痕跡が確認される。研磨は一部を除き長軸と直行方向に行われており、穿孔は単方向で行われている。ガラス製品は61号古墳から３点、64号古墳から１点、計４点の臼玉が出土した。色は水色と群青色で各２点出土している。水晶の原石２点が出土し、１点は67号古墳から出土している。

3　金属製品（第85図、第17表）

(1) 種別・器種

中山古墳群、カニホリ東・西遺跡から27点の金属製品が出土している。種類は武器、馬具、釘、銭貨がある。実測は全形をうかがわれるもの、特徴的なものを中心に行い、24点を掲示した。中山古墳群の遺物は、64号古墳9点、73号古墳2点の合計11点である。カニホリ東・カニホリ西遺跡の遺物は、Ａ・Ｂ石積、５炭、1住、２土集などから出土しているが、発掘調査時の所見より、5炭の不明品（1）、銭（10・11）を除き、古墳からの混入遺物の可能性が高い。釘以外のものは、副葬品と考えられる。

(2) 中山古墳群出土品

64号古墳出土品（１～９）　刀子1点、鏃６点、釘１点、不明1点が出土している。１は目釘と推定される穴があり、最大幅が21.5㎜と小さいことから刀子の装具（柄頭）の可能性が高い。片側が開いた状態で出土した。端部は連続する波形状に切られている。目釘と推定される穴は端部から９㎜の部分にあり、直径３㎜程を測る。外面には部分的に金鍍金が残る。鏃は６点出土しているが、全形をうかがえるものはない。３は鏃身部と頸部の一部が残存する。鏃身部平面は五角形を呈し、逆刺がある。先端は丸みを帯びる。鏃身部長23㎜、最大幅29㎜、厚さは鏃身部で最大2.0㎜、頸部3.7㎜と薄く、両刃の平造りと推定される。２は頸部～篦代部が残存し、棘篦被をもっている。８は釘の破片で、頭部が残存する角釘である。頭部を直角に折り曲げ、平坦面が作り出される。９は不明品。平面は半楕円の板状を呈し、両側を折り返している。

73号古墳出土品（10）刀子1点、不明1点がある。10は両関の完形品で、身部は112㎜、茎部76㎜の長さを測る。全体的に直線的だが、切先は僅かに反り返る。

(3) カニホリ東遺跡出土品

１住出土品（１）刀の可能性がある責金具1点が出土している。最大幅25.9㎜を測る。

Ａ・Ｂ石積出土品（３～７・９～11）　３は最大長27.6㎜を測る小形の鉄地金銅貼の鉸具で、杏葉の一部の可能性が高い。構造的には、刺金が横棒を包み込んで折り返され連結している。４は金銅板の破片で鋲止痕が1箇所認められる。５は突起部分があり、鉸具の一部と思われる。９は板状の不明品で、折れ重なった状態で出土した。直径1.5㎜程の孔が1箇所認められる。６・７は小破片のため器種は不明だが、形状から刀子の茎部の可能性が高い。10は寛永通寶、11は錆膨れが激しいが、中央に方孔があることから鉄銭である可能性が高い。

(4) カニホリ西遺跡出土品

２土集出土品（2・3）　２は弓弭付近にとりつけた飾り金具と推定される破片で、片側が失われている。表面長軸に直交する方向の木質部が確認できる。古墳から混入した遺物の可能性が高い。３は角釘の先端部破片と思われる。

4 骨

各古墳から出土・検出された骨類は、1点を除いて人骨であり、火焼を受けた埋葬骨である。ただし古墳によりその遺存状態は一様でない。ほぼ一個体分にちかい骨量が残る石室例に比べて、わずかな骨片が散見できる程度の例など、二次的な埋葬の内容の相違が推察される。残存する骨は火焼を被った骨類の一般的な性状をとどめている。色調は灰・白色を呈し、骨質は極めて堅緻となるが、一方収縮・捻転など変形がすすみ、細かな亀裂を生じ、すべてが細片状となって原形を保たない。さらに再埋葬のための移動なども作用し、微細な骨片として残存する程度となる。そのため骨格の部位から推定できる性別・年齢等に加えて、その形質的な特徴などは全く不明である。以下、各古墳等の出土人骨等の概要について記載する。

220土 古墳群に比べてきわめて多量に一括される人骨である。すべては細片状に崩壊するが、ほぼ全身にわたる部位の骨が認められる。頭骨各部で脳頭蓋の板状骨片が多い。脊椎骨や肋骨、上肢骨などの細片とともに大形長骨の断片も含まれる。橈骨頭の部分が2例完存し、それぞれ16、13mmと径の大きさに相違が見られ、複数の人骨の混在が推定される。

61号古墳 全体に少量の骨片に限られる。僅かに指骨の一部が認められる。

62号古墳 微細な骨片が僅少である。

63号古墳 微細な骨片のみ。長さ1.5cmの長骨片1点が最大。

64号古墳 石室内中央辺の約100×75cmの範囲内に集中して検出されたもので（骨の総重量1,771ｇ）全身にわたる部位の骨はすべて細片化し、散乱状態で集積されている。

頭骨は縫合線より離脱した板状骨片、眼窩縁や下顎骨の筋突起部分などが認められる。脊椎骨、鎖骨、肩甲骨などの小部分と、脛骨の骨体断片は接合により約10cm長となる。

66号古墳 すべて細片状の骨片のみである。頭骨の板状小片がかなり散見し、下顎骨の骨体の一部も混在する。脊椎骨の破片が数点、肋骨の一部、指骨片などのほか、四肢骨部分はわずかで、すべて細片状となっている。

67号古墳 微量の細片のみである

68号古墳 頭骨の縫合痕のある板状細片が数片。やや多量の骨片は長骨を主に各部の断片である。

69号古墳 細片が1、2点。

71号古墳 頭骨の板状骨片が若干。長骨の断片で骨壁の厚いものは脛骨の一部とみなされ、その他は微細な骨片のみである。

72号古墳 少量の骨片のみ。

73号古墳 頭骨の板状小片数片。長骨片は前腕骨のものか。他はすべて細片。

A区 2T 頭骨の板状骨片と細片2片のみ。

J区 西部検出面 薄片状の骨1片で、5.5×2.0cm、厚さ3ｍｍの大きさのものである。シカの角とみられ、表面の溝の凹凸が磨耗しながらも僅かに残る。特に切痕や研磨の痕は見られない。

第14表 人骨一覧表

遺跡名	出土遺構	重量（g）	部 位
カニホリ東	220土	1,898	頭骨、脊椎骨等ほぼ全身
中山古墳群	61号古墳	11	指骨
中山古墳群	62号古墳	2	不明
中山古墳群	63号古墳	12	不明
中山古墳群	64号古墳	1,771	頭骨、上腕骨等ほぼ全身
中山古墳群	66号古墳	561	頭骨、下顎骨、脊椎、肋骨等
中山古墳群	67号古墳	6	不明
中山古墳群	68号古墳	196	頭骨、上腕骨、大腿骨等
中山古墳群	69号古墳	2	不明
中山古墳群	71号古墳	86	頭骨、長骨等
中山古墳群	72号古墳	2	不明
中山古墳群	73号古墳	82	頭骨、長骨等
カニホリ東	A区2T	4	頭骨

第15表 古代の土器観察表

No.	地点	種別	器種	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	残存度	成形・調整・形態 外面	成形・調整・形態 内面	実測番号	注記
1	61号古墳	上師器	杯	8.8			□1/4	ナデ	ナデ	A61墳3	61号墳002
2	61号古墳	土師器	高杯				接1/2	ミガキ摩滅	ミガキ、黒色処理	A61墳4	61号墳001
3	61号古墳	須恵器	杯A	12.2			□1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	A61墳2	61号墳001・012
4	61号古墳	須恵器	杯A	13.5	8.8	3.95	完	ロクロナデ、回転ケズリ、体部にヘラ記号	ロクロナデ	A61墳1	61号墳003
5	62号古墳	須恵器	杯A	10.4	－	3.35	□1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳1	62号墳019・020、T1-001
6	62号古墳	須恵器	杯A	10.4	－	3.55	□2/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳5	62号墳007・012・013・020
7	62号古墳	須恵器	杯A	10.3	－	3.7	□2/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳4	62号墳014・015・019、62-2号墳072
8	62号古墳	須恵器	杯A	11.0	－		□1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳2	62号墳019
9	62号古墳	須恵器	杯A	11.8	－	3.7	□1/12	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳3	62号墳020、62-2号墳070
10	62号古墳	須恵器	蓋A	8.3	－	3.2	□完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳10	62号墳006
11	62号古墳	須恵器	蓋A	8.8	－	3.3	□完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳9	62号墳008
12	62号古墳	須恵器	蓋A	8.5	－	3.35	□完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳11	62号墳005・010・020
13	62号古墳	須恵器	蓋A	7.3	－		□1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳7	62号墳020、62-2号墳070
14	62号古墳	須恵器	蓋A	7.3	－		□1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳6	62号墳011
15	62号古墳	須恵器	蓋A	10.8	－		□1/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A62墳8	62号墳007
16	62号古墳	須恵器	長頸壺				胴1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A62墳12	62号墳009・013・016・019、62-2号墳070
17	63号古墳	土師器	甕	13.0			□1/6	ナデ	ナデ	A63墳2	63号墳021
18	63号古墳	須恵器	壺?		5.6		底1/6	回転ケズリ	ロクロナデ	A63墳1	63号墳021
19	65号古墳	須恵器	杯B	13.0	10.7	3.4	□1/2	ロクロナデ、ヘラ切り後手捏ちケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A65墳5	65号墳032・038・041、70号墳064
20	65号古墳	須恵器	蓋B	15.1	－	2.55	□1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A65墳7	65号墳031・032・041・044
21	65号古墳	須恵器	蓋B	15.1	－	2.7	□完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A65墳6	65号墳033・038・044
22	65号古墳	須恵器	平瓶?		7.4		底3/4	ロクロナデ、ヘラ切り後タタキ	ロクロナデ	A65墳1	65号墳044、石ヌ001
23	65号古墳	須恵器	平瓶	13.6	16.1	16.7	口1/4	ロクロナデ、回転ケズリ、ケズリ	ロクロナデ	A65墳3	65号墳034、70号墳065・066、石ヌ001・005
24	65号古墳	須恵器	長頸壺		10.0		底1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A65墳2	65号墳038、70号墳063、横出014
25	65号古墳	須恵器	長頸壺				底1/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A65墳4	65号墳035・044、石ヌ003
26	66号古墳	須恵器	杯A		7.2		底2/3	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	A66墳6	66号墳054
27	66号古墳	須恵器	杯B	14.0	10.8	3.9	底2/5	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、胎土に気泡	A66墳7	66号墳052、石ヌ001
28	66号古墳	須恵器	杯B		12.7		底1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A66墳8	66号墳048
29	66号古墳	須恵器	蓋A	12.0	－	3.1	□1/12	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A66墳1	66号墳053・054
30	66号古墳	須恵器	蓋A	11.2	－		1/8	ロクロナデ	ロクロナデ、美濃須衛	A66墳3	66号墳047
31	66号古墳	須恵器	蓋		－		摘み完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A66墳2	66号墳052
32	66号古墳	須恵器	蓋		－		摘み完	ロクロナデ	ロクロナデ、美濃須衛	A66墳5	66号墳054
33	66号古墳	須恵器	長頸壺	9.0			□1/5	ロクロナデ、高杯脚部の可能性	ロクロナデ、美濃須衛	A66墳9	66号墳048
34	66号古墳	須恵器	短頸壺		6.6		底2/3	ロクロナデ、回転ケズリ、ケズリ	ロクロナデ	A66墳10	66号墳045・046・057・058、70号墳065、7作003、横009
35	68号古墳	須恵器	杯	12.8			□1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	A68墳3	68号墳062
36	68号古墳	須恵器	杯A	13.0	9.2	3.4	底完	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	A68墳5	68号墳055
37	68号古墳	須恵器	杯	15.0			□3/8	ロクロナデ	ロクロナデ	A68墳4	68号墳056・060

No.	地点	種別	器種	寸法			残存度	成形・調整・彩飾		実測番号	注記
				口径	底径	器高		外面	内面		
38	68号古墳	須恵器	壷B	14.9	−	3.7	口1/3	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A68墳1	68号墳059・062
39	68号古墳	須恵器	壷B	15.3	−	3.4	口1/12	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A68墳2	68号墳058・060
40	68号古墳	須恵器	長頸壷					ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛・東海	A68墳7	68号墳060・062、溝3-003
41	68号古墳	須恵器	長頸壷		8.8		底1/3	回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛・東海	A68墳6	68号墳060
42	68号古墳	須恵器	長頸壷	10.6			口1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、粘土円板貼付、美濃須衛・東海?	A68墳8	68号墳057・060・061・062、石ｽﾐ001
43	71号古墳	須恵器	壷B	14.6			口1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	K71墳7	ｵ=西71ｺ015
44	73号古墳	須恵器	杯B	16.2	11.0	4.1	口一部欠	ロクロナデ、回転ケズリ、底面にヘラ記号	ロクロナデ	N73墳1	73号墳006
45	73号古墳	須恵器	杯B	15.2	10.5	4.05	口3/5	ロクロナデ、回転ケズリ、底面にヘラ記号	ロクロナデ	N73墳2	73号墳001・007・010・011
46	73号古墳	須恵器	壷B	18.1	−		口1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	N73墳3	73ｺﾋ003、73ｺ014
47	73号古墳	須恵器	長頸壷				肩1/8	ロクロナデ	ロクロナデ、粘土円板貼付	N73墳4	73ｺﾋ002・005
48	A石積	須恵器	杯A		8.4		底7/8	回転ケズリ後ナデ	ロクロナデ	A石積A4	石ｽﾐA001
49	A石積	須恵器	杯B		9.5		底僅か	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	N石積A2	石ｽﾐA005
50	A石積	須恵器	鉢	14.4			口1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	N石積A1	石ｽﾐA004
51	A石積	須恵器	壷		−		摘み完	回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A石積A3	石ｽﾐA001
52	A石積	須恵器	壷B	13.9	−		口1/8	ロクロナデ	ロクロナデ、美濃須衛	A石積A1	石ｽﾐA005
53	A石積	須恵器	壷B	16.0	−		口1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	A石積A2	石ｽﾐA006
54	A石積	須恵器	平瓶	7.0			口1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	A石積A6	石ｽﾐA001
55	A石積	須恵器	平瓶	5.8			口完	ロクロナデ	ロクロナデ	A石積A7	石ｽﾐA003
56	A石積	須恵器	平瓶		18		底1/24	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	A石積A5	石ｽﾐA006
57	B石積	須恵器	杯A	13.0			口1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	N石積B2	石ｽﾐB010
58	B石積	須恵器	杯B		9.8		底3/5	ロクロナデ、回転ヘラ切未調整	ロクロナデ	N石積B5	石ｽﾐB004
59	B石積	須恵器	杯B		10.6		底2/5	ロクロナデ、回転ヘラ切後手持ケズリ	ロクロナデ	N石積B7	石ｽﾐB002
60	B石積	須恵器	杯B		6.9		底1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	N石積B4	石ｽﾐB003
61	B石積	須恵器	杯B		9.3		底1/4	ロクロナデ、回転ヘラ切未調整	ロクロナデ	N石積B6	石ｽﾐB010
62	B石積	須恵器	杯B		10.6		底1/4	回転ヘラ切	ロクロナデ	N石積B3	石ｽﾐB010
63	B石積	須恵器	壷B	14.9	−	3.7	口1/10	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、美濃須衛	N石積B1	石ｽﾐB010
64	80土	須恵器	杯B		7.6		底1/5	回転ヘラ切	ロクロナデ	A土80-3	土80-008
65	80土	須恵器	蓋A	12.0	−			ロクロナデ	ロクロナデ、美濃須衛	A土80-1	土80-008
66	80土	須恵器	蓋A	12.0	−		口1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A土80-2	土80-008、検002
67	228土	須恵器	杯A		6.2		底1/4	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	N土228-1	土228-005
68	A区検	須恵器	杯A	10.2		3.1	口1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	A検8	検003
69	A区検	須恵器	杯A	13.4	6.8		底1/3	ロクロナデ、ヘラ切後ナデ	ロクロナデ	A検6	検006
70	A区検	須恵器	杯A		8.15		底2/3	ロクロナデ、ヘラ切後工具ナデ	ロクロナデ	A検7	検013
71	A区検	須恵器	杯B	10.9			口1/9	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A検1	検012
72	A区検	須恵器	杯B	13.9	9.5	4	底1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A検3	検012
73	A区検	須恵器	杯B		10.5			ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A検4	検012
74	A区検	須恵器	杯B		10.7		底1/16	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	A検5	検009
75	I区検	須恵器	壷杯				蓋1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	I検	ｵ=西検007
76	I区検	須恵器	壷杯					ロクロナデ	ロクロナデ	I検	ｵ=西検001
77	N区検	須恵器	壷B	16.2	−		口1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	N検1	検出001
78	N区検	須恵器	横瓶					ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ、粘土円板貼付	N検2	検出002
79	10住	土師器	甕		6.4		底2/3	工具ナデ	工具ナデ	A10住1	10住005
80	10住	土師器	甕		8.25		底完	ナデ、木葉圧痕	ハケメ、指頭圧痕	A10住2	10住005、検004
81	A区表採	須恵器	長頸壷					ロクロナデ	ロクロナデ	A表1	表001

第16表　古代の石製品・ガラス製品一覧

No.	図No.	遺跡名	出土遺構	出土地点	調査区	器種	石材	重量(g)	備考	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	穿孔部径(mm)
1	1	中山古墳群	73号古墳		N	切子玉	水晶	2.2		15.5	12.3	10.9	3.9
2	2	中山古墳群	61号古墳	南西部	A	臼玉	ガラス	0.1以下	水色	3.6	3.7	1.9	1.2
3	3	中山古墳群	61号古墳	北東部	A	臼玉	ガラス	0.1以下	青色	3.7	3.5	2.3	1.2
4	4	中山古墳群	64号古墳	北西部	A	臼玉	ガラス	0.1	群青色	3.9	4	3	1.4
5	5	中山古墳群	61号古墳	北西部	A	臼玉	ガラス	0.1	群青色	4.1	4	3	1.2
6		中山古墳群	67号古墳		A	原石	水晶	19.2		32.8	28.9	13.2	
7		カニホリ東	検出面		B	原石	水晶	50.8		66	23.2	24.6	

第17表　金属製品一覧表

中山古墳群

No.	図No.	器種	出土遺構	出土地点	寸法(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	金属種別	備考
1	1	刀子	64号古墳	N0.11	(59.9)	21.5	(11.3)	(10.7)	鋼	柄頭（推定長39.6mm）、金鍍金、目釘穴1孔?
2	2	鏃	64号古墳	No.6	(112.0)	(12.5)	(6.0)	(6.8)	鉄	頸部～鏑代部破片
3	3	鏃	64号古墳	No.22	(28.7)	29.4	(3.7)	(3.9)	鉄	身部平面五角形、逆刺
4	4	鏃	64号古墳	石室	(44.6)	(8.2)	(5.6)	(2.9)	鉄	頸部破片
5	5	鏃	64号古墳	西南	(16.5)	(3.3)	(2.9)	(0.3)	鉄	頸部破片
6	6	鏃	64号古墳	北東	(67.1)	(10.2)	(6.3)	(4.4)	鉄	頸部破片
7	7	鏃	64号古墳	北東	(26.4)	(8.7)	(7.3)	(1.9)	鉄	頸部破片
8	8	釘	64号古墳	北東	(35.4)	8.1	5.3	(1.6)	鉄	角釘、頭部残存
9	9	不明	64号古墳	No.1	45.8	(44.5)	8.2	(33.2)	鉄	平面半楕円の板状
10	10	刀子	73号古墳	No.2	188.5	19.6	7.2	(32.0)	鉄	完形品、両関、平造
11		不明	73号古墳	No.6	(12.7)	(4.6)	(1.1)	(0.2)	銅	金銅板の小破片

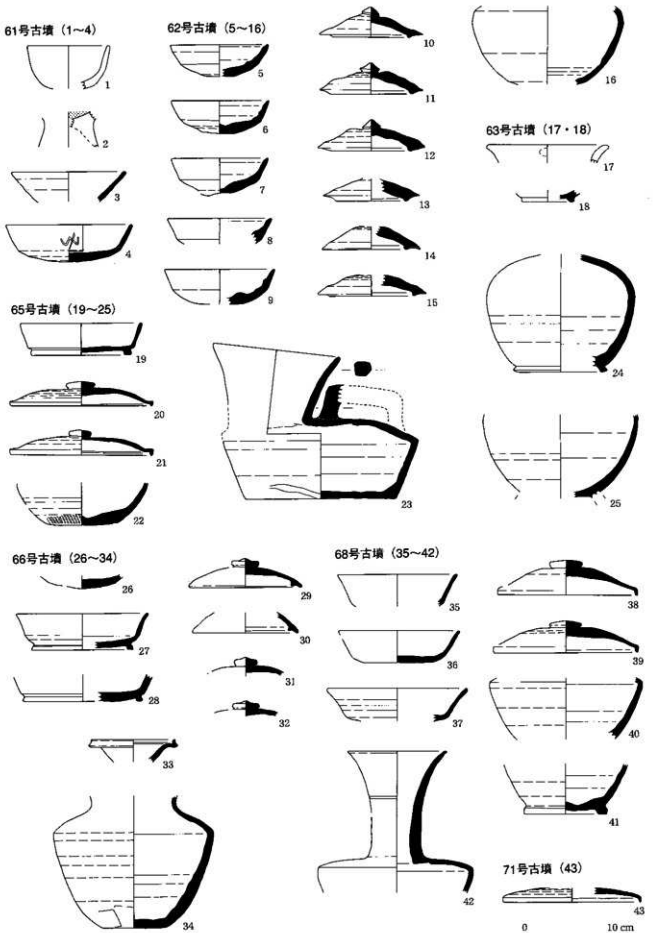
カニホリ東遺跡

No.	図No.	器種	出土遺構	出土地点	寸法(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	金属種別	備考
1	1	貨金具	1住		(34.3)	25.9	(7.9)	(4.3)	鉄	刀の貨金具?
2	2	不明	5炭	南東	27.7	27.1	10.4	(9.0)	鉄	リング状
3	3	鉸具	B石積		(27.6)	(20.2)	(5.8)	(4.0)		鉄地金銅貼、杏葉の一部?
4	4	不明	B石積	No.10	(29.5)	(18.7)	(4.3)	(3.0)	銅	金銅板、鉸止痕1、馬具?
5		不明	B石積	No.10	(29.8)	(15.9)	(2.9)	(1.3)	銅	銅板、馬具?
6	5	不明	B石積	No.7	(57.8)	(19.2)	(12.4)	(9.7)	鉄	鉸具の一部?
7	6	刀子?	B石積	No.7	(29.9)	(9.5)	(3.7)	(1.6)	鉄	茎部?
8	7	刀子?	B石積	No.7	(23.5)	(10.6)	(3.3)	(0.9)	鉄	茎部?
9	8	不明	検出面		(33.8)	(6.8)	(5.8)	(1.7)	鉄	棒状、釘?
10	9	不明	B石積	No.1	(113.7)	(67.5)	(13.3)	(29.9)	銅	板状、縁辺に1孔
11	10	銭	A石積		(21.4)	(20.9)	(1.1)	(1.6)	銅	寛永通寶、周縁欠
12	11	銭?	B石積	No.2	(28.5)	28.2	3.6	(3.6)	鉄	錆ぶくれ激しい、中央に方孔

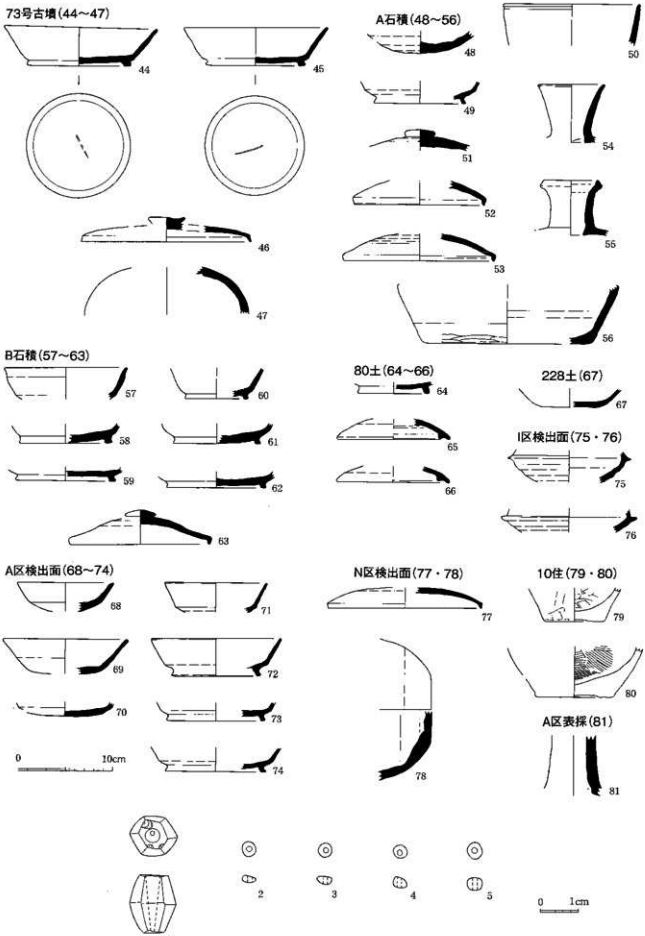
カニホリ西遺跡

No.	図No.	器種	出土遺構	出土地点	寸法(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	金属種別	備考
1	1	不明	5ST		(49.4)	(7.8)	(7.4)	(5.1)	F	鏃or釘
2		不明	2土集	2区	(26.8)	(12.2)	(8.9)	(1.5)	F	丸釘
3	2	弓金具	2土集、3区	2、3区	(24.3)	(5.7)	(3.8)	(0.7)	F	鉸金具、片側欠、木質部付着
4	3	釘?	2土集	2区	(43.7)	(4.2)	(4.2)	(1.9)	F	先端部

※（　）は残存値

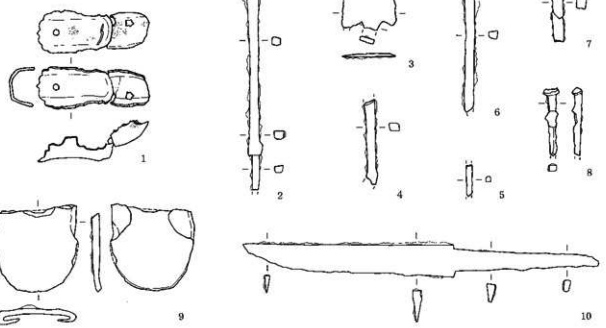


第83図　古墳　出土土器（1）

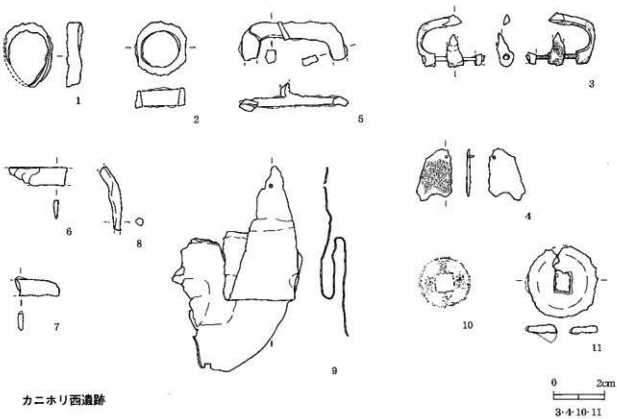


第84図　古墳出土土器（2）・石製品・ガラス製品

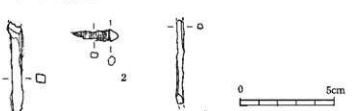
中山古墳群



カニホリ東遺跡



カニホリ西遺跡



第85図　金属製品

Ⅷ章　総括

今回は、中山古墳群、カニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡の１古墳群２遺跡を調査した。ここでは、中山古墳群、斜面上の縄紋時代前期末～中期初頭の集落、斜面を中心に築かれた炭焼窯について概観したい。

1　中山古墳群

今回の調査では、残存状況は悪いものの13基の後期古墳を調査した。周溝から墳形が推定されるものは61・63・71号墳の３基があり、全て円墳である。出土遺物から時期が推定されるものは８基あり、７世紀後半～８世紀前半代の範囲に収まる。古墳群の造営時期および追葬祭祀の継続時期と重なるものと考えたい。これまでに調査した38・49～55・57号古墳は、位置的には今回の調査地の北、地形的には斜面の上方にあるが、何れも７世紀前半～後半と推定されており、時代が下るにつれ、古墳造営地は南の斜面下方に移動する傾向がある。出土遺物では、64号古墳に馬具が認められ、馬の生産・飼育に携わっていた人々との関わりが注目される。また、混入遺物ではあるが、２土集からは弓金具の破片が出土しており、副葬品に弓が含まれていた可能性が高い。およそ1.5km東にある山影遺跡では、中期の住居址21軒が検出され、勾玉・管玉などの装身具とともに馬具や鍛が出土していることから、古墳時代中期には、馬の飼育生産に携わる集団が存在していた可能性もある。およそ1km南の塙原の牧との関連も注意が必要である。個々の古墳に関しては、８世紀初頭～前半と推定される68号古墳は他の古墳に比べ、構築方法が雑で、石室掘り方の平面形も、円形もしくは楕円形を呈している。中山古墳群における最終段階の一形態かもしれない。62号古墳は、玄室内中央部に石垣状の石積が検出された。見かけ上は2室の玄室が並ぶが、石積は、既にあった玄室を改修して新しい玄室を構築する際に新設された東側壁と考えたい。

61・64号古墳出土の炭化材は、化学分析の結果、年代は中世～近世を示している。古墳群は、廃絶以降も後世の人々に何らかの形で利用されたため、副葬品などの遺物も失われた可能性が高い。焼けた人骨は65・67・70号古墳を除く10基から出土しており、中世～近世には、火葬骨を再葬していた可能性もある。

2　縄紋時代前期末～中期初頭の集落

(1)　カニホリ東遺跡

縄紋時代前期末～中期初頭の住居址９軒がA区東側のおよそ13～16°の急斜面上で検出された。A区南のB区は台地上の緩斜面にあたり、傾斜は緩い場所で５°程であるが、住居址は認められていないことから、あえて、急傾斜地を選んで住居址を建てたものと思われる。カニホリ東遺跡では、この時期の前後には中期後半と推定される１住１軒があるのみで、縄紋時代前期末に集落が始まり、中期中頃には廃絶してしまう。住居の形状・構造では、床面積を広くし、床の傾斜を減ずるためか、等高線に沿って、長軸方向をとる住居が大半である。壁は傾いて掘り込まれるものが多く、床との境界が曖昧なものが多い。炉が検出されたものは少ない。傾向として、長径が５mを超える大形住居での検出が多い。位置的には中央～斜面上方の北側が多いが、３基の炉が検出された10住は南西部にある。柱穴は柱痕が確認できるものが少なく、柱穴がないものさえある。柱構造は何れも不明だが、位置・規模等から４本主柱、６本主柱、壁下柱穴を推定したものがあるが、統一性がみられない。特徴的なものとして、住居壁側から中央に向って斜めに建てられた可能性のあるピットが数軒でみつかっている。周壁は全く認められなかった。全体的には、一般的な縄紋時代中期の住居址に比べ、非常に簡易な構造が推定される。土坑は、B区を除く各区で数多く検出された。住居址の集中するA区東側には少ない傾向が認められる。

県内の他遺跡でも、十数カ所の同時期の集落が急斜面上で見つかっており、研究者は斜面集落あるいは、斜面住居と称して注目している。県内の代表的な遺跡には、塩尻市の女夫山ノ神遺跡、岡谷の扇平遺跡、富

土見町の机原三本松遺跡等が知られている。この内、女夫山ノ神遺跡では24軒の住居址が確認されている。カニホリ東遺跡と同様に、台地の平坦部にはほとんど住居址がなく、住みにくいと思われる斜面上に密集してみつかっている点、集落が形成された時期が比較的短期間である点など類似点も多い。これらの遺跡と住居址の構造・形状などを比較研究していく必要があろう。急傾斜地上の住居は、日常生活を送る上で条件のよい環境とは考え難い。今後の研究課題として①住居の建設地に傾斜地を求める点、②他時期には少ない点を挙げたい。

(2) カニホリ西遺跡

台地上の緩斜面上で縄紋時代前期末～中期初頭の住居址３軒、中期後半の住居址３軒を調査した。カニホリ東遺跡に比べ住居址周囲の検出面の傾斜は５～８°と緩やかで、台地上に展開する小規模な集落と捉えたい。台地上の緩斜面の北には、カニホリ東遺跡と同程度の傾斜地があるが、ここには住居址が全く無い。地面の傾斜だけを考えると、住居址の建設地に選定された場所はカニホリ東遺跡とは異なる。時期的には、カニホリ東遺跡に比べ中期初頭の比率が高い。台地の東端部にある谷状の窪みと台地末端部分の３箇所の土器集中区からは、縄紋土器片を中心に、土製品、石器類が多数出土しているが、集落の縁辺部にある自然地形を利用した廃棄遺構の可能性がある。

３ 炭焼窯

坑内製炭遺構14基、築窯製炭遺構3基を調査した。坑内製炭遺構は、中山丘陵末端の日当たりの良い南斜面全域に分布している可能性がある。一帯の春～秋季の常風は南風で、南斜面に向かって斜面下方から吹き上げており、焚口からの空気の取り込みや排煙口からの排煙に適していると考えられる。構築地点の検出面の傾斜は、５～14°の範囲に収まる。好立地の中で、カニホリ東遺跡の７炭は傾斜方向にほぼ直交し、底面の傾きは、長軸方向より短軸が強くなっており、特異な窯といえる。窯底の傾きは、全て前傾で、１～９°の範囲となる。炭化室底面に検出された付属遺構には、中央縦軸に掘られた浅い溝がある。３基に確認され、炭材から出る水分を排出するための施設と考えられる。排煙施設と推定される奥壁の突出部は、２基に認められ、個数は各１箇所である。未検出の窯も、削平によって失われた可能性が高い。時期は化学分析の結果、古墳時代～平安時代と測定されている。炭の樹種は全てコナラで、同一種で選択された可能性が高い。コナラ炭は重硬で火持ちが良く、薪炭材として優良とされている。

15次にわたる調査で、これまで合計40基を調査したが、規模・形態・付属施設などが多様で、充分な比較検討が必要になろう。製炭に携わった人々の居住地や使途の解明が今後の課題になるが、これまでの中山地区周辺の調査から、馬具の生産に伴う鍛冶に関わる可能性も想像される。

築窯製炭遺構はカニホリ東遺跡で２基調査した。近世以降の築窯製炭遺構の発掘調査としては、松本市内で初めての調査例となった。開墾等により破壊を受けて全体は確認できなかったが、礫を積み上げて構築した石窯で、炭化室、煙道、焚口、前庭部の一部等を確認できた。急斜面上におよそ30m離れる２基は、構築方法、規模が酷似し、関連があると考えられる。

最後に、本調査にあたり多大なご協力をいただいた地元の皆様に感謝の意を表して、本書の締めくくりとしたい。

付編　中山古墳群およびカニホリ東遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県松本市中山古墳群は、松本盆地東縁部の山地の裾に位置する。14・15次調査では、13基の古墳のほか、縄紋時代の住居址、竪穴状遺構、土坑、古墳時代～奈良時代初頭の土坑、ピット、中世以降の土坑、炭焼窯等が検出され、中山古墳群、カニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡に分けられている。

今回の分析調査では、中山61・64号古墳の石室内から出土した炭化材とカニホリ東遺跡の炭焼窯から出土した炭化材を対象として、遺構の構築・使用時期に関する資料を得るための放射性炭素年代測定を実施する。また、木材利用に関する資料を得るために、樹種同定を併せて実施する。

1　試料

試料は、中山古墳群61・64号古墳から出土した炭化材各1点（試料番号1，2）とカニホリ東遺跡の4基の炭焼窯から出土した炭化材各1点（試料番号3-6）の合計6点である。

2　分析方法

(1)放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。β線計数装置の気体比例計数管で、14Cの崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中のδ13Cを測定する。

なお、炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2)樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3　結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を付表1に示す。同位体効果の補正を行った測定結果は、試料番号1が^{14}420±70BP、試料番号2が^{14}440±50BP、試料番号3が^{14}1,210±80BP、試料番号4が^{14}1,400±70BP、試料番号5が^{14}1,280±80BP、試料番号6が^{14}1,130±80BPを示す。

暦年較正結果を付表2に示す。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単

位で表している。なお、暦年較正プログラムは、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、試料番号1はcalAD1,422-1,620、試料番号2はcalAD1,413-1,609、試料番号3はcalAD693-891、試料番号4はcalAD436-775、試料番号5はcalAD657-853、試料番号6 calAD782-984はである。

一方、炭化材は、いずれも広葉樹で、2種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属（*Quercus*） ブナ科

いずれも保存状態が悪く脆いため、観察範囲が狭い。道管は比較的径が大きく、単独で配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

複合放射組織を有するが、少なくとも散孔材ではないため、落葉性で環孔材となるコナラ属コナラ亜属か常緑性で放射孔材となるアカガシ亜属のいずれかである。しかし、観察範囲が狭いため、コナラ亜属かアカガシ亜属の区別はできなかった。

4 考察

中山61号古墳および64号古墳から出土した炭化材は、いずれもコナラ属であった。コナラ属には、落葉性となるコナラ亜属（クヌギ・コナラなど）と、常緑性となるアカガシ亜属（シラカシ・ウラジロガシなど）とがある。今回は観察範囲が狭いために同定には至らなかったが、現在の本地域の植生ではアカガシ亜属は分布していないことから、落葉性のコナラ亜属の可能性がある。コナラ亜属は、人里周辺の二次林（雑木林）に一般的な種類であり、現在の本地域でも普通に見ることができる種類である。炭化材の用途などは不明であるが、年代測定の結果では、いずれも中世～近世の年代を示すため、後世の炭化材に由来する可能性がある。

一方、カニホリ東遺跡の炭窯から出土した炭化材はいずれも古墳時代～古代の年代に相当し、全てコナラ節であった。コナラは、重硬で強度が高く、木炭にすると硬く締まった炭になり、火持ちが良い。周辺地域では、炭窯出土炭化材の調査事例が少ないが、コナラ節は薪炭材として優良であり、全て同一種であることから選択的に利用された可能性がある。長野県内では、三角原遺跡で炭焼窯から出土した炭化材の樹種同定が実施された例があり、全点がクヌギ節に同定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。クヌギ節はコナラ節に近い種類であり、同じく薪炭材などに優良とされることから、三角原遺跡の結果と今回の結果はよく似た結果といえる。

炭焼窯出土の木炭は、燃料材等に利用された可能性がある。長野県内では、清水山窯跡、池田遺窯跡、沢田土鍋遺跡、牛出古窯跡、石附窯址群等で須恵器窯や土師器窯から出土した炭化材の樹種同定が実施されているが、基本的にクヌギ節・コナラ節で占められており、他の樹種は認められない（パリノ・サーヴェイ株式会社,1991;藤根,1998）。本遺跡で焼成されたコナラ節も、こうした須恵器・土師器生産や同じく木炭を必要とする製鉄等の燃料に利用された可能性がある。今後、周辺地域の生産遺構等から出土する木炭との比較検討を行い、利用状況を明らかにしたい。

引用文献
藤根　久1998樹種同定による成果『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14　－中野市内その3・豊田村内－　竹川遺跡・韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号堤遺跡』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 219-228
林　昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所』
伊東　隆夫　1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ木材研究・資料31京都大学木質科学研究所81-181』
伊東　隆夫　1996『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ木材研究・資料32京都大学木質科学研究所66-176』
伊東　隆夫　1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ木材研究・資料33京都大学木質科学研究所83-201』
伊東　隆夫　1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ木材研究・資料34京都大学木質科学研究所30-166』
伊東　隆夫　1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ木材研究・資料35京都大学木質科学研究所47-216』
パリノ・サーヴェイ株式会社　1991『右岸窯址群発掘調査における花粉分析・炭化材同定『佐久市岡蔵文化財調査報告書　右岸窯址群Ⅱ』佐久市教育委員会・佐久岡蔵文化財調査センター99-111
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005『三角原遺跡の自然科学分析『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76　安曇野農業水利事業あづみ野排水路岡蔵文化財発掘調査報告書　－三郷村内－　三角原遺跡』』農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・長野県埋蔵文化財センター付属CD-ROM所収
島地　謙・伊東　隆夫　1982『図説木材組織地球社176p』
Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998『広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社122p』[Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

付表1 炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺跡名	出土遺構	出土地点	樹　種	補正年代 BP	δ13C (‰)	Code No.	Measurement No.
1	中山古墳群	61号古墳	北西（1層中）	コナラ属	420± 70	-24.8	9142-1	IAA-922
2	中山古墳群	64号古墳	No.7	コナラ属	440± 50	-26.9	9142-2	IAA-923
3	カニホリ東遺跡	1炭	3層中	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1,210± 80	-21.6	9142-3	IAA-924
4	カニホリ東遺跡	2炭	2層中	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1,400± 70	-22.9	9142-4	IAA-925
5	カニホリ東遺跡	3炭	5層中	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1,280± 80	-24.9	9142-5	IAA-926
6	カニホリ東遺跡	6炭	2層中	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1,130± 80	-27.3	9142-6	IAA-927

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

付表2　暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）												相対比	Code No.
1	421± 68	σ	cal	AD	1,422	-	cal	AD	1,521	cal	BP	528	-	429	0.806	9142-1
			cal	AD	1,579	-	cal	AD	1,580	cal	BP	371	-	370	0.005	
			cal	AD	1,591	-	cal	AD	1,620	cal	BP	359	-	330	0.189	
		2σ	cal	AD	1,409	-	cal	AD	1,640	cal	BP	541	-	310	1.000	
2	446± 54	σ	cal	AD	1,413	-	cal	AD	1,489	cal	BP	537	-	461	0.966	9142-2
			cal	AD	1,603	-	cal	AD	1,609	cal	BP	347	-	341	0.034	
		2σ	cal	AD	1,333	-	cal	AD	1,336	cal	BP	617	-	614	0.004	
			cal	AD	1,398	-	cal	AD	1,526	cal	BP	552	-	424	0.827	
			cal	AD	1,555	-	cal	AD	1,633	cal	BP	395	-	317	0.169	
3	1,210± 78	σ	cal	AD	693	-	cal	AD	748	cal	BP	1,257	-	1,202	0.259	9142-3
			cal	AD	765	-	cal	AD	891	cal	BP	1,185	-	1,059	0.741	
		2σ	cal	AD	667	-	cal	AD	975	cal	BP	1,283	-	975	1.000	
4	1,408± 74	2σ	cal	AD	436	-	cal	AD	489	cal	BP	1,514	-	1,461	0.044	
			cal	AD	513	-	cal	AD	516	cal	BP	1,437	-	1,434	0.002	
			cal	AD	530	-	cal	AD	775	cal	BP	1,420	-	1,175	0.954	
5	1,283± 75	σ	cal	AD	657	-	cal	AD	782	cal	BP	1,293	-	1,168	0.883	9142-5
			cal	AD	789	-	cal	AD	810	cal	BP	1,161	-	1,140	0.096	
			cal	AD	843	-	cal	AD	853	cal	BP	1,107	-	1,097	0.021	
		2σ	cal	AD	622	-	cal	AD	896	cal	BP	1,328	-	1,054	0.987	
			cal	AD	923	-	cal	AD	940	cal	BP	1,027	-	1,010	0.013	
6	1,138± 78	σ	cal	AD	782	-	cal	AD	789	cal	BP	1,168	-	1,161	0.040	9142-6
			cal	AD	810	-	cal	AD	848	cal	BP	1,140	-	1,102	0.190	
			cal	AD	854	-	cal	AD	984	cal	BP	1,096	-	966	0.770	
		2σ	cal	AD	690	-	cal	AD	751	cal	BP	1,260	-	1,199	0.080	
			cal	AD	762	-	cal	AD	1,023	cal	BP	1,188	-	927	0.920	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

写真図版

62号古墳玄室（南から）

図版1

カニホリ東遺跡俯瞰
(写真上方が北西)

A区東側
(写真上方が北)

カニホリ西遺跡俯瞰
(写真上方が西)

61・62号古墳（上方が北）

62号古墳　中央石積（西から）

68号古墳　礫出土状況（南から）

71号古墳　完掘状況（南から）

73号古墳　礫出土状況（南から）

73号古墳　完掘状況（南から）

カニホリ東遺跡　2住完掘状況（南から）

カニホリ東遺跡　10住完掘状況（南から）

図版3

カニホリ東遺跡　146土半割状況（西から）

カニホリ東遺跡　8炭完掘状況（南から）

カニホリ東遺跡　B石積礫出土状況（西から）

カニホリ西遺跡　5炭完掘状況（西から）

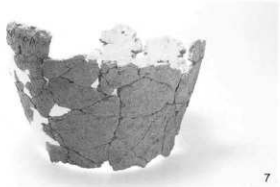
カニホリ西遺跡　5住完掘状況（東から）

カニホリ西遺跡　1土集礫出土状況（南から）

カニホリ西遺跡　115土遺物出土状況（南から）

カニホリ西遺跡　9集石完掘状況（南から）

1


7

12

110

115

123

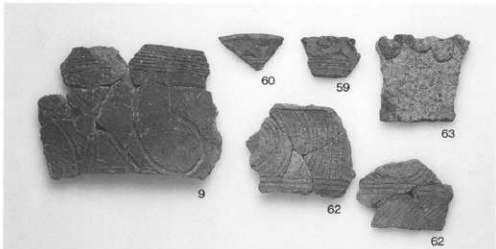
121

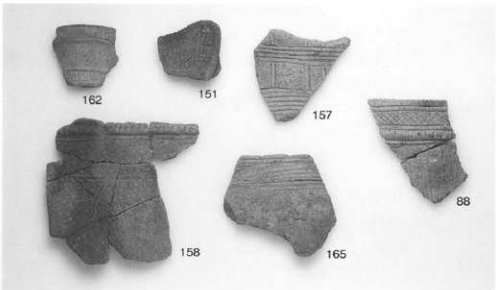
129

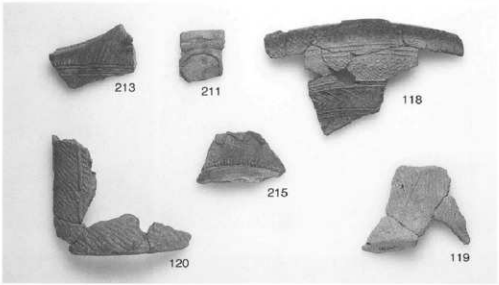
121

133

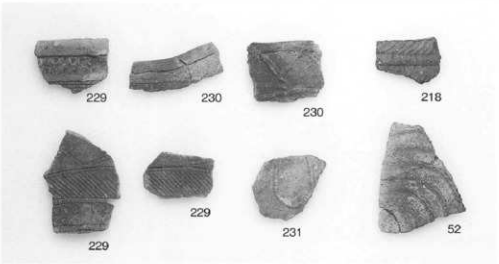
図版5





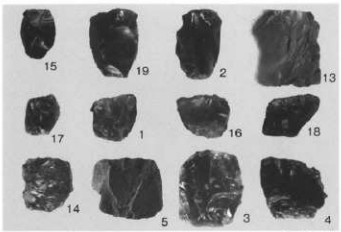

213
211
118
215
120
119

127
125

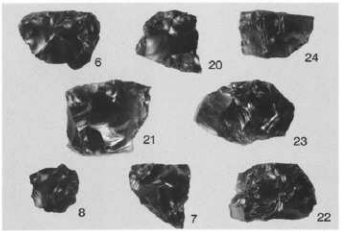

229
230
230
218
229
229
231
52

4
6
10
9

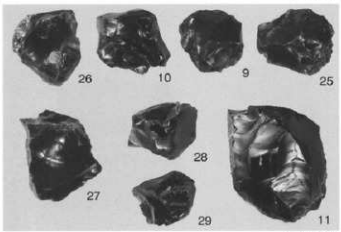
図版7



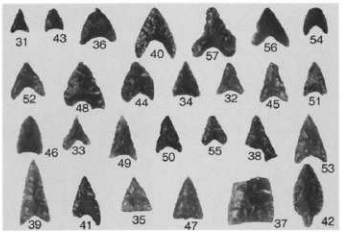
石核１類



石核２類

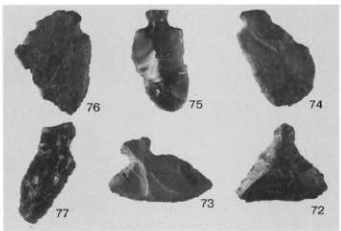


石核３類

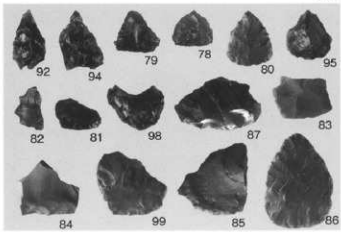


石鏃

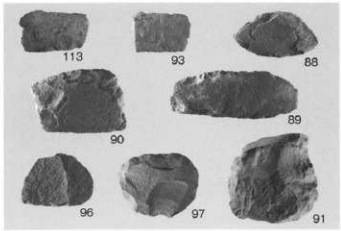
石錐



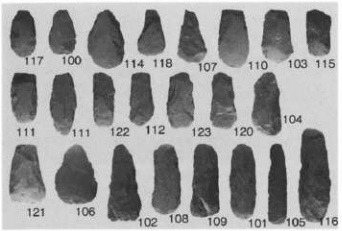
石匙



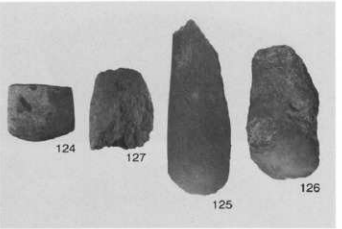
RU・UF類



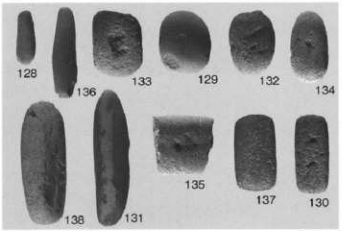
刀器・礫器類



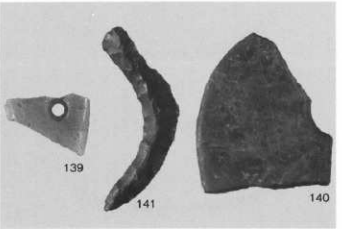
打製石斧



磨製石斧



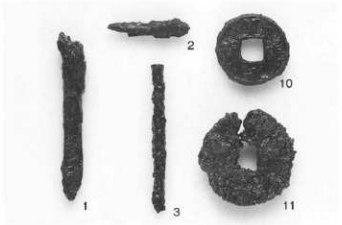
磨石類



玉器

中山古墳群　金属製品

カニホリ東遺跡　金属製品



カニホリ東・西遺跡　金属製品

石製品・ガラス製品

図版9

4

6

10

12

20

21

34

38

44

45

54

55

長野県松本市　中山古墳群14･15、カニホリ東・西遺跡　発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　なかやまこふんぐん　かにほりひがし・にしいせき　ほっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　中山古墳群14･15、カニホリ東・西遺跡　発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№196
編著者名	森　義直、西澤寿晃、直井雅尚、竹原　学、横井　奏、吉井　理、三村竜一
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390－0874　長野県松本市大手3丁目8番13号　TEL　0263－34－3000（代） （記録・資料保管：松本市立考古博物館　〒390－0823　松本市中山3738－1　TEL　0263－86－4710）
発行年月日	2008（平成20）年3月31日　（平成19年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかやまこふんぐん 中山古墳群 カニホリ東 カニホリ西	ながのけんまつもとし 長野県松本市 なかやま 中山4,883他	20202	419 511 512	36度 11分 28秒	137度 59分 49秒	2004.04.10～ 2005.12.07	15,305㎡	霊園造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
中山古墳群 カニホリ東 カニホリ西	古墳群 集落址 集落址	古墳～奈良 縄紋、古代 縄紋、古代	古墳 住居址 竪穴状遺構 炭焼窯 土坑 ピット 土器集中区 溝	13基 37軒 13基 17基 605基 450基 3基 14条	土師器 須恵器 土製品 金属製品（武器・馬具を含む） 石器・石製品 ガラス製品 骨	中山古墳群は14･15回目の調査。残存状況は悪く、墳丘は既に消失していた。 カニホリ東・西は新発見の遺跡で、1回目の調査。縄紋時代の集落の一部を検出し、土器・石器等良好な遺物を得た。

要　約

中山古墳群、カニホリ東遺跡、カニホリ西遺跡は、筑摩山地から独立した中山丘陵の南向き斜面上に立地する遺跡である。今回の調査では、古墳13基と周溝品、縄紋時代を中心とする遺構・遺物を確認することができた。

中山古墳群では、開墾に伴う削平等により墳丘は全てが失われていた。墳形の推定できるものが3基あり、全て円墳であった。

玄室は11基で残存し、土器・陶磁器、石製品・ガラス製品、金属製品・骨等が出土した。古墳群の造営時期および祭祀の継続時期は出土遺物から7世紀後半～8世紀前半代と推定される。68号古墳は8世紀初頭～前半と推定され、土石を混合して構築される。中山古墳群における最終段階の一形態かもしれない。62号古墳は玄室内中央部に石垣状の石積が検出され見かけ上は2室の玄室が並ぶが、石積は既にあった玄室を改修して新しい玄室を構築する際に新設された東側側壁と考えられる。

カニホリ東遺跡では、縄紋時代前期末～中期初頭の住居址9軒が急斜面上で検出された。台地の平坦部にはほとんど住居址がない。集落が形成された時期は、比較的短期間である。遺物の出土量は少ない。

カニホリ西遺跡では、台地上の緩斜面上で縄紋時代前期末～中期初頭の住居址3軒、中期後半の住居址3軒を調査した。カニホリ東遺跡に比べ傾斜は緩やかで、台地上に展開する小規模な集落と捉えたい。時期的にはカニホリ東遺跡に比べ中期初頭の比率が高い。台地の東端部にある谷状の窪みと台地末端部分の3基の土器集中区からは、縄紋土器片を中心に、土製品、石器類が多数出土した。集落縁辺部にある自然地形を利用した廃棄遺構の可能性がある。

松本市文化財調査報告№196

長野県松本市

中山古墳群14･15

カニホリ東・西遺跡

－発掘調査報告書－

発行日　平成20年3月31日
発　行　松本市教育委員会　〒390－0874　長野県松本市大手3丁目8番13号
印　刷　アサカワ印刷株式会社